

奇譚クラス



タフビヤ・フオト 哀憫美加特集号

奇譚クラス

THE KITAN CLUB

Published Monthly By The Japanese

Club



定價

IBM. 2205

昭和二十九年度を飾ったサド小説と新作フオト集

悦虐小説と緊縛写真特集 4 集 臨時増刊限定版

四馬孝傑作緊縛画集

写真版口絵八点

- ☆密室の私刑
- ☆鬼憲兵の拷問
- ☆高樓の裸身
- ☆悪魔の舌抜
- ☆橋下の踊子
- ☆湖底の美女
- ☆帆柱の女神
- ☆恐怖のムチ



百数十葉の新しい緊縛フオトが新登場のモデルを加えて春の花のように爛漫とほほえみかけています。昭和二十九年度本誌発表の傑作小説が、ずらりと胸を競い装いも新たに全巻に妖しい雰囲気を取りまいています。真紅の明るい表紙は、まるで燃えあがる情熱を象徴するかのよう、皆さまのお求めを心からお待ちしております。悦虐小説と緊縛写真特集号の

拘束美態特選集

グラビヤ、フオト百三十葉

- ☆今昔競艶……絹川 文代
- ☆巧まざる魅惑……田代 悠子
- ☆柔肌秋刑……大塚 啓子
- ☆逞ましき柔軟生物……桜井 葉子
- ☆句やかなる乱菊……花坂 道子
- ☆野盗退散……絹川 文代
- ☆白魚の像……大塚 啓子
- ☆忍従の哀婉……館 典子
- ☆ニユー・モード・ダンス……絹川 文代
- ☆軟体彫像……田原美佐子
- ☆寂々たる喜悅……絹川 文代
- ☆悟道の聖徒……大塚 啓子
- ☆弾性物質……愛川 悦子
- ☆変造美形……絹川 文代
- ☆樹間の冷風……絹川 文代
- ☆黙(もくもん)悶……絹川 文代
- ☆抱(ほうばく)縛……大塚 啓子

悦虐小説特選集

傑作サド読物十四点

- ☆私のモデル……飛田 良二
- ☆嫉妬の操り責め……角 皓子
- ☆デパート人形……白金 紅次
- ☆美しい五月に……古川 裕子
- ☆告白半公刑……篠原 咲恵
- ☆私の新婚旅行……富永 一雄
- ☆童貞作家……淡 美一郎
- ☆魔触(ましよく)……二俣志津子
- ☆私刑(リンチ)……菱場喜代子
- ☆わが心の記……古川 裕子
- ☆赤札囚(続・半公刑)……篠原 咲恵
- ☆流浪八年……沖野恵美子
- ☆悪の部屋……二俣志津子
- ☆股裂き散華……多山 皓

略号(悦特4)

定価 三百円

—お申込は—

大阪市阿倍野郵便局

私書函 十四号

天 星 社 へ

☆懸賞愛読者原稿募集☆

規 定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものである、どんなものでも結構です。
- 二、創作、小説、文庫、研究、物語、告白体験等形式は如何なるものでも構いません。
- 三、枚数は最高百五十枚位まで(四百字詰)
- 四、必ず未発表の作品であることが必要です。
- 五、締切は毎月十日。以後に到着の分は翌月廻しとします。
- 六、入選者は毎月の誌上に発表。賞金は一篇につき二千円以上五万円迄贈呈いたします。
- 七、掲載外の佳作には、本誌三月分乃至一年分贈呈いたします。
- 八、封筒には「懸賞愛読者原稿」と朱記のこと。原稿返戻御希望の方は返信料同封下さい。
- 九、発表に支障のある箇所は掲載の際に訂正又は削除することがありますから予め御承諾願います。

天 星 社 編 集 部

読者原稿募集

- 【体験、告白、手記】 なたにも一つや二つは必ず思い出とか、体験とかいったものはあるものです。物いわざるは腹ふくめるのとえ、どうか皆様の真実の叫びをお寄せ下さい。内容や長短は問いません。採用篇には本誌三月分以上贈呈します。
- 【創作、小説、物語】 一度自分も小説らしきものを書いてみようと思われた方は出来の如何に拘らず御遠慮なく御投稿下さい。但し未発表の自作に限りです。いずれも誌上の匿名は御自由です。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。
- 【映画、雑誌通信】 映画や既刊雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項がありましたら通信下さるようお願いいたします。映画は撮影所名、題名。雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月の明記をお願いします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。
- 【レポート】 新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き又は感想など皆様の関心をお持ちの事項について御知らせ下さい。掲載の分には本誌二月分以上贈呈します。
- ◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フオトを贈呈する準備がとどまっています。
- 【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、希望、感想、思い出話、或は読者相互間の交歓文通応答、編集上の御意見など忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。誌面の許す限りつとめて発表いたします。

☆本誌御購読の葉☆

- 一月分(1冊) 送共 三百円
- 三月分(3冊) 送共 八百円
- 半年分(6冊) 送共 千五百円
- 一年分(12冊) 送共 二千八百円

講読御希望の方は右の通り御引きいただきます。故なるべく月極にてお申込み下さい。毎月発行の都度厳重包装の上急送申し上げます。尚景品の贈呈は今後中止いたしますから御諒承願います。臨時増刊号並に限定版特別号は本誌上に広告いたしますから御予約下されば御送本申し上げます。

奇譚クラブ 定価 三百円

新緑躍進号 (6月号)

△哀憫美形特集号△

昭和三十五年五月二十日印刷
昭和三十五年六月一日発行

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天 星 社

電話 天下茶屋 三六〇七番
振替口座 大阪五〇〇四二番

御送金は振替、小為替、現金書留又は書留にてお願いいたします。少額の時には現金封入にて結構です。切手代用は当分お断りいたします。宛先は必ず書でつきりお書き下さるようお願いいたします。

◎御断り◎ 本誌発表の口絵並に写真、分譲写真の複写転載再録等を固く禁止します。

臨時増刊サド特集号第四集

略号「S特第四」定価三百五十円

「美しき惨虐物語」「四馬孝傑作」画集

狂 乱の女
手 厳しき返礼
楽 の足が好憎
こ の団の好憎
誘 髪のお仕
汚 いお仕
蛇 倉お仕
愛 星の地獄
深 犬の苦
私 刑の杉木
森立練衷獄置虹餌い待礼女
執 貌の誘
美 むんだ飲むん
飲 むんだ飲むん
ハ リツケの惨
眩 虫の執
長 上馬の
馬 ジャジャ馬
恋 ズジャ馬
初 めての経
女 学生の嫉
妬 験縄し磔念劇えだ惑賛

湧き上るムード特選集

(フオート百二十葉収載)

フイアンサーの困惑(館)
敷居上の苦斗(田代)
溪流に哭く女(絹川)
蜘蛛の糸(大塚)
水垢離強制(大塚)
強靱なるロープ(絹川)
曲線と麗姿(絹川)
囚女の舞(絹川)
花模様の跳き(絹川)
壁飾り(絹川)
床飾り(絹川)
浮世絵草紙(絹川)
冷酷なる鎖(絹川)
葉風(絹川)
蠱惑のポーズ(絹川)
わななく黒髪(大塚)

「美しき惨虐物語」傑作集

新劇家の出来事
狂 乱の女
彗星の苦衷
手 厳しき返礼
誘 髪のお仕
恋 髪のお仕
金 髪のお仕
美 髪のお仕
執 髪のお仕
眩 髪のお仕

「悦虐小説と緊縛写真」特集・第三集

臨時増刊悦特 No. 3

「嵐を慕う蝶」特集号

定価 三百円

華麗絵巻、四馬孝傑作画集

出 歯の男 足の爪先
古 池の怪 足枷責め
裸 馬の儀 鉄檻の餌物
雨 中の晒 キンケ・サイズ

新作フオート「嵐を慕う蝶」(百十四葉)

まといつく長蛇絹川 限られた自由 田代
柱掛人形 絹川 麗(れい)えん 艶 館
岩に咲く珍花 絹川 囚(しゅう)き 肌 愛川
隔世の障子 絹川 ニンフ就縛 絹川
含(かん)しゅう 羞 花坂 架(かせ)き 責 大塚
お仕置前奏曲 大塚 乱れる訪問着 花坂

昔日の問題作「悦虐小説特選集」

告白 慟哭の記 古川 裕子
謎の女と私 岡田 咲子
闇雲博士の回想 辻村 隆
責められた女 近東規矩也
罪 ある女 桜井京一郎
縄に憑かれて 時山加代子
裕子とお仕置 古川 裕子
蜘蛛と蝶々 飛田 良二
縄をめぐる随想 久留木 栄
復 古川 裕子
猿ぐつわと私 岡田 咲子
悪 の部屋 二俣志津子
私刑に泣く未亡人 小坂多美枝
私を愛して下さった皆様へ 古川 裕子

臨時増刊悦特 No. 2 定価 三百円

「悦虐小説と緊縛写真」特集号・第二集

四馬孝緊縛画集

柱 背負い 捕われ人
深夜の水浴 椅子縛り
喰 込む縄 水道責め
あんよは上手 笞打ちの果

悶悦姿態特選集

逢瀬のポーズ 絹川 しずかなる受縛 花坂
はかなき悶え 田中 美囚第十四号 絹川
羞 姿晒陽 愛川 悦び一刻 浜本・三木
綾なす白縄 絹川 乱れさく哀花 絹川
柔肌の喘ぎ 平野 荒縄と美貌 絹川
未知の驚き 岩井 悦虐狂奏曲 大塚
造形美術 花坂 艶肌の拘束 絹川
ロープ・ブラジャ 愛川 (以上百十六葉収載)

往年の好読物集

妓 の影 泉 辰之助
凌辱の幻想と期待 古川 裕子
僕 の記録 黒井 珍平
くすぐられるよろこび 山本 百合
キヤメラ愛好会 岡田 咲子
被虐の愛情 若林 啓子
責 竹谷 十三
アブノーマル・ファンタジー 岡田 咲子
変の字問答 浮家 鷹三
マダム紅鶴 野村恵美子
哀艶責め場絵噺 岩 広志
蜘蛛と蝶々 飛田 良二
由紀子のお仕置 大川由紀子
聖画の誘惑 近見 啓



奇譚クラブ 新緑躍進号 目次

美しき女奴隷たち画集……………津地谷梨・案
淹れい子・画

- 美しき女奴隷
- 女奴隷の烙印
- 逃亡奴隷に対する折檻
- バレー団の苛酷な調教
- 農場用鞍馬の奴隷
- ハレムの淫虐地獄
- 女奴隷のセリ市
- 檻に飼われた女奴隷
- サーカス団の猛訓練
- 人肉市場の女奴隷
- 織姫の難行苦行

スクリーンに於ける緊縛シーン点景……………田辺啓二・提供

東映「新吾十番勝負」 東映「二兎目は地獄行きだぜ」

東映「さけぶ雷鳥」 東映「殿さま彌次喜多捕物道中」

東映「地獄の風車」 大映「よさこい三度笠」

四馬孝緊縛画集……………四馬孝・画

一本足の力カシ

熱蠟責めの椅子

アクロバットの仕置

男性緊縛フォト「穴倉幽閉」……………モデル 湖田 平雄

戯画変形拘束私案……………杉原虹児・画

写真乗馬服の女性、愛馬を前にして（於馬場）

グラビヤ・フォト

哀憫美形特選写真

- ▽冷 光（れいこう）……………モデル・絹川 文代
- ▽究 道 女……………モデル・大塚 啓子
- ▽声なき表情……………モデル・絹川 文代
- ▽陽光にはじろうおんな……………モデル・絹川 文代
- ▽追 い 鬼 忌……………モデル・大塚 啓子
- ▽囚 女 の 祈 願……………モデル・愛川 悦子
- ▽円 転 舞……………モデル・絹川 文代
- ▽白 蓮 の 起 伏……………モデル・桜井 葉子
- ▽白 璧 反 転……………モデル・大塚 啓子
- ▽況 縛 への 執 着……………モデル・絹川 文代

告白「二人だけの協約書」……………南条 三吉……………46

セミドキュメンタリー「蠢く蒼い群れ」……………近藤 一……………54

考察「腹を切る事（その六）」……………折伏 下男……………70

随筆「アブチック放談」……………浮家 鷹三……………72

麻生氏の生活と意見（十五）……………麻生 保……………76

ソドミヤ小説「裸 馬」……………榎村 奏……………80

異色小説「サド侯爵の紅」……………蒼野 礼……………90

愛好者の記録……………とろろ・かつひ……………106

乗馬ズボンシリーズ「太平洋にかける橋」……………藤山 秀緒……………108





告白手記「澤原カオルと私と」……………	近藤 一……………	112
公開通信Ⅱ「サド女性へ贈る手紙」……………	緒方 春生……………	119
連載小説Ⅱ手記「未決囚」(強盗暴行傷害致死容疑より)Ⅱ		
『宇宙のどこかで』……………	佐治 麻造……………	122
架空臨時増刊マゾソドミア特集号……………	XYZ生……………	136
実験レポート「浣腸」……………	栗瀬 長……………	138
マゾヒズム百景……………	馬場 好男……………	142
連載第三次元小説「影の国」……………	雪俊 遙……………	146
懸賞愛読者原稿入選作品		
『零の舞踊会』……………	永見 龍也……………	158
告白倒錯、女装化への悲願……………	織田 四平……………	164
特高拷問史……………	庄田美起夫……………	166
責面通信誘拐令嬢の緊縛スタイルについて……………	浦田 紀夫……………	170
マゾヒズム通信「女性乗馬考雑感」……………	鞍 良人……………	172
手記 妻を訓練する……………	間地 誉夫……………	174
映画通信 縛られた女優たち……………	大河原珠樹……………	178
アブ・ストーリー「雨の夜の男」……………	沢木 雪二……………	180
編集つれづれ草「私の編集ノートより」……………	編集 子……………	186
ある女優の乗馬日記より……………	倉仁 成人……………	189
読者通信……………		192

乗馬服の女性

△読者某氏提供▽



—愛馬を前にして—

(某馬場)

男性緊縛フオト 穴^{あな} 倉^{くら} 幽^{ゆう} 閉^へ (その二)



麻縄で上半身をキリキリと縛られた男のズボンが
むしり取られようとする……。
さて次号では、どのようにに展開するのでしょうか。

案私束拘形变

児虹原杉





略号「S特第三」 定価三百五十円
……四馬孝画集（力作二十四点）……

蛇倉幽閉
防水服の恐怖
股裂きの実験
水責め倉
哀れな強力
俵吊り
持久戦
女体裁判
深夜の逆吊り
ム手打ち開始
美容容体
拷問台

美畜訓練師 白い実験動物 浣腸の女体 山小屋の異聞 愛人の危機 森の中の晒 猿轡と煙草 鼻責め地獄 苦悶の舌吊り 箱詰美人 烙印のX字架

…狂い咲く稀花特選（フオト百四十八葉）

狂花の戯れ	佳肴一尾
(浜本・三木)	(絹川)
タイルの冷感	脱し得ぬ拘束
(田原)	(絹川)
厚遇の座席	苦痛への階段
(絹川)	(絹川)
共通の戦き	押込みの艶肢
(大塚)	(愛川)
華鼻受難	レインコート
(絹川)	(大塚)
流れ落る美線	ひとぼしら
(絹川)	(絹川)
友愛の表現	泥まみれの青春
(愛川・春日)	(大塚)
哀美抽出	白蝶の不安心
(花坂)	(田原)
応接間の稀態	美貌の憤悶
(愛川)	(絹川)
	スポーツライト
	(絹川)

傑作サド読物集……………

塔婆十郎・作
滝れい子・画

サド小説 『地獄の無法地帯』

▽▽拷問倉庫
吊り責め地獄

▽▽肉体の太鼓
地獄谷の悲鳴

覆面子白頭巾・作参考写真多數

「緊縛フオトと緊縛フオト夜話」

▽▽▽▽
全盛期前期の緊縛フオト口絵
緊縛モデルの素顔
全盛期の緊縛フオト口絵
緊縛フオトと緊縛モデル

「サド特集号 第二集」

定價三百五十円 (送共)

麗美卷頭図絵、四馬孝画集

☆密 質 倉 庫
☆悪魔のような女
「春美の受難記」
シリーズ 四点
☆新品第一号
☆嫉 妬 の 鬼
☆奴 隷 船
☆妙な吊 責
☆雨中の引廻し
☆奈落のリハーサル
☆鼻責めテスト
☆黒目鏡の女

☆地下室の苦行
☆苦 悶
☆吊 し 責 め
☆乳 房 責 め
☆人間フープ
☆檻 禁
☆アクロの訓練
☆捕われた商品
☆犬 の 訓練
☆女 体 鞭 馬
☆筏 な が し

【被縛女特選集グラビヤ百九葉】

絹布と絹肌	(田中)	仇姿黄八丈	(絹川)
飾り人形	(大塚)	縄さばき	(浜本)
台上的賛	(絹川)	挑発の笑	(絹川)
若妻の秘美	(花坂)	被襲	(花坂)
白い若鮎	(田中)	深海魚	(田中)
麗囚	(絹川)	哀れな賓客	(絹川)
三面鏡	(愛川)	豊胸	(愛川)

【興趣尽きぬS的読物】 書下し二篇

私の責画 責めの美人と皮革 (四馬孝)
緊縛フオトと緊縛モデル (白頭巾)
南村俊平画ハ猪大人の御乱行、強制女体
浣腸器V

定價 三百円 (送共) 略号「悦特」

この素晴らしい小説集とグラビヤ写真、緊縛絵画で皆様のお心を温めて下さい。売切れては大変未見の方は、すぐお申込を！

△悦庵小説傑作集▽S的作品のエッセンス

雄獸の手記	妻は縛らず	夕の朝顔	続・囚衣	私の主	色狼	女奴隸の手記	受難記	怪奇曼陀羅教
呪縛	悦旨の旅役者	長期刑	私の思い出	片耳伝	縛られた妻以前	篝火	地獄絵行脚	鉄格子の中に

グラビヤ緊縛写真 百十四葉の傑作

競	夢	木	ブ	羅	誘	三	妖
						ツ	精(ニンフ)
		洩				葉	葵の横顔
			レ				
		れ					
花	路	陽	イ	致	拐	顔	
<hr/>							
観	黒	三	間	放	シ	首	
					ユ		
	タ	処	謀		ミ		
	イ	責	成		ー		
念	ツ	め	敗	心	ズ	縛	

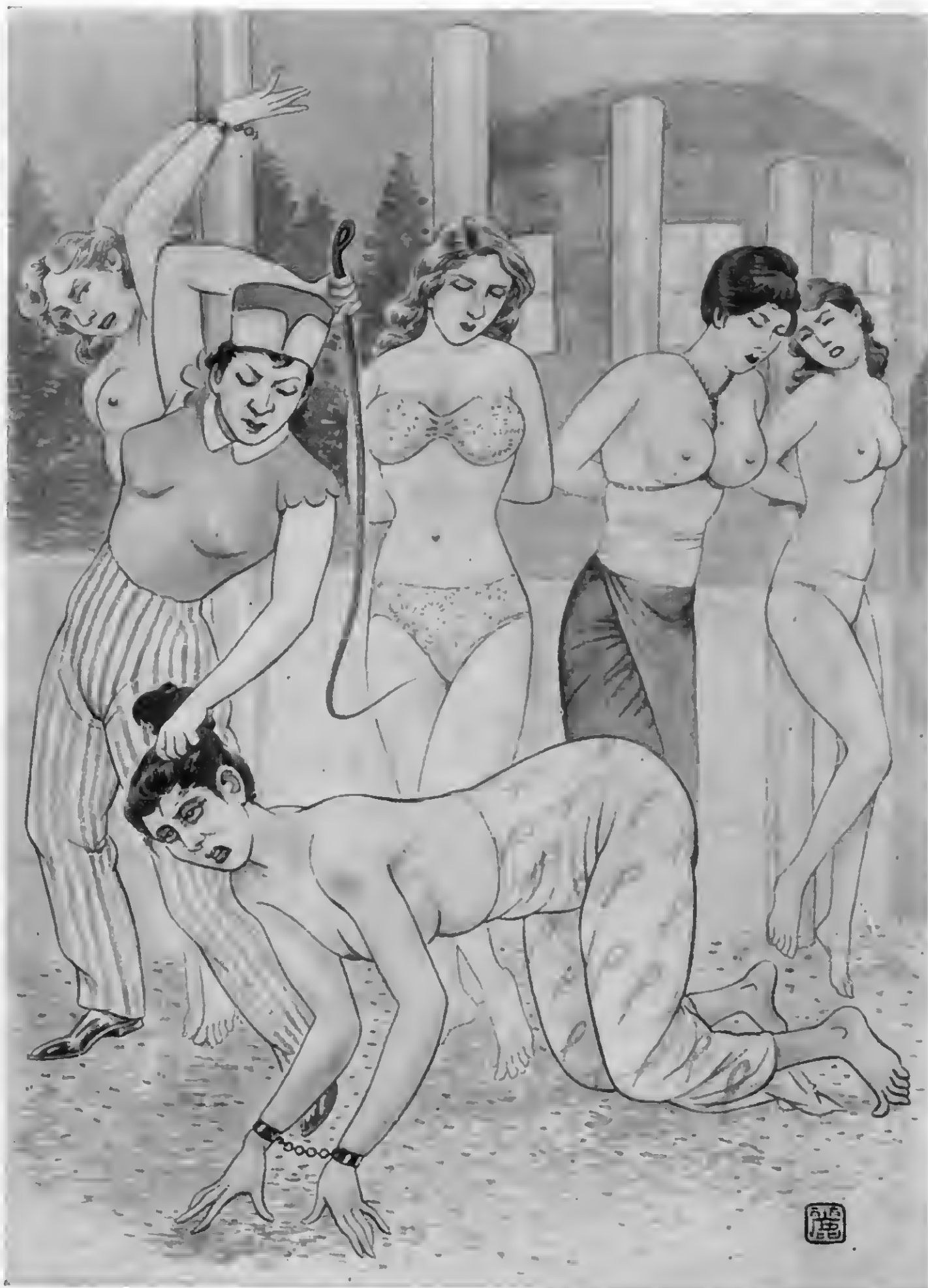
△四馬孝画賣画集 口絵▽

白魚の悶え
苦悶の前奏
鉄鎖のきしみ
籠の白鳥

宙に踊る
アクロバット
濡れる朱唇
土蔵の花

美しき女奴隷たち

冷酷な女奴隷商の手で今日も奴隷市場に世界各国から集められてきた女奴隷たちが、陳列されるのだった。すきとおるような白い皮膚の金髪娘。目のさめるような真紅の腰巻をまとった日本娘。今しもサロン姿のマライ娘が、柱につながれるのを嫌がった為、手錠をはめられ、奴隷商からムチ打ちの罰を受けるところである。小麦色の肌が恐怖にうちふるえている。



津地谷梨・案
滝れい子・画

女奴隷のセリ市

いよいよセリ売りが始まった。中央にある一段高いセリ台の上に奴隷娘が一人ずつ引き上げられた。先ず最初にセラれるのはブロンドの美しい北欧系の娘。ブラジャーも奴隷商の手ではぎとられ買手の目を楽しませた。「さあ、いくら、いくら。いくら値をつけますかね。又とない素晴らしい白人の娘だよ。」そのまわりには、あらゆる人種の女が杭につながれて下見されている。



津地谷梨・案
滝れい子・画

女 奴 隷 の 烙 印

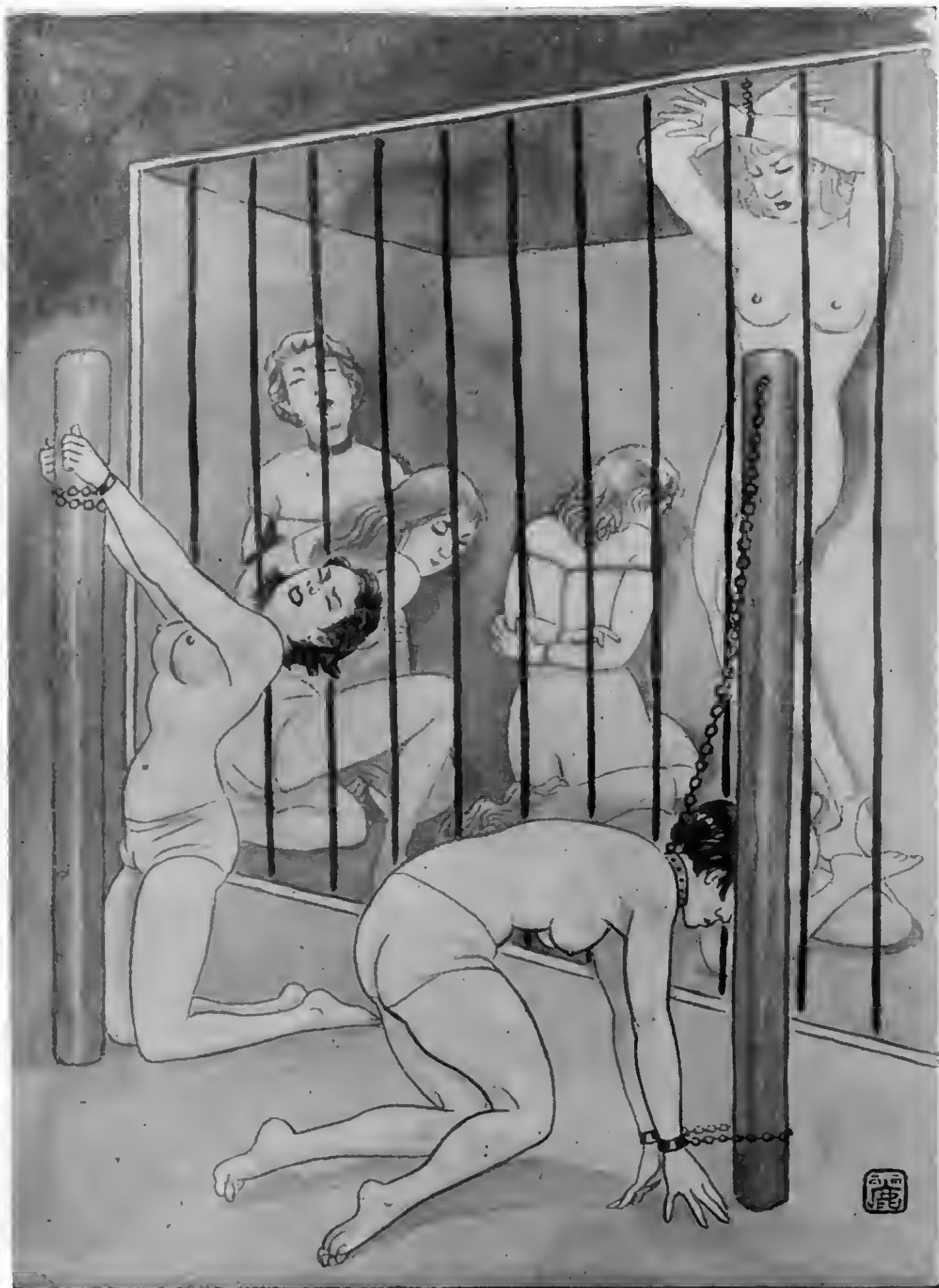
セリ落された女は、買手につれられて、手錠のまゝ、或は縄つきのまゝ、それぞれ引かれてゆく。なかには、その場で女の背中や胸に、奴隷の烙印である記号番号や持主の名前などを入墨師の手によって彫りつける者もあった。買主の言うことを聞かなかったドレイは、買主の気のすむまでムチ打たれるのである。セリ売りの声に混って、ドレイの悲嘆が市場に響くのであった。



津地谷梨・案
滝れい子・画

世界各地の港々から積み出されてきた女ドレイたちは、続々と到着してくる。セリに出されるまでの女たちは、くさり、手錠、縄など、それぞれの出荷地で施された拘束具のまゝ、一応、鉄の檻の中に飼われるのである。下見会場へ出す前のドレイは檻の外の杭につながれて順番を待つのである。ここでは商人のムチはなかったが、動物園さながらの光景である。

檻に飼われた女奴隷



津地谷梨・案 滝 れい子・画

逃亡奴隷に対する折檻

逃亡して捕ったドレイたちは言語に絶する苛烈な折檻を受けねばならなかった。くさりに依る逆さ吊り、片足吊り、で長時間放置され、くさりで両手を吊られた娘の背中や尻には革ムチがうなりを生じて炸烈する。何度も逃亡を企てた娘は足の裏に焼ゴテを当てられて歩けぬようにされた。足ぐさり首輪で引かれるドレイもあった。まことにこの世の生地獄といってよかった。



津地谷梨・案
滝れい子・画

サーカス団の猛訓練

サーカス団に買われた娘たちは、来る日も来る日も、ムチに追われて血と涙の苦しい猛訓練が続けられる。出来るだけ早く芸を仕込んで稼がそうと企てている親方は、ドレイたちの苦痛を考えてやるなどという思いやりなんか、あるわけがなく、訓練をサボるドレイには情容赦もなく、鉄槌を加えた。一輪車乗りの女は革紐で後手に括られ、ムチの雨を浴びているのだった。



津地谷梨・案
滝れい子・画

華やかな衣裳をまとったバレエ団といっても、所詮買われてきたドレイにとっては、恐ろしい調教に汗と涙で暮す場でしかなかった。ズブの素人が急速に一人前のバレリーナになるなどということは、如何に厳しい訓練を施したところで、無理な相談であったが、相手が金で購ってきたドレイであってみれば、その無理を承知で即席のバレエ団を作ろうとするのであった。

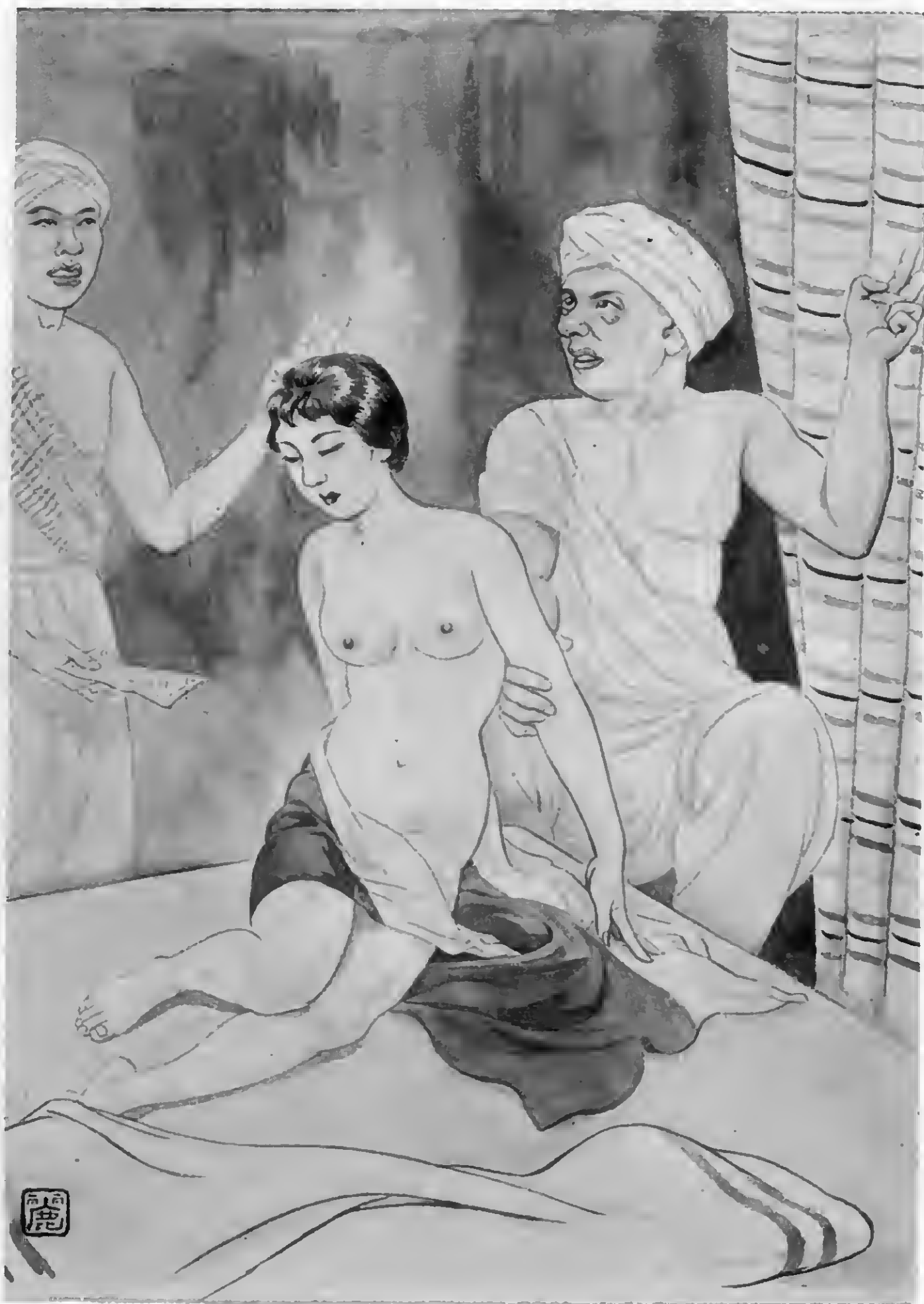
バレエ団の苛酷な調教



津地谷梨・案 滝れい子・画

人肉市場の女奴隷

人肉市場ではサービスのよい日本娘が殊に喜ばれた。日本から出荷された娘の殆どが人肉市場向として珍重され高価にセリ落されたものだった。中には淫売屋を転々と売られながら涙に明け暮れる者もあった。客の扱いが悪いといってオヤジから責められることも稀ではなかった。今しも可憐な日本の女がお客を前にして値ぶみされているところである。



津地谷梨・案

滝れい子・画



農場用輓馬の奴隷

体格のよい力のある女は、農耕用として買われた。女ドレイは比較的従順で戸外での野良仕事にもよく耐えた。時には馬の代りに車を輓かせることもあった。農閑期には街でドレイ馬の競走が行われるようになってから、女ドレイに車を輓かせることが流行した。やがて農場用だけでなく、乗用の車を女ドレイに輓かせることが流行するかもしれない。



津地谷梨・案
滝れい子・画

織姫の難行苦行

精巧きわまりない手織の更紗織は、すべて手先の器用で辛抱づよい女ドレイの手になったものである。仕事を怠けたりロスを出したりした者は、罰として三角木の上に坐らされ、苦悶にあえぎながら、針を運ばねばならなかった。この恐ろしい苦行を強いられた縫子たちは、二度と怠けるというようなことはなく、職場で精を出すようになるのであった。



津地谷梨・案
滝れい子・画

白人娘の中でも特に美貌の女が選ばれてハレムに買われていった。ハレムでは、主人の気まぐれで、別に落度がなくとも、いろいろの拷問や折檻が加えられた。ハレムの奥深き一劃にはあらゆる設備を施した部屋があった。ここでは、罪もない美貌の女ドレイたちが、太い石の柱につがれて、主人の嗜虐趣味を満足させるためだけに、苦悶の乱舞をしいられるであった。

ハレムの淫虐地獄

津地谷梨・案

淹れい子・画



スクリーンに於ける
緊縛シーン点景



東映 「新吾十番勝負」



東映 「さけぶ雷鳥」



東映 「二発目は地獄ゆきだぜ」



大映 「よさこい三度笠」



東映 「地獄の風車」



東映 「殿さま弥次喜多捕物道中」

一本足のカガシ

<四馬 孝・画>

流行のツーピースを剥ぐと輝くように肉づきのよい裸身があらわれた。白日の下にまぶしく光る肌、これは又、なんという奇抜で見事なカガシであろうか。夢の国にあらわれる美しい田園風景の一コマである。



熱蠟責めの椅子

<四馬 孝・画>

タラリ、タラリ、タラリ。胸と腹の上に立てられた二本のローソクからは、熱い蠟涙がたえまなく柔肌に流れ落ちてくる。う、う、うと熱さに耐えながらも、身動き出来ぬもどかしさに泣くのがあった。



アクロバットの仕置

＜四馬 孝・画＞

舞台で鍛えた柔軟な踊子の肢体であっても、このような恰好で長らく放っておかれるということは、たまらない苦痛であった。縄目の痛さが、次第次第に彼女をさいなんでいった。



哀憫美形 特選集



冷 光

モデル・絹川文代





究 道 女

モデル・大塚啓子





声なき

表情

モデル・絹川文代







おんな

モデル・絹川文代





陽光にはじらう



追い曳き

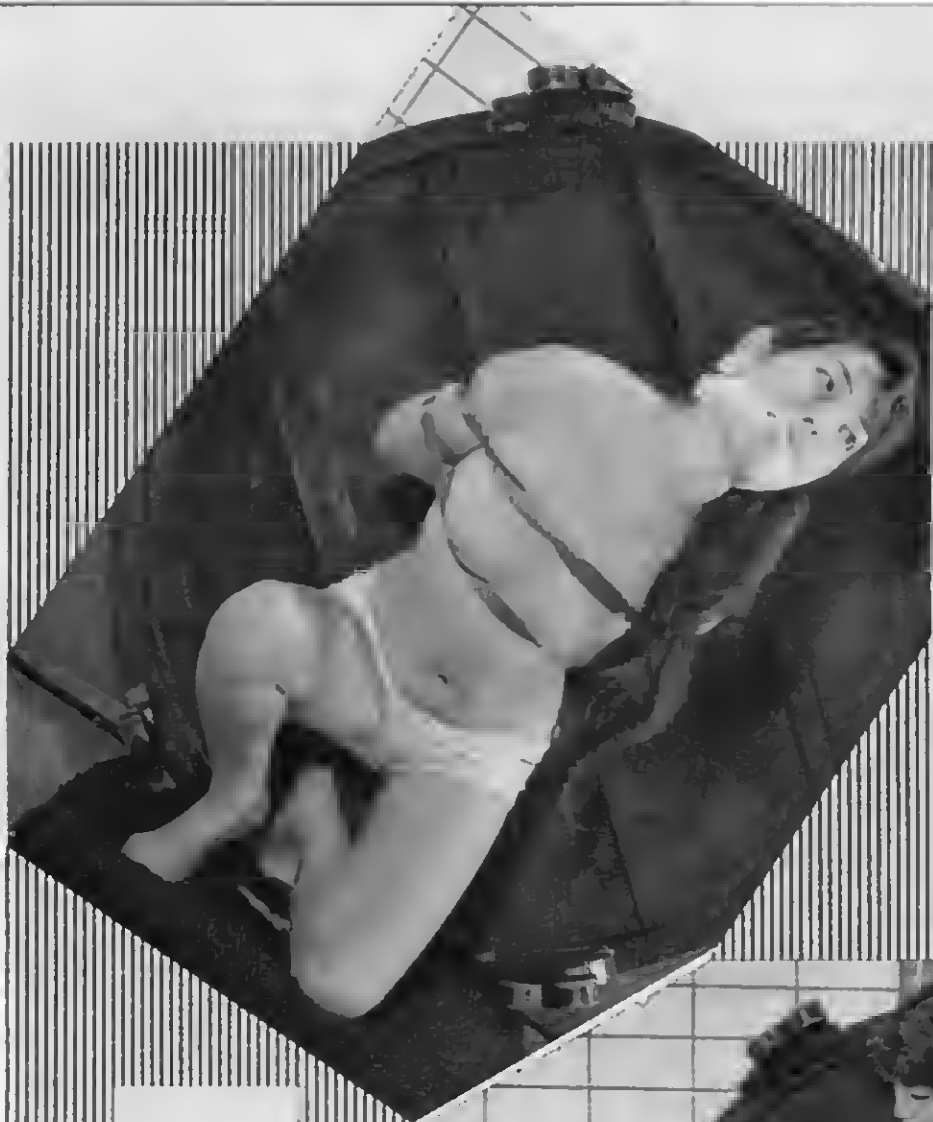
モデル・大塚



囚女の祈願



モデル・絹川文代



圓
轉
舞







起伏





白蓮の

モデル・桜井 葉子



白壁反転



千代子・大塚啓子



呪縄への執着



モデル・絹川文代



新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

新緑躍進号

1960年 6月号

(第十四卷 第八号 通刊第四百一十一号)

告白

二人だけの協約書

南 条 三 吉

癸端

我々夫婦はK誌を知る以前から相当進歩した二人だけの世界を創造していた。たまたまK誌を発見したのは妻であつたが、彼女は私にそれを購読するように薦めると共に

「これからあなたは、その本と写真で間に合わせておけばいいわ。アタシは今迄のようにいじめられなくても済むし、助かるわ」

と、私を見上げて云つたものである。

だが、結果は反対であった。K誌によって同志が意外に多いことを知り、また一部の人々に比べれば、小生のS・P（サド・プレイ）は、まだまだノーマルの範囲にあることを確かめ得た私は、今迄自分だけがアブの世界にはまり込んでいたのではないかと、ため

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

(7) 猿轡をはめられ



度なら大丈夫」と、自信をもってS・Pを楽しめる様になった。

彼女は、もったいぶって、なかなかこれに応じてくれないが、お互いの誕生日や結婚記念日、月給日、ボーナスの出た日などには、「どうぞ御存分に」

と理解ある態度を示し快くS・Pに応じ、人生を広く楽しくすることに協力してくれるのであった。それだけでも、平凡になりがちな夫婦生活に相当の変化と刺激をもたらし、我々が倦怠期も知らずに今日に至ったのは、やはりS・Pの効能と云うべきであろう。

だが、そもそもS・Pを楽しむ以上は、夫に絶対的君主制を必要とし、夫の召集令状により何時でも彼女を、おもちゃの兵隊に仕立て、お好みのS・Pを実施できるようにしておかないと、どうしても不便なので、私は、つとに、その機会をねらっていたところ、チャンス到来！この程、我家は或物件の売却による特別収入を得ることができ、その場合は8ミリを買っていいと云う約束になっていたものを、妻が貯金しておこうと云い出したところから話は意外な発展を見るに至った。

「8ミリって幾らぐらいするの？」
「そうだな、カメラ、映写機、編集機、それ

にタイトルを作る装置や三脚、セルフタイマーなど附属品一式で先ず五万円くらいだ」

「あら、そんなにいくつかわかるの？ それじや話がちがうわ」

「何を、今更そんなことは云わせんぞ」

「だって、今すぐそれだけのものを皆んな揃えなかったっていいじゃないの」

「おいおい、8ミリって云うものはカメラだけでは駄目なんだ。映写機もなければ映すことができないんだよ」

「映写機だったらEさんに借りればいいじゃないの……毎晩、写すわけじゃない……一層のこと撮影機もEさんに借りたら？」

「E君だって余り借りると厭がるよ。どうせ今度の特別収入は生活費以外のものなんだからサ」

「その考えがいけないわ。将来、家を建てるお金も要るし、子供の学資も作っておかなくちゃならないし、停年後のこともあるし、本当はこのお金みんな定期にしておきたいわ」
「そのための貯金や、生命保険は既にしているじゃないか。それじゃ約束の8ミリはどうなるんだい」

「それはあなたが、お小遣いをためて買えばいいじゃないの」

「今、手に入れてこそ楽しめる8ミリじゃないか。お爺いになってからいじるのは、8ミリじゃなくて盆栽だよ」

「とにかくアタシは厭よ！そんな話。だってもっと安いと思っていたんですもの」

「こいつ、現ナマを見て惜しみがついたな！約束違反だ！ペテンだ！」

「ペテンにかかったのはアタシよ。……五万円なんて絶対厭ッ！」

「約束を破った罪は重いぞ！お仕置きにするぞ！」

期待を裏切られた上に、説得しても効を奏しなかった苛立たしさに、私はとうとう腹を立てて、どなりつけてしまった。そして思わず「お仕置き」という言葉を使っていたことにハッと気付き「もしかしたら、これがキッカケで、8ミリを後まわしにしてもS・Pに関する絶対的君主制の方を先に確立できるかも知れない」と心に思った。そうなる私心は「如何にして話をそこへもってゆくか」と云うことで盛んに策略を廻らしにかかった。

「……」

だが策略の必要はなかった。暫らく沈黙が続いた後、やがて顔を上げた彼女は、上気し

た頬をほてらせてニッコリ笑い乍ら云った。

「どうぞ御存分に……」

私は「こそぞ！」と力を入れて続けさまに言葉を浴びせた。

「今だけではないぞ！これから毎晩だぞ！」

「ええ、いつだってどうぞ……何なら昼間でも……」

私は「しめた！」と心の中で喜んだが、なおも語気を柔げずに続けた。

「一生の間、ずっとだぞ！」

「ええ、覚悟してます」

「ウンと程度の高いこともするぞ！」

彼女は一寸ためらいの色を見せたが

「……だけど、それは飽くまで常識の範囲内でやってよ」

と釘をさして来た。ここまで云われると、

私はもう怒って見せることもできなくなり

「えっ！ 本当か。間違いないね」

と小おどりして喜んでしまった。

「大丈夫よ」

「本当に覚悟できてるだろうね？ 取消しは効かないよ」

「くどいわねえ、これだけハッキリ云ってんのに」

私は一気にここで念を押すと、はやる心を

押し鎮め乍ら云った。

「よし、それじゃあ僕は8ミリを自分で買おう。その代り毎月の小遣いをベースアップしてくれよ」

「じゃ、三〇〇〇円でどう？」

「いや、五〇〇〇円だ」

「いやよ。そんな……アタシはお小遣いなしで今まで来たのよ」

「じゃ僕が三〇〇〇円、K子が二〇〇〇円でどうだ？」

「そおねえ……この機会にアタシもお小遣いをもらって貯金通帳をこしらえようかしら、そして毛糸編機を買おう」

「よし、それがいい。それじゃ僕はこれから毎月五〇〇〇円もらうぞ」

「あら、どうして、三〇〇〇円よ」

「いや、お前の分も一応、僕がもらっておく。そしてお前がS・Pに協力する度にその成績によって御褒美として出そう。二〇〇〇円欲しかったら毎月その分だけ奉仕で稼げよ」

「まあ、考えたわねえ。その代りあなたは、その二〇〇〇円分については、たとえ余っても他のことには使わないでね。私に払うために別口しておくのよ」

「よし、責任をもって預ろう」

「そして、もしアタシが二〇〇〇円以上の働らきをしたら、その分だけあなたの三〇〇〇円から足して、アタシにくれるのよ」

「うん、やるよ」

「だけど、何をした時は幾らくれるって云う約束をしておかなくっちゃ……」

「うん、そうだね。それにその逆の場合の刑罰に対する基準も作っておこうよ」

と云うことになって、私は「二人のための協約」について条文の起草にかかった。

協約の内容は次の通りである。

協約書

(前文) 我々は、結婚してから早や八年になる。そもそも近代的な結婚の目的は「人生の幸福」を探し求めることにあるが、我々も次第にその青い鳥の正体を把みかけてきた。

「二人だけの人生」それは全く自然に、そして自由に創造されてゆくものであり、この創造力の深さこそ我々の人生を無限に拡張、永遠に楽しくする原動力である。我々は今こそすべてを許し、すべてを出し合って、思う存分生きる楽しみを満喫すべきである。

人生の楽しみが二人だけの創造によって産み出される以上、我々が今迄教えられ、且つ

習慣づけられて来た、あらゆる表面的偽善行為は、二人だけの世界に関する限り、全く有害無益なものであることを、此の際、我々は大いに認識しなければならない。

また我々が一人は男性に、一人は女性の形に分けられている以上、ことS・Pに関する楽しみを分つに当り、女性は常に献身的、奉仕的な役割を受持ち、その醸し出す美酒が男性を桃源の境地に誘う魔法の泉であることを確かめ得たとき、女性も、しみじみと人生の生き甲斐を感じ、己がもつ魅力に誇りを抱くものであって、この連鎖反応が循環し拡大して、二人の楽しい人生があることを深く認識し、茲に協約を締結するものである。

第1条(S・Pの原則) K子は夫の命令に対し、時と所とを問わず、如何なるS・Pにも直ちに従い、一切の反抗と弁明をしてはならない。

夫はK子に対し愛情を基調とした、あらゆるS・Pを命令できる。但し、S・Pは、常に常識の範囲内において、健康と衛生の限界を守ってこれを行うものとする。

前項の限界について、K子はその都度、意見と希望を述べることはできるが、最終の判断は夫によって行われるものであること

とを承諾する。

第2条(S・Pの限界) K子が受けるS・Pの限界は、原則として左の通りとする。

(1)、ハダカになること

K子は何時でも衣服を纏ってはならない。但し、夫はK子の姿が子供及び外部から見られないための考慮と、冬期における暖房につき充分、留意する。

(2)、縛られること

K子は、特に抵抗を許された場合の外はあらゆる緊縛を素直に受けなければならない。但し、夫はK子が苦痛を訴えた時は直ちに縄を緩める。またK子は、できる限りその苦痛に耐えると共に、一時的に手足がシビレても差支えないことを承諾する。

(3)、吊られること

K子は滑車・梯子・十字架・柱等を用いての宙吊り、及び逆吊りを含む如何なる吊りにも応じなければならない。但し夫はK子が苦痛を訴えた時は直ちに吊りを中止する。またK子はできる限りその苦痛に耐えることを承諾する。

(4)、くすぐられること

K子は身体の如何なる部分をくすぐら

れても、その苦痛に耐えてこれを受けなければならない。但し、夫はK子の苦しみ具合に応じ適当な休息をおく。

(5)、鞭打たれること

K子はその身体を鞭打たなければならない。平素の鞭打ちは寝巻の紐など比較的、柔かなものを用い、お仕置きの際打ちは皮ベルトなど肌に苦痛を与えるものを用い。何れも身体各部(頭・顔・胸・腹の部分を除く)に対しこれを行う。但し、夫はK子が鞭の醍醐味を体得するまでの間、必要な手加減を行い、常にK子が耐え得る限度内にこれをとどめる。またK子は鞭打ちに対し、できる限りその苦痛に耐えると共に、肌に一時的な条痕を生じて差支えない事を承諾する。

(6)、晒し者にされること

K子は(1)乃至(3)号に掲げるS・Pについて時としてそのままの姿で長時間放置されることがある。

(7)、猿轡をはめられること

K子はS・Pに際し猿轡をはめられることがある。猿轡は清潔なハンカチーフ一枚を口に含ませ、その上を紐及び布片で覆う。

(8)、目隠しをされること

K子はS・Pに際し目隠しをされることがある。

(9)、写真をとられること

K子はS・Pに際し如何なるポーズにても写真を撮らせなければならない。

但し、夫はそのD・P・Eを必ず自分で行い絶対に秘密を守る。

(10)、浣腸をされること

K子は夫の命令があれば浣腸を受けなければならない。浣腸は微温湯ならば一八〇〇CCまで、50%グリセリン液ならば三〇〇CCまでを限度とする。

(11)、その他、前各号に準ずるS・Pに応ずること。K子は新しいS・Pが考案された場合において、すべてこれに応じなければならない。

第3条(K子の心構え) K子は常に左の心構えをもち続けなければならない。

(1)、夫の命令がなくても、進んで夫に奉仕を申し出、または時として高度のS・Pを自ら計画して夫にその実施を求めるなど、夫を喜ばせるためのあらゆる方法を積極的に考えること。

(2)、日常、テレビ又は映画等により女性と

しての魅惑的なセリフと身のこなしを研究し、夫のために新しい魅力の創造に努力すること。

(3)、常に身体のをすべてを清潔に保持し、化粧は夫のためにするものであることを意識すること。

(4)、夫が命令する高度のS・Pを故なく拒否しないこと

(5)、例えば鞭打の如く未だに厭で仕方がないS・Pに対しても、早くこれに馴れようと努力すること。

第4条(お仕置き) K子が故なく夫の命令に従わなかった場合、及び、日常の生活において失策をした場合は、夫が行う裁判によりお仕置きを与えられる。

お仕置きの量刑は鞭打ちの数をもって表わし、肌に対し直接、皮ベルトを用いてこれを行う。但し、K子は皮ベルトに替えて綿ロープによる鞭打ちを申し出ることができ、その場合は量刑を倍にしてこれを行う。

第5条(量刑の基準) お仕置きの量刑基準は左の通りとする。

(1)、化粧怠慢 一打
(2)、媚態不足 一打
(3)、送迎怠慢 一打

(4)、風呂の溢水放置 一打

(5)、風呂の焚き過ぎ 一打

(6)、電灯の消し忘れ 一打

(7)、食事中の砂利 一打

(8)、食器洗滌不十分 一打

(9)、身体の不潔 二打

(10)、食事の遅延 二打

(11)、掃除不行届 二打

(12)、頼まれ事忘れ 三打

(13)、裸体拒否 三打

(14)、縫針の置き忘れ 五打

(15)、戸締り忘れ 五打

(16)、ガスの元栓締め忘れ 十打

(17)、アイロンの抜き忘れ 十打

(18)、火の用心不十分 十打

(19)、S・P拒否 二十打

(20)、お仕置き拒否 三十打

(21)、その他、前各号に準ずる行為 一乃至三十打

鞭打ち一打は、晒し吊り(裸にして身体を縛り、手、又は手足を上方にして身体を宙に吊る)一分間に換算し、K子は受刑にあたりこれを希望することができる。

第6条(減刑) お仕置きのための鞭打ち数はK子が申出る受刑姿勢に従い左の通り減刑

(3) 吊られること



ねえ

される。

もって表わす。

(1)、床に転がされて受ける刑 原刑通り

第8条(御褒美の基準) 御褒美の基準は左の通りとする。

(2)、爪先立に吊られて受ける刑 原刑の1/2

(1)、美しく化粧して夫の目を見はらせたとき

(3)、宙吊りにされて受ける刑 原刑の1/3

(2)、特に女性らしく振舞い夫を喜ばせたとき

(4)、逆吊りにされて受ける刑 原刑の1/4

(3)、進んで裸体となり夫を驚かせたとき

刑の執行日までに第八条に規定する御褒美が貯っている時は、K子の希望により、その限度において刑を免除す。

(4)、進んで高度のS・Pを計画し、夫にその実施を求めたとき

第7条(御褒美) K子が第三条に基いて実現した行為が、強く夫の心を捉えた時、K子は夫の判定による御褒美を与えられる。

(5)、夫が命令したS・Pに快く応じ、その

御褒美はお仕置免除のための鞭打ち数を

免除三打

免除五打

免除十打

免除二十打

免除三十打

免除五十打

免除六十打

免除七十打

免除八十打

成績が優秀なとき

(努力賞) 免除十打

(技能賞) 免除十五打

(殊勲賞) 免除二十打

(6)、夫が実施した高度のS・Pによく堪え抜いたとき(最優秀賞) 免除三十打

(7)、その他、前各号に準ずる行為のあったとき免除一打乃至三十打

御褒美は一打を十円

に換算し、K子は夫にその支払を請求できる。

第9条(協約の改訂) この協約は夫婦の合意によって改訂する。

もし合意が成立しない場合は、夫が改訂したい問題については権利金二万円をK子に支払って強制権を発動でき、K子が改訂したい問題については夫に請願を行うことはできるが、夫はこれに拒否権をもつ。

第10条(協約の運用) この協約の運用について夫婦の解釈が異なるときは、夫の解釈によって運用する。但し、夫はなるべくK子の

意見を考慮する。

第11条(有効期間) この協約の有効期間は双方署名の日より向う九十九年間とする。

昭和35年1月5日

夫の署名
妻の署名

調印式

調印式は、その翌日の深夜を期して厳かに行われた。K子は一読後、何のためらいもなく簡単に署名してしまった。

「おいおい、至極簡単に署名してしまったがそれでいいのか？」

「あなたを紳士と信じて……」

彼女は落付いて、ゆっくりと答えた。その表情は明るく、そして魅惑的であった。

「どうせ署名しなくたって、いずれはあなたのお好きな様にされてしまうんですもの……遅かれ早かれ、おんなじことよ」

「そうか、いい度胸だね……僕は日本一の倅せ者だ。僕は今日という日を待ちこがれていたんだよ」

私は、余りにも都合よく事が運んだ喜びに暫く浸っていた。

「あなたがそんなに喜んで下さるのなら、ア

タシ犠牲になった甲斐があると云うものよ。

「アタシは我家のために、子供のために、そしてあなたのために身体を売るんだわ……買手はあなたよ！ ねえ、あなた、アタシを幾らで買ってくれるの？」

「それは、これからK子の稼ぎ高に応じて払ってゆくんじゃないか」

「ちがうわ、最初の契約料……」

「うん、成程、これだけの内容を全部承諾して署名してくれたんだから確かに貨幣価値はあるね。……そうだなあ、それじゃ今度の特別収入から三万円だけ、K子の通帳に入れるか？」

「あら、安いわ、五万円よお……だって、あなたは8ミリの五万円使っちゃうつもりだったんでしょ」

「それはそうだけど……それじゃ結局、僕の代りにK子が使っちゃうわけか」

「ちがうわ。アタシ貯金しておいて、その内何か家のためになるものを買うのよ。そうねえ……。今年の夏、アタシが二万円、あなたが一万円、そしてボーナスが三万円、みんな合わせて六万円で電気冷蔵庫を買おうかしら」
「おいおい、それじゃ僕も一万円出すのか？」

「そうよ、いい考えでしょ」

「それじゃ8ミリのための貯金にならんじゃないか」

「そうよ、8ミリは冷蔵庫の次の次の次よ」

「次の次の次って、冷蔵庫と8ミリの間に何と何を入れてるの？」

「電気掃除機とルーム・クーラーよ。これであと家にはないものはステレオだけになるわ」

「おいおい、クーラーなんかやめとけよ。あんなの高くて、とても手が届かんよ」

「いいじゃないの。冷房の効いたお部屋で思いう存分アタシを苛めれば……オホホ……」

思えば彼女は飽く迄合理的に出来ている。

彼女は、もはやS・Pに対する嫌悪や危惧の念は抱いていない。寧ろ、彼女も今日と云う日を待ち望んでいたのかも知れない。S・Pへ踏み切る大義名分をたてるために……

その夜、引続いて我々二人が協約の締結を記念して、盛大な祝賀プレイを行ったことは云うまでもない。

協約の効果

彼女はこの夜、まるで人が変わったみたいに大胆、且つ、従順に振舞った。私は早速、努力賞として十点(お仕置き免除のための御褒

美十打のことをこう呼ぶことにした）を与えた。

さて、協約に書いてあるS・Pは、とても一晚の中にそのすべてを実施するわけにもゆかないので、我々はその後三日にわたって一応、一通りこれを行った。その度に御褒美は一〇点二〇点と増え、K子はこれをノートに控えて楽しそうに笑うのであった。

四日目になって、流石の私も睡眠不足を感じ、夕食後、直ぐ寝てしまった。

「あら、もう寝ちゃうの？ 今夜の御予定は？」

「今夜は休憩だ」

「ダメダメ、今から起きてアタシを逆吊りにして頂戴」

「いや、折角だが、明日はいつもより早く出かけるんだから……」

「いいわ、それならアタシは進んで高度のS・Pを計画し、あなたにその実施を求めたことになるんだから五点つけとくわよ」

「ずるいなあ、僕が何にもしないことが判っているものだから大きなことを云って……もし本当にすると云ったら困るくせに……」

「困らないわ……どうぞ御存分に……」

「まあ、やめておくよ」

「サンキュー。今夜は何もしないで五点いただきますよ。もうこれで五十五点たったわ。じや五点だけはお仕置き遁れのために残して、あとの五十点はお金で頂戴ね」

彼女は洋服ダンスをあけ、私の財布から五〇〇円札一枚を抜いて、ヒラヒラさせて見せた。この分ではいつ8ミリが買えることや。——然し、確かに最近のK子には貨幣価値が出てきた。

私は急に満ち足りた毎日を送ることができた。仕事の上でも対人関係が円満になり、仕事はスムーズに涉り、家路につく時も心がウキウキして、新婚当時の如く思わず歩を速め交叉点をわたる時は信号と左右をよく注意する様になった。今死んだらもったいないから人生を大切に作る気持のあらわれである。

K子も急に活き活きとした若さを取戻し眼の配り身体のかなし共に一段と魅力をたたえて来たようである。

「アタシ、この頃、御飯がとってもおいしいわ」と、健康状態のよくなったことを示しており、また便秘ぐせも忘れたように癒ってしまったと云っている。

また夜も子供のいないところでは恰も女給の如く上手に振舞い、こうなると私にとって

ナイトクラブも妾宅（もともと、そんなのな）いが——）も要らないわけである。それに朝晩の送り迎えも必ず玄關まで来てくれるようになったし、帰宅すれば直ぐ食事の支度がしてあるし、シャツのボタンつけなど頼んだことは必ずしてあるし、寝る前には必ず

「今夜の御予定は？」

と聞いてくれるのである。

「今夜も休憩だよ」

「あら残念ねえ、アタシはかまわなかったのに……じゃ五点つけとくわ」

と、点数稼ぎをする始末である。ただ脇腹のくすぐりと鞭打ちだけは極度に嫌い、

「減点するぞ！」

とおどして、漸くこれをさせる点だけが今後の問題として残っている。

勿論、私も決して無茶なことはいし、また今後共、しようとは思わない。でも、流石に彼女は女だけあって「進んで裸体となり……」の条項を利用して点数を稼ごうとはしない。拒否は減点の対象になるので、こちらから要求したときは云いなりになるけれども自分からならうとはしないのである。

以上、他人様から見れば馬鹿馬鹿しい痴態かも知れないが、私達にとっては全く愉快な次第であることを附記して、この告白記事を終ります。

蠢く蒼い群れ

近藤

(下)

この一篇のストーリーが
真実の記録として映るか、
或いはまた、単なる一個の
フィクションに過ぎないも
のとして読み取られるか、
それはお読みになる方の御
自由である。しかし、この
ストーリーの中のシチュエ
ーションに、私が異常な関
心を寄せ、強い情熱を以て
取組んだことだけは、事実
として附言して置きたい。

護送バスが家庭裁判所の裏門から乗込んで、廊下に通じる入口に横着けになった。

「サ、降りろ」

警戒のために同乗していた警官が開いた扉を抑えて少年達に低い声で命令する。女の子を先頭に手錠をかけられた連中がゾロゾロ降り立って、捕縄に繋がれて蟹のような歩みを強いられる。

女の子の多い日だった。薄汚れた身なりのちびっこの少女は窃盗で挙げられたか、払いの常習犯だった。同じ位の背丈しか無い癖にムチムチ肉づいている少女は売春事犯で客引きの最中につかまった娘だった。三人目が京子、その次が利子、その次にデパートの特売場で万引中を見つけられ常習と見做されてしまった田舎出の少女が

居る。次が令子、そして最後の七人目に路子が繋がっていた。女の子が七人もいると、男の子と別にして縛って貰えるから、何となく気丈夫だった。

検察庁のそれよりは幾らかましな明るい部屋へ、一列に並んだ少年達は変な形に歩を運ぶ。数人の警官が警備する部屋へ入れられると、カチャリと扉に鍵がかけられる。ストール様の長椅子が、本来三人掛のものなのに、真中をあける二人掛のものにして使われ、少年達は前を向いて腰かけたまま、互いの会話を禁じられている。

令子が坐り心地も悪そうにモジモジし始めた。ミッチンは敏感だった。緊張の余りか、フーコが尿意を覚え、男の子達の眼を憚って無理な我慢をしているんだなと感付いた。

「あのウ、トイレに行かせて下さい」

臆する色も無く警官に声をかけたミッチンの姿態へ、少年達の視線が一斉に集まった。いけないとは云わせない語調だった。

流石に女子用のトイレは扉の一番下が曇りガラスだが、それでも上半身は外から覗いて見える。事故防止のためとはいえ、警官の視線が注がれているし、男の子の中には、わざわざ振り向いて、面白そうに眺める奴もいるのだ。

「あんたも行つといた方がいいヨ」

「うん」

ミッチンに囁やかれぬまでも、フーコは入違いに立った。ミッチンの存在に感謝していた。勿論、ミッチンの思いやりとは気付かないから、敬愛するミッチンがよい時にトイレへ行きたくなってくれたものと感謝していたのである。

ノックの音に覗き窓から見やっただ警官が扉をあけると、八、九人の大人達はいって来た。ずんぐりしたオッサンだの、眼鏡を光らせた青年だの、まだあどけなさの残っているようなおねえさんだのが、少年達を一人ずつ順に呼び出して、家庭環境や学校のことや職業のことなどを訊ね、事件の内容を問い質すのである。

フーコとチャコは一応、神妙に答えていたが、トッコは終始だんまり戦術で手こずらせていたし、ミッチンもいやな過去に触れたくないからと面接をはっきり拒否してしまった。

後に知ったのだが、その大人たちが調査官の先生達だったのだ。先生達が出て行ってから、また暫らく待たされた挙句、今度は一人ずつ呼出されて別室でネリカン送りにするかどうかを決められる。親や兄弟が来たりして裁判官によく頼んでくれれば大概、家へ帰し

て貰えるのだろうか。薄暗い廊下に待っている父兄が順に呼入れられる気配がする。

最初に呼ばれたフーコが泣き出しそうな顔で戻って来た。前にも鑑別所へ送られたし、謙が死んだのだから覚悟はしていた筈だが、裁判官や調査達の前で涙声で嘆願する親心が思わず身にしみたのだろう。

チャコと入違いに戻って来たトッコは、只さえ血色の乏しい頬を蒼白に硬張らせ激しい興奮を見せていた。それでもミッチンを、ちらつと顧た口許には冷い笑いが浮かんでいた。ミッチンはその歪みからトッコもネリカン行きだなと感じていた。

チャコも助からなかった。筑波会の中では幾分か、まともな方であつても、何しろカリプソのチャコと名乗って、自他共に許すお姐ちゃんなのだ。鑑別所にブチ込まれて影響する学業なんか土台、持っていない。ネリカン行きが決まって部屋へ戻る時、ミッチンとすれ違ったチャコの頬には自嘲の色があつた。

瞳がキラキラ輝く裁判官だった。ミッチンは、その前の椅子へ腰かけようとしながら、肩を抑えている職員の手を払い落すように肩をゆすった。

「よしてヨ！いやらしい！」

裁判官は、じつとミッチンを見据えた。

名前をきかれ、住所や本籍や職業をきかれ、事件の内容についてきかれると、ミッチンは口許を歪めて云った。

「云いたくないことは云いたくないワ。いやなことを想い出させなくたっていいでしょ？それに、そんなことなんか、そこに書いてあるんじゃないんですか？」

吐き捨てるようなミッチンの口調に、押しかおせるような声があった。

「君を、まともな人間に立直らせるために訊くんだ。君がこれからどうやったら立直れるか、その方法をみんなして考えようというんだ。君が事件をやったかやらないか、どう処罰しようかなんて云うんじゃない。君が知っていることを在りのままに話してくれりゃいいんだ」

ミッチンは声の主を見ようとせず、ふてくされたように独り言を云った。

「云いたくないものを無理に聞き出そうって云うんなら、いい様にしたらいい。できるもんならゴー間でも何でもしたらいいんだワ。あたしの口を割ったらお慰みヨ」

鼻の先でせせら笑うような態度は、不遜の極みと映ったのである



う。ミッチンも当然のこととしてネリカン送りが決まったのである。暮れるのが早い陽は、バスの出る頃にはもうあたりを薄暗くしていた。警察の護送バスと違って、二人掛けの座席が並んだ普通のバスと同じ造りだった。

万引の少女は、田舎から実の姉が警察からの報せに驚いてとんで来て一緒に連れて帰られたから、女の子は六人だった。チャコと、かつ払いの少女が並び、トッコは売春の少女と、フーコはミッチンと並んだ。

身から出ましたサビゆえに

いやなポリ公にパクられて

手錠はめられ意見され

着いた所が裁判所。

一頃、社会問題にまでなったネリカンブルースが、ふと、ミッチンの胸をかすめて走った。自意識過剰の少年達が殊更に悪党ぶった私語を交わし、特異な劣等感を持つだけに却って捨てばちな言動に走り勝ちなのだ。

「ハク、いスケじゃねえか」

「イカスな。ぐっと来ちやうぜ」

「チャンネエ族か！何してパクられたんだろなア」

同乗の調査官にたしなめられることを計算に入れての、声高の、聞こえよがしの独りごとだったし、すぐ背後の少年達は隙を窺っては手を伸ばして、トッコやコーコやそれにミッチヤンの肩までつついて小声で話しかけて来る。青春の欲求に狡賢く行動的な少年達だ。

頑丈な金網と鉄条網の中へバスは入った。薄闇の中に真黒く



建っている冷厳な影の中に、処々小さな電灯が漏れて見えるのは、收容された少年達が夕食を待つ部屋の辺りなのだろう。

女の子六人は男の子達の野卑で哀れな歓迎の言葉を浴びながら、一足先にバスを降り、殺風景な小部屋へ入った。

書類と対照し、所持品を調べ、そして衣服を取り替える。洗いだらした紺の上衣とズボンを身につけ、V字のセーターもいかれたトッパやスラックスも一纏めに括られて名札が付けられてしまう。

ハイヒールも駒下駄も容赦はない。時折、街で見かけた男の囚人達と同じ色の仕着せを着せられて、鉄格子と錠の中で檻の生活を味うのだという想いが、ひしひしと胸にこたえる一時なのだ。

かつ払いの少女と売春の少女は初めての入所らしく、流石にオド／＼とおびえていた。経験があるだけに令子は一寸した要領を教えたりする。

「ネ、あんた。ヤキ入れられるんだろね？きついんだろ？」

売春の少女が恐る／＼訊くのを、令子は事も無げに突き放した。

「そりゃ、地獄の一丁目だからネ。無事じゃ済まされないだろ」売春の少女も掻っ払いの少女も血の気が失せてしまった。

利子は、もと／＼血の気の乏しい娘だったが、京子もミッチンも落着いて見える割には蒼白な顔色をしていた。

麦だけの御飯に野菜のごった煮の夕食だった。鑑別所のお偉方の訓辞があって、第一夜をすごすべき個室という名の独房へぶち込まれる。水道が引かれ、造りつけの便器があり、ベッドがある。錠をかけられた扉には、薄暗い中で毛布にくるまり、

生暖かく息づいている囚われの少女を表示する名札でも架けられるのだろう。一定の時間を隔てては、少女のいる個室の覗き穴から、二つの瞳が正確に監視する。

罪人という扱いではなく、心に重い病気のある患者という扱いなのだ。三日間は面会も許されず、安静第一の名目で、少女達は終日ベッドの中で悶々輾転としているのだった。

三日間のうちに一応、心身の鑑別を終ることになっている。それ

が済むと、云わば雑居房のような制度が認められ、人恋しさが或る程度満たされる。一日の一定時間は運動をさせて貰えるし、とにかく人と話をするのが大っぴらに許されることが嬉しい。明るい陽光を浴びながら中庭へ出て、黒い土に小さな花の彩りを眺めるのも心が和やかになるのだ。

しかし、この三日があけた時は、僅かな喜びに併せて地獄の責苦が降りかかるのだ。女子寮はともかく、男子寮では深夜に新入り歓迎のパーティが催され、特製のカクテルが持出されるという。

俗にこの馬鹿騒ぎをリンチと呼ぶ。従来、マスコミの取扱いでも私刑と呼んでいた。だが怨恨も憎悪も全く無い処に私刑があるだろうか。お互い收容された者同志が挙って参加する一種の事実習慣では無いだろうか。古参者が新入者を勧めるのは伝えられたし、きたりの実践であり、そして檻の中の歪んだレクリエーションでしか無い。その証拠に歓迎パーティを受けた者がやがて新入者を迎えると、自から先頭に立ってカクテルを製造するではないか。反感も復讐もなく、あるのは古参者の優越だけなのだ。

共犯者は同じ部屋へ入れない建前である。といって一人だけ新入りにするのも可哀想だという思いやりからか、令子と京子が同室に入れられ、利子は掻っ払いの少女と、ミッチンは売春の少女と同じ部屋へ入れられた。

どの部屋にも筑波会の名を聞き知っている不良少女が一人や二人はいた。それ程に城南の筑波会は特異な存在だったのだ。

令子は再入だけに要領よく高飛車に出て、同室の京子と共にリードシップを取ってしまった。虞犯、売春、傷害致死となっては如何に此の世界の少女達も太刀打ち兼ねよう。一方、利子の方は蒼い

程の細面に凄みのある瞳をギラ／＼させて、吐き出すように云い切った。

「筑波会ってのを作って、したいことオしてただけさ。ミッチンって凄くイカすひとが付いてくれてサ、何でもできるんだ」

「筑波会ってサ、謙ちゃんてのにガンつけられてるんだって？」

「知らないネ。その謙と勝ってのがアタシ達に因縁つけて来て、刺されて死んだのさ」

「死んだ？あんだ、バラしたのかい？」

「さあね、それでパクられちゃったんだけどサ」

云うだけ云って、さもつまらなそうに口を緘した利子に、古参の少女達は冷い恐怖が背を走るように感じたろう。

いきなりらしいのが行われたのはミッチンの部屋だけだった。

毛布にくるまり、壁を向いて横になっているミッチンを、ぐり／＼と足の裏が踏み躪った。

「あんだもいい軀してンねえ。パン公？」

横になったまま振り返ると売春の少女の哀れな姿が目に入った。

寝ていた毛布を引っ剥がされて、パンティ一枚にむかれた半裸体を床に正坐させ、二人の少女に左右の腕を捻じ上げられ、張った胸乳が太腿に押しつけられる位に二つ折りにされている。セットの跡も残らない髪の毛を驚嘆みに曳いて顔を起している腕には必要以上の力が加わっていた。血色の悪い、ひからびたような唇や頬がわなわなと顫えているのは、娘の素肌にプツ／＼鳥肌を立てさせる夜の冷氣と、二人がかりの力任せの苛みと、それ以上に襲いかかる不安や恐怖のせいなのだろう。

パシッ！

いきなり、ミッチンの頬が小気味よい音を立てて鳴った。

「眼をあきな！なめた面アするんじゃないよ！パンスケッ！」

ミッチンは、ゆっくりと起き上った。自分の頬を打った少女の前に、向き合って立った。

「おい、パンスケ！新入りの挨拶を教えてやろう。今夜アたっぷり可愛がったげるから、黙って裸ンなんな。騒ぐとぶつとばすよっ！」

ミッチンはニヤリとした。

「一人前の顔して、騒がれるとこわい？」

「何ッ！」

瞬間、ミッチンの顔に往復ビンタが飛んだ。売春の少女は眼をつむった。だがミッチンはよろめきもしなかった。次のビンタを左手で止めるや、相手のその右手首をグイッと極め、片方の手で胸倉を掴んで引寄せた。同室の他の少女達は眼を瞠った。

ミッチンは低い調子で、とどめを刺すようにゆっくりと云った。

「遅いんだから静かになさい。私を何に見ようと勝手だけど、私の容疑は唯の人殺し。売春じゃないわ。あなたは私を知らないンでしょ。私も、城南の筑波会じゃ誰もあなたを知らないわ。それでおいこ。話があったら明日、聞いて上げる」

上品ぶった言葉使いが殊更な凄味を持っていた。白けた空気の中で、加虐側の少女達は呆然としていた。

「その娘を放して上げなさい。風邪ひくわよ」

自分が理不尽に殴打されたことを一言も咎めない自信に満ちた物腰が、少女達の怖れを誘うのに大きな力を見せていた。

売春の少女は上田サキと云った。翌朝になってサキが礼を云いか

けると、ミッチンはぴしりと釘をさした。

「私はね、あなたの裸なんか見たくなかったし、眠かっただけよ」

サキがミッチンに近づいた裏には、無意識にせよ古参少女に対抗する上での打算があった。それをねつけたのは却って良かったのだ。ミッチンの頬を打った少女はバーの女給を看板にしたお目見得ドロで、愚運隊のヒモに貰いでいる能村明美という娘だった。明美が筑波会に入れて欲しいといった時、ミッチンは静かに云った。

「あなたが自分を大事にしているなら、フーコ達に話して御覧なさい。フーコとトッコとチャコがいいと云ったら誰も文句を云わないわ。でも、あなた命がけで恋をしたことない？恋人から命がけで愛されようとしたことが無いの？」

居室を分けたことは余り意味が無く、却って逆効果だった。ミッチンと利子と、それに令子達を中心にして筑波会の力は各部屋に浸透し、そして大きく凝集して行った。

一日のうち極く僅かな時間、鑑別所にいる少女達が顔を見合って喋ることを許される。筑波会の顧問格ということが知れて、女としても頗る魅力的なミッチンの許へ何彼と相談をしかける少女もできて来た。ヤケクソな呪いを聞かせに来るもの、今後の身の振り方の相談や更生の激励をして貰いたがるもの、不平不満を唯はき棄てて行くもの、中には処分を軽く逃れるべき秘策を受けに来るものさえあった。ミッチンは聞かれれば静かな口調で、而も至極当然のこととして云ってやる。

「どんな小さなことでも、困ったらすぐ調査官に相談しなさい。私達の処分については調査官とのつながりが一番大事なんだから。調

査官にだけは、訊かれたら本当のことを話すのよ。訊かれたことだけネ。訊かれないのに話すことはないワ。どんな事情があっても調査官を欺しちゃ駄目、嘘ついたら助からないわ。知ってることを知らないと言ったら嘘になるから、云いたく無ければ黙って下を向いているのが一番。悪いことをしておいて、狡く構えて罰を逃げる方法だっているいろいろあるわ。結局はネ、調査官に、この子は本当に悪かったって後悔してるんだと思って貰うことよネ。ごまかしたいんなら総ては演技力だわネ。でも私達みたいに演技力が弱かったら、人から本物に見えるためには、本当に後悔しちゃった方が楽じゃない？」

共犯者の令子、利子、京子に対しても路子は強く云った。

「誰に聞かれてもこうだと云い切れることだけを云うのよ。少しでも嘘は駄目。間違いないことだけを正直に答えるのよ」

筑波会という特殊な組織をめぐって惹起された事件だけに、難かしいものと見られたのであろう。只でさえ共犯者の多い事件とか、少年が学生であって性格、環境等に多くの問題を含むような難事は、経験に富んだハイクラスの調査官があたるものだが、この筑波会の幹部少女達による傷害致死事件は、正にそのすべての要件を備えていた。

背の高い調査官だった。彫りの深い顔は、高邁な理知と識見を偲ばせ、豊かな人生経験を示す人間の年輪も見えていた。大きな瞳が鋭く光り、人を憚る少女には恐ろしい存在に違いないが、罪の意識無しに話したら、さぞ頼母しく愉快な支柱と思われた。勿論、初対面では路子達に笑いかける理由は無かったが、もし彼が微笑でも見

せたなら心から親しめるムードを醸すだろうとミッチンは思った。

鑑別所入りをしてから五日目、初めて調査官に逢った。冷やかな一隅に、薄暗く殺風景な調査室が幾つか並んでいた。部屋から呼出されたミッチンは、教官の先生に附添われて調査官の先生の前へ連れ出された。

「君が高橋路子だね」

錆のある低音だった。調査官の高杉先生は事件の記録を見ながら要領のよい質問を路子に浴びせ、路子の応答の中から何事かをメモして行く。

調査官は、警察官よりも検察官よりも、誰よりも熱心に彼女達の生い立ちを知りたがった。性格に関して自ら認識する長短を云わせ、生育歴を根気よく追い続ける。

「裁判所はネ、君達の罪をあばいたり、処罰しようというのじゃない。君達が立直るのにどうしたら一番いいか。皆で相談しながら考える所なんだヨ。そのためには君達の性格や環境を充分に知っていない限りやいけないだろう？何でも隠さないで話さない」

だがミッチンは平然と云った。

「先生のおっしゃることは分ります。でも、そのために私達が苦しむのは構わないでしょうか？」

「先生のお仕事が私達の過去を洗いざらし調査なさることだとは知っています。調査ができればお困りでしょ？でも私は自分の過去を忘れるために死にもの狂いなんです。たとえ先生にだって私の過去に触れられることは我慢できません。まして私自身の心の古傷をはじられるのなんか真平です。——」

「本籍は分りません。住所不定でルンペンです。お父さんもお母さ

んも殆ど憶えていないんです。今日まで何をして来たかなんて、とても殺されたって云えやしません。これだけで全部です。もし、これだけしか云わないと少年院へ入れられるんなら、私は少年院へ行きます。刑務所でも行きます。人殺しの罪で死刑にされるなら、それでもいいです。醜い過去を云わされる位なら、その方がずっとましだと思います。――」

「悪いことをしなかったなんて決して云いません。乞食もしました。バタヤみたいな真似もしました。食べる物をあさって、よその家の裏口の辺りをうろついて、水をひっかけられたこともあります。ヤケになって暴れたら、野良犬みたいに棒でぶたれて追い廻されたこともあるんです。――」

「私は世間を憎んで、呪ってやりました。小さな搔っ払いからユスリをおぼえました。そのうち男の人を欺してお金を捲き上げることが覚えたんです。そのためにお酒も煙草ものめるようになったんです。――」

「こないやなことばかり。私自身が忘れたいことを聞かれるなんて、死んでもいいやです。許して、先生！」

ミッチンの語調は次第に熱を帯び、半ばからは堪えきれぬ苦しみに悶えるような声になった。高杉調査官はそんな彼女を観察するように鋭い視線をじっと浴びせていたが、若い調査官なら追及を続けたであろうものを、それ以上、路子を問い詰めはしなかった。

中二日おいて二度目の調査があった時も、路子は自分の生育歴については語りたがらなかった。が、その代り令子の処分については執拗に喰い下がったのである。

「令子はどうなるんですか？先生、まさか令子だけ少年院へ入れら



れるんじゃないでしょう？可哀想です。あの子。令子は男の人に欺されたんです。玩具にされて、棄てられたんです。酷い目に逢わされて、あの晩だっていやなこと云われて喧嘩売られたんです。令子の場合には仕様が無いと思います。正当防衛なんです。正当防衛ってあるんですよ？もし令子がどこか入れられるんなら、私が身替りになってもいいワ。どうしても駄目なら私も一緒に入れて下さい」

老練な高杉調査官も路子が何か頼りになるものを持っていると感じ出した。

「令子は淋しいだけなんです。根は素直な子だと思うんです。令子の気持を分ってやれる人さえいたら、きっと良い子になります。路子だって京子だって同じです。あの子達に親味になって相談に乗れる人がいたら、何も人に憎まれるような、恥ずかしい真似なんかしない筈です。そうじゃありません？先生」

この時に、既に高杉調査官の胸奥には路子に対する処分の構想ができ上り、そして令子をはじめ路子や京子に対する処分も浮かんでいたと云う。

調査は慎重に行なわれた。鑑別所に收容される期間は二週間で、一回だけ更新できる。だが令子、路子、京子は形だけでも学籍があり、既に勾留も一杯になされた以上、一カ月以上の長期欠席は好ましくないし、学業の遅れという点を除いても、少女の身柄を拘束し続けることが本人の教化遷善のために悪いことは云うまでもない。

高杉調査官は慎重な裡にも迅速に心がけた。本人が語りたがらない事項は他の少女達の話を総合すること。そして尚不明ならば敢て空白のままに書類を作った。調査の結果報告のうちで裁判官が重視

するのは本人の再非行の度合の強弱、保護者の保護能力、それに調査官の処遇意見くらいのものだということを熟知していたからである。

特にミッチンの場合は、もし彼女があくまで犯行を否認すれば、或いは嫌疑なしとして、釈放されるべきケースであった。それを、「私は夢中だったから、もしかしたら刺したかも知れない」と云われては、謙を刺した証拠も無い代り、刺さなかった証拠も無いのだから、真逆に釈放はできかねる。だがこういう事情のもとで、知らぬと云い張らない路子の心持が高杉調査官には何故か嬉しかった。近いうちに愈々審判があると聞かされた日、ミッチンは令子達に云った。

「審判の時には聞かれたら正直に返事しなよネ。それから、どんな結果になっても文句つけたり、不貞腐れたりするのはよそうよ。私は行け！」と云われたら刑務所へでも行く。あなた達も筑波会の幹部なんだから、みっともない真似だけはしないで頂戴ネ」

三人の少女は只、まじ／＼と路子の顔を見守るばかりだった。

何を今さら！という気持もあつたろうし、ミッチンのいやに自信ありげな口振りから、ミッチン以下全員の少年院送りが既に決まっているような感じがして、背筋がゾクツとしたのだろう。

審判の日。

横腹に小さく東京鑑別所と書いた水色のバスが家庭裁判所へ向かう。当日、審判に付される少年少女は鑑別所の先生達に附添われて午前十時から始まる審判に間に合うように出頭する。

家庭裁判所で一番陽当りの悪い北の端にネリカンの出張所があつて、特別に奥まった細い廊下の奥に、頑丈な鉄格子のついた部屋が

ある。昼でも薄暗い部屋に電燈は無く、堅いベンチが幾つかと木の机が一つ、片隅にコンクリート造りの奇妙な水洗便所が一つある。鑑別所の職員が入口に机や衝立でバリケードを造り監視する。

アルミの湯呑みがアルミの盆にのり、煎じた茶を入れてある薬罐に添えてある。夏は冷房は無く、冬は石炭ストーブで暖をとる。そんな殺風景な部屋で或る者は俯向いてじっと物想いに耽り、或る者は差入れの漫画本を貪り読み、或る者は些かの落着きも見せず、キョロ／＼と忙しく顔を動かす。予め自分の処分を識っている少年のうちには、兇悪犯罪を誇らしげに吹聴し、自暴自棄の余りに絶望的な虚榮をひけらかす者もいるから、せめてもの思いやりを、ぐっ、表現に託して忠告するネリカンの教官達が、鼻の先であしらわれることも屢々だった。

少年事件にあっても真実をなおざりにしてよいものではない。従って裁判の手續は刑事訴訟法によっている。唯、少年法の理念が、少年の保護育成にある処から、刑罰法令の適正な運用を離れて、少年の非行性の摘除が第一の目的とされるのだ。

少年院とか教護院とかに收容されるほか、或いは児童相談所に送られる者もあり、罪情が悪質で検察庁へ戻されたり、都合で他の裁判へ移されたりする者もある。

家へ帰される者も理由は一つではない。審判を必要としない場合や処分をしないで済ます場合、それに保護観察にした場合は家へ帰されるのだ。そして少年事件では帰宅を許される場合が過半数を占めている。

家へ帰して果して善くなるだろうかと思われる場合で、といって

一年半も施設に收容して教育し直すのも考えものだという時に、民間の篤志家や保護団体に少年を預けて様子を観ることがある。一応三箇月程度の観察で最終的に帰宅か施設收容かを決めるのだ。

最初のタカリや喧嘩が不処分となっていた令子は、二度目の売春で保護観察になっていた。そこへ今度の事件である。傷害致死では少年院送りも当然のことだと高杉調査官も云う。罪質も悪く、性格の矯正も必要であり、更に、もし帰宅を許したら、死んだ謙や勝男の仲間からどんな危害を加えられるかも知れず、それを回避する自信は毛頭なかった。令子については、どうしても暫く家から引離すことが必要と思われた。

利子についても同様なのだ。直接の下手人が利子でないことは、はっきりしている。だが飛び出しナイフを常に携行し、何かと云うとすぐ振り廻したがる勝気な美少女には問題が多かった。令子を抜けば間違いない筑波会の首領なのだから……。

京子だって問題が多い。カリプソのチャコだなんて自称して、何かあるとすぐ調子に乗って騒ぎ出す思慮の浅い少女では、いつまた爆動に乗るかも知れず、もう少し年令に応じた分別を持たせる必要がある。第一、謙を刺した容疑者の最たるものが彼女と令子なのだから、ほとぼりのさめるまで家から離しておかないと、惨い私刑のあげくに果知れぬ暗黒街へぶち込まれないとも限らない。

肝心なのは路子である。彼女の不可思議な魅力で、手に負えぬ不良少女が統率されるのだから無視できない。実際、路子が鑑別所に入れられている間、少女達の調査がかなりやり易くなったことを気づいた調査官も尠くない。路子については恐らく初めての非行らしく、指紋照会によっても逮捕歴さえ浮かばなかった。その上、改俊

の情が顕著で、再非行の可能性も極めて乏しい。容疑も薄いのだから処分をしないのが普通というケースなのだ。だが彼女は然るべき保護者が無く、住居不定で無職である。酒も煙草も嗜むのでは精々女給かダンサーか妾くらいにしかなれない。それに路子から引離された場合の令子達の動揺を考えると、その更生のために路子にも同じ措置をとらない訳に行かず、高杉調査官は問題点を総て示してから路子の意見を求めた。

「令子を少年院に入れるのは待って下さい。謙さんが居なくなったらきつと変って来ると思ふんです。今度のことも、今までいろいろして来たことも、みんな謙さんがもとなんです。暫らく何処か遠くへやって様子を見てやればいいと思ふんです。利子の処はお父さんが厳し過ぎます。利子も我儘ですけどお父さんが叱るばかりじや可哀想です。もう少し相談相手になって上げれば、あの子は優しい子になれると思ひます。京子の処は甘やかし過ぎるんです。きちんとした生活に馴れなければいけないと思ひます」

真剣な表情で、控え目な語調の路子は、それから臉をパチ／＼させ、ちよ／＼ぱりはにかみながら云う。

「それから私ですけど、私、先生がおっしゃるようない子じゃありません。あんまり素直じゃないし、強情で、お酒や煙草ものみます。何処か厳しい処でいじめられた方がいいんです。私、令子達が好きなんです。あの子達が少年院送りにならないのでしたら、私、大抵のことなら我慢します」

惚れ／＼するような微笑が口許に美しく浮かんでいた。

審判の結果は四人とも高杉調査官の意見どおり試験觀察の決定が

あった。要するに暫く様子を見た上で処分を決しようとするのだ。試験觀察には二種あって、家へ帰す場合の在宅試験觀察と、よそへ預ける補導委託がある。共犯関係にある者を補導委託に出す場合、同じ委託先を選ばないのが原則になっているが、これは悪友との連繫を断つ意味があって、しかも東京の場合、女の子を預かってくれる所が幾つもありはしないのだから大変だ。

路子の意見が充分に考慮されて、それぞれの落着き先が選定された。利子は都内にある篤志家に引取られ、住込の店員ということで働くことになった。京子は自分の家から二時間とからずに行ける宗教団体の女子寮に入れられた。そして令子は、路子と一緒に農耕等を業とする近隣の篤志家に預けられることになったのである。

他の処に較べ令子と路子が預けられ所は女子専門の受託施設であって、收容可能数も大きいし、実際に多くの女の子を引取っている。

高杉先生に連れられて行った日、もう夕食の準備に忙しく立働いていた少女達や、部屋の中で思ひ／＼の仕事をしていた少女達が物珍しそうにジロジロ見つめる視線の中に、何かしら冷いものを感じていた路子だった。そんな中に、一人だけ心配そうな少女が隅の方から送る視線に気がついて、ネリカンで見知った顔だなと思ひ、そして近々ヤキを入れられるんだと察しがついた。

大した度胸や腕／＼の少女も居そうになく、どうやら古参の順にハバを利かせているらしい。小さな社会には何処にもありがちな慣習だから反抗するだけ馬鹿を見る。おとなしく、されるままになろうと観念して眼を閉じたが、流石に令子は寝つかれぬらしく、遅くまで頻りに寝返りを打っていた。

最初の二、三日は万事に不馴れなので職員も何彼と注意をするから、古参者もむやみに手出しはできなかった。三日目から令子と路子は畑に出た。作業用に借りたデニムのズボンはヴォリュームのある二人には小さすぎて、ヒップの盛り上りではち切れそうになっていた。畑からの帰り、班長格の芳子と伴子というのが、精々凄んで云った。

「あんた達の歓迎会、近い内に開いてやるよ」

「一遍に二人も仲間が殖えたんじゃ、盛大にやんなきゃアね」

六日目になって監督のやかましい職員が東京へ出かけて留守になった。路子は手廻しよく用便を済ませ、令子には醜態を演じないよう注意した。

物置小屋から、普段滅多に使わない旧式で大型のリヤカーが持ち出され、藁を敷いて必要な道具類を載せる。

「さ、出発！」

リヤカーを曳く少女を先頭に、芳子と伴子は路子と令子を取り囲むように指揮を執る。道が曲って、寮が見えなくなると芳子が声をかけた。

「ストップ！あんた達、代って曳きな！」

リヤカーを引こうとすると腕を掴まれ、無抵抗の路子は荒縄で手首をキッチリ後手に括られた。令子もおとなしく縛られた。

——どうせ泥臭い子供欺しの癖に。したいことなら何でもしたらいい。——

令子の心にも余裕が湧いて来た。路子と並んでリヤカーのかじ棒の内に立ち、横棒を丸々した腹部に当てている。伴子達はリヤカーに鈴なりになり、尻込んでいた顔見知りの娘も否応なしに乗せられ

て、八人の少女の重みが二人の柔らかな腹部に喰込んだ。

「ソラ！しっかり——」

「走れ——！もっと早く走るんだよ——」

キア——ワア——云う少女達の大人気ない罵声を背に浴びながら二人は重いリヤカー曳いてよろ——走る。踏ん張った脚が眼の仇に小突かれ、屈めた背中に木の枝の鞭が飛び続ける。

畑の近くの林の中に二匹の少女馬は追い込まれた。そこで手首の縄を解かれ、路子も流石に豊かな胸の隆起を喘がせながら、袖で額を拭う。令子もハア——云って嘲笑を浴びた。

「喉が渴いたら水呑みな！」

突き出された薬罐を手にとると、路子は蓋を逆さにして指先で穴をふさぎ、水をなみなみと注いで飲んだ。薬罐と蓋を令子にまわして、手首の縄の跡を揉みながら、唇に微笑を浮かべながら芳子に云った。

「あたし達、ここへ決まった時から覚悟して来たんだから、ヤキ入れるんだったら遠慮しないで、さっさとやってくんない？どうせ、ここじゃ場違いなんだから。いつまでも蛇の生殺しみたいにしないでサ、やられなきゃいけないリンチなら、ひっぱたくなり何なり、早くやってさっぱりしたいんだよ。普通なら死刑になるあたし達なんだ。命なんかいらないんだから、下手なことするとあんた達だって困るだろ！」

路子に似合わず、いきなり高飛車なハッターを囁ませた。

「あんた、一体何やったってのさ」

たじ——となった伴子が訊いたが、路子が笑っているだけで応えないので、ネリカンの顔見知りが傍から口を出した。

「この人達ネ、やくざとの出入りしたんだって。やくざの顔を二人
ネムらしちやっただって。殺人犯なんだよ、この人達。」

少女達は一様におびえた風だった。だが強いて虚勢を張る芳子と
伴子に、路子は追いかけて云った。



「筑波会なんて東京のと真中のちっぽけな集
りだから、田舎のあんた達は知りやしないよ
ネ。けどサ、あんた達も此処で班長とか何と
か呼ばれて新入りを哭かしちゃ恐がられてる
んだろ？今更人殺し位に驚ろくようなモグリ
じゃないよネ？」

随分、皮肉な云い方である。芳子も伴子も
頭へ来て怒りはしたものの、底知れぬ恐怖に
圧倒されて、蒼白くなった頬をヒク／＼させ
るだけだ。

「あたし達を此処まで連れ込んでサ、ヤキ入
れないで許してやったっていうんじゃ、あん
たの貫禄が下がるだろ？いいんだよ、遠慮し
なくて。あんた達にならリンチされて上
げるよ」

路子は令子を願って笑った。

「いいね、あんたも」

それからネリカンの顔見知り云った。

「あんた、あたし達を縛んなよ。あんた達も
やりたきゃ、いいだけぶん殴っていいよ。ぐ
ず／＼していると日が暮れちゃうよ。あたしは
早く済ませて、早く帰りたいんだから」

ネリカンの子に荒縄を握らせ、芳子と伴子

に手頃な細枝を押しつけると、路子は令子を促して適当な太さの立樹を抱いて立った。手首を向う側で縛らせると、片頬を樹の皮に擦らせながら、芳子と伴子を煽った。

ビュッ！ビュッ！ビュッ！

細い枝は風を切り、路子と令子の背中や尻にぶち当たって小気味良い音を立てた。

ピリリッ痛みが突っ走り、喉の奥で声がつまるが、然し路子には快い刺激だった。向き合っている時は威圧を感じて口もきけないズベ公が、縛られて両手の自由を失った路子達には、威圧が大きすぎた反動で眼の色をかえて襲いかかるのだ。どうせ人眼につく部分には手出しの出来ない弱虫と踏んだのが当って、田舎っぺの小便臭い小娘に何ができるか、やりたいだけのことをやらせてやれ、という想いが強くなって、殴られながら鞭の味が快くなっていたのだ。

令子は令子で、永年の自虐的な生活が身にしみついていいるし、謙のヤキ入れにさえひるまなかったグラマーなのだから、尻の痛覚なんか大したこともなかった。

細枝の筈が折れとぶ前に芳子と伴子がへばってしまった。実際の労働より興奮の心労が大きかったのだろう。他の六人の娘達は、とう／＼手を出そうとしなかった。

路子が古参者を立て、特に芳子と伴子を先輩の寮生として立てるので、彼女達も単純な頭脳だけに手の込んだ意地悪など一切やらなくなつたし、却って路子や令子に近づいて種々の話題を求めるようになったから、女子寮の事実上の中心は路子に移り、日毎に元氣を取戻した令子の発言力は強くなった。

ネリカンでの顔見知り富美子と云った。路子達がリンチに遇ったあとは安心して近寄って来て、自分が加えられたリンチを話してくれた。

「あたしネ、おしっこ飲まされたの」

ネリカンで見た時は痩せて尖っていた顎に幾らか丸みがついて、オド／＼していた瞳も落着きが出て来た。唇を尖らせ眉を寄せながら、さもいやらしそうに語るのも愛嬌だ。

「ほんとはみんなのを飲ませるんだけど、お前は可哀想だから自分のを飲めって」

似たようなカクテルは幾らも聞かされた。唾液や或いは歯磨の汚水が屢く使われる。そう云った古参者の穢れで新入りの心を染め替えようという企みなのだ。

路子と令子との寄せ書きで、利子と京子に便りをした。ありのままの近況を知らせて欲しいと書くために、ちよ／＼、ふざけた文章で二人が受けたリンチの模様や田舎の寮の様子を書いてやった。日ならずして利子からも京子からも便りが来た。

利子は、なか／＼綺麗な字を書く。預けられている人数が少いし家族同様の扱いなのでヤキは入れられなかったと書いてあった。令子の様子を見に来た高杉調査官の話では、小才が利くし身綺麗なだけに、利子は店の奥さんに気に入られて、働いた報酬は貯金され、休みの日には小遣いを貰って映画を観に連れて行って貰えるのと云った。店も忙しいし、できたら自動車の運転を習いたい等と云う。

京子の方は、たど／＼しい字だった。さぞ時間がかかったろうと思われる反面、一生懸命の誠意が溢れているようだった。厳しい日

課だし、古い子が意地悪なので毎日泣いて暮したと云う。路子や令子が傍にいてくれないから淋しくて、一日も早く逢いたい。家へ逃げて帰ろうとしたが、隙が無いし、お金が無いから帰れない。帰る途も分らない。それも結局は自分が悪かったのだから、心を入れ替えるよう修業します等と書いてあって、何だか、しんみりさせた。

もと／＼当初から逃げ隠れする気のない路子と令子だから、高杉調査官の添状が無くても、長年の経験で受託者側では路子の穏やかな瞳に信頼を寄せていた。

追々と女子寮の中心になって行く路子と令子を重用するのも自然の成行きだろうが、それがまた困ったことにもなり兼ねない。初めて所用で路子が芳子と男子寮を訪れた時、少年達は口笛を鳴らし奇声を発して窓際に集った。それを恥じたり嫌悪する程の少女では無いが、余りの騒ぎに呆れたものだ。

非行少年の多くが女性の肌を経験しており童貞であることが肩身の狭い世界なのだから、男子寮の連中は女に飢えた狼だった。ガラの悪い芳子や伴子が賓客扱いだし、富美子のように貧弱な体でも魅力的なのだ。路子と令子が大騒ぎされるのも無理は無い。大した用もないのに女子寮へ使いに来たがる少年が殖え、来れば必ず覗き込んで行く。

男子寮に原因不明の殴り合いが何度か起り一般に落着きが無くなったのが目立つ頃になって、それが女子寮にいるミッチンこと高橋路子とその妹分のフーコこと筑波令子が醸し出す色気にあると気づいて、監督の職員も頭を痛めた。真逆、醜く変貌させる訳にも行かず、天与の麗質はやむを得ない。勿論、そんな理由で追出すことも

できず、少年達を叱ってはみるものの、無理も無いと同情さえ湧くのだ。

更に二箇月が過ぎた。

その間に男子寮も古参者が殆ど出てしまつて大分落着きを取戻したし、一方、女子寮も路子や令子が古参になるまでに變つて来た。新入り泣かせのリンチは馬鹿々々しいから止めてしまつたし、そして出て行く者には心からの送別の夜を催す習慣を作った。

芳子は路子達の感化か、おとなしい娘になって審判の結果、保護観察になつて家へ帰された。芳子の跡を継いで班長になつた伴子は路子達に対抗意識を持った虚勢からか荒んだ気持が直りきらず、中等少年院へ送られてしまつた。それ以来、班長は寮生の選挙に依つて選ぶことになり、路子が推されてリーダーになっている。少しも固苦しいことを云わず、下らないことは軽視する路子の人柄が次第に少女達の思考を、まともな大人へ近づけて行つた。少年院にいる伴子へ激励の寄せ書を二度も出した。富美子が審判になる前の晩は夕食後、隠し芸を出し合つて皆が愉快に、はしゃいだ。路子に心服していた富美子は涙を流して別れを惜しんだが、審判の結果、赦されて家へ帰つた。

そして愈々路子と令子の審判の日が来た。職員も寮生達も、魅力的な個性を持つ美少女が家へ帰されることを希い、かつ信じていた。面会に訪れた令子の両親が、娘の更生のために是非、令子と一緒に来て欲しいとまで頼み込んだのだから。

審判室の前の廊下で筑波会の中心の四人が再会したのだ。京子は

路子の胸に縋りついたし、利子は今にも泣き出しそうな笑顔を見せていた。しっかりと握り合った四人の手は、Mを溜り場にしていた頃みたいにスベスベしてはいなかった。

最初に呼び込まれたのは路子だった。一緒に坐ってくれた令子の両親が路子を引取りたいと云ってくれたし、もと／＼取立てて云う非行性の無い彼女だから、容易に不処分の決定を受けた。赦されて、裁判官や調査官に一礼した路子は、だが、余り嬉しそうではなかった。

令子は前の保護観察が継続中なので、この件については不処分になった。

利子も不処分だった。父親の反省も見え、元々保護能力はあるのだから当然だろうが、預かっていた人が是非、店で続けて働かせたいと云って就職までくっついて来たのだ。

最後の京子はまだ／＼規則的な生活に馴れきれず厳しい監督が必要と思われたが、他の三人を帰したこともあって、保護観察による教育が施されることになった。

処分こそ違え、とにかく四人共、家へ帰されることになったのである。本人達以上に、令子や利子や京子の親達は喜び合い、高杉調査官には幾度も／＼頭を下げていた。

審判があつてから半月以上、経過した。

令子の家へ引取られて行った路子から高杉調査官に電話がかかった。

「高杉先生？私、高橋路子です」
弾むような声に明るさを感じて、高杉調査官も気が軽くなった。

「どう？元気でやってるかい？」

「先生、私、令子の家とび出しちゃったんです」

ドキッとして事情を問おうとする調査官の耳に、楽しそうな路子の聲が響く。

「これ以上、令子達とつき合う必要がないでしょ？いつまでも世話になれませんね。ネ先生。ほんとにね、謙と勝男を殺した犯人は私なの。私が勝男を抑えてる時に男の子が刺したの。それでノビた処をあい／＼ちをとろうとしたはずみに喉が斬れちゃったの。だからあれは本当にはずみなのよ。そのあい／＼ちで令子や京子達と揉み合っていた謙を刺したの。心臓をズブリと一突き。死人に上手に握らせたのは私の小細工。御免なさい。先生、私は唯、女の純潔を踏み躪って得意になつてる奴が憎かったの。女の生血を絞る街のダニに無性に腹が立ただけ。一生涯、憎み続けるの。でもネ先生。恥ずかしいけど私、間違はなく乙女、できれば一生このままでいます。私の生い立ちやなんか、みんな嘘。でたらめ。私には本籍も、親や兄弟もあります。年令だって嘘、はたち過ぎなんです。

不処分の決定があつてから、二週間経ちましたわネ。これだって、一事不再理でしょ？これから、先生、何か手段を考えて私をつかまえる？凄いいスリルネ。でも駄目。もう二度とお目にかからないワ。私の得難い経験、とんだアバンチュール。先生にも、令子達にもお別れ。私はもうつかまらないワ。先生！お元気ですね。さようなら！」

泣きべそをかいだ令子と、慌てふためいた母親が、翌日の朝とび込んで来てもまだ、高杉調査官には路子の電話が実感にならなかつた。

偶然にも高橋ミチ子という嘘の上手な少女が新聞を賑わして児童

相談所へ送られた事件があるが、勿論、偽名のミッチンこと高橋路子とは何の関係もありはしない。

(おわり)



考 察

腹を切る事

(その六)

折伏下男

切腹が数段階の行動を沈着冷静に遂行されねばならないと前回述べた。そしてその第一段階の準備行動として、衿を押しひろげて腹部を充分あらわにする事が、腹を切る形の準備と共に心の準備ともなると言う所迄述べて置いた。

第二段階の準備行動、それは切腹開始寸前の行為である。刀のさやを放ち、冷く鋭き刃

先三寸を残して紙を巻き、右手に逆手に確と握る。即ち、右手のたな心を上に向けた状態で、刀のつかが親指の方、刀の切先が小指の方、そして刀の刃の側が手のひらの手元を向き、刀の峯の側が指先の方に向けた状態で刀を握りしめる。これが、攻撃的意志のない、そして、自らの腹に突き立てますという神妙な態度を現わしているのである。左手の方

は、これから切り開かれるべき腹部に袂別を告げる事により精神を己が腹部に集中する。切腹という儀式の中で最も哀調のある場面であろう。右手の加害者の立場に対し、左手は己が腹をいとおしむ。この間に切腹人は切腹開始への気持が自然に流れ、右手は左脇腹へ左手もその脇つぼの上下へと運ばれる。

第三段階、愈々切腹開始。即ち左脇つぼへの刺突である。色々の形がある。(イ)一氣に力を加えて一工程で突き立てる。(ロ)力を加え、少し切先が突き立った所で一寸、力を抜き、一息の後、改めて力を籠めて、今度は深く突き込む。これは二工程。(ハ)切先をやや右へ廻し乍ら刀を引き付ける。こうすると容易に刃は腹中へ入るものらしい。大体、以上三種だが、(ロ)の第一段階のみでの皮切り切腹もあったようだ。(ハ)の突き立て方は大体に於て一種前後の深さで切る切腹に用いたらしい。(イ)の突き立て方は割合難しく、余程力を加え過ぎたと思っても刃先が全部、腹中に没する様な

事はなかったらしいが、その点(口)は最初の一息で一先ず力を抜くので、力の加え方に不安定さがなく、成功率も高いと推測できる。この段階での痛みは、表皮の鋭い痛みで、それは力を加える程に痺れてしまつて消え去るだろう。刀が刺さった時には殆んど何も痛みを感じないが、切腹開始の現実に対面して自律神経が、はっと刺戟を受け、顔面等の血色に変化を来た事があつたに違いない。

第四段階、引廻し、そのものずばりで腹を切り開く動作。(イ)一氣に右迄引き廻す。(ロ)最初、二種程切り、一呼吸の後、一氣に引き廻す。等が立派な切腹とされていたようだ。切腹は文字通り腹を切る動作であつて、正に切腹のクライマックスであらう。恐しき動作、痛々しい時間は、更に恐ろしき一瞬——介錯——又は急所を求めた直後の苦もん、——と比較すると問題でない。切腹の当人とすれば、切腹の引廻しの動作、それは痛く、恐ろしい事ではあるが、我慢の出来るものであり、否、未知の悲壯感に酔いながら、更に恐しい瞬間を忘れつつ、死へ突入してゆく事が出来たのであらう。

武士とすれば死は恐るるに足らずとするも人間としての、生への執着を超越するに、切

腹程魅力的だったものはなかったのだろう。死なねばならぬ時には腹を切つて。——それは幾分的にも死すべき時、即ち切腹すべき時を求めつつ——と言つた考えは一つの空心立命を得られたものではなかったか。それは封建時代に於ては切腹が常に見聞され、殊に刑としての切腹が人の前で取り行なわれ、又、介錯人は必ずしも役人ではなく、友人、子弟関係人等であつた事等からして、現代とは違つて多くの人が、実際の切腹を夫々の目で見、又は親しく立合つて介錯した、と言つた事が多いに関わらず、尚、且つ、求めて腹を切つた士の多きことは、單に武士道と切腹を結ぶというだけでは説明が足りないと筆者は、切腹が武士に対しては慈悲死にも勝る名誉と、魅力と、安樂を与える事が出来たものと考え

る。切腹が手のこんだ自殺方法であり、死刑である事には間違いない。急所を求め死に先んじて行なわれる切腹とは、腹部に対して責苦を与える事であり、自らの手による大きな傷口と血と苦痛とが与えられる。冷く鋭利な切先は、腹の皮肉を切り裂くばかりでなく、腹中をかなりの時間をかけてえぐつて行く。

話は大方それだが、第四の引廻しの後、十

文字に切り下げたり、はらわたを掴み出したと言ふ動作のある事もあるが、大体は臍下を横一文字に切つて、腹を切る動作は終りであらう。右脇腹で刀を抜き取り、愈々最後の第五段階となり、急所を求める。(1)心臓を突く。(2)のどを突く。(3)頸動脈を切る。(4)上腹部を突いて下向き大動脈を切断する等がある。

近時は切腹未遂をよく聞くが、昔は未遂は少かつた。というのも切り損じ、死にそこない等は用意周到でなかつた事として不名誉であつたからだろう。介抱のきく切り様はせぬと云う事で、例え、急所を求め得なくても、手当のきかぬ切り方、それは昔と今では医術も違うが、右上腹部に切り上げたり、十文字に切り下げる事は、肝臓を切ると言う事で、確かに致命的となる。

その上、昔は介錯という事があつたため、死すべき時には腹を切る前に特定の人に介錯を依頼する事により、切腹を完遂する事が出来たという立派な理由がある。

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

隨

筆

アブチック放談

三 鷹 家 浮

(色彩の分岐点)

店頭に並べ立てられた、色様々な柄模様の反物の中に、ボツリと混った「直紅無地」の反物。……たとえ、それがネル生地であろうとも男性たる者の眼を、サ迄(或は全然)魅きつける力はまだ無い。

しかるに、若しそれが「女性の腰のもの」一着分に相当する程度の端布? に截ち切られたものとなると俄然、男性の関心を喚起するのだから、まったく「性の心理」というものは不思議だと思わざるを得ない。……

けれど又、この段階では、まだまだ真? のフェチシズム的な欲望は起らぬであらう……。では、どうなれば……。? 勿論、それは判然といい切ることが出来る。

それは、その截ち切られた赤い布地の一端——即ちこれを着用するであろう女性のウエストに当る部分に、白無地の補足布を幅狭に継ぎ足した事によって、フェチシストの憧憬は漸く完全なものとなる。

赤と白との対象! その反対色の分岐点に男性の眼は、白い女の肌と、これにまつわり付く赤い腰布を想起して、「自己陶醉」に陥るからであり、まだ一度も異性の肌に着かな

い「真新しい」そのものにさえ、その「自己陶醉」の中では「異性の匂い」を感じるとさえあるのである。

反対色への感覚——勿論、それは人間である以上、敏感なる者と、鈍感なる者とが有るのは止むを得ないとしても、その職業が「画家、又はカメラマン」にして、以上二者のうちの「鈍感」なりとせば、当然その人の「社会へのデビュー」は、芳しからぬ結果を招く筈であらう……。

茲に於ていえる事は、「女体緊縛画」並に「写真」にしてからが、以上の「色彩の分岐点」を實際と理論の上に於て明確にしたものでなければ、如何に對手がこの種のマニアであらうとも、敬遠? されるは致し方もあるまい——ということである。

(懐古調と新感覚調)

尤も、以上これまで述べた事柄は、K誌党の謂う「懐古調」即ち「懐古派」の言であつて、純日本風俗(和装、腰巻)が、その根源である。

戦前の、昭和も十年頃迄は、まだこの「純日本風俗」が相当ハバを利かせていて、筆者の亡母等も、もうソロソロ白いものの混った

(時代劇映画の回顧)

南方佳男さんの挿絵はどなたか

お描きなされたか存じませんが編集の方から

氏の原稿があたしくして廻って来りましたから

(滝)

巾着意図が有りました箇所を描って見ました



妙な頭髪を、可愛い丸髷に結っていたのを覚えて

戦後、日本人の服装は、物資の欠乏と向米政治が大いに影響した故もあって、男女共に

断然、洋装時代を現出した。

そして、最近「歴史は繰り返さず」の譬が實際化して、又々和装(女性に限り)礼賛の時代でもある。

しかし乍ら、現代女性のその和装は、必ずしも「純日本風俗」とは着做せない人々の多いことは、如何に時勢とはいえ、懐古派にとっては一抹の憤懣的寂寥を覚えしむるのである。

彼女等の現代和装の多くが、厳格にいつて「和洋折衷」である事は、今更ここで細かく分析した説明を要すまい。そして、女性服装の変遷に伴い、当然「フェチシストの狙い」も変遷する。——即ち「オコシ」に憧れる者とそれを必要としないで「パンティ又はブローズ」に憧れる者——という具合に……

勿論——異性の肌付きのものを欲求するのが、フェチシスト本来なのだから、色彩や品種の如きは二の次だといえればそれ迄だが中々それがそう理論? 通りにはゆかぬから厄介である。

例えば、それがどんなに色彩、品種共に優れた「女性の腰のもの」であっても、使用者が「梅干婆」か「大醜女」だと知った時、興?は一時に醒めてしまうであろうし、反対に至極お粗末なそのものでも、使用者が肌の匂い立つばかりの健康な若い女性だと知れば、勿論それは大満悦であろう……。そし

てこの場合だと、使用者が多少「醜女」であっても、問題で、ない筈である。まして美人であれば、その場合のフェチシズムは極度に高まり被品種は最早、新鮮なものより、むしろ大いに使い古した物を欲求する様になる。

どうも、こんな事を余り長く書くと、なんだかこの道の先輩である有名な著述を売りにしているのではないか？と思われそうで面映ゆい。筆者が、今日ここで述べたい事の眼目は、「美女緊縛構図」に対する色彩的な着眼点である。

ハッキリいって、筆者は近頃の映画に思うことに、どうもカラーものより、矢張り黒白写真の方が、緊縛場面では「迫力」を感じるのではないか？……ということだ。

カラーものは、美しいには違いないが、余程色彩の配合に留意しないと、折角の色気が無くなってしまう場合が多い。

(映画その他の場合)

ごく最近の時代劇映画に例を執ってみるとそれは大映の総天然色時代映画「風雲将棋谷」での一カットだ。

この映画の前半過ぎ……近藤美恵子扮する娘目明し「お絹」がサソリ道人に捕えられて

秘室の所在を白状させる為、高い処から後手に太い綱でグルグル巻に縛られて吊り下げられた場面があった。

普通？　ならアノ場面で、緊縛マニヤは可成りの満足を来たすべき筈なのに、それがどうも一つ頂けなかった——というのが、ソレ筆者の述べていう「色彩の分岐点」を判然させない、寧ろ「調和」し過ぎの感あるが故では無かつたらうか？。

アノ映画を御覧になった方は、思い出して頂こう——。

お絹の着物はアイ色の勝った縞物であり、それと胸に巻いた黒ずんだ太綱その他すべての色彩調がアノ場面では地味である。

では、黒白ものなら……？　そうだ！　よい対象を挙げてみよう。……それは……

今から三年ばかり以前——東映の黒白スコップで、月形竜之助主演の水戸黄門シリーズの第何話であったかに「鳴戸の妖鬼」題したものが上映されたことがあった。

かの映画中での一カット。八汐路佳子扮する「夕霧」の井戸中への吊し責めを観た読者が居られたら、前記「風雲将棋谷」での場面と比較して、これまた思い出して頂きたい。

あの場面も矢張り、あんなに地味（色彩的

から見れば）に撮していても、あれが黒白なればこそ、マニヤには充分な満足を与えた筈ではなかつたらうか？……

そこで今度は観点を、**動**（映画演劇）から変じて、**静**（絵画写真）に向けて筆者の愚見を述べてみたい。

甚だ手前ミソだが、筆者が未だ壮年時代のこと……かの伊藤晴雨氏の「責め」を知り、その蒐集品を入手したくて堪らなかったが何しろ戦前の七六ッかしい司法時代とて容易に手に入らず、やむなく当時の大衆小説の挿絵から落丁した緊縛画を土台にして、これに又いろいろと当方の註文を付けて、特約の画家に描かしてみた事があった。

そして、それから得た種々のヒントのうち若し腰巻一つの裸女の緊縛画を色彩画にした場合は、巻頭に述べた「腰巻の赤」に対する「白い補足布」を描かず、つまり白い肌の次に、いきなり腰巻の赤を持ってくる、そこで色の分岐点を判然させることによって、その緊縛画に一段の生彩を与える——と云う事を知った訳であった。そして若し又、どうしても前記補足布を描くならば、肌の白との差を極く僅少に、たとえば水色、或は緑色の極く薄い色を用いて、それも補足布全部を塗り潰

さず、線に添って陰影をつける程度がよい。

そこで又、云えることは、……これが色彩を用いず、即ち、黒白（と云えば写真もそう）画となると最早、断固として補足布を描くべきではない。——これはK誌の特写々真にも申したい事柄で、単に裸体の場面のみならず凡ゆる緊縛構図には必ず以上の「色彩の分岐点」を判然させるに非ざれば、先ず魅力的効果は得難いのではないか？と筆者は左様思う次第である。

では、憎まれ口を叩いた次でにお許し願って、既刊本誌の三月号に「時代劇映画の回顧……縛られた女優の変遷」とある題名の上に書いていた緊縛画を例として筆者の偽らざる意見を述べさせて頂いてみよう……。

正直云って、かの絵にある縛り縄の掛け具合や其の位置等は、筆者が常に希っている標準？で、アノ程度が一番無難である。

背面から見た東洋式？後手縛りを完全、亘つ克明に描いてあって、わが意を得たり、の感があったが、しかし、それと同時に非常に納得出来兼ねる個処をも見出したのであった。

他でもない——即ち色彩（かの場合、黒白）分岐点に就てである。

尤も、筆者思うに、かの絵はデッサン的なものであって、……だから「チェツ、あんなものに因縁をつけやがるのかッ」と或は、かの絵の作者に呶鳴られるかも知れないけれども、しかし敢て筆者は茲で自分の納得ゆき兼ねる個処に不遜のメスを入れてみたい。

先ず筆者の眼に、非常に物足りなく映ったのは、背後に廻して縛ったその両腕の手首が余りにもギスギスした感じで、悪口を許して頂くなれば、あれではまるで年老いた女形か栄養不足の男娼の手首に見える。

「そうよ！あれは演劇調に描いてあるんだ、これだから素人は鼻持ちならねエ」と、こう又云われるかも知れないが、われわれマニアは、この一寸した個処にさえ神経過敏なのである。題名の「……縛られた女優の変遷」とあるを見たトタン、もうその題名の上の絵を見る眼が、その絵を女優、即ち女を期待させるのであるから、この点から云って、例の手首はもう少しフクヨカナ、水々しさに描いて欲しかったのである。

（最後に——）

次に愈々黒と白との分岐点についてだが：かの絵にある衿足、及び肩、即ち肌の次に着

物の衿（黒）があるべき筈なのに、どうした事かそれが白である。肌の白の次が又、白である——筆者は始めアレを襦袢の衿と見るべきか？と随分、思案したのだが、どうしても彼処に白のあるべき理由が納得出来兼ねた。

この場合は裸体、腰巻の場合の補足布（前項参照）とは意味が違うのである。今、仮に衿無し襦袢というものがあって、それを着込んでいる絵だと想定するとして……そして猶、その上、その襦袢が純白一色であるとしてもそれなれば肌の次にきている、衿に相当する襦袢の線一本を描いて、アトは又、白である筈であり、襦袢が色物であれば、肌（衿足及び肩）の次に来るものは当然「黒」でなければならぬであろう……。

しかるに、かの絵は肌の次が又、白であり次に黒が来ているのだから、これは「黒」を着物の衿と見て、その下に着ている襦袢の衿と……つまり、重ね着している様を描いたつもりだが、それが彩色出来ない黒白画である為にあなったものだ——と、こう作者に同情した見解を以て、自ら納得しようと努めたが、しかし、それならそれでよいとしても、矢張り、どうしても納得出来ないのは、衿の線を除く他の個処に、重ね着の様相を見出せない

麻生保氏の生活と意見

(十五)

麻生保

事だった。

即ち、襦袢一枚の女形俳優を後手に縛った絵——と、こう観るより致し方なかった次第である。

もう一つは、後ろ横向きのこの絵の向って左にある、乳房の膨らみうとも紛う……それだいて、これも矢張り納得ゆき兼ねる突起が描かれている事である。

筆者の友人に、これも女体緊縛マニアが居

るので、かの絵についての意見を斗わしてみた処、衿の黒白問題については、まア仕方があるまい。……それに、こうした黒白系の挿絵の場合は、理窟に合わない点が屢々あり勝ちだし、加えて「重ね着だ」と見れば見られぬこともあるまい。——ということで大体の意見が一致したが……それにしても、胸の突起の線？については、どうしても納得出来ずしまいに終った。

アノ突起を試みに消してみたが、ちっともお可笑くないどころか、寧ろスッキリするのだった。

最早これ以上、くどい理窟は述べまい。筆者とて、決しアノ絵を、こき下すのが目的ではない……どころか、実を云って矢張りこの種のマニアなればこそその老婆心であり今後の読者の一員としての希望を、かの絵にかこつけて些か述べたに過ぎない次第である。

(暴言多謝)

「空には本」 寺山修司歌集

的場書房発行

この若い歌人の作品は、何かよくわからないが、美しい詩情と、異常な感覚の冴えとを感じさせる。学生時代に、上級生への関心を示したもののや、年下の少年への愛情を歌ったものが多く、ソドミ的傾向を示すが、又、シュールレアリスムの新鮮な美しい言葉の遊戯が多い。又、若干の怪奇趣味もうかがわれる。この歌集中、二首が著しく麻生の興味をひいた。まず

手にかわく ぶどうの種子いくつお

われは遠乗会には行かず

この歌を、麻生はこう解釈する。彼(作



者)は恐らく貧しい農民であり、ぶどう畑に働いている。そのふしくれ立ち、ひびのはいった手に、これから撒くぶどうの種子をのせて眺めている。そこへ乗馬の一隊が通りかかる。紳士、淑女、貴公子、令嬢たちの遠乗会である。貧しい彼は、やるせない憧れと、ねたましさと、そしてあきらめとを以て、ぼんやりとそれを眺めている。高貴な一隊が通りすぎた時、彼は手に唾をふきかけ乍ら呟く。「チエッ、遠乗会か。おらア、そんなもん、行くもんケ」

なり、麻生の我田引水的解釈でないことが理解されよう。

キロットに草の架つけ帰りきし
美しき疲れをわれは妬めり

彼は、その日の夕方、一日の労働が終ってから町へ出た。すると町で(恐らく停車場附近でも)遠乗会の帰りの人達に会う。その中には、キロットに草の架をつけたままにしている人もある。それは、美しい令嬢の腰のあたりについていたかも知れない。又、さっきまでピシピシ馬を責めていた鞭で、それを

麻生がこう解釈した理由は「遠乗会には行かず」という結句が何か引っかけかり、素直なもの言い方でないからである。若し、彼自身も、貴公子の仲間、単に都合で遠乗会に参加しないのなら、この様にひがみとあきらめの混ったものの言い方はしない筈である。そんなら単に「遠乗会に行かず」と言うだろう。この一首だけでは、はっきりしないが、次の歌でいよいよ作者のシチエーションが明瞭となる。

しかも、この貧しき「彼」は、そういう上流階級を、いささか妬んではいるが、少しも反感を持ったり、憤りを感じたりはしないで、かえって、ますます強く憧れ、崇拜している感じが強い。寺山氏のこの連作は、この二首しかないことを残念に思う。

なお、三島由紀夫のあまりにも有名な短編「遠乗会」の中の、一少女の描写をここに掲げよう。麻生は何度読んでも飽きない名文と思う。

「楽陽はどなたでございますか」砂塵のなかを片手でしなやかに馬を引きながら、こうきいてまわっている令嬢がある。年は十七、八にしか見へない。仕立のよい紺の乗馬服の胸はくびれて、まるで双の掌で抱へることのできさうな細い胸を目立たせている。髪はのびやかに、丸顔の目は大さう

涼しい。その美しさは女難の美しさで大儀さうな長靴の足もとは、どこか不器用なわがままに育った少年のやうな風情がある。いたいたしい快活さでも謂へるものが、激しい運動のあとでもえ立った頬の曙いろに窺はれた。：

「オットー ママ
苧菟と瑪耶」 三島由紀夫

三島氏の、ごく初期の作品。美しい言葉と夢のような詩情がただようメルヘン。筋は、サド、マゾヒズムに直接、何んの関係もないが、オットーが馬を駆るところの描写が一寸、麻生の注意をひいた。

：馬はかけた。憤怒の汗にまみれ、血ばしった目をひらいてゐた。みだれた焰さながらに髪は風にそよぎ、鞭が箱のやうなきびしい音を立ててつづけざまに打たれた。：

鞭が馬体に鳴る音の重要性(?)については、本誌四月号に述べたが、この三島氏の形容はまことに素晴らしいではないか。下手な擬音詞を能もなく並べるよりも、何倍も美しく、しかも力強い。

原忠正氏の「アマゾンについて」の感想

二月号に載ったアマゾンの写真中、Hを

特に素晴らしく思いました。向うをむいた白馬の横に立って鎧革を計っている女騎手の長靴につけられた鋭い拍車は、柄が長く、何と残忍にみえることよ。あんなに強い拍車を馬腹に蹴り込めばきっと血が滲むでしょう。白馬の腹が血で赤くいろどられ、鞍上の人は美しい英国女性：ああ何と素晴らしく美しい場面が想像出来ることでしょう。又、こっちへ向けられた馬の遅いお腎は、何度この女騎手の鞭を受けたことでしょう。そうです。お腎こそは、被虐の野なのです。

又、同記事中、写真Fの説明に「かかる緊急の場合には、女性たちはまち本性を露呈する」と書いてありましたが、麻生は、友人から似たような話をきいた事があるので、参考までに記しておきましょう。

誤解のない様に前置きしますが、その友人は、麻生の様な傾向は全く無く、極めてノーマルな人ですが、偶然にただヨーロッパのある町で障碍馬術の競技会を見たというだけのことです。

それは、ベルギーだったか、オランダだったかの女性選手だったそうです。何しろ選手の多くは男性、しかもその時は特に軍人が多く、武骨な雰囲気の中でこの美しくうら若い

アマゾンの登場は、場内に花が咲き出たよだったと、麻生の友人は言っていました。ところが、技術の方はあまり美事ではなくはじめから横木を落してばかりいて、遂に最後に近い大障碍を馬が拒否したのです。彼女は、すかさず、ピシリッと鋭い鞭をくれ、もう一度それに向いましたが、又もや拒否、失権のベルが鳴りました。その時、彼女は手綱をギュッとひきしぼり、右手の鞭を持ちなおして、馬の首すじをピシリッピシッ、ピシッと激しく打ち据えたのです。少くとも四、五回は鞭音が高らかに鳴りひびき、満場は彼女の烈しい気魄に圧倒されてしまいました。然し、失権のベルが鳴れば、すぐに審査員席に一礼して退場するのがエチケットなのに、この失権宣告後に馬に与えた懲戒は、ヒステリックなものと見做され、審査員の心証を悪くして、翌日のスポーツ新聞では大変に非難されたそうです。

その友人は、この話を麻生にしてくれたあと、こう言いました。

「そいつがね。虫も殺さねエような可愛いらしい顔した娘なんだ。だから、向うの女はわからねエ。あんな娘を女房にしたら、

かなわねエだろうナ。文字どおり尻の下に敷かれちまわア。女は日本に限るヨ。おとなしくてナ、従順でナ」

麻生は、「バカヤロウ」と言いたいのをやっと我慢した次第でした。

最近号について

四月号で、原氏が当分、執筆を中止されることを知り、びっくりした。さきに沼氏が休載され、今回は原氏と、マゾ陣営の二大家を失うことは、何と不運な事だろう。

又、「黄色オラミ」も当分中絶ときいている。全く泣きっ面に蜂である。しかも原氏は二月号より「アマゾンについて」を連載されることを約束され、その第一回を発表された矢先であった。これこそは、麻生のような馬化マゾヒストの聖典たるべきものだっただけに、この気持は、残念などという言葉で表現出来るものではない。氏としてはいろいろの御意見や事情もあらわれるだろうが、何等かの形で執筆を続けて下さる様に願いたいのは麻生ばかりではない筈である。麻生は原氏に、今後、慎重に穩健に行動されることを切望したい。マゾヒスト

の実態を理解させ、一般人を啓発するとか、異常者の樂園を作るとかと言われるが、それは、あまりにも夢物語ではあるまいか。氏の健在を案ずる麻生は、氏をして、マゾスヒトの全学連たらしめたくはないのである。

さて、一方に於て四月号は、馬場氏、山本氏の力のこもったエッセイと、倉仁氏のデビューを心から嬉しく思った。特に山本氏の示された与謝野晶子の歌は興味深かった。

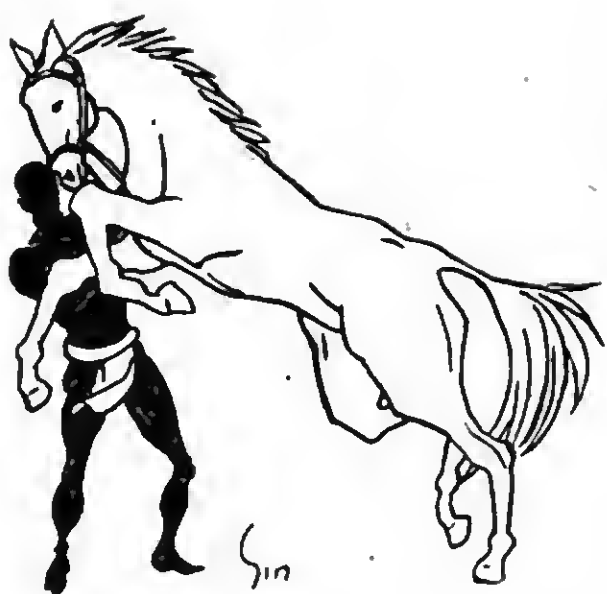
さしえとカットのこと

四月号の麻生の「生活と意見」のカットと山本氏の「フアンタジア・マゾヒスティカ」のカットは全く素晴しかった。特に後者は全身にしてみたかった。(但し、手綱は、大小勒二本の方が望ましい)この画家先生に、生活と意見のさしえなど時に描いて頂きたいもの。二月号の「雌雄」の乗馬服を着て鞭を持った美奈、三月号の読者通信ではめたけれどもその後、拍車があまり下についているのに気がついた。こういう事は気になると、まことに興味をそぐものである。三、四年前の口絵にあった北原さんの「馬を御す令嬢」も信憑性の乏しい珍妙なものだ。これに比べ

ば、二九年五月号の「ダイアナ夫人妻期」のさしえは、特に刺戟的ではないが乗馬女性性が正確に写されていて真迫力があつた。なお、S特四号の四馬孝氏の口絵、「馬上の磔」「ジャジャ馬馴らし」などの、長靴に包まれた美女の脚をみるにつけても、是非、同氏に(真の)乗馬女性を描いて頂きたいと思うのだが、四馬氏はS絵巻専一でいらっしゃるのだろうか。

何はともあれ、マゾヒスト、特に馬化人種は、特にムード派なのである。原氏が二月号で喝破された様に「真正の乗馬、及びこれに関連した品物衣裳について紹介し、そこから奔騰する想像力によって、マゾヒズムを誘致する」のである場合が極めて多い。だからこそ麻生は、美しく、しかも馬術的見地からしても、正確なさしえが多く現われることを期待する次第である。

ところで乗杉貴代子さんの「ダイアナ夫人」シリーズをKK叢書で出して頂きたいもの。そして、それに先日、沼氏が麻生に御教示下さったKK通信第十四号にのった東京R子さんの乗馬体験記を加えて一冊としては如何でしょう。



創作

裸馬

榎村 奏
青木 審・画

誰もいないと思ったのが間違いのもとだった。

高校の社会科の教諭である柏原教平は、絵に興味をもっていて、アマチュアばかりのグループに入っていた。会員は十人ばかりの小さな団体だが、年に二回、春と秋には必ず展覧会を開くほど活潑な活動をしている。

柏原が、この秋の展覧会の準備にスケッチをとろうと思っていたが、N市からT線に乗ったのは六月になって最初の日曜日だった。もう夏の近いことを思わせるよく晴れた日で、電

車を下りた柏原が三軒余り歩いて川原に着いたときは全身が薄く汗ばんでいた。

手に抱えていた上衣とスケッチブックを投げだし、ワイシャツの釦をはずした柏原は、石の上に脚を伸して一息入れたが、対岸の山の縁を映した川面を眺めているうちに、フト水を浴びてみようかという気になった。辺りを見回したが人影はない。流れの音さえ聞えぬような静けさである。

彼が水浴をしようとしたのには、汗を流そうという目的の他にもう一つ理由があった。それはその日、彼は秘かに六尺褌を締めてきたからで、己の褌姿を大自然の中に置いてみ

たい誘惑を覚えたのだ。といっただけでは説明が足らないと思う読者の為にもう少し詳しく述べると、柏原には褌に対する奇妙な愛着があつて、ときどき誰にも知れないように六尺褌を締めてみる癖があつたのである。勿論、常用はしなかったし、家族や親しい友人にも内証にしていた。それは彼が己の褌に対する愛着を異常なものと考えていたからで、他人に知れることを極力惧れていたのだ。

辺りに人のいないのを確認しても、柏原はいざ裸になろうとすると、やはり逡巡が先だった。それで一旦は止めようかと思つたものの、遂に誘惑に抗しきれず、彼は胸の鼓動

を抑えながら一枚々々衣服を脱いでいった。
 (もし他人に見られたら……) という危惧も、もうそうなると思われを悦しむという気持ちになってくる。

禪一本になった柏原は、普段の冷静な性格とはまるで逆な人間になっていた。彼がハッと我にかえったのは、不意にかん高い人声が耳に入ったときである。

ギクリとして眼を上げると、土手のスロープを駆け下りて来る数人の男女が見えた。

(しまった!) と思ったが、水から出て服を着る暇はない。柏原は何喰わぬ顔で対岸へ向って泳ぎだした。そうして彼らが立ち去るのを待つことにしたのだ。何か叫んだり笑ったりする声を背中に聞く度に、柏原は舌打ちがでた。そう泳いでばかりもいられないので、浅いところへ下半身だけ沈めて時間の経つのを待ったが、彼らは仲々立ち去る様子もない。そのうちに余り長く水に浸っていたので体がだんだん冷えてきて、もうどうにも辛抱しきれなくなった。ジリジリして岸のほうを見ると、彼らは依然として騒々しく騒ぎ回っているが、柏原が衣服を脱いでおいた水際からは大分遠くへいって、そのくらい離れていけば、よほど注意して見ない限り禪を見

分けることもあるまいと思われた。それにグズグズしていたら、いつまた彼らが戻って来ないとも限らない。柏原は川から飛び出すと、急いで衣類に手を押さそうとして「アッ!」と叫んだ。無い。そこに脱いでおいた筈の衣服が影も形もないのだ。まるで煙のように消え失せてしまったのである。場所を違えたのでないことはスケッチブックが置いてあるので確かだ。狼狽した柏原は、ウロウロとその辺を探し回った。するとドツという笑聲がおこった。奴らだ! 奴らが悪戯をしたに違いない! 柏原は顔から血の引く思いがした。しまった! こいつは大変なことになった——グレン隊でもなさそうだが、いずれも十代の派手な服装をした男女は、とても一筋縄でいきそうもない。しかし何としてでも衣類を取り返さねばならぬ。

「おい、君達。つまらん悪戯はよしたまえ」
 そう云ったからといって、おとなしく云うことをきく奴らとは思わなかったが、柏原はそう云ってみるよりしうがなかった。もう禪を見られる恥ずかしさなど、かまっていられない。柏原は再び同じことを云いながら彼らに近づいていった。
 「ワ—イ。ここまでおいで。甘酒進んじよ」

「ほしかったら何か芸を試してみな。そしたら返してやるぜ」

そしてまた、ドツと噓したてる。

それは端から見たら、イヤ当事者にとっては、なおさら馬鹿々々しい情景で、それだけに情けなさで柏原は泣きだしたような気持ちだった。もしカッとなった柏原が彼らを追い駆けたとしたら、忽ち珍妙な鬼ごっこが始まるだろう。三十二才の彼には死んでもそんな真似はできなかった。

そんなときだったから、裸馬に乗った若者が、すぐ後に来るまで柏原は気がつかなかった。

「どうかしたんですか?」

声をかけられた柏原が愕いて振り仰ぐと、馬上の青年は真ッ白な六尺禪一本の裸体だった。陽に焦げた匂いのしそうな赤銅色の皮膚は禪の白さを眩しいほどに際立たせている。

「イヤ、あいつらが僕の衣類を、悪戯してとってしまったんだ」

「畜生。悪い奴らだ! よし、僕にまかせなさい」

突如、現われた騎馬の若者に、気をのまれたようにボカンとしていた数人の男女は、それがいきなりこっちへ向って駆けてくるのを

見ると、悲鳴をあげて逃げ惑った。

土手の上まで悪戯者を追い上げた青年は、戦利品のように柏原の衣類を抱えて戻ってきた。

「どうもありがとう。おかげで助かった」

礼の言葉を述べながら、柏原はそそくさと衣服に手を通した。一秒でも速く青年の眼から自分の禪を隠したかった。その気持は青年が禪を締めていることで、かえって切実だった。そういう心理状態は彼の古い記憶の中にもあった。

柏原は、ハッとして眼を上げた。

「水田耕一。君だったのか！」

「先生。今判ったんですか。僕には最初から判ってましたよ。暫くでした」

五年前。T市の県立高校に職員の欠員ができて柏原教平が赴任したのは、その年の二期からだ。したがって三年生だった水田耕一とは僅か教力月の師弟関係でしかなかった。しかし水田は陸上部の主将をしていたので顔と名前はすぐに覚えた。いや、それよりも柏原にとっては、水田を強く印象づけられる小さな事件(?)があったのである。それは冬休みになってからの宿直の晩だった。

夕食を終えた柏原が風呂に入っていると、誰か脱衣室に人の気配がした。小使が湯加減を訊きにきたのかと思っていると、不意にガラス戸が開いて、裸になった水田が入ってきた。

「オイ。黙って開ける奴があるか！」

柏原は予期しない生徒のちん入に反射的にとった己の態度が裸を少しも意識していないような水田に比べ、いかにも女性的で卑屈に思えて、非礼を咎める以上に腹をたてていた。

「すみません。先生。背中を流します」

水田は全然、悪びれた様子もなく、それが当然のことのように小桶に湯を汲んだ。

「そうか。すまん。しかし、それならおまえまで裸になることはあるまい」

「ええ、でも、先生の後すぐ入りますから」

「ああ、陸上は今、合宿中だったナ」

「はい」

「どうせ裸になったんだ。おまえも一緒に入ったらいい」

「いいですか？」

「いいとも。教師と生徒が一緒に風呂へ入っていかんという理由はない」

柏原は心とは全く反対のことを云っている

自分に益々腹がたってきた。本当は、すっかり辞易していたのだ。できることなら「出ていけ！」と呶鳴りたいくらいだった。理由は自分でもハッキリとは判らない。もしかするとハッキリさせたくないのかもしれない。た。しいて云えば意味のない恥かしさだった。柏原はスポーツこそやらなかったが、人並以上の立派な体軀で、他人に見られて恥かしいところはどこにもない。ただ水田の体が立派すぎて柏原に劣等感を抱かせたのは事実である。それに水田という間、そんな必要のないことを承知のうえで、どうしてもタオルを離せない自分に嫌悪を感じ、それが愈々、劣等意識を深めてしまった。

(水田は、きっと俺を軽蔑しただろう)

その思いは永い間、柏原の胸中を去らなかつた。

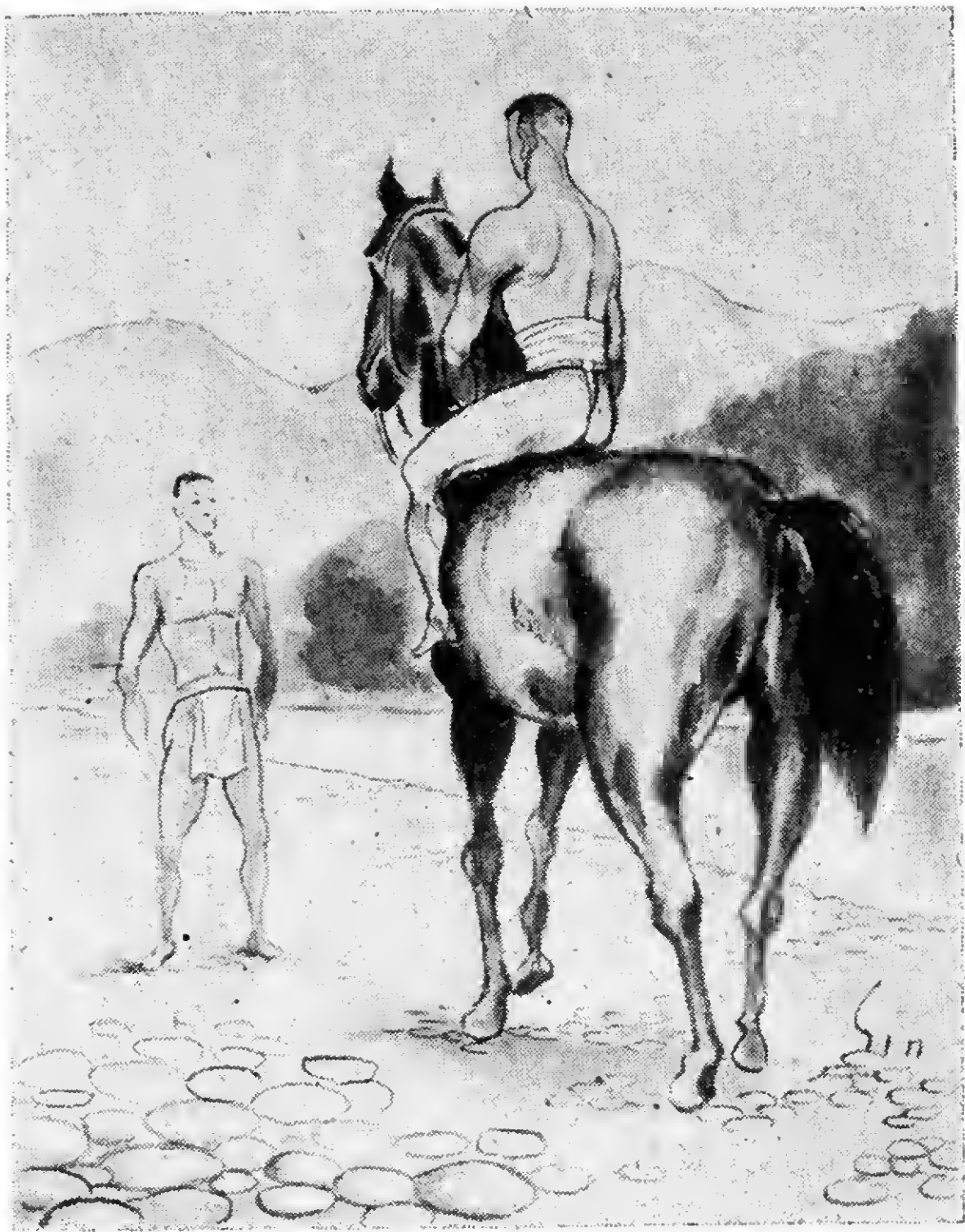
かつての日、柏原を圧倒した水田の体軀は、上背も一段と伸び、サラブレッドのような精悍さに、柏原は思わず歎息を洩らした。

「いい馬だね」

柏原は水田の体格を褒めるかわりに馬を褒めた。

「いやア、駄馬ですよ。耕作用ですからね」

「ああ、そういえば、君の家はこっちのほう



だったね。今は、どうしてゐる？」

「百姓です。馬を洗ってやろうと川へ来たらこの有様でしょう。吃驚しました。でも先生だったとは意外だなア……」

「いや、スケッチをとろうと思って遠出して

来たんだが、僕も君に逢えようとは思わなかった」

そんな会話の間中、柏原は禪のことを訊かれやしないかとヒヤヒヤしていたが、禪を常用しているらしい水田には不思議でも何でも

ないのか、そのことはオクビにもださなかった。

「君は始終、この川に来るのかい？」

「ええ、まア——」

「じゃア、今度の日曜もここへ来れば逢えるね？」

「また来られるんですか？」

「うん。実は今思いついたんだが、風景はやめて人物にしようと思うんだ」

「……？」

「それでネ、君にモデルを頼みたいんだが。

いいだろう？」

「モデルですか？」

「いや、禪をしたままでいいんだ。ネ、頼むよ」

「そりやア、先生の云われることですから——」

「ありがとう！じゃ今度の日曜日。いいね」

モデルというのは口実だった。勿論、水田の逞ましい裸を描きたい気持は充分ある。しかし、とても冷静に描ける自信はなかった。柏原は、ただもう一度、水田の禪姿を見たいという望みだけで一杯だったのである。

水田と別れた柏原は、ともかく帰りの電車に乗りはしたが、何故か家へ戻る気がしなかつた。

った。柏原は喫茶店で時間をつぶし、食事も外でとって夜遅く帰宅した。深夜の帰宅にも不平もいわず妻のいそいそしい世話に、結婚以来、はじめてわずらわしい気な態度を見せて妻を不審がらせた。

二、

「またスケッチですか——」

という妻の言葉を聞きながして玄関を出た柏原教平は、何か妻に隠れて情事をもつ男のような、多少のうしろめたさと秘かな愉悅を胸に噛みしめていた。

川原を見下す土手の上に来ると、小石を拾っては川に抛っている若い男が見えた。脚にピタリついたデニムのズボンに荒い格子縞のシャツを着ているが、水田耕一であることは短く刈った頭の恰好で判った。

「ヤア、君のほうが早かったナ。忙しいんじゃないのかい？」

「ええ、まア……。でも、いいですよ。少しぐらいなら」

「悪かったナ。じゃ、すぐ始めようか」

「ええ、裸になればいいんですね」

水田がシャツを脱ぎズボンを脱ぐと、その下には六尺褌が締めてあるだけだった。

「先生。描かないんですか？……」

「ア、イヤ、今描くよ」

柏原は、スケッチブックも開かず水田の美事な裸形に見惚れていたことを詰られでもしたように赤くなった。

クロッキーをとり始めたが、手が顫えるように思うように描けない。しかし、そんなことはどうでもよかったのだ。柏原は、水田の禪姿を何の遠慮も必要としない状態に於て眺めうることで、いわば所期の目的は果しえていたからである。

はじめは単純な立ポーズでも固くなっていた水田は、そのうちにだんだん馴れてきて、ポーズしながら口笛を吹いたり、小声で流行歌を口吟んだりするようになった。

それにひきかえ、柏原は一種の緊張感から息苦しさを覚えてきた。やりきれない焦慮が胸を波立たせ、そのまま描き続けることが堪え難くさえた。

「駄目だ！描けない……」

そう叫んでスケッチブックを投げだしたかった。しかし、描くのをやめたら水田にポーズをとらしておく理由がなくなる。柏原はケント紙を黒く汚していく作業を続けながら、息を喘がせて水田を凝視した。

水田は柏原の表情の変化を、仕事に熱中する余りと思って、別に気にもかけなかった。

朝から雲りがちで、ときどき薄日の洩れていた空が、ポツリときたので見上げたときにはもう一面の厚い雨雲で、（こりアまずい）と思うまもなく、忽ち篠つくような大雨になった。

「わア、こいつアひでえや！先生。下のほうに小屋があるんです。そこまで駆けつけていきましょう」

シャツやズボンを抱えて駆けだす水田の後から、柏原も背中を丸めて走ったが、川原の石がゴロゴロしていて、それがまた濡れて滑るので走り難いこと、おびただしい。対岸の山も川下の堤もすっかり煙って見え、前をいく水田の姿さえ霞んでいる。

やっこの思いで小屋に辿りついたときは二人共ズブ濡れで、裸の水田よりは柏原のほうが見るも無残な恰好になっていた。

何に使う小屋かは判らないが、やっとい坪あるかないかの狭さだ。土間の真中には石が積み、黒く煤けているのは火を焚いた痕とみえる。羽目板は破れたまま、だがどうやら屋根は完全らしい。

「とにかく火をおこしましょう。その間に濡

れたものをお脱ぎなさい」

水田は辺りに散らばっている藁屑や木片を集め、ライターの火を移した。

小屋の隅には、おあつらえむきに古いロープが置いてあったので、水田はそれを張って柏原の脱いだ衣類を干した。

「先生。スッカリ脱いだらどうですか？濡れたのを着てちゃ毒ですよ」

「うん、そうだな」

水田に云われて柏原はメリヤスの肌着を脱いだ。ズボン下は着けたままだった。ズボン下にも雨が透っていたから穿いているのは気持ちが悪かったが、彼には脱げない理由があった。まさかこんなことになるとは思わず襦袢を締めてきたのが後悔される。襦袢は水田もしているし、一度見られているのだから、今更具合の悪い筈もないのだが、柏原はやはり襦袢一本になる勇気がなかった。

焚火に手をかざしている水田の髪は脛の毛が一本々々見えるほどの近さにあり、濡れた襦袢から湯気が立っている。外は豪雨で小屋を覗き見る人のあるうとは思われない。云うなら今だ。この計らずして得たチャンス逃したら、いつまた、うちあけるときがくるか判らない。しかし何と云おうか。これが男と女

なら考える必要もない。言葉の多くも要さないだろうに――。

「水田君――」

「え？……」

思いきって声をかけたつもりだったのに、水田の若々しい眼に出会っていると、柏原はやっぱり気が臆した。

「いやネ、煙草を吸おうかと思って……」

「アア、上衣のポケットですネ。大丈夫かな」

「大丈夫だと思うよ。ケースに入ってるから」

水田が気軽に干してある上衣に手を押さそうとしたとき、不意に小屋の戸口に立ちはだかった男がある。

「兄哥！……」

向きなあった水田が口の中で叫ぶのと、男がズイと小屋へ踏み込んだのは殆んど同時だった。雨は、もうさっきから小やみになっていたが、男の派手な背広の肩は、かなり濡れている。

「耕一。てめえ、どうも様子がおかしいと思ったら、こんなところへシケ込んでやがったのか。フン、俺の眼をごまかせると思っててもそうはいかねえぞ。しかし、おめえもいい度

胸になったよナ」

「兄哥。何を云ってるんだ。俺は何も――」

「云いわけは聞かねえ！こんな小屋に二人ツキリ、しかも裸にまでなってるや、いくら馬鹿でも想像はつくんだ」

「違うよ、兄哥。裸になったのは雨に濡れたから――」

「もうよせ！てめえも、こうなったからにやア覚悟があるだろう。表へ出な。表へ出るんだ！」

男は怒りで蒼褪めた頬をひきつらせると、裸のままの水田を強引に外へ連れだした。

余りも突然の出来事ではあったが、柏原にはすべてが了解できた。水田にそんな男のあったことは全く意外である。しかし、今そんなことを考えている余裕はない。外では何か唸鳴る声や肉を打つ鈍い音がしているのだ。柏原は生ま乾きの衣類を急いで身に着けると、小屋を飛びだした。

「先生。危ない。逃げてくださいッ！」

男に組みしかれて拳の乱打を浴びながら、水田が悲痛な声で叫んだ。

柏原は一瞬たじろいだだが、ともかくこの斗争は鎮めなければならなかった。ボクサーくずれみたいな男の体軀や嫉妬に狂った凄じい

勢いを見れば、とても手向っていける自信はなかったが、水田を想う気持が柏原を捨身にした。

「君。乱暴はよさないか！」

柏原がグイと男の肩先を掴むと、水田の軀を離して立ちあがった男は、嘲笑うように唇を歪めた。

「なるほどネ。おまえさんもこの小僧が好きなら黙って見ちゃアいられねえ立場か。よし、やるか！」

「いや、僕は何も喧嘩をしたいわけじゃない。ただ君達に無益な斗争をやめて貰いたいだけだ」

「何イ。フン、生意気なことぬかしゃアがって。俺をなめる気かッ」

男は怒声と共に掴みかかってきた。柏原も一度は体をかわしたものの、格斗となれば、もう勝負は決っていた。盤石の重みで押えつけられてしまつては、飛んでくる火のような鉄拳を防ぐ術もない。

「兄哥。よしてくれ！やるんなら俺を、もつと気のすむまで殴るがいい。先生は何も悪くないんだ」

よろめきながら起きあがった水田が割って入ろうとすると、男は怒りに拍車をかけられ

て益々狂暴になり、一撃で水田を倒し、続いて柏原にも痛烈なパンチを喰わせて、

「ようし。二人共、存分に思いしらせてやる！」

と吠え、小屋からロープを持ちだすと、力尽きて呻いている水田をまず後手に縛り、それから柏原の衣類を手荒く剥ぎにかかった。全身の激しい疼痛で、柏原はもう抵抗する気力もなかったが、最後に男の手がズボン下にかかる、

「お願いだ。それは勘弁してくれ！」

と泣くように哀願した。しかし、男が容赦する筈はない。忽ち鞭一本にされた柏原も同じように後手に括られてしまった。

「さア立て！二人共、歩くんだ」

男は柏原と水田の縄尻をとると、勝誇ったように命令した。それがどんなに不当な命令であっても、二人にはもう抗うだけの体力がない。

「兄哥、俺達を一体どうするつもりなんだ？俺はいい。しかし先生までこんな目に遭わせて……」

無駄と知りつつ水田はそう云わずにはいられない。嫉妬は人間を気狂いにするというがこうまで残虐な奴とは知らなかった。ただ殴

打ただけでは飽き足らず、このうえ何をしようというのか。

「やいッ。トットと歩け！こらッ」

男は快さそうに小突きながら、哀れな恰好の二人を土手に追い上げていく。土手の上は県道だ。山の中だから人通りは殆んどないがときどき木材輸送のトラックが通るし、バスも二、三本は通っている。

柏原は、現在の屈辱はまだ忍べても、この滑稽な姿を他人に見られたらと思うと、全身の血が冷えていくような戦慄を感じた。

「兄哥。こんな往来で、もし他人に見られたら——」

ついに道路へでると、水田も、たまりかねて云う。

「フフフ。そこが俺のつけめさ。てめえらをナ、往来の真ン中に晒し者にしてやるのさ」

「そんな無茶な！」

「何が無茶だ。おめえらにゃ相応しいお仕置よ。オイ、腰をおろせ。背中合わせになつて足を投げだすんだ——」

男は楽しい作業でもするように、余った縄尻で二人を背中合わせにグルグルと括りつけ別に用意してきたロープで各々の足首も固く縛った。

「ハハハ。いいザマだ。何アに、そうしているのも少しの辛抱よ。そのうちにバスかトラックがきて助けてくれるサ。それまで仲良くそうやってるんだな。じゃ、アバヨ」

「マ、待ってくれ、兄哥！兄哥ったら——」
身を振って呼ぶ水田の声をしりめに、男はスタスタと立ち去っていく。

「先生。すみません。僕の為にこんなことになって。畜生！何てえひどい奴だ」

「水田君。そんなことより、何とかして動けないかね。人が来ないうちに土手の下へだけでも下りられないだろうか？」

「そうですね。やってみましょう。少しずついざってみますから先生も調子を合わせてください」

「よし。しっかりやってくれよ」

しかし、それは容易なわざではなかった。二人共、汗ずくになり、死にものぐるいで体を動かそうとするが、ただいたずらにもがくだけで、芋虫の這うほどにも動けない。

「先生。駄目です。こうなったら、もう諦めましょう。そのうちにトラックでもきて助けてくれますよ」

柏原は、水田のようにそう簡単には諦められない。高校教師の自分が禪一本の裸で縛られ、白昼、道路の真ん中に転っている。もし他人に知れたら死ぬよりも恥かしい思いをしなければならぬ。いや恥かしいだけならまだ我慢もできる。恐ろしいのは地位も名誉もだいなしになってしまうことだ。柏原は悪夢なら早く醒めてくれと祈る気持だった。だが、これは夢ではない。今にもバスかトラックが通りかかって、珍妙とも滑稽とも云いようのない姿を人目に晒さなければならぬのだ。それは、もう絶対に避けられない。柏原に残された望みは、最初に通るかかる自動車（自動車）がバスでなくトラックであってくれればいいということだけだった。トラックならせいぜい二人の男に見られるだけですむ。



しかしバスだったら、数人、悪くすると数十人の乗客の好奇に満ちた視線を浴びなくてはならぬ。しかも、その中には女や子供も混っているに違いない。柏原は己の禪姿を妻にさえ見せたことがなかった。もっとも、このあいだ川原で女の子に見られているが、あのと今とでは状況が違う。見世物として余りに完璧なこの有様を、女の見物に供することは堪え難い屈辱だ。柏原は、刑の執行を待つ死刑囚のように、一刻々々が身の細る思いだった。

「先生。来ました！」

「バスか？トラックか？」

柏原は自動車くるまのほうを見ないで訊いた。声はかすれ軀中に冷汗が流れる。

「トラックです」

と聞いても（よかった）と思ったのは一瞬で、観念の眼を閉じてても、錯乱した気持は鎮めようもなかった。

木材を満載したトラックは五メートル先で急停車し、運転手が窓から顔を出して呶鳴った。

「おうい。どうしたんだア？……」

「助けてくれ。動けないんだようウ」

水田が叫び返すと、左右の扉が同時に開い

て、運転手と助手が飛びだして来た。

「どうした。追剥か？」

「ひでえことしやがるなア」

中年の運転と若い助手は、口々に云いながら縄をときにかかる。

「ナニ、喧嘩に負けたあげくが、この有様さ。相手が悪かったんだ。迷惑かけてすまねえナ」

「何だ喧嘩か。それにしても、ひでえ野郎がいたもんだ」

水田が適当に釈明しているあいだも、ずっと無言で顔を隠すようにして俯向いていた柏原は、縄がとかれると、もうどうにもいたたまれなくなって、

「水田君。後を頼むよ」と云うなり、滑るように土手を駆け下りていった。

三、

顔を紫色に脹らせて帰ってきた柏原を見ると、妻の素子は口もきけないくらい愕いたが「とんだ災難に遭ったよ。与太者の喧嘩のまきぞえを喰ったんだ」と云うと、

「嫌ねえ。気をつけてくださいよ」と顔をしかめただけで、それ以上は追及しなかった。軀の痛みはまだとれなかったが、柏原は一

日だけ休んで出勤した。誰もあの事件を知る筈はないと思っても、同僚の顔を見るのが妙に恐しく、彼は自然、無口になって教室へでも授業に身が入らなかった。あのととき地位も名誉も目茶目茶になると考えたのは、今思えばむしろ滑稽だが、それだけ傷痕の残るように苦い記憶は消えなかった。

放課後、柏原が帰り支度をしていると、事務の少女が来客のあることを告げて来た。何気なく玄関へいってみると、客というのは水田耕一だった。

「やア、君。ここがよく判ったな」

内心ドキリとしながら、柏原は笑顔で云った。

「以前の学校で調べて貰ったんです。来てはいけなかったでしょうか？……」

水田は黒っぽい流行の背広の肩を一寸すばめるようにして、柏原を見上げた。

「イヤ、僕もちょうど帰るところだ。一緒に出よう」

「すみません。どうしてもお話ししなければならなかったことがあったもんですから……」

鞆を取りに職員室へ戻りながら、柏原は水田の云った「どうしてもお話ししなければならなかったことが——」という言葉に反響していた。

例の男と水田との関係が如何なるものであるか、柏原には容易に想像のつくことである。そして柏原の感じたのは、嫉妬でも絶望でもなく、むしろ一種の安堵だった。柏原の氣持を水田が受け入れるか否かは別としても少くとも、柏原の告白を聞いて、水田が愕いたり軽蔑したりする惧れのないことを発見しえたのだ。

昨日、一日中、寝ていて、何も知らず甲斐々々しく看護に当る妻に、不貞な夫としての自責の念を抱いたり、美人ではないが細っそりと初々しい項に、フト哀れを覚えた柏原だったが、思いがけない水田の訪問は、それらを忘れさせ、期待が胸をふくらませた。

「静かなところがいいだろう——」

柏原は山手の目立たないところに建っている旅館に水田を案内した。

「先生。僕、謝らなければならぬことがあるんです」

部屋に通るなり水田は、キッチンと坐って云いだした。

「あのことか。いいんだよ、君が悪いんじゃない。いわば災難だったんだ」

「あのこともですけれど、それより他に——」
「何のことだ?……」

「僕、先生に嘘をついていたんです。ごめんなさい」

「嘘?」

「僕、百姓をしてるんじゃない。本當は、街で良くない仲間に入ってたんです」

「ふうん……じゃ例の男は——?」

「兄哥分で劍持という男です。あいつ僕につきまといつて無理ばかり云うんで、それから逃げる意味もあつて家へ帰ったら、田舎へまで追つてきやがったんです」

「じゃ君は、あの男のことは——?」

「好きじゃありません。でも仕方なかったんです」

「で、君はどうするつもりなんだ? いや今後さ」

「僕、決心しました。あいつとはキツパリ縁を切ります。いえ、この際、ヤクザからも足を洗うつもりです。そして、今度は本當に百姓をします」

「そうだったのか。イヤ、それを聞いて僕も嬉しい。心から君に敬意を表するよ」

正直いって、柏原は水田の更生を喜ぶよりも、劍持と別れたことのほうにより以上の喜びを感じた。今までの女学生のような逡巡が我ながらおかしくなる。

「風呂へ入ろう。話はまた、それからだ」
そう云って、柏原は、立ちあがった。

狭い浴室だが、しゃれたすみれ色のタイルは滑らかに光り、螢光灯の明りを湯氣が甘く包んでいる。

「先生は昔と少しも変わりませんネ」

「え? アア……」

それがタオルのことだと判ると、柏原は思わず苦笑したが、不意に突き上げてきた激しい衝動にクルリと向きなおった。

「水田!……」

タオルが音もなく足許に落ちる。

「先生。僕、結婚します」

いきなり平手打を喰ったように柏原は、たじろぎ、暫くして馬鹿のように薄笑いを浮かべた。

「さっき云ってしまおうと思ったんですけど何だか云いそびれて——。近所の娘でしてね幼馴染なんです。親父やお袋のほうが乘氣なくらいで、僕もやっと決心したんです。先生も喜んでくれますか?」

「勿論さ。おめでとう……」

それだけ云うのがやっとで、柏原は力なくながしに胡坐をかいた。

異色小説

サド侯爵の紅

一

蒼野

礼

パーティが閉ねた。時計がない広間なので、はっきりした時間は分らないが、大方、午前二時近い頃合であろう。窓から星が消え、いつのまにか落ちて来ている。幽かな雨である。

「降って来ましたわ」

窓の方を見て、今夜のパートナアが云う。痩せぎすな十八、九の女性である。鶴田に背中を向けて帰り仕度をはじめた。黒い地味なセーラー服に黒いストッキングと云った服装である。ちらりと白いふくらはぎを見せて、女はストッキングを穿き終えた。

「さようなら、あなた」

振向いて云い、ソファを起った。

「さようなら」

鶴田はソファから会釈をかえした。薄暗い中へ女の痩せぎすな肩が消えて行く。黒い制服から推すと女子短大の学生でもあろうか。どう云う素姓の女性か全く分らない。向うにしても鶴田の氏素姓は全く知らないのだ。

鶴田が広間の入口にあらわれたとき、その柱に凭れて彼女は人待ち顔に、たたずんでいた。胸のバッジが鈍く金色に光っている。同じバッジを鶴田も胸につけている。よし、今夜はこの女をパートナーにしようと鶴田は咄嗟に心を決め、軽く頭をさげて近寄った。女は、うなずいて白い歯を、こぼした。

「どうぞ。お願いしますわ」

別段、第一印象で強く惹かれるものがあつたわけではない。どち

らかといえ、鶴田には興味の薄い印象であった。薄暗い中でパーティーを選択することが彼は臆怖なのであった。誰だっていい。只自分の気が紛れる程、踊り抜ける人でさえあれば——そんな投げやりな気持で実は、きめた相手であった。

眼の前の女性をパーティーにきめて、クロックで腕時計を預けるとき鶴田が針を見ると、十時であった。各自、腕時計をはずしてクロックに置くのは、この会のしきたりである。時間を忘れて過そうという趣旨である。

今が二時近い頃だったら、約四時間にわたって鶴田は彼女と踊ったことになる。彼女は思いのほか軽ろやかなステップをふんで、彼を内心おどろかせた。

向うの出口に赤いランプが点った。人々の顔や髪が赤く染まる。全部で四十名ばかりの男女会員がいどきに狭い出口に集ったので混雑を呈している。時計を持主に返すクロック係の男性役員は大童である。その多忙な様子が、こちらの鶴田からも見える。真のダンス愛好者を一堂に集め、巷のホールに求め得ない清楚な雰囲気の中に、その日のパーティが終った。次は来月——五月十三日である。その日を、もう今から楽しみにして、この広間を去って行く者も多いことであろう。雨のそば降る戸外へ三々五々彼等は散って行く。鶴田のパーティーも、すでに外の闇に吞まれた。

鶴田は会員中でも変り者であるかも知れない。二十八歳のたくましい体軀を有しながら、月並な結婚など毛頭、考えないのである。名は保二郎、土工である。ダンス愛好者には似合しからぬ職業である。大学卒の学歴を持ち、無論、根っからの土工ではない。本人が好きで飯場暮らしをしているのだ。

鶴田保二郎は、広間を横切って片隅のリビング・バーへ寄って行って、

「飲みたいが——」

カウンターの後片附をしているバーテンは黙ってウイスキーを注ぎ、

「どうぞ」

しかし余り粘っては困る。大体、時間後に酒を出すのは会規違反だからと笑った。

「分っている。すまない。どうも、このパーティが終った後が淋しくてねえ。毎回こんな淋しい気分になって、すぐには、ねぐらへ戻りたくないのだ」

鶴田は一息にグラスを乾すと次は自分で瓶から注いだ。美味い。パノラマのような広間の光景が幻であったような佗びしさで、酒は甘い感傷を醸してくる。酒に酔うのか、先程までの爽かなステップの追慕に酔うのか、渾然とした、ほの甘い想いが胸をひたしてくる。五杯目を乾したときである。

奥の部屋から、ばたばたと、こちらへ駆けこんで来た女がある。裾が割れて白い脚が見えた。鶴田の驚きが苦笑に変わった。彼は知っているのだ、この二人の奇妙な交際を。

「かんにんしてえ——」

哀れな声をふりしぼって女が掌を合わせた。追いつかれて帯を掴まれたのである。

「よ、よくも逃げたナ」

びしびしと平手打ちを顔に浴びせ、

「逃げた罰は覚悟なさい」

この邸の女主人である平山由美である。摘まった女は、よく見ると葦田路子である。女性会員中、最も容色優れた元映画女優のこの女を、鶴田は勿論、知っている。三十歳を時機に映画界から身をひいて、今年三十二歳になる筈だが、美貌輝くばかりで、とても、そんな年齢とは見えない。顔も姿も二十代の若さを匂わせている。類絶した艶やかな容色である。

「かんにんなさって——」

美しい眸に涙を溜め、葦田路子は平山由美の足許にひれ伏した。「お立ち！」

この豪壮な西洋館の持主、さる富豪の末亡人である由美は、二十八、九、或いは、もっと若いだろうか、本人は齢を隠して云わないが、ともあれ路子より齡下には違いない。これも色白な美人である。由美は路子の豊かな髪をつかんで「お立ちたらっ」吊り上げるように彼女を立たした。ビシッ、路子の顔へもう一度、掌が飛んだ。

「ああッ——」

路子は両手で顔をかばい、

「かんにんしてえ」

「だめよ」

ふふふ、と由美は笑って、

「鶴田さん」

と、止り木の鶴田の方を向いた。

「なに」

「パーティはもう済んだわね。これからは私達、自由に振舞っている時間ネ」

鶴田は、あいまいに笑ったが、由美は、もう路子の顔へ顔を戻し

て、

「背中を出して、向うを向いて」

二言、三言、なお路子は哀訴したが、ピンタを張られると、

「ああ——」

悲しい泣声を洩らして、和服の胸をくつろげ袖から腕を抜いた。白い、ふくよかな二の腕があらわれ、ついで白い背中が露わになった。美しい背中を鞭で責めようと云うのである。

鶴田は知っているだけに息をこらした。彼も由美と共通する血の流れを自覚しているのだ。

もはや観念して、路子はすすんで壁の方へ歩み寄った。壁際に、ずらりと三十六本の円柱がならんでいる。その一つの柱に路子は腕をまわした。鶴田は瞳を張った。つい、さっきまでの清楚で健康的な雰囲気が一変して異様な空気がみなぎる。何とない感動が鶴田を襲う。自覚するアブの血を、ダンスに紛らしている彼には二人の狂気じみた気持がよく判る。彼はウイスキーを瓶ごと叩いて、二人の女の態度を見まもった。庭に雨の音が喧ましくなってきた。

柱へまわした路子のかいなを、由美は手首を重ねさせて持ってきた鉄枷を嵌める。次いで脚を揃えさせて同じく鉄枷を足首に施す。短い鎖が、じやらじやらと鳴った。

半分、解けかけた長い黒髪を乱暴に由美は解き崩すと、柱の上から垂れた麻ロープにからみつけ、ロープを引いた。上に映写スクリーンを吊る滑車がある。ロープの一方を引くと、からからと滑車が鳴って、路子の髪は上へ逆立ちになって行く。じりじりと顔が仰向いて行く。「髪吊り」と称ぶ責めの一つである。

「イタイッ——」

路子は泣声を張りあげた。

「まだまだ」

からから、滑車は廻る。全髪が逆立って抜けんばかりである。美貌は苦痛に歪んで、仰向きに反った。天井を仰いだ恰好である。そうして背中に皮鞭が、はじけだした。

「ああっ——うう……」

ひと撲ちごとに路子は悲痛な声を挙げ、気の絶えそうな、うめきを洩らす。薄暗い中に異常な舞踊が独演される。若人達の楽しき宴の果てた広間に打って代って、美女が苦痛の声を飜させ、肌を撲つすざまじい皮鞭の音が響き冴えた。

「由美さん——や、やめて……背中はやめてよう——」

「フフフ」

左手で額の汗を払いながら、由美は喉で笑う。哀願する美女のその顔に苦悶の極限が感じられた。鶴田は、止り木を飛び降りた。路子は絶気の一步手前である。

「待て」

と鞭を持つ由美の右手を扼した。

「落ちるぞ」

学生時代、柔道選手だったから、つい、そんな云い方になった。気絶するぞと云う意味である。由美から鞭をとり上げておいて、鶴田保二郎は柱へ寄って、仰向いた路子の唇に、いきなりウィスキーをそそいだ。

「しっかりしろ」

青白い頬を叩いた。薄く眸をあけて、

「——お願い、……別なところを責めるように云って」

タラタラとウィスキーが唇の端から、こぼれた。

「お、……お願い——」

云いもあえず気を喪った。

バーテンが帰っても鶴田は、まだバーの止り木に掛けていた。角瓶の中味は残り少くなっている。酔いが彼の胸をあたためている。今夜は、なぜか土工の体臭に埋まった飯場へ帰りたくなかった。バーの屋上登だけ残して、広間の灯はすっかり消えた。邸内の燈も一つずつ消えて行く。広大な西洋館の内部を、未亡人の女主人に仕える家令たちが巡視して、一つ一つ消燈して行くらしい。家令たちの黒い影が窓に動くのがバーから見える。

やがて一旦、奥へ入っていた平山由美が出て来た。紅いガウンに着替えている。

「もう、おそいわ。雨も小やみになったし」

お帰りになると鶴田に云う。素直に鶴田は席を起って、

「路子さんは帰りましたか？」

「ええ」

充分、手当をしてやって、さっき帰らせたと由美は云う。そして

「驚いた？」と問いかける。

「いつかお話しした、私達のプレーというのがアレなのよ」

鶴田は肯いてニンマリした。

「僕がやればあんな生ぬるい責め方では納らないだろう」

「えッ？」

「おやすみ」

ハッとされた様子の由美の眸を軽くそらして、鶴田は外へ出た。由美は小やみだと云ったが、豪華な玄関の庭には薄く月光さえ射して

このぶんでは雨は、すっかり上った模様である。やや千鳥足で鶴田が門へ向って歩いていると、
「大変だあ」



向うの車寄せの辺りで、けたたましい声が挙った。家令の一人らしい。その声に仲間の家令たちが、わらわらと駆け寄って来る。泥水をはねあげて鶴田も駆けつけた。

「サド侯爵にやられた」

猿ぐつわを解かれると、若い美男の家令は苦しい声で云った。まわりを仲間たちがかこみ、手早く若い家令のいましめをほどこいていく。両手両足を強い細引でくくりあげられて、ころがされていたのだ。猿ぐつわが首を巻いていたので、発見した中年の家令は、てっきり絞殺されたと見て大声を放ったのである。殺そうとしたのでは勿論ない。美少年の家令を拳銃で脅し、しぼりあげて、その背を存分に鞭撲ったのである。上着をとられた背中が血を噴きだしている。その傷のむごたらしさは、由美が路子に加えた鞭撲ちの比ではない。サド侯爵と自称する人物がその自称にふさわしく、いかに冷酷残忍な性格であるかを、この傷痕は充分、物語っている。

「輸血をしろ！ 早く！」

犠牲者の顔色を見て鶴田は呟鳴った。

「サド侯爵ね」

不意に耳もとで由美の声がした。

「鞭傷ばかりではないわ」

云うまに犠牲者は抱え上げられて運ばれて行く。医者へ電話すべく、家令の一人が宙を飛ん

で邸内へ向った。

「ひどい奴だ。刃物を使うとは」

鶴田は云った。

「やり口が残酷だわ。私も路子さんには、ずいぶん、ひどい責め方をするけど、斬ったり突いたり、そんな刃物いじりは絶対したくない。やれと云ったって、できはしない」

刃物をもって人を責める残酷無頼のサディストへ、由美は怒りを燃やし、嫌悪が顔の美しい冴えを覆った。夜風が真紅のガウンの裾を撫ぜた。香水のいい香りが、ならんで立つ鶴田に匂った。

「やっぱり、あらわれたな、サド侯爵め」

鶴田が吐き捨てるように云ったとき、

「屋根の上に人が——」

語尾はかすれて、由美は鶴田の肩にいきなりしがみついて、ふるえた声で云う。

「見えるでしょう。ほら、あの屋根の上」

居る。本館の三階建の西洋屋根の上に黒いマントを風にふわふわとさせて奇怪な蝙蝠の姿で立つ、一人の人物。

サド侯爵である。

二

五月十日、役員の会合が東銀座のFと云う喫茶店の階上特別サロンで行われた。Fの経営者は福岡と云う五十がらみの紳士で、この会の会長をつとめているだけにダンスは堂に入っている。

三日後に平山邸に於ける月例のパーティを控えている。その十三日のパーティにサド侯爵が乗り込んで来ると云う噂が、いつしか会

員の間に流れて恐怖の念を喚んでいる。拳銃を擬し、ナイフをかざす悪魔紳士の訪れは誰しも怖い。次の犠牲者は自分かも知れないと云ううち毛立つような恐怖が、各自の胸を嘔む。今日の役員の会合はサド侯爵への対策を講じ、会員の恐怖を無くし、例会を常の如く盛会にしようとする目的を帯びて催された。

では今日までのサド侯爵の惨虐の行状は一体どんなものか——それを知るには福岡会長の、今、卓上に置いた皮表紙のノートをのぞいて見るのが最も手っとりばやい。

「サド侯爵と称するX人物覚書」

第一頁に達筆で、そうしるされている。二頁から彼の行状が記録されている。そのまま写してみる。

昭和三十四年十二月三十一日夜。

越年を祝す大みそか特別パーティで賑う平山邸の例の大広間に、突如、暗緑のマントを羽織った覆面の人物があらわれ、拳銃を擬して我々を威嚇し、全員を鞭で打撃して引揚げた。サド侯爵と名乗り鞭を振ったのは、およそ三十分位であった。自分は初め会員の誰かが道化ているのだらうと思い、「悪ふざけはよせ」と叱ると、返事が代りに顔面を鞭が襲った。臉が切れ鼻血が出るまで撲れた。自分には心から恐怖した。

彼が去ったあと皆は夢から醒めたように、姦ましく喋り立てた。ある者は紅裏のマントであったと云い、或る者は表も裏も真黒だったと云うし、マントの下は燕尾服、否、黒いぬいぐるみのようなものであったとか、ただ、その服装に就いて論議するばかりで、その正体に就いては誰も測り知る者なし。念のため自分はすぐ会員の点

呼をとった。今夜の参加者三十八名、全員、居る。したがって會員の誰かが不心得な悪ふざけをした訳ではない。彼は外からやって来た。一体、何者か？ 洒々としてサド侯爵を名乗るは憎し。人を喰ったその異様な風采も憎きなり。ともあれ、我々の愉しき宴げに不祥事が発生したことは深く遺憾。

ついでに書き留める。自分の眼にはマントの色は暗緑色、裏色は紅、服は燕尾服と映った。

昭和三十五年一月五日。新年特別パーティを平山邸にて開催。旧年あのサド侯爵事件が起ったため會員の寄りが案じられたが、全員参加で盛況。鶴田保二郎氏に特に願って入口の警備をして貰う。鶴田氏は軀幹雄偉の青年。柔道の有段者なり。彼、張り切ってサド侯爵の来襲に備えたが、効あつてか平穩裡にパーティは終った。

しかし、その帰途、會員の北村夫妻サド侯爵に襲わる。前日の扮装で突如、路上に出現して夫妻を鞭打ち仮死状態に落したと云う。未明に至って夫妻は行人に発見され、危うく凍死を免がれた由。戦慄を覚ゆ。この惨忍な人物の正体は何者なりや。齒がゆし。

一月十一日。

女性會員、岡村文子氏、下宿先の二階六畳間にて終夜、サド侯爵から虐待さる。拳銃で威脅し、体をしぼり猿ぐつわをさせて、凄惨な責めを加え、夜明方、窓より屋根伝いに逃走した由。自分は現場に行ってみたが侵入口も同じ窓からと思われる。文子氏が帰宅するのをサド侯爵は押入れにひそんで待ち受け、彼女が帰るなり銃口を背中に擬したらしい。覆面暗緑色のマント、声は一声も発せずと云

う。文子は某デパートの事務員である。鞭で、ぶたれている間は、さして恐怖は覚えなかったが、喉を噛まれたときには殺されるのかと思ひ、気が遠くなつたと語った。彼女の喉は紫色に腫れ上っている。自分は見舞金を置いた。この程度に止まったのは幸である。それにしても彼は、我々會員だけを狙う。わが会の事情に明るいのはなぜか？ 彼は會員の誰かではないか？ 疑えば一人疑うに足る人物が居るが。しかし、輕はずみなことは云えぬ。

一月十三日。例会。無事。

二月十三日。例会。平穩。

三月十三日。例会。平穩盛況。會員は、もうサド侯爵のことは忘れたる様子なり。あの悪魔め、二度と出て来るな！ われわれの愉しい一刻を乱すなかれ。われらを恐怖させるなかれ。惨虐を我等は忌む。

作者曰う。しかし翌日に至って、福岡氏のノートには、こう誌されている。

三月十四日。

再びサド侯爵出現。元女優、美貌の葦田路子、自宅で襲わる。責め例の如く惨！ 彼女の告白を聴きつつ身ぶるいがでた。悪魔は消えたかと思つたのに、こちらの安易な心を嗤うように又しても會員に惨虐な責めを加えた。風の如く邸内に闖入して、未明に、いずか

たへともなく去ったと云う。血に染まった鞭が部屋に捨てられてあった。指紋採取は徒労に終る。手袋を用いて鞭を振ったのであろう。会員は、みな我子のように自分は可愛い。だから一そう自分は、サド侯爵なるZの人物が憎いのだ。彼奴は何者？ 疑うべき人物が一人居るのだが、公けにするには残念ながら、まだ証拠がない。しかし詮索は続ける。

四月十三日。例会。

パーティが閉ねて約四、五十分後、サド侯爵出現、平山家の美少年の家令を襲う。ナイフで背中を斬り、家令は輸血をするほどの大事なり。このとき、屋上に立つサド侯爵の姿を、平山由美と鶴田保二郎の両会員が目撃。鶴田氏は屋上に登って彼を追跡したが、化鳥の如く彼は屋根から屋根を翔んで逃げたと云う。全く鳥そのものであったと、鶴田氏は驚いて語った。屋根の上に立って嘲笑う不敵な態度、まったく憎し。憎し憎し、サド侯爵。

わが不明を自分は愧じねばならぬ。鶴田氏を疑っていたことだ。最初にサド侯爵があらわれた大みそかの特別パーティのとき、鶴田氏は不参加でアリバイがなかった。次に一月五日の新年特別パーティの折、会場の警備を彼に頼むと、サド侯爵はあらわれず、帰途、北村夫妻が襲われた。以上の二点から自分は鶴田氏を疑った。サド侯爵なる人物は屈強な男であると思ふ。そうして会の事情に明るい者だ。鶴田氏は土工であり柔道の有段者である。その点からも自分は一そう鶴田氏を疑った次第だ。土工と云う彼の身分が、なぜか妙に私の疑惑を深めてもいた。おろかなことであり、済まぬことであった。

月 日。

平山邸の家令が背中をナイフで斬り裂かれて以来、サド侯爵に対する会員の恐怖は、いちじるしく募って、来月の例会にサド侯爵があらわれて暴虐に及ぶと云う噂が流れている。根拠のない流言と一概には笑えない。事実となって、あらわれるかも知れぬのだ。

会員有志が集って緊急に対策を講じねばならぬ。このままだと、われわれの愉しいパーティはさびれてしまい、遂には会自体が解散してしまいかも知れぬ。会合の機会を早く作ろう。

三

さて、カーテンをおろした二階のスペシャル・ルームで、サド侯爵への対策が役員有志に依って協議されたが、外が、たそがれだし、これも、これと云う名案の極め手は出ない。神出鬼没、正体不明の相手だから、どうにもこうにも実は仕様がなないのだ。いかなる人物かその正体の一端でも掴み得ていたら、もっと積極的な対策が樹てられ、場合によっては会員全員で正体の究明に乗りだし、法的制裁を加えることも出来るであろうが、手がかりがまったくない状態では、結局、会場の警備を厳重にすると云う術しか他に術だてはない。結論は、それになった。警備委員は鶴田保二郎、他五名の男性会員がえらばれた。復讐の一念に燃え立って北村氏は、すすんで参加した。当夜、愛用の猟銃を持参すると云う。

サロンに灯が点ると、人々は散会した。外は、あたたかい春宵である。ネオンの華が、あでやかである。角に来て、鶴田は先を行く芦田路子に追いついた。路子は今日も和装で会合にのぞんだ。長い

髪が艶やかに光って肩へ流れている。自然に二人は肩をならべ、人波の中を歩いた。路子の髪が美しく肩に揺れる。

「西銀座へ参りませんか？」

夕食を奢りますと、鶴田に云う。

「ありがとう。しかし、こんな恰好だ」

労働服、地下足袋の装^なりである。

「あら、かまいませんわ」

「じゃ、御馳走になるか。トンカツを」

「トンカツ？」

路子は笑った。すばらしい笑顔である。かつては、この笑顔がスクリーンで観客を魅了したものだ。通る者が時折、路子をふりかえって見る。

フランス軒と、ネオン文字の輝いた瀟洒な洋食店へ路子は鶴田を案内した。豪華な和服に身を包んだ艶麗な婦人と土工服のカップルは、客の眼を惹く。鶴田は思わず顔が、ほてった。

「トンカツなど注文したら、此処のcockの腕が泣きますわ。チキンソーテか、テキなどいかが？」

差し向いで椅子に掛けると、路子は云う。

「じゃあ、カレーライスを頼もう」

「冗談おっしゃって」

チキンソーテ、ライス、エッグ、コーヒを二人前、路子は云い付けた。

「おとといねえ」

器用にホークをあやつりながら路子は、おしやべりをする。

「由美さんが私んちに見えてねえ。わたし責められたのよ。まだ痛

いわ」

あの夜、鶴田に見られたためか、路子は平然としている。

「ほう」

鶴田は口一杯に頬張る。悲しいかな、こういう美味しい鶏肉を喰うの生れてはじめてである。好きこのんで、あたら学業を積んだ身を土方渡世に落した身の上が、彼はこのとき幽かに侘びしかった。

「由美女史は、いつも貴女を離さない。貴女もそれを望むらしい」
「いいえ、のぞんではいせんわ」

「と云うと？」

噛みしめながら鶴田は云う。

「ただ、のぞんでないと云うだけですわ」

「ポートワインが一杯、飲みたい。注文してもいいですか」
「どうぞ。二杯ね。私も戴きますわ」

食事が済んだ。土工と美貌の婦人は仲良く外に出た。不審と羨望の入りまじった眼差しが、カウンターで路子が金を払うとき、鶴田の顔へ注がれていた。

一杯の葡萄酒で路子の顔は、ほんのり紅味が差している。鶴田の腕へ腕をまわした。

「タクシーを止めて」

「何処へ行く」

鞆田路子は唇を、ほころばせた。

「どこへ行くって？帰るのよ、私の家に。鶴田保二郎と云う人とともに」

「僕にも由美女史と共通したものが……」

「聞きましたわ。だから、お誘いするの」

車の波。赤い空車燈を点したペットが、鶴田の合図を見て、さつと横づけてきた。

った。パバリ、鞭の輪が延びる。
「待ってー」



れ子

目黒公会堂に近い場所に葦田路子の家はある。目黒区中目黒で木立に囲まれた静かな場所に一人住いにふさわしいモダンな文化住宅である。銀座からそこまで帰って行く車中で、路子は、かつて主演した映画の主題歌を小さく歌った。泌みるような美しい声である。

「葦田路子さんですね」

中年の運転手が云った。公会堂横の暗い細い道をタクシーは通り抜けた。

家の中にはいると路子は、ドアに鍵をかける。

鶴田の人間性を、これは充分、信頼した上での動作だろう。だが、鶴田は好意だけを謝す風に微笑した。

「由美さんの責め方には倦いちやったのよ。お願い」

常に肌身離さず所持しているらしい鱈皮製の長い鞭を懷中から出して差出しながら切げに訴える。

鶴田の胸が浪立ち、そして心が決

「さからうか！」

左手で路子のビンタを張った。烈しい音がした。

「馬になって俺を此処から運ぶのだ」

「はい」

草履を脱いで路子は式台に膝まずいた。両手をひらいて前に突く。

「可愛い馬——」

背中に懸った美事な黒髪を鶴田は双つに分けて編みだした。手綱にするのである。

「ぶって。鶴田さん」

路子は耳を紅くした。

「今に存分、ぶってやる」

髪が長い環になって、手綱ができた。

「よし」

鶴田は、どっかりと跨った。全体重を背中で支えて背骨が折れそうな苦痛が、路子を襲い、後髪を引かれて顔がぐいと上に反る。

「そりやあつ」

片手でビシリと叩いて、

「ハイシドウ、ハイシドウ」

よたよたと美しい人間馬は廊下を這いすすみ出した。

「のろいぞ」

ビシリと叩く。

「髪を離してえ——」

「云うな！」

邪慳に、いっそう強く引張る。

「うっ……」

痛みを覚え、路子の顔は充血する。美貌が凄艶に映る。

ようやく居間に辿り着くと、べったりと腹ばってしまい、華奢な馬は暫く声も出ない。

生暖かな春の夜は、次第に更けて行く。

「もう、かんにん——」

壁に、へばりついて路子は悲鳴を挙げる。

「かんにんしてよ——」

「酒はあるか」

鞭傷を酒で消毒してやろうと鶴田は云い、そこでようやく鞭撲ちを止めた。長い鞭を巻いてポケットにしまい、

「おい」

ぐいと顔を、こちらへ向かせて、

「返事をしろ」

バシッと一発、ビンタをくれた。

「ああ——」

路子は撲れた頬を押え、

「キッチンにウイスキーが……」

「なんだ、その顔は。泣きべそかくな！」

もう一度、手を振りあげると、路子は両手を前にかざして、

「持って来るわ。だから顔は撲たないで」

角瓶に半分程残っている琥珀色のそれをたずさえて来ると、

「はい」

と鶴田に渡して腹ばった。

「うっ……」

一滴垂らされただけで、劇薬のように傷口に沁みる。齒をくいし

ばり、眈を釣って、

「ムム——」

滴々と、そそがれる液体の苦痛に、路子は身もだえた。

鶴田保二郎が葦田路子の家を辞したのは、もう零時を過ぎる頃である。「変な誤解を招くといけないから」と彼は、路子の家で夜を明かすことを断った。正しい態度であろう。世間に広く知られた有名な彼女の性格を下手に傷けまいとする優しい心づかいが、このインテリ土工の胸にはある。アブは遊戯であって情事ではないとする彼の信条も、そこに、はつきりと書いてある。路子は玄関で彼の手を握って夜の道へ送り出した。

初夏のように、なまあたか夜は、明日は雨をよぶらしい。中天の月が円い暈をかぶり、おぼろな光を地上へ投げている。三丁程も行ったときである。

片側のコンクリート塀の上に樹上から、ふわりと降り立った者がある。黒いマントが風を孕んで蝶の羽根のように広がった。燕尾服の胸のワイシャツの白さが、夜目にも鮮かで、覆面の顔に眼ばかりが双つ光っている。手に拳銃を構え、銃口は、ぴたりと路上の土工の心臓を狙っている。

土工の顔が蒼ざめた。突如として塀上に立ったサド侯爵は、今夜は鶴田を狙って攻勢に出ている。かって平山邸の屋上で鶴田の追跡に遭って鳥のように屋根を渡って遁げた彼は、今夜は真正面から鶴田に挑み、その態度は不敵に緯々としている。ふわりと、マントの裾が風に煽られて緋色の裏地を見せる。かすかな忍び笑いが覆面の下から洩れた。

「撃つぞ。動くな」

含み声で頭上の異形者は云った。小さなコルットの銃口が上を向いて鶴田の眉間を狙うようである。

「——た、た……たすけてくれ……」

情無く、鶴田の声は震えた。体軀堂々、柔道の心得があっても、所詮、銃器には勝てぬ。恐怖が鶴田の全身を包んだ。サド侯爵の一方の手が、びゅっと鞭を素振りした。木の葉が叩かれて、ばらばらと落ちる。

「逃げれば命がないぞ」

ひくい含み声だが、陰に籠った凄みがある。一步でも動けば、たしかに銃口は火を噴くであろう。毛が逆立つような恐怖が鶴田を襲う。

塀の上を、こちらへ向って一、二歩、サド侯爵は歩み寄った。片手に鞭を振りかざした。風を切り唸りを挙げて鞭は襲いかかった。発止と鶴田の顔面に炸裂する。眉間が破れて土工の顔を赤い血が奔った。

「ム——」

掌で顔を掩う。二撃目が襲った。次に肩口へ、そして背中へ——矢継早やの乱打である。

サド侯爵が去ったあと、鶴田は芋虫のように路上に転って苦痛にのたうっていた。通りかかったタクシーのライトが、その姿を照らした。車は急停車して運転手が飛び降りて来た。車内には少女の客があつて、顔面蒼白である。

つい今、巨きな鳥のように黒いマントを、ぱあっと拡げて近くの屋根へ翻んだ人の姿に、物の怪を見た如く怯えたのである。

「医者に——」

抱き起して運転手が云うと、

「要らぬ……」

そして土工姿の青年は、

「おのれ、サド侯爵……」

と、齒ざしりした。

四

五月十三日。やはり、当夜の月例パーティは、サド侯爵出現の噂に怯えて参加会員は全体の三分の一度程度しかなかった。福岡会長の躍起の説得も余り効果がなかった。悪いことに前夜、中目黒の路上で、鶴田保二郎がサド侯爵に襲われている。神出鬼没、惨虐の嗜好者への恐怖は会員の胸間に一そう募った。女性会員の欠席が、いちじるしい。北村夫妻は北村氏のみ出席した。某デパート事務員、岡字文子の姿も欠けている。彼女も北村夫人も共にサド侯爵への恐怖症に、とらわれている。

葦田路子は艶やかに着飾って常の如くパーティにのぞんだ。眩しいばかりの彼女の容姿は、大輪の花を置いたようにパーティを華やかに彩る。華麗な花である。

パーティの初めにこの美しい婦人をめぐって、平山由美と鶴田保二郎との間にトラブルが起ったことを誌さねばならぬ。たがいに路子を自分のパートナーに希んで相ゆずらなかつたのである。福岡氏が仲に分け入って調停しようとするが、両人は肯かぬ。

「それでは」

と、サド侯爵の対策に心労した顔を福岡氏は葦田路子へ向けて、
「貴女が二人のうち、どちらかを選びなさい。ね、そうなさい。さ

あ早く」

路子は、じっと顔を伏せている。リビング・バーの燈が彼女の白い項に射している。いつまでも顔を挙げない。不意に由美が呟いた。
「憎いわ」

路子は鶴田の腕にすがった。鶴田を選ぶ意思を、そうして示した。こよないパートナーを失う悲しみが、この瞬間、由美の顔に強く走ると、彼女はそれを隠くすように、くるりと踵を返した。

フロワーの中程へ鶴田は路子を、みちびいて行った。広間でも、この出口際でも、すでに哀調を帯びたブルースが流れ、幾組かのカップルが軽やかに輪を描いている。出入口に近いフロワーで踊るのは、鶴田たち警備係の役員である。ダンスを愉しみつつ、サド侯爵を警戒するのである。

路子は柱の前に待たしておいて、鶴田は北村氏の側へ寄って行った。

「北村さん」

獵銃を貸して欲しいと鶴田は云った。パートナーの女性が彼へ会釈をおくる。鶴田は見忘れていたが、前月のパーティの時、彼のパートナーになった、あの痩せぎすな若い女である。鶴田は会釈を返して、

「北村さん、頼む」

もし今夜、サド侯爵があらわれたら、そいつで一発ブツ放して、奴を引っ捕えてやりたい、昨夜の仇を討ってやると息まいた。サド侯爵に打れた顔が、お化けのように腫れあがって、すざまじいばかりである。

「私も今夜、奴があらわれたら撃つ気でいるが――」

それほど、おっしゃるのでしたら、貴方にお任せしようと、北村は銃を渡した。ベルギー製六連発の精巧な獵銃である。

「これさえあれば百人力です。有難う」

待っていた路子が銃を見て首をすくめる所作をした。

サド侯爵があらわれたのは、それから三十分後である。今日は雨を見るかと思つたのに反して、昨夜のように、おぼろ月が中空にかすむ平山邸の屋根に、彼は例の異形をあらわしたのである。助けを求める葦田路子の絶叫が、その屋根の上から流れた。

路子がサド侯爵に拉致されたと云う突然の事態に、最も度を失つたのは鶴田である。「馬鹿云え！」彼はコップを床へ落した。つい今、このリビング・バーへ来て水を飲みかけていたところである。路子と踊っているうちに、無性に喉がかわいたので此処へ来た。

その間、二分とたっていないであろう。その瞬速の間にサド侯爵は路子を奪い、屋根へ登ったと云うのか？ 脱兎のように鶴田は出口へ走った。銃を、鶴田は掴んだ。

「撃つな！」

庭に群がる人々が一斉に叫んだ。「葦田さんが危い！」騒然と庭は湧いた。

「やめろ！彼女が殺されるぞ！」

福岡会長が心死に叫んだが、時遅く、鶴田の指は曳金を引いた。轟然と一条の閃光が夜空に尾を曳いた。銃声が訝する。

黒いマントが翼のように風にふくらむ。悠々と彼は屋根に立っているのである。路子は側に転がされているのだろうか、姿は見えない。姿は見えず、彼女の悲鳴だけを人々は聴いたのである。

「ちくしようにッ！」

鶴田は曳金を引いた。これも当らぬ。下界の騒ぎを小気味よく打眺める如く、悠々たる態度で、サド侯爵はなおも屋根にある。

「これだけ距離があつたら無理だ」

北村氏が云う。

「屋根へ上って狙うより他はない」

「よし」

鶴は一旦、邸内にはいった。一階から二階、二階から三階へと豪華な邸宅の階段を走り上って行く。彼の眼は血走っていた。彼の胸に炎える感情は、サド侯爵への報復の念ばかりでなく、より以上に烈しい路子を救わんとする想いではなかったか——。よし己れは殺されても、あの人は救いたい。その意思が無意識にはたらいて彼をこの危険な行動へ駆り立てていると解釈しても不当ではあるまい。

鶴田は三階の窓から体乗りだして屋根の雨樋を掴んだ。ぶらりとぶらさがった。樋の軋む音が下で見守る人々の耳にも聞えた。ハッとして思わず眼を閉じたのは、瘦せぎすな若い女である。男も、かたずを呑んで、この危険な離れ業を見守った。鶴田の腰から銃がすべり落ちた。矢のように銃は落下する。

同時に鶴田の体は機械体操の要領で瓦の上にあがった。無腰である。敢然と彼は、屋根瓦を踏んで走った。

「サド侯爵！」

忽然と侯爵の姿は消えている。広い屋根の上にあるのは、ただ一面の星空である。夜風が颯々と瓦を渡る。

「みちこさん——」

のど一杯に彼が叫んだときである。応える如く路子の悲鳴が邸内で挙った。

鶴田が屋根に達する瞬前にサド侯爵が、ふいと姿を掻き消したのは、庭にたたずむ人々の眼には等しく映ったことだ。サド侯爵は逃げた。それを屋上の鶴田へ知らせようとした時、路子の、けたたましい悲鳴が人々の耳を打ったのである。会員たちは一斉に邸内へ向って走った。悲鳴が聴えたのは三階である。しかし、どの部屋か見当はつかぬ。銃を拾って手に構えた北村氏を先頭に、片端しから室を開けて廻った。さして造作は、かからなかった。

路子は北側の隅にある一つの洋室から廊下へ姿をあらわして来たのである。毯のようにその体へ飛びついて、

「ぶ、ぶじでよかったわ！」

かたく抱擁して吾がことのようにいたわるのは平山由美。よかった、よかったと手を取って涙を見せる紳士は、会員思いの福岡氏。

会員たちも口々に彼女の無事をよるこぶ。

サド侯爵は自分を屋根へ伴い、鶴田が追って来たのを知ると裏側から此処へ逃げ込み、自分を邸外から連れ去ろうとしたが、身の危急を感じると自分をそのままにして窓から夜の闇へ逃走した。昂奮が鎮まると、葦田路子は言葉少なに以上のことを語った。

「保二郎さん——」

向うから廊下へ遣って来た鶴田の長身を見ると、路子はパッと駆け寄る。「保二郎さん——」かと、口の中で云って、両人の親密な様子に微笑を浮べる会員もいる。由美だけが淋しい顔になって二人の態度を眺める。ぱちぱちと拍手が起った。パートナーを救うべく果敢に行動した彼への賞讃である。拍手は、どよめいた。

再び生じたサド侯爵事件で、パーティは流会になった。無理もない。恐怖の生々しさが胸にわだかまって、誰しも、まだ黒マントの

不気味な姿が目につく。人々は一団となって帰途についた。

約十分後である。平山邸のさきほどの屋根の上に、じっとひそんでいる異形の人物がある。身をかがめ、風に煽られるマントの裾を押えて誰やらを待ち受けているらしいその覆面の姿は、云わずと知れたサド侯爵。

待つこと、しばし。やがて果して屋根の一角にあらわれた一つの人影がある。猿のような軽捷な動作で、つつ——と瓦を渡って来たその人影を星明りで見ると……。

葦田路子である。「あっ」と云う間もない速さでサド侯爵は彼女へ迫り、覆面を脱ぐ。鶴田保二郎の顔があらわれた。

五

あなたはお訊ねにならなかった。あのことに就いて、おたがいに沈黙を守ったまま、私と貴男は、こんなに遠く離れてしまいましたね。

出立の日、横浜港まで御見送りくださって有難う。空は青く晴れ私と貴男の手に結ばれた黄色いテープの色が鮮かでした。そのテープが切れたとき、私は愈々日本を離れ、貴男から離れました。

「サド侯爵」の私は、このときブリッジに立って泣きだしてしまいました。サド侯爵が泣くなんて、若し会員の誰かが知ったら、どんなに意外に思うことでしょう。サド侯爵、実は葦田路子——この事実を知る者は、しかし貴男一人しかいない。そうして貴男は、そのことについて私を訊そうとも責めようともなさらなかった。沈黙を守ったまま、貴男は埠頭で去る私へ手を振り、それはいつまでも、いつまでも、見えなくなるまで手を振っていられました。その御姿

が今も路子の臉に浮びます。

なぜ私がサド侯爵を名乗り、中世紀風な衣裳をまとい、ああ云う惨忍な振舞をしたか、それはこのお手紙の最後に答えることにいたします。

私は、あの平山邸の屋根の上に脱ぎ捨てたサド侯爵の衣裳が貴男の眼に止まらなかったら、今もなお、東京の夜に跳梁していたことでしょう。悪夢に憑れた如く惨虐な振舞いをつづけていたことでしょう。そうして、誰も私がサド侯爵であることに気づかなかったことでしょう。私は用心深く正体を隠していたし、私が元サーカスの芸人であったことは誰も知らない秘密でしたから。私の運動神経は常人のそれと比較にならない程発達しております。

私がサド侯爵に襲われたと云うことは、云うまでもなく正体を隠蔽するための私の用心深い偽装であり、狂言でございました。

しかし遂に破綻が訪れ、あの夜、屋根に脱ぎ捨てた衣裳を貴男に発見され正体が露頭してしまったのです。サド侯爵の姿で星空の屋根に立って口から悲鳴を発し、葦田路子の悲鳴を下界の人々の耳に聴かせて一人二役を演じた私は、貴男に追われると、たちまち衣裳を脱ぎ捨てて三階へ逃げ込み、さも危機一発を救われたように見せかけて善良な会員の皆様をたぶらかしたのです。そこまでは満点のお芝居でした。

私の破局は、パーティが終って衣裳を取りに再び屋根に登ったときに訪れました。私でないサド侯爵が、そこに居たからです。そのときの私の驚きを貴男に対して今更、書く必要はございませんね。

貴男は覆面をとって、物も云えないで居る私に、
「この覆面には貴女の口紅が捺している。貴女の化粧の匂いが泌み

ている」

今夜の記念に、これは僕が貰って置く——それだけ、貴男はおっしゃったきりでした。

ああ、貴男に対しても惨虐な鞭打ちを加えた私ですのに、何事もおっしゃらず貴男は私を、お許しになった。

忌わしい私の行状をその胸一つに畳んでしまわれた。私は音楽を勉強するために外国へ行きたいと申しました。嘘です。私はただ自分が恥ずかしくて日本を離れ、異国で暮したいと思ったのです。下町の酒場で、私は、いまピアノを弾いて生計を立てています。

さて、なぜ私があんな大胆なことをしたか、それをお答えしなければなりません。云わずとも貴男は充分お察しの事と存じます。甘えるようですが、サド・マゾ両性の私と云う女を、どうぞ哀んでくださいませ。

さようなら、永遠に。もう御手紙は致しません。私は、この異国を墳墓の地とする覚悟でございます。さようなら、鶴田さん。

さようなら。いとしい、あなた。

一九六〇年夏、仏国巴里。

葦田路子拝(了)

〔伝言板〕○庄田美起夫氏へ、「特高拷問史」はあと一回でスト

ックはありませんから、先に連絡下さったように続きがあるのでしたらお送り願います。○菅良太氏へ、貴稿は毎号なんとか掲載したいと苦心していますが、誌面の都合で中々期待にそえず残念です。増頁してでも、切腹、浣腸、男性責、ソドムなどの手持原稿を消化したい気持ですから御理解願います。予告の分も出来たものから拝見させて下さい。

愛^マ好^ニ者^アの記^ノ録^ト



(136)

この責め苦を

手持ちラジオのスピーカーの音が、どうも気にいらぬ。そこでいっそ、スピーカーボックスを自分で造ることにした。取引先の木工場に頼むと、やかましい設計、註文にもかかわらず、イヤな顔もせずこちらの気に入るようにボックスを造ってくれた。

|| 同好の友へ、

ソツとささやく頁 ||

とやま・かづひこ

一週間も待てば、ついでの時にでも届けてくれるというのを、早いほうがよい、とばかりに、大きな荷物を苦にもせず、国電にかつぎこんで持ち帰りにかかった。かなり重い荷だが、ヒザにのせて座席に坐る。

山手線はかなり空いていたが、品川を過ぎると急に混みだし、目黒を出る頃は身動きも出来ない程になった。目黒には有名なSドレ

スメーカー学院があるが、ちようど、この下校時間におつかったためらしい。

座席にぎゅうぎゅう押しつけられる。息苦しさ、ヒザにかかる圧力をよけようと思うがどうにもならない。かづひこのヒザの荷の上に、ティーンエイジャーの洋裁学生(?)が、これも足をとられて、苦しげに倒れかかっているのである。

ちようど、かづひこは下敷きになって、この女性の体重を支えている格好。身動きもならぬ座席に、かなりの圧力がおそってくる。

こうして、駅の数にして四つか五つ。奇妙なもので、彼女の圧力は、かづひこをゴーモンの世界に導いてくれた。

美しいひとの膝下に屈伏する囚人、そんな幻想だ。電車が大きくカーブする。更に加わるゴーモンの責苦。

つらく、たのしいひとときだった。

(137)

うに

同好の友、及川さん夫婦に夕食に招かれ、久方振りに公団アパートの一室を訪ねる。

及川さんもわが党の一人。それも固形に興味を抱く人。しかし御本人の弁では、実行家ではなく、もっぱら幻想を楽しんでいるそうで

ある。

同好者同志の話は、自然的に一致して止まるところを知らない。

やがて、キッチンからウイスキーとつまみ物が二、三点盛られた盆が、美しい笑顔と共に運ばれてきた。

かづひこの好物のキャビアや、うにが、美皿にわけられて食欲をそそる。三人揃ったところで、改めて旧交をあたためる意味をこめた乾杯。

何気なく、うにに手を出そうとしたら

「ああ、とやまさんは、こちらのよ」

と、奥さんが慌ててハシを押える。

見れば、一方は鮮やかな紅いろのうに、そして一方はいやにドス黒く、コロリと固まっ

ていて少々気色がわるい。

奥さんは、紅色のをかづひこに、ドス黒いのを及川さんに指定した。

「いや、今日はオレも、とやまさんののと同じにするよ」

及川さんが、おそろおそろ云う。

「ダメよ、いつもあんなにセビるくせに」

ピシヤリと、奥さんがいった。

「そうかい。今日はあまり欲しくないんだがネエ」

及川さんは、そういうながらも、そのドス黒いうにハシをのぼす。

「自分の夫だけには、とっときの珍味を出すのか？」と、いささかヒガんでいたかづひこは、中ッ腹の途中で、まてよ」と及川さんの趣味と、このうにとをむすびつけて考えてみた。

かづひこだけの自己流の考えかたかも知れないが、奥さん手製の、どこにも売っていないうにを、わざわざ客の目の前で無理強いに押しつける……こんな考え方は手前勝手にするだろうか。

その真偽は知らない。しかし万が一、かづひこの考え方が適中していたら、こんなうりやましいことは他にないと思った。

(138) 便秘読本

『暮らしの手帳』五十三号（三十五年二月五日発行）一四〇頁を開く。

題して『腸と便秘の読本』十六頁の特集。

「まず腸というものはどんなものか」「お手洗いにゆきたくなるワケ」「口から入ったものが、つぎつぎにたどってゆく道中」「便秘の二つの型」「下痢と浣腸」——等々

お医者さまが、ウンチクをかたむけてのく

わしい解説。腸の図解が入ったりして、実にあのしい？特集である。

おまけに、同五十四頁には『足の体操』という美しいグラフがある。真珠のように美しい足のフォトが六枚。

『婦人画報』三十四年十一月号にも「足とクツ」の特集があつて、かづひこを楽しませてくれたが、こうした婦人雑誌や生活雑誌などにも、わがあこがれの特集を見出すことのできるのは嬉しいことである。

(139) ラーメン中毒

東京の大井駅前、ある飲み屋の女給さんで、ラーメン（中華ソバ）中毒といわれる程の女性がいるそう。『日本観光新聞報』

一日平均十二、三杯のラーメンを注文し、ソバは殆んど食わず、スープだけを飲むという。ソバ屋の方も心得ていて、スープを普通の倍にしてサービスするそう。

日に十二、三杯ともなれば、しかもスープが二人前といえ、内輪にみても二リットルは僕にあらうと思われる。とすれば、排出される分量もサゾ多いことだろう。もったいないことだ。一度、その女性にあって頼んでみたいものである。

太平洋にける橋

藤 山 秀 緒

(続)

乗馬ズボン・シリーズ

異国の切腹マニア

日本に憧れ、切腹マニアとなった令嬢バーバラ・アダムスに頼まれて、彼女の帰米後、元の通訳、松崎恵美子は毎週一本ずつ、新しい趣向の切腹シネを撮影して飛行便に託する仕事に従事している。

サドであり、マゾであり、フェティシズムやナルシズムにも縁のある「切腹」と云う行為が、太平洋を越えて、一人の富豪令嬢の心を強く捉えてやまないものである。

そして、バーバラの心を通して移し植えられた切腹への憧れは、松崎恵美子の心にも深くくしみわたって行った。

恵美子は、バーバラから、半ば無制限に送られて来る資金をもとにして切腹シネ専用のスタジオを持ち、「日本文化の紹介」を名目にふさわしい女性をスカウトし、訓練するようになった。

第一番に目をつけた女性は藤野道子と云い、白虎隊の剣舞で、コンクールに出場、その迫真の演技で、見事一等

賞を勝ち得た美貌のBGである。はじめは、その異様な「日本文化紹介」に驚き怖れた道子も、恵美子の熱心な説得と、その稀な乗馬服姿の美しさに魅せられて、二人の仲が急速に近づくにつれて、プレイは迫真の力を帯び恵美子の念願が叶って、最初のシネが、二ヵ月後遂に海をわたって行ったのであった。

そのシネは、道子が軍服姿で玉砕するといふテーマのもの。腹部をくつるげ、がばっと一文字に腹かき切ったのけぞり、俯伏し、烈苦と闘いながら、祖国を拝して悶死する壮烈なものであった。もちろん、テープに声も入れて送った。

しかし、このシネは、バーバラの充分な満足を、かち得ることが出来なかったと見え、バーバラから、強い不満と注文を書きつけた手紙が届いた。恵美子も、道子も、残念そうに歯をくいしばった。二人は、バーバラの身も心も凍りつくすような、凄絶なシネを作ろうと誓い合ったのである。

処女作

オーバーオール、編上ブーツに身を固めた道子が、スタジオにひとり物思いに沈んでいる。恵美子は、いつもの乗馬ズボン、長グツ

姿で、ガラス越しに、じっと道子を見つめて
いる。

やがて電灯が全部消され、第一回目のシネ
が、道子の目の前に写し出される。

タイトルについて、鉄兜姿の道子のアッ
プが美しい。恵美子の澄んだナレーション
が道子の腹切る支度を一きわ哀れに描いて行
く。道子の穿いた乗馬ズボンがアップにされ
ベルトをゆるめる手もと、ズボンの下で、小
きさみに震える腹部が写し出される。

「……男物のキュロットを押し下げ、美しい
彼女は覚悟の切腹に身をゆだねて行くのだっ
た……」

物悲しい恵美子のナレーション。

……そしてその後、絶え入るまで時間
にして十七、八分とも思える凄惨な描写が、天
然色の画面一杯に繰りひろげられるのであ
った。道子は、何度この映画を見たことだろ
う。そして、そのたびに、新たな想定と意欲が湧
いた。

道子は、今度こそ、バーバラの期待にこた
えるような立派な作品を作ってみせる。と心
のうちに叫びつづけるのである。

二週目の作品は和服姿、三週目は女学生姿
で撮影した。テープも、同時でなく、アフレ

コにして、密室に道子を入れ、気がねなく断
末魔の絶叫を録音するようにした。

迫力は増したが、バーバラは、乗馬ズボン
姿のハラキリを熱望していたので、恵美子は
「アジアのジャンヌダーク」として、川島芳
子をモデルに、女スパイの死を描く「大作」
に取り組んだ。

実説の芳子ではなく、もっと年も若くし、
最期を切腹としてストーリーを作り、道子に
は、乗馬服を着せ、特製の、ゴムの腸管、血
のり入りの腹巻、ブラジャーなどで武装させ
て、ぶっつけ本番、アフレコという計画で、
準備をすすめた。

試練に堪えた道子の出来は、すばらしかつ
た。本誌「夕陽に散る華」を思わせるストー
リーで、独房での自虐、刑場での自決、とも
に涙をさそった。ことに、内臓をつかみ出し
短刀で断ち切って苦しむ道子の演技は、真実
の断末魔かとさえ疑うほどの迫力をもりあげ
ていた。アフレコではあっても、道子は撮影
中、何度もくく呻いた。

泳えかねつつ、

「うーっ」

「む、む、む、む、む」

と、身をよじらせて、悶えつづける道子の

壮烈さ。恵美子は、何度、かけ寄って抱きし
めようと思ったことだろう。撮影中でなかつ
たら、二人の情熱は焰となって互いの名を呼
びつづけたに違いなかった。

電 気 責

アフレコの日が来た。恵美子は今日はじめ
て試みるという、「呻き製造機」の前に道子
をつれ出した。

それは、電気椅子にも似た、無気味な腰か
けである。革ベルトで胸、腹、腿をしっかりと
縛しめ、要処々に、着衣の上から、裸電
線を巻いた。これに弱い電流を通じて、道子
に呻かせようとするのだ。

もちろん、着衣が濡れていなければ電流は
通じない。道子は先ず、水槽に責め衣、編上
長グツの姿のまま、首までつかるように命ぜ
られるのである。

男のように、ショートカットにした道子の
頭髮が、心持ち蒼ざめた美貌に乱れかかって
いる。ずぶずぶと着衣が水を吸って、道子は
妖しくおののいた。がっぷりと首まで水槽に
ひたして、道子は体をくねらせ、体全体に水
分が滲透するのを待った。たとえようもない
冷たさであった。

水槽から上った道子は、体をしごいて着衣の水を絞った。残るくまなく濡れ鼠となった彼女を、恵美子は抱えるように「呻き製造機」に坐らせ、ベルトをしめつけるのである。

道子は、観念したのか、云われる通り、おとなしくベルトを自分も手伝って締めた。

裸電線を巻くときは、流石に不安そうであったが、恵美子の顔色を見ては、いやとも云えなかった。

恵美子は颯爽とした乗馬ズボン姿で、道子の背後に立ち、スイッチを点検する。

「道子。テストしたげるわ。電流が通じたと
き呻くのよ。いゝわね……」
ぐっと、スイッチが入る。

「あ、あつ、やめて、やめてッ！」

スイッチが切られ、恵美子のサディスティックな微笑が、はじめに道子を見下す。

「弱虫。なによ。その男装が泣くことよ。い
いこと、私のスイッチの入れ方で、あなたの
呻きが強くも、弱くもなる、って云う仕掛け。

さあ、今日中に作り上げて送らなけりや、今
過分に間にあわないじゃないの。映画、写す



わよ。黙ってよく見てからね！」

否応なしに恵美子は、電灯を消して、「ア
ジアのジャンヌダーク」を映しはじめた。

たてつづけに何回も、同じ映画が写され
た。道子も次第につりこまれ、自分の美しい
死の光景を喰入るようにつめていて。そし
て、いよく、不思議なアフレコが行われよ
うとしているのだった。

異様なアフレコ

テープは廻りはじめた。

道子は、ごわごわした濡衣に身を包み、
長グツ姿の両足をつま先立てて、電流の通
じるのを待った。

場面は進んで、いよく道子の扮する男
装の女スパイは、静かに腹を寛げるのであ
る。

刃が光り、腹部へ喰込んだ。

道子は、ペーパー・ナイフを、画面と同
じように左脇へ押しつけて

「う、うっ……」

と、喘ぐ。

呻きとすれば、まだ序の口である。恵美
子も、スイッチは入れないのだ。

画面一杯に、男装の道子が、のたうつ。

黒光りする長ぐつが、勇ましい女体切腹の光景に、サディスティックな効果を添える。ゴム製の腸管が、傷口からのぞき、なまなましい感じで胸を打つ。

不意に、道子が、ぎくっと硬直した。

「あ、あぁ、あぁ、あぁ……」

スイッチが入ったのだ。

「う、うゝむッ！」

呻きは、画面の展開につれて、予想通りの迫力を盛りあげた。

「う、う、ウーッ！」

「あッあぁ、う、ウーッ、あうっ、むゝ」

刃は鳩尾へ押しあてられた。腹切りのクライマックス……

「ウ、ウーッ！……ウゝゝムッ！」

乗馬服、乗馬ズボンを血みどろにして、道子の男装が激しく硬直する。

「ウーッ……」

あゝ道子は、恵美子のスイッチの入れ方によって、電流の激しさが違うのか、何度も伸びひり、両肢をもちき、空をつかんで泳えかねた呻きをあげる。

脂汗が流れ、両眼は血走って、責め衣に身を固めた道子は、拷問さながらのアフレコを強いられつつけるのだった。

恵美子も、右手にスイッチを握りしめて、画面と、電気椅子を半々に見くらべながら、のめるように喘いでいる。

「科学の鞭」が、恵美子の異常なまでの同性へのサディズムを、道子の上に投げかけつつけるのだ。

「ウーッ！」

「ウムーッ……あうっ、ゲ、ゲエーッ！」

道子は脂汗にまみれている。……でも、「やめて！」とは云わないのである。

電圧が変わるたびに道子は、ぐっと体を反らせて立ち上ろうとするが、しっかりと体に巻きつけられたベルトと、裸電線のために身動きは出来ないのだ。

血糊の入ったゴム管をかき切り、血の海の中に泳ぐように道子の男装がのたうつ裡に、「アジアのジャンヌダーク」は終わった。

流石の道子も、ぐったりと椅子にもたれて喘ぎつつけている。道子は何を思ったか。

「最後のところを、も、もう一度、うつつして！」

……一部分を巻き戻して、クライマックスが再び映し出されて行く。

道子は、そっとベルトを外し、電線を抜き取って自由の体となり、恵美子の後へ廻っ

た。

二人は肩を並べて立ち、手を握りあってスクリーンを見つめている。

「苦しかった？」

「うゝん」

「こんなに汗かいて……」

「夢、夢中だったわ。こんなに……ときどきしているの……」

「あの椅子、いや？」

「……」

「又、やってみない？」

「……」

再び道子は電線を負って椅子につく。

アフレコは、とうに終わっている。その、むなくも見えるアフレコ・プレイは、いつ果てるともなく、皮肉にもいよゝゝ迫力を帯びてつづけられるのであった。

のたうつ作業服と乗馬服の喘ぎをよそに、フィルムはスタジオ一杯に唐紅を溢れさせているのだ。

しっとりと濡れた彼女の責め衣の肩から、ほのかな蒸気が暗いスタジオの天井へ吸込まれて行った

(つつく)

告白

滝原カオルと私と

近藤

滝原カオル——
憎いまでに慕わしい魔性の女——

私が奇譚クラブに結びつけられた契機も、そして私がほのぼのとした悦虐のムードを渴望する人間になったのも、すべては彼女の存在に端を発したことなのだ。

滝原（みおはら）という姓の響きも、蒼白い月の輝きを想わせるような、冷たい静けさを感じさせる。彼女が私に残してくれた印象は、夫を信頼しきった人妻の貞淑と、恋する女の歓喜と、それに病的なまでに妖しい淫蕩

が、それぞれ思いきり奔放に息づいている女体というものなのだ、と今になって思う。

彼女が私の意識の中にクッキリと鮮烈な映像を烙きつけたのは、私がまだ小学校の三年か四年の頃であった。彼女はK氏の妻であったのだ。つまり彼女の姓はKを名乗っていた訳である。にも拘らず、冒頭に私は何故、滝原カオルとしたか？

K氏が自らの手で充実した生涯に終止符を打ったあと、私は彼女が滝原の姓から離れずにいたことを識った。実質的にはK氏の妻であった彼女が、入籍という手続をとろうとも

しなかったのだ。しかも、それは二人が合意の上でなしたものであった。理由は知らない。だが、とにかく彼女は、K氏の世間並な妻にはなれずに終ってしまったのである。

敗戦までの民法が、どれほど妻の座に冷いものであったか。K氏が愛する彼女を必要以上に卑屈な女に墮さないため、対等な立場で生活の愉しみを味わうために、理不尽な社会的制約への精一杯のレジスタンスと観ることは出来ないだろうか。

この生き方は、法制的改変がなされた今日も、なお私の心に大きな魅惑を植えつけてい

る。私の恋人も強く賛意を表わしてくれた。私達は、今それぞれの姓を名乗り、精一杯の努力を続けて生きている。現今の法令によれば、夫婦となった男女は、どちらか一方が相手方の姓を名乗らねばならず、合意だからといって第三の好みの姓は名乗れない。精神的にも、そして法律的にも従属が生じるではないか。

私の女奴隷は常に生き／＼として精気に満ち溢れていなければならぬ。若鮎のように、牝豹のように――

私の父がK氏を世話したことがあるとかでK氏は随分、恩に着ていた。父は囲碁や将棋が好きで、よくK氏を相手にしていたし、K氏も父とはウマが合うようだった。K氏は私を可愛がってくれ、私も「Kのお兄さん」と呼んで敬愛していたから、K氏の奥さんであった澤原カオルを「お姉さん」と呼んで親しんでいた。

初めの頃、母が、

「何です？小母様とお呼びなさい！」

と私をたしなめた時、

「だって、ボクと幾つも違わない、こんなに綺麗なひとを、小母様だなんて可哀想じゃないか。」

いか」

などと、聞きかじりの俗語を使って母を怒らせた程、私はまてていた。

悪漢ごつことか当時流行の少年探偵団の遊びのような子供の遊戯ではなく、私が女の人を本当に縛ったのはカオル姉さんが初めての人だった。

怖ろしかった。

私の手で、私はカオル姉さんの両手首を抑え、力を籠めて紐を巻き締めていたのだが、それは私が縛ったと云うのではなく、無理強いに縛らされたと云うべき事態だった。唯、私はそう思いたくないと意地になっていたのだ。

――女になんか負けるもんか！――

大和魂を誇り、軍人に憧れた男の子は、一様に女を軽侮した。

――いくら大人だからってカオル姉さんは女じゃないか。女なんかに馬鹿にされてたまるもんか！――

私には女の人を同じ人間と視ることが、感情としてどうしてもできなかった。物心ついてからの私の環境は、そういうものだったのだ。そして、そういった男の子の虚栄に満ち

た誇りというものを、澤原カオルという女性には、心憎いまで巧妙に衝き、かつ弄んだ。

初めての日、私の胸の奥に烙きついて、そして未だに残っているものは、紐に絡まれてヒク／＼と蠢いた彼女の白過ぎる手首だけなのだ。私の前に息づいている背で、彼女の両手は自ら組み合わされていた。私の掌は彼女を抑えはしたけれど、それは勿論、彼女の抵抗を鎮圧するためではなく、私自身が立つために体の支えを必要としていたからであった。

何故、真白な印象なのか私には分らない。彼女はスポーツが好きで、ひどくお転婆なのだ。血色も良く、健康な日本女性の美体を持っていた。衣服に覆われた部分はともかく、むきだしの腕が何故、雪白の膚の印象を残したのであろう。すき透るように白くつややかな肌の下に、蒼い血の管がすっきりと走っていた。

女を縛った感慨などあるべくも無かった。

「お姉さんだなんて思わないで、只の悪い女だと思えばいいのよ」――

「可哀想なんて思っちゃ駄目。女の中にだって凄く悪い奴はいるわ。泥棒だって人殺しだっているじゃない？力が無い代りに計略を使

「うから女の方がずっと狡賢いのよ——
「男の子がこわがっちゃおかしいわ。スパイ

なんか女の方が多いのよ。お国の為にはスパ
イなんか殺しちゃわなきゃいけないでしょ？」

女を縛るくらい何でも無いのよ——

「もしも、お姉さんがシナのスパイだった
らどうする？殺せる？殺せなきゃ駄目
よ。たとえ、お姉さんだからって、ス
パイをそのまま放っとくような意気地
なしは、お姉さん、嫌い。お国の為に
天皇陛下の為にはどんなことでも喜ん
でできる人が、本当に忠義な日本男子
だと思うナ——

「お姉さんじゃない、シナのスパイを
捕えるんだと思えばいい。一ちゃん、男
だもの、お姉さんを縛るのなんか訳な
いわね。天皇陛下に忠義だわね——

私は日本男子でありたかった。

天皇陛下に不忠な、非国民にはなれ
なかった。そしてカオルお姉さんに嫌
われたくはなかった。私は、全く無抵
抗なカオルお姉さんを、まるで憎むべ
き女囚のように括り上げ、彼女に愛さ
れる忠義な日本男子としての努力を無
我夢中で続けていた。

私の純真な魂を弄んだ彼女は、当然
罰さるべきであった。愛国心を歪んだ
欲求の対象に供した罪は、正しく非国



民に準ずるものであろう。罰は苛烈残酷なものでなければならぬし、そうでない生ぬるいものは、すべて彼女にふさわしくなかった。

魔性の女、落原カオル――

その胸の裡に巢喰う不忠不敬の精神を追いつ出すために、K氏は全力を傾注した。

遊びに行った私の面前へ、K氏は彼女を曳き出した。罪を犯した囚われの女は、鎖で飾られていた。オド／＼した歩みが精一杯の足鎖は、一尺前後のものではなからうか。足首には四、五寸巾の輪がはめられて、その両足首が鎖で繋がっていた。足首の輪が緩いものでなく、びっちり締まっているのを知っただけで、その材質を見極める程の心の余裕は私に無い。

私の大好きな姉がこれ程の処遇を受ける理由を、私にかかわりがあると思いつけなかったのだ。

姉の手首も繋がれていた。しかもこの方はもっと鎖が短かった。K氏の云付で、お茶やお菓子を運んで来た時の姉は、両手首を殆んど揃えたような珍らしい仕方でお盆を持っていた。私達の傍に正坐した彼女は、両掌を

重ねて膝に置いた。彼女にはお茶もお菓子もない。K氏に促されて、私はお菓子を口にしていた。

「一君、君がこの間来た時に、お姉さんが君に縛って貰いたいって頼んだそうだね」

静かな語調だった。

私が見ると、彼女は何か物云いたげな視線をそっと外して眼を伏せた。忘れられない瞳だった。私は黙ったまま、K氏に頷いた。

「いやだったろ？」

「ハ、ハイ」

優しくツボを心得た問いに、私は小さく、然し、はっきり答えた。

大好きなカオルお姉さんをむごたらしく縛り上げるなんて本当にいやだった。だから私はK氏の間に肯いたのだ。だが、もし他の女だったら、本当にシナのスパイだったら……

しかし私は何も云わなかった。何か云わなければ、とも思わなかった。K氏もそれ以上の訊かなかった。苛酷な刑罰を受けつつある当の彼女さえも、一言の釈明さえしようとしなかった。当然のこととしてカホルを罰し、当然のこととしてカホルも罰を受けた。それが一番自然のことなのだと私も感じていた。

私を縛り立てて縛らせたのがカホルお姉さんであつたから、私に縛られた女体がカホルお姉さんであつたからこそその酷刑だった。人間のお団子のように円く両脚を抱え、ぎゅう／＼縛られて転がされても、背骨がポキッと折れやしないかと思う程反りかえらされて、背中を集めた手や足や頸の縄を操るK氏の意のままに、お腹を底にした小舟のように揺れながらも、カホルお姉さんは、K氏を恨んだり、私を呪ったりはしなかった。

生身である以上、あれだけの罰を平然と甘受できよう筈はない。彼女は両手首を縛り合わせた縄で吊られ、伸ばした爪先が一尺近くも床を離れた宙で、ゆっくりと廻って揺れながら、本当に鞭を受けていた。女学生の頃から殆んど剪ったことのないという自慢の髪の毛で、眼尻がキュッと吊り上がるくらいに強く柱に括られ、後手に縛られた身を爪立ちのまままで長いこと放って置かれたのだ。全身をギチギチと縛り上げられて逆さまに吊り下げられ、床に垂れて這った長い黒髪を蹴られながら、苦悶の汗で喉から額から衣服までビツショリ濡れたことさえあつた。

そんな時、大好きな姉は悲痛な呻きを洩ら

し、苦しげな喘ぎに全身を顫わせ、哭いた。顔を歪め、醜くひきつらせ、忘れられない程酷く動物的な唸りを発したことさえあった。

しかし彼女は只管、従順であった。進んで罰を受け、苦痛を味わっているように見えた。

姉の余りにも烈しい苦悶を見て、稚い私の胸は勿論、痛んだ。だが姉に加えられる罰が過当なものとは決して思わなかった。生涯に償いきれぬほど大きな罪を犯してしまった女の姿が、姉の姿態の中に表われているように思えたし、すべてを捧げ尽くしてK氏の答の下に息づいている彼女の瞳の輝きに、私は、何かしら崇高なものを感じないではいられなかった。

その崇高な或るものが、人間同志として交わされる愛情というものだと思ったのは、かなり後になってからであった。

澤原カホル――

この魔性の女が、私の純真な愛国心を玩弄した罰を、どのようにして、いつ受け終ったのか、私は知らない。

あの直後の二週間ほどを除いては、私には姉が被虐に苦悶する姿を見ることが無くなった。といって、彼女が赦されたのでないこと

は容易に知れる。彼女の皮膚には特殊な意味を持つ痕跡が染みついていることもあったし、私が思いきって無遠慮な質問を浴びせかけなくても、時折は彼女の方から私の好奇心を満たし、彼女への敬愛の念を満めるような内容の話をしてくれたからである。

私は彼女を視るのが愉しかった。

彼女の瞳は素晴しかった。見つめずにはいられない瞳だった。あまりマジ／＼と凝視する私に、彼女が訝しげな面持で尋ねたことがある。

「どうして、そんなに見るの？お姉さん、何か変？」

私は一瞬、詰まったが、すぐ正直に云った。

「好きなの。僕、お姉さんの瞳が好きなんだ。とっても綺麗だし、いつもキラキラして、何か云いたそうなんだもん」

事実、彼女の瞳は生きていた。彼女の精気に満ちた全体の中でも、瞳だけが殊更に特別の生物のように、始終、何かを話しかけてくれた。私はそんな彼女の瞳を黙って凝視していることが愉しく、決して飽きはしなかった。彼女が私を計った罰として、あの見るも無残な地獄の責め苦に悶えている時、居たたま

れない筈の私が、彼女の瞳に見入ったまま動こうともしなかったのである。鎖に繋がれ正坐した囚われの姿で眼を伏せた美しさは、私が終生、忘れ得ない筈のものなのだ。

私はもう一度、澤原カホルを縛ってみたいと思った。今度は彼女に強要されるのではなく、私自身の意思に基いて縛りたかった。その相手が女としての彼女だったのか、やはりシナのスパイとしての彼女だったのかは判然としない。

だが私には、私からもう一度、縛らせてくれという勇気がなかった。何か悪事を企むような後めたさが先に立った。

私は、彼女がもう一度、私を誘惑してくれないかしらと考えていた。お姉さんの方から誘って来たなら、結果として私は彼女の需めに応じ、そして私自身が最も安心な満足を味わえると思ったからだった。

それなのに、――

それなのに、お姉さんはとう／＼誘ってはくれなかった。K氏を愛し、私を可愛がってくれた彼女としては当然のことであつたけれど、私にはそれがやはり恨めしかった。

大好きなカホルお姉さんには、もうちょっ

と悪女であって欲しいとさえ思った。

この魅惑に満ちた魔性の女人が、私の嗜虐



の導火線に口火を点じてくれたために、私の今日の姿勢があるのだ。

私が奇譚クラブの誌上で、私の原稿が活字になったのを見たのは、通信文を除けば、イメージを綴った「FAの独り言」が最初であった。それ以後、私は眼先の趣向を変えた原稿を編集部へ送り、数多く掲載の機会を与えられた。それら一般に通じて流れるムードは、読者の感じ方は知らず、私に残された滞原カホルの仄かな残り香であった。

私が附した「継母」という題名に、或る読者は継子いじめを予期されたようであった。あの中で私は小学生の男の子を利用して被虐の願望を満たそうとする大人の女を描いた。男の子はそのことによって男らしい、性向に眼ざめ、大人の女を愛し、激しい苦悩の果に彼女を愛しながら憎む。それが自然なのだ。男の子はもう一度彼女を縛ることができたが、その差違を除けばそのまま私の姿だった。編集部が題名をつけて下さった「結婚の条件」は私の理想像に残る滞原カホルの姿態だった。平凡な社会人として、平凡な日々を送りその中に非凡な努力を傾注して、異常に烈しい生活を享受する夫婦。そういうものに私は憧れ、そして自らの生活にも自信を感じた誇

らしさが、私にあの一文を綴らせたのだ。

初めて私に「縛り」の意識を感じさせた対象が、もしも澤原カオルでなかったらどうであらう。私は、今日の私の出現は無かったと確信したい。

何かの事情で、私が警察や憲兵隊や或いは女囚を扱う刑務所に紛れ込んだとしよう。罪を犯し、或いは犯罪の嫌疑をかけられた女達を、私は名誉ある遵法精神に則って容赦なく緊縛しただらう。そうして、そのように厳正な職務遂行裡に、やはり私のことから、早晩、嗜虐性の発芽を見たであらう。縄や鎖などの拘束具を媒介とした女体との接触が、複雑な感覚を植えつけ、私の体内の特異な血の流れを沸き立たせずにはおかないだらう。だがその場合、私の得る感覚は容易に正義感とすり換えられ、より陰惨なものになって行くに違いない。無責任で、卑怯極まる享楽なのだ。

それに反し、愛情に基く悦虐はどうか。愛する女性を、愛するが故に責め抜くところには正義感はない。職務として与えられたものでない。全くの自発の行為には好悪を問わず結果の責任をとらねばならぬ。当初から独立

の意識があり、確固たる自覚が要求される。

私がカオルお姉さんに誘われた口実は、忠君愛国の日本男児たる立証ということであつたけれど、私が縛った女体は、シナの女スパイでは無く、紛れもない大好きなカオルお姉さんだった。

私は当初から、愛する女性に厳しい拘束を加える異様激烈な刺戟感を味わされたのであつた。責任と自覚は出発から負わされていた。それ故、私の悦虐の歩みには、不断に省ることが要求されて来たのである。

歩一歩、地を踏みしめた前進によって今日の私が創られたのだ。そのことに私はやはりそこはかたない愛着を感じ、誇りを抱く。

私の今日を創り出した澤原カオルの罪な思いつきを、私は、ついぞ恨みはしなかった。

私は敢て思いつきと謂う。

私の大好きな彼女は、気紛れな悪戯心を愉しむ性癖が強かった。女学生時代、彼女の操行は一度だって甲とか優の評価を受けたことは無かった。野蠻や粗野ではない。陰険や執拗でもない。ユーモラスで機智に富み、奇抜で勇敢だった。クラスの人気者であり、多く

の先生達も彼女を信頼し可愛がった。然し、誰しも彼女が模範生でないことは疑われない。

彼女の特徴の気紛れな悪戯心は、彼女が既成概念の規格に適した模範女学生たることを、あくまでも拒み通したのであつた。

そして、そんな悪戯心を私は彼女の生命とも思い、こよなく愛し、感謝せずにはいられない。

澤原カオル――

私の魂を魅了した魔性の女のイメージを通して、私は古川裕子という存在を識った。そして奇譚クラブとは離れられなくなった。

暖冬の夜長。

私は澤原カオルを想う。――

――好きだったんだヨ。僕。やっぱり、もう一度、縛れるわねって誘って欲しかったんだ。だのに…… バカッ！――

(おわり)

〔謹告〕 緊縛女体分譲写真「G組」並に

「ES組」四馬孝画「涙のダイヤモンド」画集二組略号(かん)(なみ)は今度分譲打ち切りとなりましたのでお知らせいたします。

サド女性へ贈る手紙

緒 方 春 生

あのときは、ことばも交さず、もちろんお名前もきかずにお別れしてしまいましたが、あなたとは、きっとK誌を愛読なさっているサド女性でいらっしゃると思います。あのとき、というのは先日夕刻、国電、京浜東北線、大宮行きに有楽町駅から乗りこんだあなたが、ぼくの左隣りに席をとり、膝の上で本の頁をくりながら、右肘でぼくの左腕を上からぐいと抑えつけたときのことです。有楽町から浦和まで四十分の間、抑えつけられたままだったので、浦和で降りる時ぼくの左手は

快くしびれてしまったのです。

しかし、あなたは大胆でしたねえ。もっとも、あなたとしては最初、半身に重みをかけて、ぐっと抑えつけたとき、相手の様子をごらんになったと思います。ところが、ぼくがあなたの右肘をはねのけず、そのまま抑えられているのを見て、これはいけるとお考えになったのでしよう。あのまま終点までゆき、あなたのご命令を待つのが、ぼくの義務だったのですが生憎、重要な用件をかかえていたため、浦和で降りてしまいました。

しかし、あなたに抑えこまれていた四十分間に、ぼくは少年時代からのマゾの記憶を、つぎつぎによみがえらせていました。中学二年の時、柔道を習いに町道場へ通いましたが先生に二人のきれいなお嬢さんがいて、ぼくら少年の講習にあたっていました。当時二十才だった姉嬢の淑子先生（淑子さんなどといったら、たちまち跳ね腰を見舞われました）は立技で、ぼくを倒しておいてから「これは科外教授よ」といいながら、いまでいえばプロレス流の乱暴な技で責めることがよくありました。

あなたが男性どもを、どのようにお責めになられているかは知りませんが、柔道では相手の胸板に馬乗りになったままでいることは絶対ありません。すぐ次の投にかからなければいけないのです。ところが淑子先生は、道場外ではもちろん、道場でも人がいないと十分でも、二十分でも馬乗りに跨ったまま楽しんでいられるのです。そして、ときどき淑子先生の美しい鼻がピクピク動くのです。下から見上げると鼻孔は意外に大きく、鼻毛の一本、一本まで数えることができました。それほど長いあいだ、かの女はゆったりと跨ったままでいたのです。

るので、両腕と全身で跳ね起きようとするでしょう。そうすると、あなたがたのお尻がどんなに重くても、重心が両の膝頭に移っているの、前のめりにつんのめるか、倒されないまでも、相手の頭はあなたがたの膝やお尻から、すっぱり脱出することができます。

淑子先生も馬乗りのまま上体で乗り出し、両膝でぼくの顔を挟むことができましたが、そのとき、ぼくが右手で彼女を押し上げ、全身を左によじると、さすがの女武者も重心の安定を失って横倒しになってしまいました。

「やっぱり駄目ねえ」と彼女は苦笑いしながら、次は寝業の胴締めで、ぼくを苦しめたものです。相手を脚で挟み込むのは、これしかないのです。ところが、そのとき、ぼくが痛さで悲鳴をあげ、完全な屈服を余儀なくされたのは、車中でああなたが試みられた肘抑えです。これも柔道にはない手ですが、淑子先生は、ぼくを横倒しにして両膝で挟みつけ、右肘でぼくの背骨、あるいは抑向けにして、あばら骨を刺すようにして突くのです。

痛かったけれども、うずくような気持で全身がおののいたことをいまでも忘れません。ぼくが四十分間も、あなたの右肘で、ぐいと抑えつけられたままだったのは、あのときの

快いうずきが何十年ぶりかで全身をかけめぐったからです。あなたとの再会を願っているぼくの気持は、これだけでも、よくお分りでしょう。

女柔道家を通じてマゾ男性に仕上げられたぼくは、結婚のときにもそのような相手を求め、乗馬の好きな現在の妻をえらんだのですが、乗馬好きの女性、かならずしもサド女性でないことを発見し、失望しました。只々かつてK誌へよく寄稿された、京都の山田正美さんご夫婦のような倒錯遊戯は、結婚当初にころみようと努力しただけで、その努力も実りませんでした。

ぼくの妻は生来サディスティンでも、フェティシスティンでもなかったのでしょう。新婚時代が経過すれば、普通の世間一般の女性に変わり、ときどき乗馬にゆくぐらいいでした。しかし子供ができると乗馬からも遠のき、子供たちが成長するにしたがい、平凡な家庭の主婦となってしまう、倒錯遊戯にも興味を失ってきたようです。

はじめはK誌読者のサド女性と睨んだあなたさまに呼びかけるつもりが、K誌のマゾ男性にも呼びかけるような、とりとめもない手紙になってしまいました。それというのも

あなたの右肘の抑え込みが、ぼくのマゾフィスムをいっぺんに呼びさましたためなのです。ぼくの顔や姿態や体格は、もうあなたもご存知でしょう。四十分間も抑えつけていらしたのですからねえ。

いまとなっておたがい名乗り合わず、アドレスもきかずに別れしてしまったのが、つくづく後悔されます。そして、こうなってしまうのは誌上を通じての再会のみが一樓の望みです。再会できるとすれば春ですねえ。そのときが待ち遠しい。

本誌既刊特集号の案内

既刊特集号の内「責小説特集号」並に「サド特集号第一集」の二冊は売切れとなりましたが只今左記の通り在庫しておりますから御注文の栄を賜れば幸甚です。

「サド特集号」第二集	三五〇円
「サド特集号」第三集	三五〇円
「サド特集号」第四集	三五〇円
「悦虐小説と緊縛写真」特集号	三〇〇円
「悦特」第二集	三〇〇円
「悦特」第三集	三〇〇円
「悦特」第四集	三〇〇円
「青い廃院」長篇サド小説	二〇〇円

連載小説

宇宙のどこかで

(二)

佐 治 麻 造

手記『未決囚（強盗暴行傷害致死罪容疑）』より

検事局送り

二昼夜の後手錠のあとでは、手が使えるということの有難さを本当に身に泌みて知りました。夜、仰向けに寝ますと、革鞭の痕が、ずきずきと痛みますものの、矢張り楽です。自白した日から中二日置いて検事局へ送られました。

一緒に送られるのは私の外に男三人、女二人です。嵌められた前手錠の味を三日振りで味わい乍ら中央監視台の所へ連れられ、レンガ色のパンツを穿かされました。男も女も皆、着けているものを脱がされ、パンツを着けたものから次々と戒具と鉄鎖を施されます。腰に頑丈な金具の着いた幅十糎程の分厚い革の腰枷を締め付けら

れ、うしろで錠を下ろされます。腰枷の前に取付いて居る錠前と前手錠の短い鎖とが連結されます。そして一米半程の鉄鎖で互いに腰枷の金具を繋ぎ合わされました。私は前から三番目でした。私の前は三十過ぎの大柄な婦人で、首の札は三十六号です。脱いだ衣類を拾わされ、曳き立てられます。鉄鎖の触れ合う音を立て乍ら留置係室に入り、横一列に正座させられました。婦人の係長が近寄って来て、平伏して居る私達に申し渡します。

「お前達六名を本日、送検する。途中、神妙にすること。若し変なことをすると特に重い懲罰だよ。余り御手数を掛けしないで、早く罪の償いをさせて戴く様に。分ったかい」

三人の警官に監視されて玄関を出ました。衣類の入った袋を両手

錠の手に持ち、人々の嘲けりと憐れみの視線を浴び乍ら、うなだれて曳かれて行きました。顔をかくさせて欲しいという女スリの言葉が実感をもて痛切に感じられます。知った人に出会いはしないだろうかと考えると、本当に消え入りたい程です。道行く人々は、それぞれの衣裳を身に付け、自由に行き来して居ます。送検される容疑者として当然の取扱いを受けて居る訳ですが、何としても恥しく情なく涙がこぼれるのをどうすることもできません。私の前の女も、若い女の身だけに余計に恥しいのでしょう。肩を微かに震わせて声を忍んで嗚咽して居ります。

「まあ、こわいわ」

向うから来たアベックの婦人が、男の後にかくれる様にし乍ら私達の方を盗み見して居ます。

「大丈夫だよ。縛ってあるじゃないか」

「大丈夫？。これ、懲役人なの？」

「いや、未だそこ迄は行かない連中さ。検事局へ送られる処だろう」

「けど情けないでしょうねえ、こんな恰好で」

「仕様ないじゃないか、悪いことしたんだもの。若しだよ、悪いことしてないとしてもさ、疑いを掛けられたら、この位のことは当然のことだね」

「そりやそうだけど。あの背中やお尻の赤いすじは何？」

「革鞭の痕だろ。少しきびしい所の奴隷には身体中ついてるだろ。

そんなことよりさ、お昼御飯は何にする？」

「そうねえ。何かあっさりしたものがいいわ」

自由な社会人の人々の間を曳かれて行きますと、今更の様に自分

の今置かれている境涯を思い知らされ、奪われた自由が恋しくてなりません。自由を剝奪された日夜を、これからどのくらい過さねばならないのでしょうか。本当に逃げられるものなら逃げ出したいと思いますが、叶うことではありません。

「さっきから何をめそ／＼してやがるんだ」

罵声と共に背中に革鞭が鳴り、それが前の鞭痕と重なったのでしよう、思わず悲鳴が出ました。

「此の女もだ」

前の女囚の背中に、みみず脹れが斜めに走ります。

「ぎやっ、ひ——ッ」

人々の眼は一斉に私達に注がれます。

「哀れなものねえ」

「泣いたってしょうがないじゃないか。可哀想な様だけどね」

一応は憐れんでは呉れますが、革鞭を止めて下さる方は勿論のこと、此の忌わしい首鎖や腰枷や手錠を外して貰える様に計らって呉れる方もございません。

検事局迄の約一時間、屈辱を身体中に満喫し、犯罪者に対する世間の冷い眼を身に泌みて知らされました。あと二十分程で検事局へ着くという時分、一人のあくどい化粧をした真赤な唇の婦人が、冷笑を浮べてすれ違いざま、吸って居たタバコを私達にポンと投げ付け、それが私の前の女囚の胸に当たった様でした。

「フン」とせせら笑って真赤な唇の婦人は、シオルダーバッグをゆすり上げて行ってしまいます。余りの口惜しさにととうとう逆上したのでしょう。私の前の女囚は突然、身悶えし、例の婦人の方へ顔を向け、両手に嵌められた手錠をガチガチいわせ、腰の鉄鎖をジャラ

ジャラとゆすり乍ら絶叫しました。

「あ、あんまりですっ。いくら囚人だからって。く、く、くやしいっ。此の手錠さえなかったら……」

忽ち革鞭の雨が加えられ、女囚はへた／＼と坐り込んで悲鳴を上げます。珠数繋ぎの私達も立ち止ってしまいました。赤い唇の婦人が歩き戻って来ました。

「私に何か用があるの？ 何か云った様だけど」

「いや、奥さん、すみません。あとで充分、懲罰を加えます。本当にしようがない奴だ」

警官は突伏して号泣して居る女囚の首鎖を掴んで引起すと、顎を押し下げ無理に口を開かせて、二人掛りで手早く嵌口具を嵌めてしまいました。私も奴隷達が嵌められているのを見て知って居ましたが、中央に鉄の玉がある鉄の棒で、その玉を口にくわえさせ、更にその玉に強いバネで取付けてある銅製のカバーを口の上に当てて棒の両端の革バンドを後頭部で絞め付ける式のものでした。



TAK

嵌口具を嵌められた女囚は咽喉の奥の方で微かにうめいて居ますが、もはや声はできません。例の婦人は女囚に唾を吐きかけて、さっさと立去ってしまいました。

「立て」

革鞭が地面に音を立てますと、女囚はビクツとして、よろよろと立上ります。

「馬鹿な女ね。囚人の分際にくせにねえ」

立止まって眺めて居た人々に嘲けられ乍ら再び鉄鎖を鳴らしはだし、の足でアスファルトを踏んで未決檻へと引立てられるのでした。

やっと屈辱の道中を終え、裁判所に隣接して建てられた検事局の門を入ります。

私達を待つて居るのは、きびしい戒具と独房なのですが、世間の嘲けりの眼から逃れて、本当にホッと致しました。

広い拘留課の室のカウンターに隔てられた空所で一応、正坐します。收容の手筈と手続ができたのでしよう。数人の係官が出て来て

キビキビとした指図で次々と私達は未決囚にされて行きました。衣類袋を取り上げられ一人宛、腰鎖を解かれ、首の札番号を確認され首鎖だけ残して手錠と腰枷を外されパンツを脱ぎます。シャワーを浴びて出て来ますと再び手錠を嵌められ猿回しを踊り身体中、検査されました。簡単な診察を受け指紋をとられますと、男は頭を丸坊主にされ、女は情容赦もなく毛髪を二、三寸の長さに切られてしまいます。次に胸と背中に囚人番号が特殊塗料でマークされます。例の女囚は毛髪を切ら

れる時、本当に大きな玉の様な涙をホロツと落して居りました。男も女もレンガ色の襪を与えられ着けさせられますと、愈々戒具を施されます。

先ず首鎖が何日振りかで解かれるや否や、今度は首環です。金具が冷く光る五糎程の幅の分厚い革製の枷ですが、音響器が付属して居って、少しでも動かすとチンチンという高い音とガラガラという嫌な音が混って発生するのです。必要によって鍵で音を出さない様にもできます。嵌められた首枷の前後には鉄札をつけられました。私の番号は「未三三九号」です。次に手錠が外され、両手を別々



があります。

別々の両手首はそのままにして、腰枷が嵌められました。護送の時のものと同じですが、腰の両側に十糎位と三十糎位の鎖がフックに吊下げられてあります。その鎖の両端には、先が尖って先端から十糎程の所に溝を切った鋼鉄の丸棒がついて居ります。

私に戒具を施して居るのは未だ二十前の娘さんと云った感じの婦人係官です。腰の短い方の鎖を取って云います。

「手を出して」

警察手錠を受ける要領で両手を差出しましたが、枷の重さにはび

に、それ〴〵頑丈な枷が嵌められました。いわゆる監獄手錠と云われるもので、本式には第二種手錠と称されて居ります。今まで嵌められていました手錠は、いわゆる警察手錠と云われる第一種手錠です。

第一手錠は逮捕の時を考慮して嵌め易い様に造られてあって、軽く打ちつけただけでスプリングの作用で忽ち嵌ってしまい、しかも鎖を引っ張ると緊まる様にできて居ります。第二種以下、第四種迄ありますが、第二種以下はすべて無抵抗の囚人に施すことを前提として造られてあり、頑丈一点張りの構造です。今嵌められた第二種手錠は、幅四糎、厚さ一糎程の鋼鉄の環で、環を閉める錠が手首の外側にあり、蝶番は内側にあるよう嵌められます。手首の内側には更に錠の部分があって、直径一糎程の挿込み孔

・ っくり致しました。片手だけで約二疋は充分あります。婦人係官は鎖の両端の鋼鉄棒を、両手に嵌った枷の挿込み孔に各々挿込みました。カチリ、カチリと錠が鋼棒の溝に嵌まり込みます。これで「第一種手錠、自由度一」の戒しめです。自由度と云うのは、両手の枷を連結する鎖の長さのことで、「自由度、零」とは短い鋼鉄棒だけで連結されることで、「自由度五」迄あります。今は一応、「自由度一」と「三」の鎖を常に身につけさせられ、「自由度一」の鎖が使用されたわけです。

それにしても、妹のような年若い女性に、唯々諾々として戒具を施される恥しさ、口惜しさ、情無さ。しかし、婦人係官は私の氣持等、全く眼中にないらしく、事務的にテキパキと扱ってゆきます。

「さ、足は自分で嵌めること」

云われるままに床の鉄枷を取って、不自由な両手で自分の両足首にそれ／＼嵌めます。足錠も手錠と同じ分類で、今自分で自分に嵌めたのは第二種足錠です。重さは手錠より、ずっと重いものです。

「鎖で結んで」

床の鎖を取上げ、手錠と同じように挿込み孔に押し込んで両足を五十糎程の鎖で連結致します。今度は婦人係官の手により、腰枷の前に鎖が取付けられ、その鎖の他端の錠が、足錠の鎖の中央に嵌められました。

「真直ぐ立ってごらん。少し甘いようね」

足錠の鎖を吊った鎖が腰枷の錠前の所で加減されて、更に上方へ引き上げられます。

「よし。こんなものね」

手錠の鎖の中央が腰枷に固定されます。

「さあ、終わったよ。あっちで写真を取って貰いなさい」

これで完全な未決囚なのです。ずっしりと重い第二種手錠は、緊まりはしませんが、警察手錠とは又異なる拘束感を与えます。手錠も手錠ですが、足錠の重さ、それに鎖を上方へ吊られて居ますので、鎖の長さ一杯に歩くには腰を曲げるか、膝を曲げるかしなければなりません。それにしても何というきびしい戒具でしょうか。腰鎖だけでも逃げたりは出来ませんものを、と思いますが、規則ですから仕方ありません。

正面、両側面、そして背面、最後に顔だけ正面と両横から浅ましい姿で撮影されます。身動きするたびに首の音響器が囚われの音を立て、鎖がジャラ／＼と鳴ります。他の囚人達も厳しいいしめに打ちひしがれ、女囚達は啜り泣いてはビンタを喰って居りました。

再び正坐平伏して拘置課長代理の婦人係官より訓戒を与えられます。足錠の幅が広いので、警務庁で嵌められた第一種足錠程痛くはありません。

「お前達を本日より本拘置所に拘置する。お前達は刑が確定する迄は罪人ではないから一応の人格は認めてあげるが、監獄法を適用するからそのつもりで」

面倒臭そうに云い捨てると、行ってしまいました。

「じっとしとれ」

平伏したお尻に注射針が差し込まれ、かなり痛い注射が施されました。

話に聞いて居た「ノイロン」の注射です。

囚人の自殺を防ぐため、死に対する極端な恐怖を生じさせる神経薬です。ついで発狂防止剤「ニヒロン」を注射されました。

「ノイロン」は中和剤を与える迄は、数十年間の持続性を有するもので、罪人や囚人が自殺によって刑から逃れるのを防ぎ、刑を完全に執行するがためのものなのです。

「立て」

担当の看守にそれ／＼引き立てられ、監房へ曳かれます。足鎖につまずきそうになり乍ら冷い廊下を歩いて行きます。看守に引き立てられて行き来する未決囚の哀れな姿が処々で見受けられます。私もあのような浅ましい姿なのです。首、手、腰、足に嵌められた戒具が今更のように骨身に喰い入る思いです。監房区画の入口で平伏して、罪名と囚人番号を申告し独房へ曳かれます。監房の構造は警務庁と殆んど同じです。私達六人の未決囚は或る監房の前で止められました。

「皆、これからの有様をよく見ておけ。あ、三五〇号は前科があるんだから知ってるだろ」

三五〇号一人だけ自分の監房へと連れて行かれました。護送の途中、わめいて嵌口具を嵌められた女囚が曳き出されます。

「八三号。さっきはよくも社会人の方に口返しなんかしたな。海老の味を教えてやる」

足鎖が、うんと短くされ、背中を足鎖が、うんと短くされ、背中を足蹴にされた女囚は監房に倒れ込みそうになり、あわてて足を踏み出そうとしましたが、短い足鎖の悲しさによるけ、つまずいて膝をつき、それでも足りないで床に、したたか肩を打ちつけました。

腰枷に固定された手錠のため手をつくことすらできないのです。首の音響器が、一きわ大きく鳴ります。前手錠の連結鎖が一応解かれ、直ちに後手錠にされ、その手錠の鎖の中央に別の鎖がつけられ

うんと上へ引き上げられて首枷の後の金具へ連結されました。女囚の背中に刷り込まれた「八三」という黒い塗料が脂の乗った白い皮膚にくっつきりと浮き上って居ります。彼女は、もう恐ろしさに茫然として居ましたが、後手錠を上方へ吊り上げられた時は、苦痛のうめきを上げて身もだえしました。

「こちら向いて。あぐらをかけ」

嗚咽された女囚は、へたへたと坐り込み、恥しさに肩をふるわせ乍ら渾一本の姿であぐらをかきました。看守の一人が中央に把手のついた鉄の丸い棒を持ち出して、その一端を足鎖の中央に連結し、他端のフック金具を首枷の前部の金具に連結し、把手を回し始めますと、棒が次第に縮まって参ります。

女囚の上半身が次第に前へ倒れ、苦痛が加わります。看守は女囚のうめき声と顔色とを見乍ら、慣れた態度で女囚の身体をひどく痛めつけずに最大の苦しみを与える箇所を把手を固定し、更に捕縄で女囚が後向きにひっくり返らないよう床の鉄環に首枷を結びつけました。

「く、く、くるしい。くる、くるしうございます。うー、うう。お救し下さいまし」

おそらく海老貴の懲罰は生れて初めて受けるのでしょうか。女囚は、たえだえに哀願します。勿論、赦される訳はありません。

「いいか、これが海老だ。一寸苦しいものだぞ。こら八三号、一時間そうしてろ」

残った私達四人の未決囚は恐ろしさに身震いし乍ら、それ／＼の監房へ曳かれました。

私は婦人看守に追われ、海老貴の女囚から二つ隔てた監房へ入れ

られました。鉄格子がガチャンと閉められ、錠の下りる嫌な音がしました。房内でも戒具はこのままなのかと一寸しよげて居ますと、婦人看守が格子の間から手を入れ、「自由度一」の鎖を手枷の錠孔から外してくれましたので、

「やれ、うれしや」

と思うまもなく

「手にもう一本の鎖をつけなさい」

と云われ、腰に吊った長い方の鎖を取って、我れと我が両手を繋ぎ合わせます。

「出してごらん」

格子の間から差出した手錠を検査し乍ら、婦人看守は冷たい声で云います。

「ここじゃね、戒具はできるだけ自分で嵌める事になってるのよ。嵌めたら必ず検査を御願いすること。いいかい。フッフ、情けない顔するんじゃないよ。囚人じゃないの。当り前のことよ。正座おし」

留置場と同じように印の所で壁に向って正坐します。正坐する時、足と腰につけられた鉄鎖がコンクリート床に嫌な音を立てました。これで完全な囚人です。丁度、正坐して眼に入る壁面に金属板が埋め込まれ、「未決囚人心得」とありますので読みました。

一、其方は監獄法の適用を受けている囚人である。

二、監房内では正坐を原則とする。

三、起床六時三十分。直ちに点呼及び戒具検査。

朝食七時。用便その他七時三十分より正午迄 正座

昼食正午。用便その他

十二時三十分より十八時迄 正座

夕食十八時。用便その他

十八時三十分より二十一時迄 正座

点呼及び戒具検査

就寝二十二時。

四、就寝時は原則として仰臥し、両手を毛布の外に出すこと。

五、監房内では原則として、「自由度三」の第二種手錠を遊離状態に施す。

六、戒具及び身体に異状ある時は、点呼時、又は巡視看守に申出ること。

七、許可なくして声を出してはいけない。

八、看守、又はそれに準ずる方と相對する時は平伏のこと。許可あつて身体を起す時は遊離状態、前手錠の際には合掌のこと。

九、戒具は止むを得ないもの以外は自ら嵌めること。

十、其方に加えられる懲戒の種類は左の通り。

イ、革鞭 ロ、電気鞭 ハ、鉄砲手錠 ニ、海老責め ホ、房内後手錠 ヘ、大首枷 ト、嵌口具 チ、胸鎖 リ、坐り吊り ヌ、立ち吊り ル、窄衣 其他。

情けない身の上をひし／＼と感じつつ、繰り返して読み看守達の機嫌を損じないように今後、振舞わねばなりません。それにしても監房内でも、手錠、足錠を外して貰えないとは。首枷や腰枷は仕方ありません。又房を出る時には、どのようにきびしく戒具を施されようとも仕方がない身であります。房内でも手錠足錠とは、この頑丈な監房から脱け出すこと等、考えも及ばないことですし、懲罰を考えれば暴れよう等とは露程、思いませぬのに。と考えますが、一

旦、嵌められた手錠、足錠は看守が持っている。鍵がなければ、どうすることもできません。

今日、浅間しい姿で曳かれ乍ら見た自由な社会人の方々を思い浮



TAK

べますと、囚れの身が本当に悲しく思えた次第です。

つい近所の房から、はらわたを絞る様なうめき声が聞えます。さっきの海老責めの女囚なのです。遠くの方で革鞭の音と悲鳴がします。全く生地獄です。

婦人検事

巡視の看守の眼に射られる度に身のすくむ思いをし乍ら、漸く未決囚の第一日を終えました。

「横領、強盗、暴行及び傷害致死罪容疑未決囚三二九号、戒具及び身体異状ございません」

ついで鋭い眼で首枷、腰枷、手錠、足錠等、検査されます。「就寝」の号令と共に袋毛布を敷き、中へ潜り込み、手錠の両手を外へ出しても毛布の上へおきます。留置場での後手錠の痛さはありませんが、身体の要所々々の自由を拘束する戒具のずしりとした重量感、そして首に嵌められた革枷のうるさは、今更のよ

うに囚われの分際を感じさせ、仲々寝られません。寝返りを打ちたいのですが、首枷が音を立てますし、そうすると少く共、革鞭の二つや三つは喰うに違いありません。

現に革鞭の下で悲鳴を上げている未決囚が居ます。奪われた自由が痛切に恋いしく、それにも増して妻が恋いしくてなりません。柔い夜具にくるまって寝た夜々のことを思い出しますと、涙が出て来ます。

「妻よ、助けておくれ。本当に辛いんだ」

叫び出したくなるのを鞭の味を思い浮べて懸命にこらえます。誰の思いも同じと見えて、どこかの房で叫び声が聞えました。

「つらい、こんなつらい目に……（泣声）くそっ、あんまりひどい……
せめてこの手錠だけでも……」

反則した囚人の処置は忽ちの内につけられました。嵌口具を嵌められたのでしよう。声は聞えなくなり、革鞭の音が三つ、四つ、五つ。鼻腔から洩れる絞るようなうめき声。そして恐らく後手錠にされ足錠を「自由度、零」にされるのでしよう、冷い金属の音がします。どんなに辛かろうが情無かろうが、もはや未決囚の身の上、唯、歯を喰いしばって堪え忍ぶ他ありません。少し、うとうとしたでしようか。痛烈な痛みを胸に感じ、わけの分らぬ悲鳴を上げて跳ね起きました。巡視の婦人看守が革鞭を手に冷く見下ろして居ます。

「横向きに寝ていいと誰が言ったの？」

「申訳ありません」

平伏して詫びを言いますが、頭をポンと足蹴にされます。格子扉を閉めて立去る看守を手錠の手で合掌して見送り、又、袋毛布に潜り込みます。留置場では少しぐらい寝乱れても、何ということはありませんでした。拘置所ではそうは行かないわけです。それにこのように看守が監房内へ立入るとすれば、万一のこともあるし、やはりこのぐらい戒具も必要なのかな、等と考えている内、鞭の痛み

も薄らぎ、いつとはなしに寝てしまいました。

「起床」

ハネ起きて毛布をたたみます。首枷の鳴る音、鉄鎖の響きが各監房で一斉に聞え、今日一日の囚われの朝を迎えます。点呼、朝食、そして正座の苦業です。未決囚心得を繰り返し読み、又、膝の上においた両手の手錠の頑丈さに改めて感心し、発見されずに膝を崩す法を研究したりして永い永い時間を過します。取調べに曳き出される囚人が引かれて行きます。

「コーヒーが飲みたい」

と痛切に考えますが、身動きも許されない分際で笑止な願いです。

翌日もそのまま監房に繋がれ、翌々日も曳き出しがありません。少し不安になり焦々しましたが、勿論どうすることも叶わず、唯じっと正座の苦しみを味わう他ありません。

看守の中でも気の良い者も意地の悪い者もあって、少々姿勢を崩しても知らぬ顔をして呉れる者もあり、又、仮借なく鞭を加える者もあります。勿論、幾ら気の良い者でも戒具を外して呉れる気ずかいはありませんが、思わず身悶えして首枷の音を立てても、知らぬふりをしている呉れますと、本当に有難いと思いました。婦人看守の方が概して意地悪く、三日目の午後、横坐りを発見されて、中年の婦人看守によって、十挺程の鉄棒を水平に挙げた手で支えさせられた折、申渡された三十分間はおろか十分間も支えられず、両手が下ってしまいました。

脂汗を流して、何とかいい付けの通り支えようと思いますが、肩が抜けそうでもなくならず、思わず赦しを乞いました。

「私が悪うございました。看守様、どうぞ御赦し下さいまし」
重い手錠の両手を胸で合掌します。

「そうかい。私の命令なんか馬鹿馬鹿しいというんだね」

「ち、ちがいます。どうしても支えられないのです」

「フン。囚人てものはね、そんな甘いものじゃないのよ。海老責めの味でも教えてやろうかねえ」

同僚の婦人看守を呼び二人で私に海老責めを加えました。後手錠を思い切り上方へ吊られるその痛さ。そして首と足首が接近するにつれてその痛さは益々激しくなり、上体はバラバラになりそうです。鉄砲手錠と同種の苦しみですが、呼吸の苦しさが加わります。三十分の後やっと赦され、再び我と我が両手を鎖で繋ぎます。

先日の女囚は、女の身で一時間の海老責めはどんなに苦しかったろうかと、懲罰の恐ろしさに今更のように震え上がりました。其の晩は仰臥すると肩の辺の骨が痛くて堪まりませんでした。中三日おいて五日目の朝食後、曳き出されました。若い婦人看守から鍵を貰い、両手の鎖を手枷の錠孔から抜き出します。

この小さな鍵さえあれば、まるで嘘のように両手が自由になるのです。押しただいて鍵を返し、「自由度一」の鎖を取って先ず左手の枷に差し込み、両手を差出して
「お願い致します」

といいますと、婦人看守は右手枷にカチリと嵌め込んで、ついで腰枷に固定されました。「自由度二」以上の鎖なら自分で両手を処理できますが、「自由度一」の鎖は自分では両手に嵌め得ないわけです。

足錠を引きずり乍ら中央監視台の所に集められ、担当の検事別に

鎖で腰枷を繋ぎ合わされます。私と同じ鎖につながれたのは何の縁か海老責めの女囚でした。腰を曲げ膝を屈め首枷の音響器を鳴らし鎖をジャラつかせ乍ら廊下を曳かれて行きますと、本当に

「幾ら囚人だからといってもあんまりだ」と、つくづく考えました。検事の取調室の手前には囚人控室があります。私達二人の哀れな囚人は控室の壁に向って、お互いに背中を向け合って繋がれます。腰をつなぎ合わせた鎖は解かれましたが、代りに壁に埋め込んだ鉄環についた鎖が首枷につけられました。丁度、犬の様な恰好なので

朝の八時前のことです。から勿論、検事は来て居ません。看守はタバコをふかし乍ら椅子に坐って新聞を読んで居ます。突然、鉄鎖の触れ合う音と共に、取調室の扉が開きました。

「こら、こら、三三九号と八三号。ちよっと後を向いて見ろ」

振り向いた眼に一人の囚人が見えました。婦人看守が持った細い鎖の端は、囚人の鼻について居ます。ああ懲役囚です。刑が確定し監獄へ送られるのを待ち乍ら苦役を課されて居る既決囚なのです。

「今ちよっと監獄へ送り出し過ぎてな。既決囚が少くてお前達の食事の運搬なんかは未決囚が当番でやっとなので、お前達初めてだろうと思うが。お前達もだ、早くこういう恰好にして頂いて罪の償いをさせて欲しいだろう。え？幾ら未決に繋がれて居ても何にもならんぞ。刑期はこういう姿にして頂いた日から勘定するんだからな。おい赤印、身体を回して見せろ」

三十七、八の男の既決囚は戒具の音を立てて回れ右しました。見るもおぞましい姿です。刑が確定すると同時に人格を剝奪される訳ですから当然の姿といえるのですが、それにしても何と残酷な取扱

いでしょうか。私も社会人として自由な日々を過して居ました時には、当然の報いだぐらいに考えて居ましたが、戒具の味を身に泌みて知った現在では、その苛酷さがよく分ります。手錠一つにしましても嵌められた経験がなければ、その辛さは分りません。眼の前の既決囚は膝を折り曲げて上体を直立させ、空ろな眼で前方を見詰めて居ます。私達は禪の一本だけでも着けることを許されていますが彼は戒具以外は何も着けていません。

先ず鼻には罪人の象徴としてステンレスの鼻環を嵌められ、それにつけた鎖を婦人看守が持っています。口には革と鉄で作られた頑丈な嵌口具、首には全鋼鉄製の首枷ががきと嵌められて居り、額胸、背に赤い塗料で番号が刷られています。後へ回した両手には恐らく第三種手錠でしょう、私達のは少しちがう更に頑丈な手錠が嵌められ、腰枷の後の金属部に固定されて居ます。両足にも勿論、足錠です。足錠の鎖を腰枷に吊る鎖は、かなり短くされて居ました。「行け」

哀れな身体中、鞭痕だらけの囚人は婦人看守の鞭に追われて曳かれて行きます。私達も近い内にあのような身になるのです。前に正坐している女囚の両眼からポトポトと涙が落ちています。私の視線は思わず女囚の豊かな乳房や、禪一本の腰の辺りに止ってしまい、気がついた看守に罵しられ、再び壁に向きます。やがて女囚が取調室内へと引立てられました。微かに嗚咽する声、ピンタの音等が時々聞え、きびしい取調を想像させます。あの女囚は何の罪を犯したのでしょうか。目を泣き腫らせた女囚と入れ違いに今度は私の番です。命じられるままに膝で歩いて室内に入ります。

正面の大きな机の前に正坐しますと、床に埋め込んである太い鎖

が腰枷に繋がれました。室内には誰もおりません。平伏して三十分程待って居ますと、奥の室から係官と一緒に検事が見えました。

正面の机に検事が着くと同時に腰を蹴られて合図されましたので平伏のまま取調べを御願います。

「ヨシ」

といわれて身を起します。私を見下ろされている検事は、ああ、やはり婦人です。中々の美人でシックなツーピースに身を包んだ三十五、六の方でした。

検事も、このようなハッキリした事件はないという様な気持でしたのでしよう、私が警務庁での自供を否認して、もう一度調べ直して下さいといいますと

「まあ、本当に何という図太い男だろうね」

席を立てて私の前に来ると、革スリッパでピンタを取ります。手錠足錠の私は殴られ放題になり乍ら、身をもんで哀願します。

「ほ、ほんとなんです。一度その場所に行ったら、あの晩どこをはしど酒して歩いたかを思い出さうと……(パシッ、パシッ)あ、あ………思います。おねがいです。おねが……」

「フーン。よし、それ程いうんなら連れて行ってやってもいいがねその代り、若し嘘だったら死刑を求刑するからね。いいかい」

「死、死、死刑！死刑ですって？そんな馬鹿な……」

「人一人殺しておいて未だいい逃れよう等とする人間は、この世から抹殺した方がいいことよ。罪を悔いて償おうというんなら、御慈悲もあるけど」

「ああ、本当にどうしたら……」

「ええと、そうすると山田さん、何日行こうかねえ？さっきの八三

号は明後日にはけりがつくと思うけど」

「検事さん、明々後日から御休暇でしょう？」

「そうなのよ。一週間許り旅行して来たい
と思つてね、彼氏と。フフフ、それ迄に一
くぎりつけときたいんだけど、こんなのは
一日で済むと思つたのにねえ。本当に手数
をかける奴だわ」

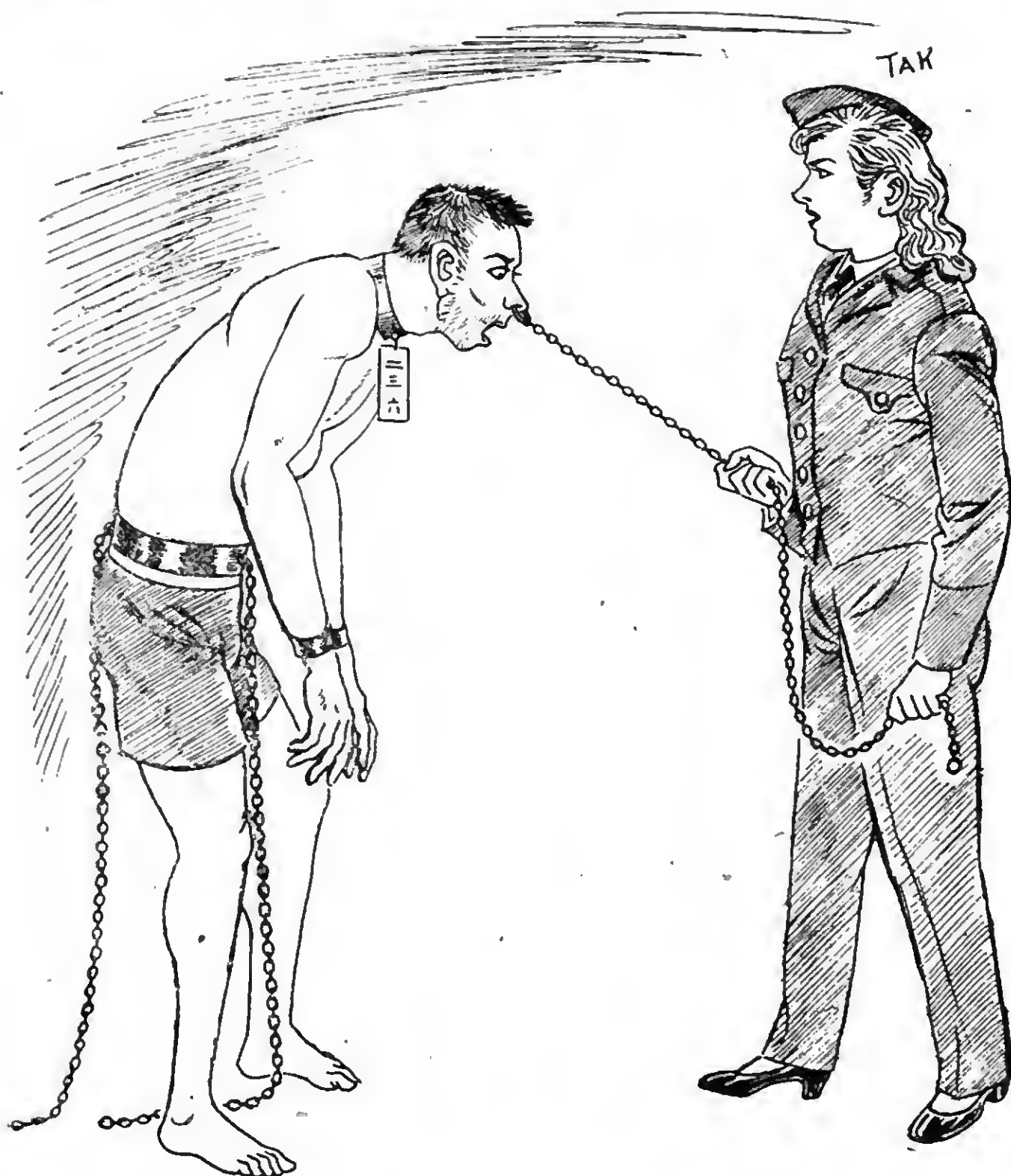
「少し反省させてやってはどうです。」

「モチよ。私が帰る迄、そうね、後手錠、
胸鎖と行きましょう。じゃあ、こいつは帰
つてから引き廻して、ことによれば電気鞭
で思い知らせてやろうと。しかし馬鹿だね
お前も。看守さん、三三九号、済んだわ
よ」

「検事さん。戒護課への懲戒指圖書の理由
は何にしましょう？」

「そうね。いつものように検事侮辱でいい
じゃないの。けど、こんなハッキリした場
合なんか拷問が認められて然るべきねえ」
ハイヒールの足で頭を踏みつけられ、礼
を申上げ、膝で歩いて扉を出ます。重い鎖
で腰を繋がれ廊下を曳かれて行きます。

途中、戒護課へ寄って若い婦人係員に懲
戒を改めていい渡され、監房区画の入口で
自ら懲戒を申告させられました。女囚は自



分の監房へ曳かれ、私は監視台の所で婦人看守によって懲戒の戒具
を施されます。手錠の鎖を片手だけ外され両手を上へ差上げます。

胸に冷い胸鎖が巻き付きました。普通の鎖と違って一つおきに金平糖状の鉄塊がある太い鎖です。ぐっと締め付けられ錠が下ろされ次に別の鎖で両肩に吊られ、その鎖は首枷の両側の環を通して居ます。これでこの胸に巻きついた鎖は固定された訳です。あごをしゃくられ両手を後へ回し自由度一の後手錠にされ更にグッと首に吊られます。

私に戒具を施して居る婦人看守にとっては、全く造作もない、ほんの一挙手一投足の手数なのですが、嵌められた私にとっては、それ所ではありません。今後、御慈悲で外して貰える時まで呻吟せねばならないのです。

「看守様。胸鎖、後手錠、ありがとうございます」

平伏して御礼を申し上げ、監房へ曳かれます。監房の前で婦人看守は錠前で以て足鎖をうんと短くしてしまいました。そしてその上、足鎖を腰枷に吊る鎖も短くしました。両足は十糧位しか開きませんし、腰枷と足首とは五十糧位です。こんなことは申し渡されなかったのに。と思いました。囚われの身の悲しさ、訴える術もありません。

「入れ」

膝でいざり歩いて監房へ身体を入れるや、ボンと腰を蹴られ、短い足鎖、後手錠の悲しさに鎖をガチャつかせ乍ら床の上にうつむきに倒れてしまいました。打ちつけた肩の痛さに唸り乍ら正座します。いくら囚人だといえ、あんまりだと思えますが、反抗はおろか口答えすらできません。ガチャンと閉まる錠の音を聞き乍ら口惜し涙がこぼれました。

胸を締め付ける胸鎖は正座して居ても、ジワジワと圧迫感を以て

苦しめますが我慢できないことはありません。しかし夜、横になりますと、その責苦が身にこたえます。夜は立つことはおろか坐ることも許されませんので、後手錠の身をもがきますが、どういう風にしようと胸鎖は肋骨に鋭く喰い込んで痛いのです。どうしてもねられず、その苦しさ痛さに思わず起き上りますと情容赦ありません、革鞭を受けます。鞭の痛さに再び横になりましたが、一時間も経たない内に堪え切れず又々上半身を起してしまいました。婦人看守は舌打ちして短い鎖で首枷を床の鉄環に繋いで鋭い鞭の一撃をして、出て行きました。今度はどうしても起き上げません。呻き、もだえのたうち回って苦しみ、そのあげく嵌口具を嵌められてしまいました。この胸鎖という懲罰は何でもないようですが、ジワジワとした絶え間ない苦痛を与えるもので、後日、幾分慣れて参りました時でも一カ月も嵌められて居ますと本当に気が狂いそうになりました。

この時は何しろ初めてなものですから、全くその苦しさ、七転八倒とはこのことでしょう。鎖をガチャつかせ、のたうち回って嵌口具の内で呻き乍ら、どうかして起き上ろうと首の鎖を引っ張ってもがき回ったものです。

全く一睡もせず朝を迎え、やっと首鎖から解かれた私は床にひれ伏して哀願します。勿論、嵌口具で声は出ませんので額で床を打ち乍ら身もだえするのです。看守は私の苦しみをよく知っているのですが、知らん顔で戒具の検査を済ますと出て行ってしまいました。やっと朝食の時、嵌口具を外されたので、勇を振るって、しつこく哀願します。

「胸鎖を外して下さいまし。御慈悲でございます。ほんの少しの間でもよろしくごいます。御慈悲です」

無駄とは知りつつ身もだえして慈悲を乞いますが、返答は嵌口具です。諦めて正座した太腿へ革鞭が鳴ります。

「横領、強盗、暴行、及び傷害致死罪、容疑。未決囚二三九号。戒具、懲戒具及び身体異状ございません」

夜の点呼が済み、又、苦しみの夜が来ます。

「三三九号。嵌口具は今夜も要るの？」

婦人看守の冷い声に

「決して騒ぎませんから御赦し下さいまし」

「そう。本当かい？ まあ、そのうち慣れるよ」

胸鎖の苦しさもさき乍ら、折曲げたまま伸ばすことが出来ない両足のたるさ。首に床の鎖を繋いで居る婦人看守に思わず訴えました。

「あの、検事様の申された懲戒は胸鎖と後手錠だけなのですけど」

「フン。それで？」

「あの、足の鎖をもう少し長くして頂けませんでしょうか？」

「へええ。するとお前は何かい、懲戒が不服なんだね」

「い、いえ、ち、ちがいます。足鎖のことは検事様も戒護課でも何ともおっしゃら……」

忽ち革鞭が鳴り、そして嵌口具が、つきと嵌められ、その上、足で背中を踏みつけられて胸鎖を更に締められてしまいました。

「何を生意気なこといつてるのよ。囚人の分際で」

詫びを申上げること、もはや出来ません。自由を剝奪された身の悲しさ。あまりの取扱に前後を忘れ、思わず反抗しようとしたが、もとより後手錠、足錠、首鎖のきびしいいましめを受けた身のこととて、無慈悲な婦人看守の足蹴のままに短い首鎖がガチャガチャ鳴らして床を転げ回るより外ないのです。

苦しさ痛さに呻き乍ら、それでも少しは眠ったようでした。朝が来て又、正座です。尾籠な話ですが短い足鎖と後手錠のまま用便を足すのは中々むづかしいものですし、後手錠の身は後始末もできませんのが情なく、せめて用便の時だけなりと前手錠にでもして貰えたらと、社会の方々に見られるのも恥しかった前手錠が恋しくなりました。婦人検事は私の苦しみ等、気にも留める筈もなく、休暇を楽しむ旅行に出発することでしょう。

一週間といていたのですから、まだあと十日間は、この戒具のまま放っておかれる訳です。せめて足鎖でも長くして貰えたらとつくずくと眺めますが、足首に嵌められた枷の頑丈さ、鎖の太さ、ああ、あの小さな鍵をあの鍵穴に入れて回せば、と思いましたが所詮叶わぬことです。

四日目あたりが一番苦しいございました。胸鎖と後手錠にじんわりと責められ乍ら正坐して居ますと、本当に気が狂いそうでした。食事と点呼の時以外、嵌口具を嵌められ、食事の時には当番で使役されて居る同囚の未決囚によって外され又、嵌められる訳です。

胸鎖されて四日目の当直看守は初めての方で、本当にやさしい方でした。昼食を配っている女囚の腰鎖を持って私の監房の前に立った時、一目でやさしい婦人であると感じました。（自由度三）の手錠を嵌められた女囚が不自由そうに鍵で差入口を開け、食器を房内へ置きます。そして婦人看守より嵌口具の鍵を受取った女囚は私の後頭部の錠を外して呉れましたので、口にくわえさせられた鉄の玉を歯で支え身を倒して嵌口具を床の上にそっと置きました。私の姿に女囚はびっくりして居ます。犬の様に嘔り終え、やがて再び女囚を曳いて来た婦人看守に必死に哀願しました。

「お願いでございます。胸鎖をほんの少し、ゆるめて下さいまし。本当に気が狂いそうなのです。辛くて辛くて……痛くて肋骨が折れそうでございます。御慈悲です。看守様」

できれば手を合わせて哀願したいのですが、それはできません。「そんなに辛い？何日目なの。そういえば、ちよっと緊め過ぎのようね」

少しゆるめて下さった上、ついでにちよっと、ずらせて下さいました。突起が新しい皮肉に当たりましたので、うんと楽になります。

「外して欲しいだろうけど、そうは行かないよ」

「と、とんでもございません。懲戒を受けて居る身でございます。懲戒具を外して頂こう等とは……」

「そう。辛いだろうけど辛抱するのよ。あら、足の鎖もずい分、短くされてるのね。可哀想にねえ。神妙にしなきゃ駄目よ」

「ハ、ハイ。もったいない御言葉、ありがとうございます」

嵌口具の玉をくわえて身を起しますと、女囚が看守に教わり乍ら嵌めてくれました。全くホッと致しましたが、二、三日しますと前程ではありませんが苦しさ痛さに堪えられず、身もだえしては革鞭で打たれました。

十日目近くになりますと、朝から晩迄考えることは手足を伸ばして背中を床につけて寝たいということばかりです。自由な方々にとっては当り前のことが、私にとっては天国の様に思えた次第でございます。(続く)

架空臨時増刊

マゾ・ソドミア特集号

X

Y

Z

吾々の切望にもかかわらず、男性向の特集号が一度も計画されないので業をにやした私は、ここに架空臨時増刊号マゾ・ソド

ミア特集号を発案したので、目次の一端を掲げて同好諸氏の賛同を仰ぐとともに、編集部

(1)ドリーム・ランド 沼 正三
家畜人ヤプーの続編であるが、ここではヤプーの主人公、麟一郎は出ず新たに逞しき日本の美青年、譲(ジョー)が登場する。架空の国ドリーム・ランドに地質探検に来た譲は、女性が権力をもち、男性は悉く畜化されている国の女王エリミアに捕われ、黄色いヤプー第一号として家畜化される。女王の寝室の装飾用の灯台を捧げる奴隷として、蠟燭を頭にのせて奉仕させられる。ジョーはこの国の侍女アイリスと恋に陥るが、怒った女王はこの二人にあらゆる責めと凌辱を加えるあたりが圧巻で、挿画

は四馬孝氏が担当、興味深い責画を数葉挿入して、マゾ派垂涎の読物。

(2) 被虐七曜譜 槇村 奏

輝とソドミア物で鳴らした槇村氏の新構想の小説。富豪の一人息子の家庭教師となつた小学校教師が、一夏、避暑地で遭う奇妙な体験談。美少年の教え子に思うまま翻弄され、青年教師は心ならずもマゾ化してゆく。七曜譜というのは、少年が作った一週間割りで、火曜には火責、水曜には水責木曜は木馬責、金曜は金具責という奇抜なアイデアによって責め抜かれる。挿画は名コンビ、青木審氏の筆で、魅力ある画風が輝ファンを楽しませる。

(3) 男性責映画昨今 梶 孫一

エロデ王、ベンハー、十戒、ヘラクレスの古典映画から、西部劇の私刑場面。人間の条件のリンチ・シーン。その他ドギツイ映画責場面を微細に、数十葉の秘蔵スチールを提供して解説。男性責映画の文献としても欠くべからざる読物。

(4) 輝小僧物語 森 太一

例の昆布屋の小僧の物語りであるが、ヒイキの映画俳優の締めた輝が欲しくてたまらず、撮影所の小使に頼んで強引に貰いう

け、天にも昇る心持ちで宝物のようにしていたが、実はそれが小使の爺さんのものだったという、孤独な少年の哀愁をユーモアを交じえて描いた好短篇。

(5) 切腹田原坂 児島 輝彦

久しく筆を揮わなかつた児島氏の、鹿児島武士と美少年とが田原坂の戦さ破れ、二人で刺し違えて果てる悲壮な物語りで、挿画は例によって自筆の独自なもの。

(6) 黒い襟章 菅 良太

終戦時、中国の争乱を描いたもので、日本の憲兵中尉が暴徒、黒竜党の手に捕えられて報復を受ける話で、引廻し、晒刑、拷問、凌辱と、息つく暇もなく刺戟的場面が次々に展開する。主人公を三船敏郎、その他の登場人物を現映画界の俳優に似せて描いた挿画が興味深い。

(7) 水仙の間 三根 耕一

温厚な中年紳士と青年とのソドミア物語りで、温泉地の出来事。深夜の岩風呂での被縛シーンが圧巻であるが、全篇に淡い哀愁を漂わせている点が、作者独特のもの。

(8) 緋牡丹屋敷 緑 猛比古

緋牡丹屋敷とよばれる旗本の下屋敷で妖艶な奥方の手によって責苦を受ける美青年武士が松の木に逆さ縛りにされて、数名の腰元た

ちに鞭打たれ、引廻わされ、果てはくすぐり責めに遭うところが面白く、氏の「天狗鼻由来」以来のマゾものである。挿画は三条春彦氏が久々に筆をとったもので、牡丹咲く奥庭での責画は、正に絢爛そのものである。

その他、マニアの手によるマゾ・ソドミア写真を収載。素人くさいものもあるが、大胆なポーズとアイデアは在来に一度も発表されなかつたものである。

猶、刊行記念として「男性責写真」を臨時発売した。

(一) 男性被虐フォト

- | | |
|----------|---------|
| 1、逆さ大の字磔 | 2、輝吊責 |
| 3、クレーン吊責 | 4、跨帯 |
| 5、蟻責 | 6、天狗面 |
| 7、刺青責 | 8、股裂き刑 |
| 9、海老責 | 10、さそり責 |

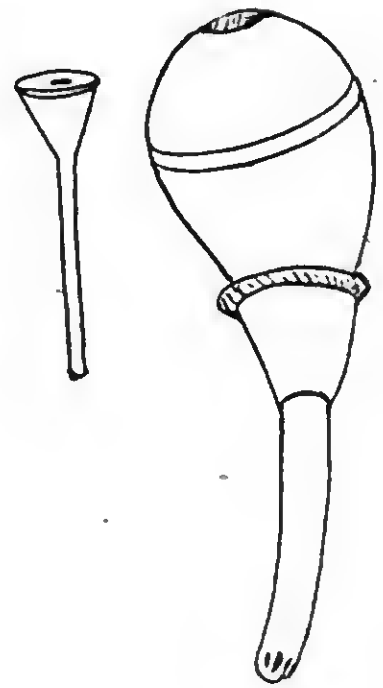
(二) 時代物責絵巻

- | |
|-------------------|
| 1、丸橋忠弥の火責 |
| 3、天野屋利兵衛の石抱き |
| 3、大槻内蔵助の蛇責め |
| 4、放駒四兵衛の海老責 |
| 5、紅陽上人の鉛熱湯責 |
| 6、日親上人、灼熱の鍋 |
| 7、勤皇志士、古高俊太郎の蠟燭責 |
| 8、石川五衛門、釜煎処刑 |
| 9、木鼠吉五郎の木馬責 |
| 10、軍事探偵、鐘崎三郎の油煎処刑 |

浣腸

栗瀬長

〔実験レポート〕



「滲み渡るグリセリン溶液に腸は猛烈な蠕動運動を起し、烈しい腹痛を懸命に耐える彼女の顔面は蒼白となり、額には脂汗が、じつとりと滲み出る——」

浣腸責に喘ぐ美女を写し得て妙なる前文をはじめ、幾多の先輩諸兄姉が本誌を飾られた浣腸の責苦の記録に、私は何度マニアとしての胸をときめかした事であろう。私も責められてみたい、この欲望からは私は、真実の責苦には遠く及ばぬながら、そして果して描写の如き事態が起り得るものであるかどうか、恐る恐るながら、長い時日を費し、各種の方法を用い、自ら実験したつたない報告である。

告白、手記、創作等には或は八分とも、十分とも、長くは十五分とも書かれている。そこで私は、各種肉体的条件のもとに、グリセリン二十％溶液から五％きざみに百％溶液まで二カ月にわたり、折にふれ実験した結果の中から、典型的な四例をとり大方のマニアの

為の参考としたい。

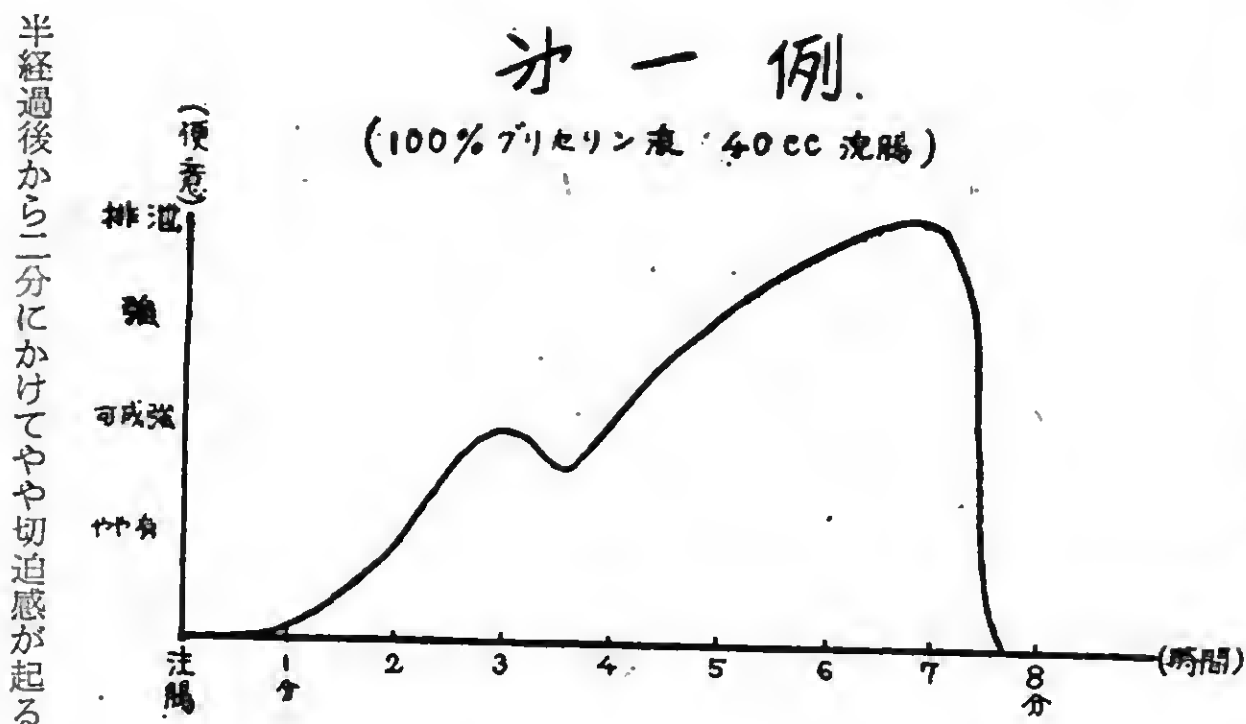
第一例（グリセリン液のみ〔百％〕四〇

CC、前日排便後十八時間経過）

注入後一分間は何等の切迫感もなく、一分

例

（100％グリセリン液 40cc 浣腸）



が、この辺は自然便意と大して差がない。

ところが、二分半から三分ともなると、可成り強く便意が押し寄せ、思わず体を固くする。途端にグーッと腹部がなって、一時切迫感が安らぐ。三分半経過後である。ホッとする間もあらばこそ、今度は強烈な勢いで押し寄せ、四分、四分半、五分と強まるばかり、何時失禁せぬかと、満身に力をこめて、ただ耐えるばかりである。五分半を経過する頃、我慢する足に力が入って、膝の辺に、かすかなふるえが来る。拳を握りしめ、歯を喰いしばって耐えること一分、二分、遂に七分にして要求は迫るばかりにして、どうにも我慢しきれなくなったが、この場合、前日の自然排便後十八時間しか経過していない為に腸内老廃物が少いたためか、腹痛を感じる事もなく、又脂汗が出る様な感じは全然なかった事を附記しておく。

第二例 (五〇%グリセリン溶液五〇CC

(グリセリン二五CC、微温湯二五CC)前日排便後二十八時間後)

今回の実験は、ごく普通に用いられる五〇%の溶液の典型である。さすがに百%液と違って、便意の来るのは遅い。やっと二分半を経過する頃、やや便意を感じるが、三分頃に

は可成り強まる。途端に潮の引くが如く弱まり四分頃、又一しきり強まるが、ゴロゴロと腹が鳴って又一時弱まる。五分、再び強まりそのまま可成り強い便意を感じ、歯を喰いしばって耐えると、一時弱まった様に感ずる間もなく(六分頃)六分半を経過する頃から、

言いようのない不快な鈍痛のようなものを感じ、便意はつのるばかりにして八分で排便。この場合、前日、排便後一昼夜以上である事から、第一例の一〇〇%液と時間的に大差がないものと思われる。もっとも、鞭等によって、強制されたならば、十分以上、我慢する事も可能であったであろうが、独りのプレイとしては、これ以上、耐える事が何か面倒くさい様に感ぜられた。この点、独りのプレイとしての限界があるのではなからうか。

第三例 (三三%グリセリン溶液六〇CC

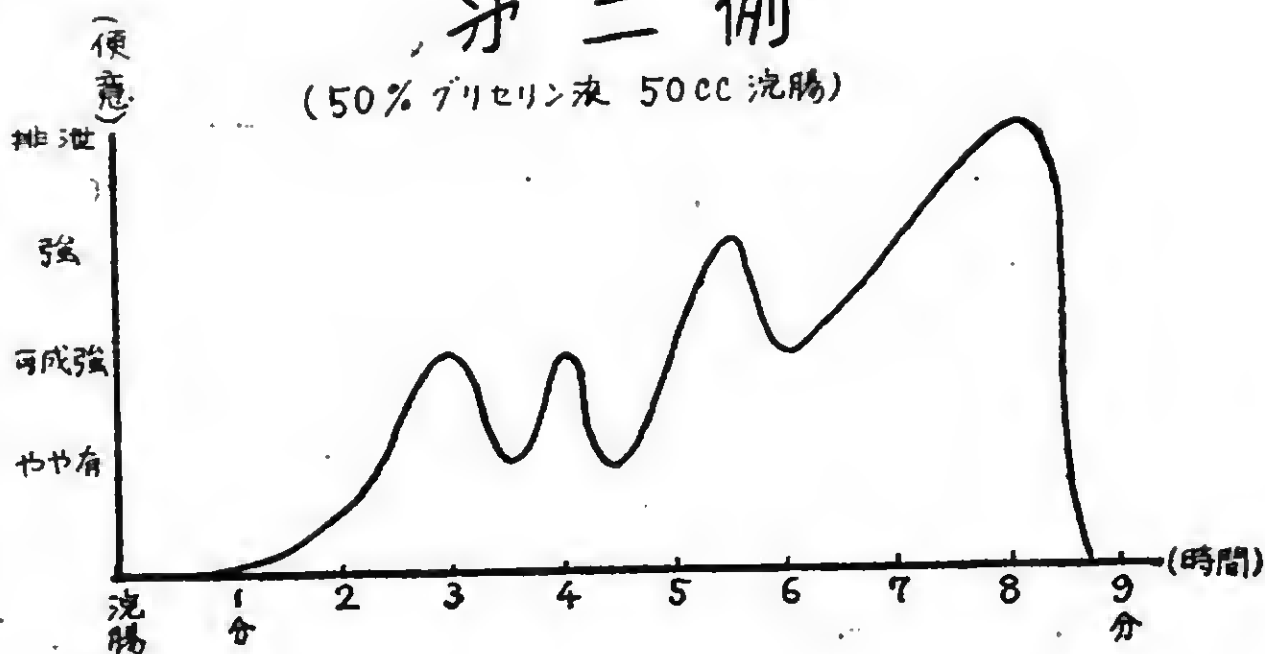
(グリセリン二〇CC、微温湯四〇CC)前日排便後二十時間)

グリセリン三分の一という稀薄液で実験してみた所、聊か不満足な結果が出た。

注入後三分は全然便意を感じず、四分たつてはじめてやや感ずるも微弱であり、一分間隔で、強まったり弱まったりする中、七分半では全く便意がなくなり、八分半で又一寸強

例二

(50% グリセリン液 50cc 浣腸)



まるかと思うとすぐ弱まり、十分にしてい、ぐっと強まって、耐えられなくなるかと思われたが、そのまま再び弱まり、以後、緩慢な強弱が繰返されるばかり、丁度、乗物の中で、

下痢を我慢する様な慢性的症状を呈し、何等の感興をも催さぬので、十六分で一応打ち切った次第である。

この結果から、便秘の際は稀薄液もよいが浣腸プレイとしては、少くとも五〇%以上の溶液であることが必要であることを痛感した。

第四例 (最初五〇%グリ

セリン溶液四〇CC、引き続き一〇〇%グリセリン液三〇CC追加。前日排便後二十四時間)

二回浣腸がどんなに苦しい素晴らしいものであるか、実験の跡をふり返ってみよう。

先ず最初普通の五〇%液を量をやや少めに四〇CC注入した。図の通り、四分してやや便意を感じ、五分半、六分半で強まり、八分あたりやや小康を保つも、九分で可成り強まったのを、懸命にこらえ下腹に何か圧迫感を感じながらも、便意の一つの峠を越してホッとした所で、かねて用

意の一〇〇%液を三〇CC注入した。丁度、再び便意が強まろうとする所に合致したからたまらない。ググッと押し寄せる排便感、両手足、殊に腰部にどんな力を込めても、耐えられぬ程、この時ばかりは、私も一瞬プレ

イである事を忘れて頑張ってみたものの、ものの二分と耐える事は出来なかった。こうして、最初の浣腸を懸命にこらえている所に、無慈悲にも、更に強力な液が再び送り込まれる場合が最も強烈な排便を促す事、言いかえるならば、最もプレイとして高度なものである事が実証されたわけである。特にタイミングに留意したならば、その効果は更に強まるものと思う。

第五例 (イルリガートル二%石鹼

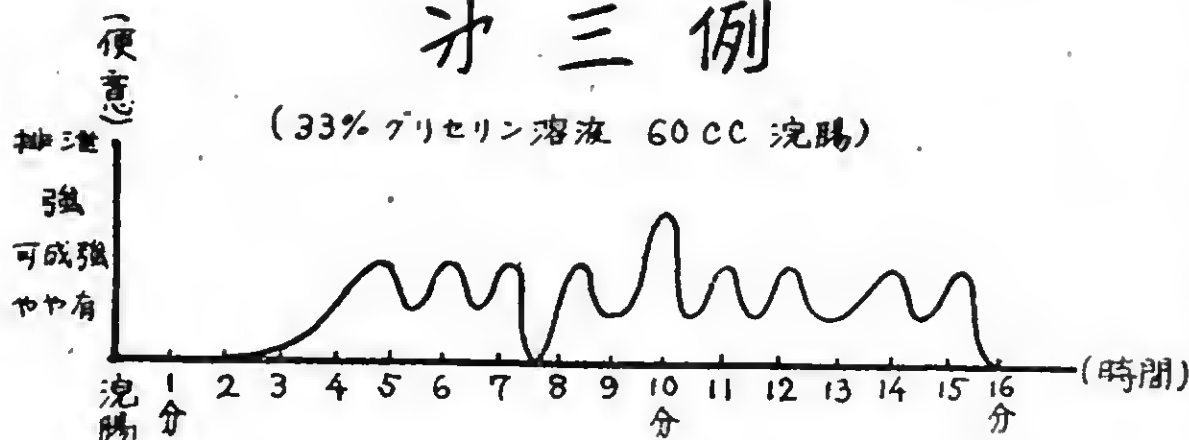
液一五〇〇CC 前日排便後三十時間)

微温湯一五〇〇CCに、化粧石鹼三十グラム溶解して、イルリガートルによって浣腸した結果である。

イルリガートルは八十糎の高さに釣り、一分間五〇〇CCの割合で注腸されるようにした。一分後、即ち五〇〇CCで、早くも便意を感じ、二分、一〇〇〇CCで便意はやや強まり、三分後、一五〇〇CC注入し終る頃には可成り強く、そのまま五分半過ぎまで持続。六分頃一しきり強く切迫感が押し寄せ、言いしれぬ鈍痛を感じる。七分

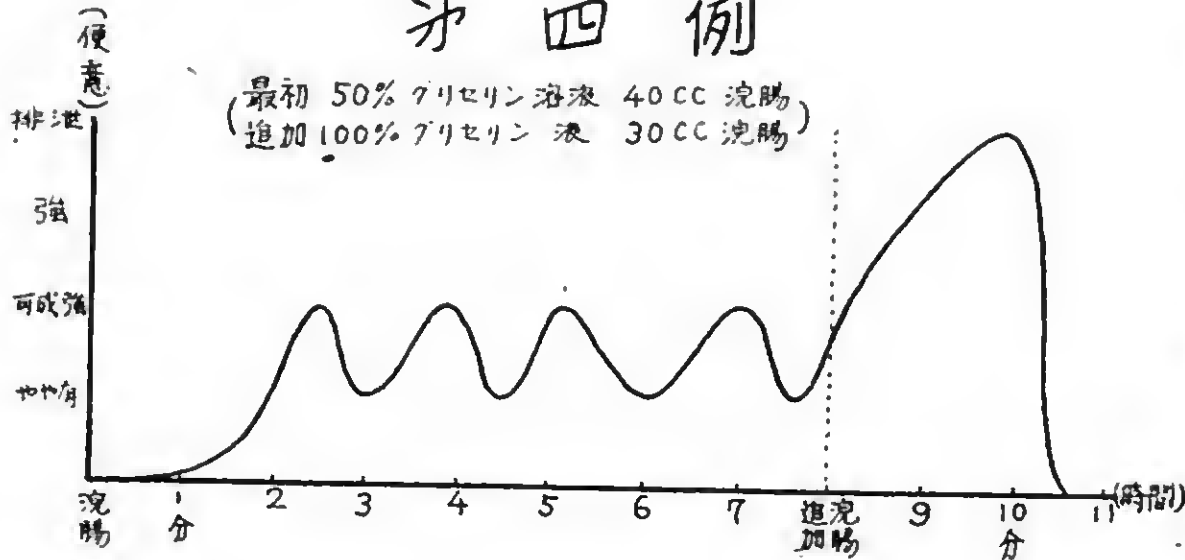
例 三

(33% グリセリン溶液 60 CC 浣腸)



例 四

(最初 50% グリセリン溶液 40 CC 浣腸
追加 100% グリセリン液 30 CC 浣腸)



一寸弱まるかと思う間もなく又一しきり強烈な切迫感、我慢するのに全身に力をこめるや顔が猛烈にはてってくるのを感じる。十分、再び強烈な便意、膝頭に微かな震えが来て、そのまま切迫感は強まるばかり、十一分十二分と時間の経過を祈る様な気持で我慢し続けたが、遂に十二分半にしてカプトをぬいだ。

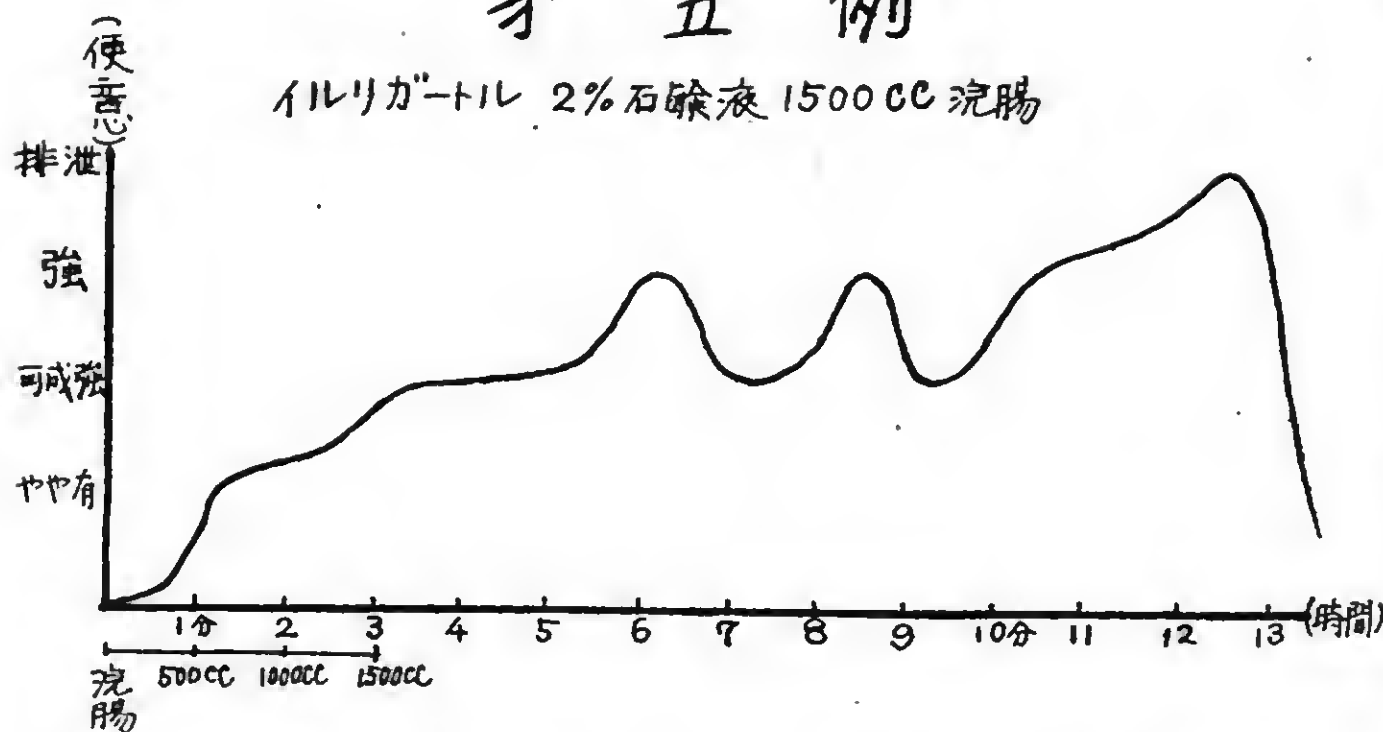
以上、幾多の実験のうちから典型的な数例を述べたにすぎず、この五例から結論を出すのは勿論早計であるが、この例をはじめ、私の数多くの実験の結果から、一応の結論を申し述べてみたい。

勿論、浣腸にもいろいろの方法、薬液の濃度、その時の人体の状態があるが、一般的にグリセリン浣腸とイルリガートル（エネマシリンジも含めて）とに分けて考察する。

実験の結果では、グリセリン浣腸の場合、一応、薬液が腸内に滲透する最初の一、二分は殆ど要求を感じず三、四分頃に最初の要求を感じ、五、六分頃に可成り強まり、以後、断続的に強まったり弱まったりする。これはグリセリンの脱水作用が腸管に及ぼす影響であって、濃度が高ければ周期も短く、場合によっては弱まる暇なく連続的に強まる場合さ

例 五

イルリガートル 2% 石炭酸液 1500 CC 浣腸



えあり得る（大体濃度八〇%以上）。逆に三〇%以下では、脱水作用も弱く慢性的に便意の

低下がみられる。この結果から、濃度五〇%以上、量も五〇〇 CC以上、而も可能ならば二回、三回の追加浣腸が最も苦責の強いことが判明した。

一方、イルリガートルによる大量浣腸ではその便意は勿論、薬液の濃度によるが、概して量による腸管の圧迫であって、グリセリンの化学的作用に比して物理的作用が主である。

従って、便意は最初の五〇〇 CCから発生し一〇〇〇 CC以上となると、注入中から激しい便意が襲う。そしてそれは、グリセリンの断続的に比して持続的であって波が少く、常に抑制の緊張を強いられる。しかし、これは一〇〇〇 CC以上であって、五〇〇 CC程度では、余程濃度が高くない限り、持続緩慢便意となつて、苦責の目的は達せられない。

これを要するに、両者とも一長一短があつて一概に断ずる事は出来ないが、イルリガートルはその雰囲気独特な味があり、グリセリンはその断続的的刺激に興感があるかと思う。ただ、マニア個人のプレイとしては、便意抑制に強制力が伴わない憾があつて、なか／＼長時間の苦責に耐える真の喜びを味わうことはむづかしいのであるが、濃度方法を種々に変化させながら、春宵を楽しむもの、マニアなればこそであるかも知れない。



マゾヒズム百景

馬場 好男

第32景 女と少年

十五年前の敗戦直後の話である。この話は私の体験でなく、今は郷里のY市へ帰っている学校友達から聞いたもので、以下、私とあるは、その友人である事をお断りしておく。

私が東京で終戦を迎えた時は、勤めていた工場は焼かれ、御丁寧に住む処もなくなっていた。早速、郷里へ帰ろうと、それほどでもない荷物をリュックにまとめて、大学を出るや出ないうちに工場に追い廻され、青春のよろこびなんて凡そ縁もゆかりもない灰色の箱におしつめられた事から解放され、ホッとしたものの精神も肉体もすっかりうちひしがれていたもので、とにかく早く郷里へ帰りつきた

い気持で一杯だった。

なかなか乗れない汽車を待ち乍ら、東京の焼けあとを私は感じがし無量の気持で毎日眺めていたが、或る日、余りぼんやりしていた故か、大切な自分の荷物を入れたリュックを駅の中で盗まれてしまった。幸い、少い乍らお金だけは肌身離さず持っていたので助かったが、全く腹が立つより、もうどうにもならないという、世を捨てる様な情ない気持になったものである。その夜、私は真くらになって人通りのとだえた或る焼けビルのそばを通ったが、これは何の目的もなく只、ばくぜんと其処を通ったのだ。

翌々日になれば、もう間違はなく郷里迄の汽車の切符が手に入るといった事もあって、

最後の東京の夜をといった気持もあったのか

もしれない。私は、道であり乍ら暗くなって焼けくずれた瓦礫のゴロゴロした石のかたまりに、つまずかない様、遠く見える駅の灯を頼りに歩いていたら突然、元は三、四階建位の立派なビルであったらしい建物の、それも壁だけ四方に残って中は全然からっぽらしい焼けビルの処から、すごい勢で私の身体にぶつかって来た者があるのだ。

「あッ、誰だッ」

私は咄嗟に子供だなと察したが、と思う間なく、バタバタと又、人影が現われたのだ。

「つかまえてッ、そいつをつかまえてッ。泥棒なんだよ。泥棒ッ」

と女の声で全くの金切声だ。

私は、私にぶつかって倒れたものの、素早く起き上って逃げようとした子供を、泥棒と聞いて無意識に飛びかかるや、つかまえたのだ。

十二、三才のこの少年は私につかまっては
大変と、ものすごくもがいたが、学生時代、多少なりとも柔道をやり、又、二十一才の青年だ。この少年の腕をしっかりとつかまえて、私は目の前に現われた女を見た。

「どうも有難う。この子ッたら、私の留守中に残っていたパンを、みな食べてしまったんですよ。今夜は許さないからねッ」

というや、私におさえられて動けない少年をいい幸いに、ピシッピシッと両手で頬を交互にひっぱたいたのだ。

「ちよっと、ちよっと待って下さい。僕はこの子の手を離しますよ」

私は二十五、六才位らしい、夜目にも、よれよれの布地のスカートの女にいった。

「一寸、待って。手を離したら又、逃げてしまいうわ。いいわ、ね、貴方。悪いけど、その子を後手にねじってください。縛っちゃうから」

「ハ？だって、こんな子供を縛るなんて」

「いいのよ。私達、姉弟ではないけど、一緒

に暮しているのよ。他人じゃないの。警察には連れて行かないわよ。でも悪い事をしたお仕置はしないといけないわよ。いくら戦争に負けたって、これからは明るい自由な国になるんですからね」

私は女がいった明るい自由な国になるとい言葉が、とても印象的に聞えて、今まで暗い敗戦の虚無状態だった処へ、それこそ久しぶりに明るい気持ちを感じたのだ。その感じと一緒に私は、ちゆうちよなく少年の両腕を背中にねじりあげてしまった。

女は私の横へ来て、いつ手にしたのか荒縄で少年の両手を縛りあげたが、私の鼻にプーンと明るい自由のきざしを感じさせる様な女性の匂いを感じたのだ。

不思議に少年は始めの抵抗はどこへやら、全然おとなしくなっていて、うつむいたまま後手に縛られている。女は縄尻を両手でもて遊び乍ら私にいった。

「ね、よかったら寄ってゆかない。貴方だって私がこの子を、まさか殺すとは思わないでしょうけど、気にはなるでしょ？ 見せてあげるわ、私達の生活を」

女はそういつて縄尻をひき乍ら、「歩け」と少年をこずいて焼けビルの中に、私の方を

見乍ら連れて入った。私は戸感ったが、この女に何となく好感が持て、もし余り酷い事をする時には、少しでもお金を与えて少年を助けてやろうと思うと、そのまま女に従って行ったのだ。焼けビルの壁の中に入ると、前は地下室にぬける階段らしくポツカリと穴があいていた。女は少年を引き廻し乍ら、馴れているとみえてスタスタとこの階段をおりる。

私も続いて、真っ暗な中を足さぐりの様な恰好で降りてゆくと、ローソクの灯が見え、その中に入るとコンクリート張りの地下室だった。あちこちが崩れ、石がゴロゴロしていた。が隅の方には、うまく家財道具を並べ、焼けた鉄棒だけのベッドの骨の上には板をのせ、むしろと汚い布団が乗せてあった。汗をふき乍ら私が上を見たり下を見たりしていると、女は

「暑いのに汗をかかされちゃった。どうするか覚えておいで」

といったかと思うと、少年の腰の辺りを素足でポンと蹴りつけた。少年は後手のまま、コンクリートの上に敷いてあるむしろの上につぶせに倒れたが起き上れず、じっとしている。一本のローソクの灯が、その勢いにユラユラと揺れて大きく影をつくったので、私

はその異様な室内の気配に一寸、口をつぐんでしまったのだ。

「ね、お兄さんは学生さん？ まあ何でもいいや。この子はね、私が食べさせるのよ。何処の子だか知りやしない。空襲で焼け出されて一人で泣いていたのを私が連れて来たの。私だって一人ぼっちよ。義理の親子か姉弟、まあそんな処よ。女のくせにひどい事とと思うでしょうけど、盗む事は別だからね。悪い事はいろいろあるでしょうけど、この子に先ず盗むという事は徹底的に私は、させたくないの。嫌なら別れるだけよ。別れるって変な言葉ね、私とこの子の間では。ふふ……」

女の笑いに、私も笑ってうなずいた。現に私も盗まれた事では全く頭に来ていたのだから――そして、こうして話しあってみれば、なかなか明るい気性らしい女と意気があってしまったのだ。

女の少年に対する折かんは可成り、ひどいものだった。大柄のこの女が仰向けになった少年の胸の上に馬のりに跨って、ぎゅうぎゅうという目におさえつけ、果は、撲る蹴るのすさまじさだったが、私は黙って見ていた。

私には、女の勢いが余りに激しくて、止めるきつけが見出せなかったというより、何

かとめられないものが、いやこの有様を見ていたいものが私の体内にかくれていたのだ。

「ああ、疲れた」

と女は少年の顔の上に腰をおろしてしまった。少年は腹をピクピクさせてもがいたが、両手は縛られたままで、両足はもう力なく投げ出されてしまっている。

やっと女は立ち上り、少年の縄を解いた。涙にぬれた少年の顔は一層ゆがんで、フラフラとその場にうずくまると、両手について女の前に平伏したのだ。

「もういいから寝な」

女の声に少年は隅の方へ行って私を見たが私が笑うと、僅かに泣き乍らニコツとした。

少年はおしだったが、どうしても私はこのさっぱりと明るい女が憎めなかった。勿論、女と少年の事は何も聞かなかったし、その後の事も知らない。

第33景 マゾ・マゾ雑感

ふと考えた事がある。マゾ愛好者には何かみんな持っている或る一定のものがあるのだろうか。きっとある筈だと思うが、私には判らない。私のいわゆる性癖面での友人が四、五人いるが、この人達や私自身を見つめて、

一つ思い当る事がある。それは金銭面が非常に固いという事だ。固いという言葉は、あくまでもよい意味でいったので、廻りの人々にいわせると、きつと、もつとひどい言葉でいうだろう。

これは再び断っておくが、私及び私の友人のみを見たもので、他のマゾ愛好者の事は知らない。金銭面が自由になって、マゾ的な事を自由に出来たらとよく思うが、或る意味からいえば、金で買うマゾは凡そつまらない事だろう。然し正直に言って女性是一般論でいえば受け身の方で、先ずサジストは殆んどない。有ったとしても、その数は誠に少く、全く貴重の一言につきるが、果してサジズムの女とマゾヒズムの男が夫婦になって何年うまう生活してゆける事だろう。お互いがこの性癖を理解しあえば、或いは完ぺきかも知れないが難しい事だと思う。こうしてサジストの女が皆無に近くなれば、矢張り金銭でまかなわれる相手が出来てくる訳で、大半がマゾ愛好者を満足させるのは、これらの人々がかなり小なりでないかと思う。一定のマゾの男とサドの女の将来には、何かしらの破綻が感じられるのだ。ところが逆の場合、いわゆる一般的の男が女を縛るという事には、殆んど

この破綻がない。というのは、きっと女が受け身で、或る程度の事は黙ってついてゆくからだろう。私はサジズムの男性は、勿論程度にもよるが、満足の度合が、我々マゾ愛好者より手っ取り早くいいと羨しく思う事がある。私はマゾ愛好者であり乍ら満足の度合が少いので、そう思うのかもしれないが（私も或る程度はあっても更によりよく、更にそれよりも、欲望の尽きぬ故もあるかも知れないが）とにかくマゾの強弱を計るものがあるとして、それが強くなるにつれ金で買う以外にはその手段がないと思うが、どんなものだろう。そのためかどうか知らない全く下手な持論だが、私に関する限り我が同好の志は金銭面には非常によい言葉で固いのである。即ちサジズムの女にのみ金は有効に使うという事もあり、考え様によれば、金のない者にマゾ愛好者が多いともいえる様な気がする。

尤も、本誌上に活躍されている先輩諸氏には、私の持論は棒にも箸にもかからないものであり、私とレベルの違う事もよく承知しており、くどい様だが私の関係のみの事を感じたままである。

暖かな日さしの或る日、近くの公園を歩い

ていたら中流家庭位の家族が散歩姿のまま八ミリを撮影しているのだ。三十七、八の父親と七ツ位の坊や、それに四ツ位の女の子、若く美しいなりのママらしい女性もいて、あれこれと演出が大変らしい。そのうち、父親の合図で坊やが芝生の上に四ッ這いになって女の子を背中に跨らせると、お馬ごっこで、その辺を這い廻り始めたのだ。うれしそうに女の子をあやす様にしてママらしき女性は手を叩き乍ら、四ッ這いの坊やの前で後むきに歩く。そんな光景を父親は八ミリで一生懸命に撮っていたが、私には嬉しい姿だった。

年末にラジオ、テレビで紅白歌合戦があるが、いつも女性の紅組が勝てばホッとするのは、マゾ愛好となれば私一人ではあるまい。

男と女の対抗するものは、みんな女性の方

第一弾！

『緊縛フォト・アラベスク』

特価五百円 略号「アラベスク」

縛られた女体ばかりを集めた数十頁の写真集です。美しい女体がいとどりの緊縛姿態で拘束を競っています。お買い洩れの方は、この際即刻お申込を。

に勝って貰いたいと希うこの私という男は、何故か女性の味方だのに余りもてない。おかしいものである。

スケートセンターで習いたてらしい男子の中学生が、姉さんか知人か知らないが女子高生に手をひかれて滑っていたが、それでも足許が悪くて転ぶ方が先なのだ。腰をおさえもらったり、両手をひかれたりしているうちに何のはずみか、この中学生、ツルリとすべって転んで女子高生生の両足の間へ足の方から入って倒れるや、女子高生はその腹の上あたりにドシンと、これもすべり転んで跨ってしまった。キャアキャアと笑い乍ら、しばらくこのポーズを作っていたが、若い群衆の一駒だった。

第二弾！

『緊縛写真と緊縛画集』

特価五百円 略号「緊〇」

三十数葉の四馬孝描くところの緊縛画集と数十態の緊縛フォトとをとりまとめたものです。大好評！増刷分も残部少し。絶対他の追従を許さぬ超豪華版です。すぐお申込を。

連載第三次元小説

影の国

雪 俊 遙

第七章 黒いジェット機

逆吊りの稽古に併行し、或いは前後して、その他の基本的な責めの訓練が丸一カ月、珠子の身体に加えられ続けた。

これは責めに馴らせて耐久力をつけ、併せてその責め特有の苦痛を覚えさせる為だった。苦痛の体験は苦痛の演技には、もっとも重要なのである。例えば、石抱きの責め場があったとする。次の芝居やショーがあるから、本当に重い伊豆石を五枚、踊子の膝の上に載せる訳には行かない。舞台では、どうしても火山灰で作ったプロッ

クとか、軽石の責道具を載せなければならない。しかし、責められる踊子は実感が湧かないから演技もお座なりになる惧れがあった。その場合、踊子達に本当に伊豆石で責められた経験があれば、その時の苦痛を思い出して実感のこもった責めが演じられた。或いは、その本当の責めを見ておく必要もあった。この国では、観客自身が現実の拷問などにも目が肥えているので、お粗末な責めの演技は素人芝居だとバカにされる惧れがあった。

石抱きの時、罪人が乗る算盤木とか、木馬責めの木馬なども、実際に舞台で使う小道具は、真中を丸くして周囲だけ鋭角な物なのだが、稽古の時は時々本物に乗せて痛めつけておく必要があった。その外、吊し責め、蠟涙責め、磔など、舞台でよく演る責めは一

通り訓練された。

車裂きで大きく足を開いたり、磔で長時間、舞台にいる場合に備えての訓練もあった。

海老責めに耐える為には、アクロバットの基礎も教えられた。

答は、それまでにいやという程受けていたが、念の為、尻、背、腹、腿などに集中答を当てられて、皮膚、神経、筋肉を鍛えられた。

こんなに多くの事を一カ月かそこらでマスターしきれる筈はない。それに踊りと違って拷問の訓練はスパルタ的に、強引に詰め込む訳にも行かなかった。だから実際には珠子は、来る日も来る日も拷苦の中に惑溺して、泣き続けていたに過ぎなかった。

その月も余す所、後数日になった。

この頃、珠子は夜も皆と一緒に寝かせて貰えなかった。昨晩は炭俵に詰められて物置の片隅で一晩を過し、一昨晩は大きなかめに入られ、首枷になっている蓋から首だけ出して、冷たいかめの中で一晩中、膝で身体を支えウツラウツラと眠る情ない身の上だった。

その晩は水風呂の中に一晩中、浸けられていた。もう秋も半ばに近かったので、水の中に身を浸していると、夜半過ぎからは、氷の中に閉じ込められている様な冷たさだった。

連日の拷問責苦に遭って、流石に豊満だった珠子の身体もゲッソリ肉が落ち、痩せ細っていたので、氷の様に皮膚を刺す冷水は、よけいに身にこたえた。

しかし両膝を括られた上、太腿から足首にも輪縄を掛けられ、後手に縛り合わされて、手首で結えた縄の余りをピンと張って、お臀の下で足の平に繋ぎ合わされていたので、浴槽の底から立上ることも出来なかった。冷水は鼻腔の入口までヒタヒタと張られていた。

一晩中、珠子は一睡も出来なかった。うたゝ寝でもして水底に倒れたら起上ることも不可能なのだ。その恐怖は冷水責め以上に心を脅やかしていた。口は、すっかり水の中なので、泣いても涙が流れるだけで、声は出せなかった。

その姿で泣いて過した一晩は全く長かった。夜が明けて間もなくガラリと戸があいた。

「珠ちゃん、辛かったでしょう」

無論、返事も出来ない。涙の溢れる目に、白いタオル地の寝巻に紅の細帯を締めた座長の姿が、ボウツと滲んで映っているだけ。

座長は寝巻の袖を捲り上げ、真白な骨細だがムッチリした二の腕を肩まで露わにして浴槽の栓を抜いた。鼠色モルタルの湯槽から、冷えきった水が次第に減って行って、濡鼠で鳥肌立てた珠子の身体を露わして行った。水が減って腹まで露わになると、珠子は歯をガチガチとぶっつけ合いながらうなだれた。蒼ざめた顔が羞恥で微かに赧らむ。

「いつまで経っても初心だねえ」

座長は目をキラ／＼させて、浴槽の底に縛られて跪いている珠子の姿を見下していた。水は膝から弾けるように引いて行った。

すっかり空になってから中へ入って来た。素足でずぶ濡れの膝を踏んでみて、

「オオ、冷たい」

大仰な声を上げて、その足で珠子の腹や胸を所嫌わず踏みつけた。濡れきった縄の結び目は仲々解けなかった。濡れた体で早朝の冷気に触れて、珠子は一層ガタガタと震えた。

足の縄はほどかれたが、後手の縄目はそのままで、座長に引立て

られるようにして稽古場へ連れて行かれた。

次の公演の責めの稽古で、久美という一番体格のいい踊子が後手に縛られて吊り下っていた。傍で、これも寝起きらしい寝巻姿の高倉が、上体を前に倒して吊下った久美の、キッと起した顔を下から見上げながら煙草をふかしていた。

バンビという仇名の、牝鹿のように鋭角的な久美の顔に、大きな目を睨んで青黒い隈取りが出来ていた。久美も一晩中、ここに吊されて一睡も出来なかったのだ。近づくにつれて、久美の後手の恰好の不自然さが気になった。振返る拍子に高倉の腕が一寸、久美の身体に触れた。床の上、一尺の高さに吊上げられたまゝ久美の身体がぐるりと廻って後向きになった。

「アッ」

珠子は、思わず立ち停った。驚いた。後姿を見せた久美の背中に腕がないのだ。後手に廻されていながら背中中は、すっかり露わだった。よく見ると、真新しい黒檀の板の様に栗色に光る久美の背のずつと上の方、首のすぐ下に、二つ折りになった肱と腕とがピッタリと重なって、ギリギリと太い縄で何カ所も縦に強く縛られていた。まるで短い肉色の材木が一本、肩の上に載っているようだ。後手の工合がおかしいと思ったのは、この縛りの為に、肩の横に水平に延びた二の腕だけが前から見えた故だった。

ゆっくりと又、向きの変った久美は、氣丈にも大きな目をダイヤのように光らせて、首をキッと立てゝいた。絵本で見た責められる毒婦のような顔だと、珠子は思った。

「やあ、お珠、驚いたかい。これは肱の関節を外して上膊部と下膊部を一本に縛り合わせる一番難しい後手だ。相当、痛いから修練を

積まないと無理だよ。その内、お珠にも教えてやろうね」

「そんな事、いゝです」と珠子は、いいたかった。しかし骨の髄まで凍りつくような冷たさで、全身ひっきりなしに震え、歯がガチガチで鳴っていて、それ所じゃない。震えて上顎と下顎のおつかる音は久美にまで聞こえたと思えて、久美は宙吊のまゝ珠子を見下し、嘲ける様に笑った。

「可哀想に、冷たいかい？」

「ハイ、先生」

「よし、すぐ寒さなんか忘れさせてやるよ」

暖くしてやるとは、いわなかった。忘れさせてやるというのだ。

「久美は、もう少しぶら下っているよ」

「ハイ、先生」

高倉は、久美から離れて珠子の前へ来た。

「後向きになれ」

ガタ／＼震えながら背を見せると、背中で縛り合わされて一本になつていた縄をほどかれた。

「今日は後手の稽古だ。これで稽古は一通り終って、一週間ぐらい充分、身体を休めて、次の公演から舞台に出る。いゝな」

「ハイ」

「跪いて」

高倉の強い力で後手を掴まれ、冷たい床の上に跪く。男は少女の手首をムズと掴んで、背骨の溝に沿って両手共、上の方へ上げた。肩胛骨の下の窪みの間まで持上げられると腕の附根が痛くなつて来た。それでも構わず捻じ上げられる。珠子は下唇を噛みしめて痛さに耐え乍ら、白い背中を少しずつ前へ傾けた。とう／＼顔が床に

着いてしまった。男は珠子の細首を片膝で抑えつけ、力を少しも緩めずに、珠子の手首を揃えてその膝の方へ引寄せた。
「ウッ。ムウウッ」
珠子の上半体が踵から浮き、苦しげに左右にくねる。膝の下から顔をのけぞらせて、ヒイー、ヒイー、と悲鳴を上げた。



ビシリッ。
ヒイーッと泣いて、その時だけは珠子は膝をつき正座したが、すぐ又、もとのようになってしまう。そして又、笞の折檻を受けなければならなかった。
腹をくびられて棒のように吊されている久美が、自分の苦痛も忘

「痛いかな？」
「ハイ、ヒイーッ。先生、もう許して。腕が折れてしまいます。ア、ア、イ、イ、イッ」
「五分間、このまゝで我慢していろ」
「ヒイーッ。ヒイーッ。ヒイーッ」
短い間を置いて間歇的な悲鳴が、広くもない稽古場に響き、母屋の方まで洩れて行った。エミ達は、その声で起き出した。
痛さ、苦しさに耐えかねて珠子は膝をくの字にしたまゝ、脚を拡げていた。持上った上半体を目掛けて、座長がトネリコの笞を振った。
「キチンと、お座り」

れた顔で見下している。

五分経つと、珠子は解放された。しばらくは腕や肩を揉んで貰った。それから又、後向きに跪かされ、項を抑え込まれ、後手に捻上げられた。

キッチンと座ったまゝ五分間、我慢していればこの稽古は一応、中止という話だったが、ほんの少し宛だが一回毎に後手が深く捻上げられて行くので、いつまで経っても珠子は答を免れることが出来なかった。座長はエミに答を渡して珠子の折檻を任せ、久美の縄をほどこいて寢室に引取らせた。

「今朝のお稽古はもういゝから、小屋入りまで、ぐっすりお寝み」
脱臼を治して貰った久美は、両脇をまだ痛そうに揉み乍ら稽古場を去って行った。

「私も寒くなつて来たから着換えて朝御飯を食べて来るわ」

「じゃ、俺も行こう。オイ、エミ。こいつは小屋入りまで後手吊りの訓練をしてやれ」

「ハイ」

座長夫婦が去ると、エミは前沢ユカに犬の首輪を持って来させた。珠子は頸にその首輪をつけられた。マスチフかセントベルナードにさせるような、特別大型の首輪だった。ユカが、観念して行儀よく座っている珠子の首を、それでキツチリ締めつけると、少女の白首の周りで首輪の飾り金具がキラキラ輝いた。珠子は背中では手首を合わされて細縄でギツチリ縛られた。縄は背筋から首輪の下を潜り天井の大きな鉄の鉤に通された。

その間にナナともう一人、桂子という踊子が、珠子の清楚な富士山型の頭髪を二つに分けて、短いまま編んでしまった。

編んだ毛の先は細い紐で別々に括られた。

最後の一人、吉野照代という踊子が、後に答を持って立っていた。用意が出来るとエミは、その答を取ってピシリと珠子の胸を打った。
「お立ち」

珠子は素直に立上った。キッチンと背骨を伸す。観念して、そっと目を閉じた。ユカが手首の縄を手繰って伸張させ、ナナと桂子は頭髪の縄を後の壁の下についている環に結んだ。わざと少し緩ませて……。エミは又、答を照代に預け、例の洗濯用ロープを取出して珠子の前に、かがんだ。珠子の白い足は太腿から足の平まで真黒いビニール・ロープでギリギリ縛り合わされた。五米を充分に使って縛り上げたので、白い肌と黒い紐が無数の横縞になって足の形を作り出した。黒い縞は白い膚をギツチリと締めつけ、白い縞は豊かに溢れて黒い紐の上下の端を覆った。幾ら連日の責苦で痩せてしまったとはいえ、もともと肉置きしじみの豊かな少女だから、十重、二十重に、ひしひしと緊縛された太腿やふくら脛の白い膚は紐と紐とに上下を圧迫されて、健康な時にも見られなかった程、豊穡に盛上って見えた。

女達は折檻に掛る前に、異様な姿にされて生来の可憐さに妖しい雰囲気まで加わった珠子の哀姿を楽しげに見ていた。そこへ阿藤や上村達も加わった。珠子は白い顔を蒼白に引き締め、目を閉じたまま顔を上げていた。姉程の受け唇ではないが、多少その傾向はあるので、朱い小さな唇は上下、同じ大きさに見える。小さい割に肉付きがいいので朱い合弁花のように顔から盛上って見える。その唇が次のお仕置の痛さを予想してピクリピクリと痙攣けいれんした。

エミがユカに代って腕縄を引こうとすると、
「エミちゃん、俺にやらせてくれよ。今度の芝居で皆を吊す役は俺

だからな。吊上げ方の稽古をさせてくれ」

エミは仏頂面で縄を上村に渡した。

「後手の腕だけで吊るすんだから、その積りでそっとやらないと腕を折ってしまうわよ」

「心得てまさあ」

上村が腕縄を少しずつ曳いた。背中で縛られている珠子の腕が少し上へ吊上げられる。そこで縄は、ぐっと緊張した。上村は両掌にかわるがわる唾を吐いて、縄に掛けて来た抵抗感を楽しむ様に力を入れて引張った。

案外、縄は軽く引けた。

腕で吊上げられる代りに、珠子が踵を軽く浮かせたのだ。

それならというように、更に、ぐうっと引張る。

珠子は腕を背面でW字型に組んだまま、くっ、くっ、と踵を上げた。しかし、悲しい哉、それには限界がある。すぐ珠子の全身の重量は爪先だけに掛ってしまった。小さな爪先が小刻みに震え、親指の腹は稽古場の床にのめり込んで、白い指先を丸く捻げた。エミが足の平にまで縄を打ったので、すっかり露わになった白い足裏にまで、黒い紐がキッチリ掛っていた。土踏まずの所を強く縛られて、そこが痛々しく細くなっている。わざと緩めて繋がれた頭髮の縄も、大分直線に近くなっていた。

ぐっ、ぐっと上村が段階をつけて小刻みに縄を曳く。そのたびに後手の手首が三耗か五耗ぐらい宛、白い背中を滑って上って行った手首が、ちぎれそうに細くくびれて、縄目が半ば埋まっている。

「ヒイッ。チーッ」

遂に赤い合弁花が、かすかに開いた。蓮の花が開く時、かすかな

音がするように、固く閉じ合わされた朱唇が開く時も、低い地を這うような悲鳴が伴うのだ。

「チッ、チッ。ヒイッ」

排気が狭い歯間と唇間を通して来るので、泣声はシューッというように聞えた。

痛さに耐えかねて、珠子は首を右の方に傾けながら前に倒した。それにつれて背中も倒そうとしたが、頭髮縄がピンと張って珠子の胸は微動も見せずに反ったままだった。

指の先はまだ僅かに床に触れていたが、珠子の全身の重量は、ヒシヒシと手首に喰い込む縄目で吊上げられていた。

苦痛の余り、足をバタつかせようとしたが、太腿から土踏まずまでギリギリ巻にされているので、それは不可能だ。かえって身体がくるりと四分の一回転して斜向きになってしまい、見物者を徒らに喜ばせただけだった。上村は今まで背を見せていた珠子が、三角形に尖った胸の尾根を見せたので、面白がって又、三耗ほど綱を曳いた。珠子の身体は全然、持ち上らなかったが、苦痛はそれだけ加わっていた。

「ウッ。ウッ、ウッ、ウッ、ウッ」

嗚咽しながら珠子は、顔をのけぞらせた。

白い肩に喰込む様に密着していた拳が緩んで、十本の指が白い芋虫の様に別々に伸び縮みし始めた。自由に動かせる唯一の部分であるそこを、充分運動させる事によって、身動き出来ず吊下っている我が身の苦痛を少しでも忘れようと、可憐な犠牲は無意識に試みているのだ。

顔をのけぞらせたので頭髮縄が又、緩んだ。

もう一度、上村が縄を曳くと珠子の手首が五耗程ずり上り、身体も三、四耗、吊上った。珠子は吊上げられながら、苦痛に耐えるため肩をくねらせ身体をひねった。すると、宙吊りのままくりと後向きになった。上村の目に烈しく波打つ胸が映る。しかし、それは一瞬で、頭髮繩に曳かれて珠子の身体は又、元に戻った。

「ヒーツ。ヒーツ。ヒーツ。ユ、許シテェ」

珠子は本格的に泣出した。泣くたびに白い咽喉の筋が怒張して、その部分の首輪が一層、締まって見える。手首から首輪の下へ通した縄が背骨の溝に密着したまま泣声と共にかすかに震えていた。縛られていない肩、胸、背中のすべてを、動かせる範囲内で精一杯、動かして珠子は号泣した。号泣しながら一層、吊上げられて遂に親指の尖端の表皮まで床から離れた。

時計を見ていたエミが、初めて答を珠子にピシリと当てた。

「よし。お兄さん、下して。偉いわ、この子。始めてなのに五分、耐えていたわ」

その日で責めの稽古は一旦、終った。一週間ばかり珠子は栄養を摂られ、充分休養させられた。若い上に、腺病質の姉と違って、もともと健康で性格ものんびりしている方なので、珠子の身体は直ぐ元に戻った。肌も白くツヤツヤ光り、肉附きもムツリした堅肥りの、見るからに健康そうな身体に……。

高倉は毎日、珠子の肉附きの回復ぶりを測っていた。

小屋入りしてからは楽屋裏の細々した用をさせられたり、メーカーヤップや着附を習ったり、裏方の仕事を見学したりして過した。踊りの練習も少しやった。暇に任せて自由契約の普通ショーの踊子か

らタップを習ったりした。

それにも飽きると高倉から許可を貰って客席へ行ってみた。

「客席からよく見ておいて、自分が舞台へ出たら、どういう風に演れば踊りでも芝居でも効果が上るかを研究しておくのだぞ」

稽古以外の時にもしている、手足の鎖を外し乍ら高倉が言った。

「お前は奴隷なんだ。逃亡奴隷は刑法上、どんな刑罰を受けるか知っているだろうな」

「ハイ。逆磔か石臼の刑です」

「よし。どう誤魔化したってお前が奴隷である事は、役所と奴隷市場の戸籍簿に、ちゃんと登録してあるのだから判るんだ。十年、ここに勤めていたら俺が自由民にしてやるから、それまで逃げようなんて考えちゃ駄目だぞ」

「ハイ。よく解ってます。先生」

客席に行つて最初は前の方の席で見っていた。ショーの最中で、珠子にタップを教えてくれた普通ショーの三人組の踊子達がサンバを踊っていた。奴隷の多いストリップパーと違って、普通ショーの踊子は皆、自由民の娘なので、踊りも潑刺として活気があった。三人の内、二人までは珠子より一つ年上なだけだった。もう一人はトリオのリーダーで、二十三だという話だったが、脚の筋肉がこぶの様に逞ましく盛上っていて、外の二人と同じぐらいに身体は若々しく、踊りも伸び伸びとしていた。諦めてはいても羨しかった。三人とも奴隷にして苦しめてやりたい様な気が、しきりにした。

休憩時間に場内燈が点いて明るくなると、珠子は自分がもうすっかり売出されている事を知った。舞台の両側に大きな写真が何枚も掲げてあった。「金の城」の誇る明日の明星などという大文字

が目に入った。皆、珠子のアップ写真だった。奴隸市場から連れて来られて間もなく、メーカーアップだけされて撮られた、手鎖足鎖の写真がある。踊っている所もある。磔や逆吊りや石抱きの訓練を受けた時に、メーカーアップされて撮られた写真もある。

「宣伝に使うんだ」

と高倉が言っていたが、こんなに派手に使われているとは思わなかった。ポスターやプログラムにも珠子の事は美辞麗句で予告されていた。皆、あの新鮮な目をパッチリ見開いた顔を正面に向けた写真入りだった。珠子は顔を上げる事が出来なかった。

通いの文芸部の片岡の声で、次の芝居までの幕間を利用して専属の踊子の紹介をすると告げた。珠子は慌てて立上った。日中なのでまだ疎らな客が皆、自分を見ている様な気がした。

下手の袖へ行くと、エミ達がバタフライや腰布一つで阿藤達に縛られていた。珠子が行くと上村がすぐ真赤な幅広いリボンをしていて、珠子を手招きした。



舞台では仲井が前口上を述べていた。音楽に合わせて、後手に縛られたエミが踊り乍ら出て行った。両腕が背中で逆M型に組まれ、黒い紐が肉付きのいい二の腕の附根と中央部、肱の附根と手首にくい入っていた。手首の縄は首に吊り上げられ、一本宛、腕の附根へ

巻付けられてから、背中をZ型に通って反対腕の肱に廻されていたその縄は元と同じ筋道を辿って手首へ帰り、再び左右に水平に別れて、太いエミの二の腕の真中を、ソーセージのように、くくっているのだ。

「珠ちゃん、早く」

「私も紹介されるの？」

「そうさ、決ってるじゃないか。君を紹介しなきゃ意味ないよ」

皆を縛ってしまった阿藤達もやって来て、せき立てる。

「さ、手を後に廻すんだ」

珠子は手を後に廻すと、自然にいつも縛られる時の習慣で、その場に跪いてうなだれた。

「こいつ、可愛い娘だなあ」

上村は珠子の手首と肱の上とを真赤なりボンでキリリとりボン結びに締め上げた。

舞台ではエミが仲井の傍に立っていた。音楽が止むと、踊っている間は奔放に体をくねらせたり、後手に縛られた腕をわざと持ち上げてみたりしていたエミが、急に素人娘のような含羞を表情に漲らせた。

珠子は、紹介というのはどんな事をするのかよく知らなかったの

で、皆の間から、縛られ乍ら一生懸命、エミの動作を見ていた。

「エー、鞠井エミでございます。その名の如く色白で丸々とよく肥った娘でございます」

仲井がそう言うと、エミは丁寧に辞儀した？。

「年は」

「二十一です」

答えると直ぐ、くろりと後向きになって、縛り上げられた腕を客席に見せている。

「仲々美事な体でございます。ヒップの大きさは、うちで一番でしょう」

「何種あるんだ」

客席から野次が飛んだ。

「それでは一寸、測ってみましょう」

仲井は用意の巻尺で測ってみせた。客席がワツと笑い崩れ、エミは真赧になっていた。

珠子は立上らされて、腕ばかりか首と胸にも帯のように括けたりボンを巻かれた。胸を縛られている時、近所の売店で飴でも買って来たらしい例の三人組が、珠子を見乍ら傍を通り掛った。珠子は屈辱にギョッと胸の縮む思いがした。

舞台ではエミが上手の方を向き、身体を水平にして右脚を伸し、左脚一本で立ちながら仲井の問いに答えていた。

「お好きな責めは？」

「何でもいいです」

今度は海老責めのように胡座をかき、足の間に、ぐっと首を入れた。顔が真赧になり、床に額がつくと、逆M型に組んで縛り上げられた後手が自然に高く上の方に突き出した？。

「学校へ行ってた頃は、どんなスポーツが好きでした？」

「テニスなんか好きだったわ」

その姿のまま後向きになった。

「趣味は他にどんな物ですか？」

「映画も好きです」

一問、答えては種々ポーズを取って身体の線を見せ、視覚と聴覚の両方から自分を紹介して行く訳だ。珠子は奴隷市場のせり売り台に立たされる直前と同じ震えを感じた。上村が太息で顔にドーラや紅をつけてくれた。

古参順に久美まで紹介された時、開演一分前のブザーが鳴った。

「後の紹介は次の幕間だ。メリキヤップは、それまで落しちゃう駄目だよ」

「ハイ」

上村が折角、美しく縛り上げたリボンを惜しそうにほいた。珠子は普通ショーの踊子の楽屋に行き、三人組のリーダーの原利代に白いストールを借り、出来るだけ深く顔をかくして客席に戻った。

もう前の方に座る元氣はなく、一番後の席に着いた。後の方はガラ空きで、二、三列、奥の方に黒いコートの襟を立てた男と鳥打を目深に被った男が並んでいたが、その二人も嫌に熱心に舞台を見ていて、そっと入って来た珠子には誰も気づかない様だ。ホッとしたり。

今月の芝居は現代物だった、「黒いジェット機」という題である。

全体を真黒に塗り潰した国籍マークの一つもない怪ジェット機が或る星もない夜、グライダーの様に滑空して、日本国の高原に降り着陸する。中には三人の男と一人の美女が乗っていた。男達は何れも影の国の奴隷販売商人で、女は政府から特派された女憲兵だった。男達は影の国の奴隷資源を豊富にするべく、特に政府の許可を得て超次元ジェット機によって次元外の世界へやって来たのだ。

女憲兵は彼等のお目附役で、しかも彼等を操る黒幕の財界人の腹心であった。しかし、意外にも彼女の本質は女権拡張党の闘士で、この機会に、今度こそ影の国の実状を、日本政府に訴えようとしてい

た。

彼等は日本の美女を撰りすぐって数人掠奪し、ジェット機の中や秘密アジトで彼女等に奴隷訓練を施す。逃亡を企てた者は厳しくリンチされる。美女は彼等に協力して、のっぴきならない証拠を作り、帰国間際に日本の警察に訴えようとするが、影の国の司令塔で超次元工業テレビを使って刻々一行の行動を監視していた憲兵司令官に事前に察知され、超次元短波で連絡を受けた三人の男によって奴隷達と一緒に連れ戻され、凄惨なリンチを受ける。

これが、この芝居の筋だった。

一幕目では久美と照代とナナが捉えられて来て訓練された。二幕目ではユカと桂子とエミだが、先に捉った久美達は後の方に吊るされて、エミ達の折檻を見下していた。照代とナナは普通の後手だが久美は例の腕を真二つに折曲げられて、首の直ぐ下で水平に括り合わされた吊り姿だった。時々上村や仲井がわざと久美の身体にぶつかって、久美は吊下げられたまま横向きになったり、くると後向きになったりした。久美は大きな目をキラキラ光らせて、例の責められる毒婦のような凄艶さだった。紹介の時、身長百六十三糎、体重五十四キロと答えていた美事な身体が、その責められりと美貌とで完全に舞台を圧倒していた。珠子は自分がスターになるなんて不可能だと思った。あんな立派な身体美人が、この劇場に居るのに。

その幕の終る少し前に、珠子は手洗いに行った。すぐ幕になってドヤドヤ男達が入って来た。今、出て行くのは恥しいので、壁の落書の責絵を見乍ら、次の幕が始まるのを待っていた。スリリングなバンド演奏と共に最終の幕があらわしい。そこで出ようとした時、

又、二人ぐらいの靴音が乱れて入って来た。

「あのバラ色のツンパをはいた子かい」

「そうです」

「あれならイケそうだな。抜く方は大丈夫かい？」

「手は打ってあります。今晚ですよ」

「うん、うまくやれ。手に入れちゃえばうちの資本力で奴隷籍などはどうにでも直せるが、その前に捉ると面倒な事になるぜ」

そうして靴音は出て行った。珠子が急いで出て見ると、大小二人の男が暗い場内をカブリツキの方へ歩いて行く。

自分の席に戻って舞台に並んだ奴隷達をよく見てみたが、バラ色のツンパをはいているのは久美一人だった。珠子は何となく胸騒ぎがした。久美さんをどうするのかしら……。

舞台では、女憲兵が脱出直前に捉えられ、手錠をかけられてジェット機の中に引ずり込まれている。女憲兵に扮した座長は、冴え冴えとした美しさも特別だったが、暴れながら引ずられて行く演技は流石に迫真のものだった。制服の上から鉄のバンドを胸や腹に掛けられて、鉄鎖で四方八方に身動きも出来ぬように繋がれ、帰路を急ぐジェット機の轟音の中で男達に虐め抜かれる所も素晴しかった。

そうして舞台は、最後のクライマックスにかかっていた。

遂に影の国へ連れ戻された女憲兵が、司令官と財界の大物の前で壺焼きにされるのだった。

舞台の後には日本国から連れて来られた奴隷達が、首や手足を鎖で珠数繋ぎにされて立っている。舞台の真中には大きな硝子製の壺が壇の上に置いてある。壇の下には薪のように大きい木炭が積み重ねてあった。

男達に散々に責め抜かれた座長の女憲兵が、その壺の前で一枚宛着衣を剥がれて行った。

「ヨォ。大統領」

「待ってました」

客席は沸き立った。

暴れ、抵抗し、笞打たれ、倒され、踏まれ、蹴られ、抑えつけられながら、一枚、又一枚と脱がされて行く真に迫る熱演。

京人形のような美しい顔を深々とうなだれて動かなくなってしまう座長を、仲井と上村が腕を掴んで引き起した。胸に腹に、あの洗濯用ロープがキリキリと打たれて行った。

後手に縛られてうなだれて立っている座長のまどかな姿態を、薄いチェリー・ピンクの照明が、ほのぼのと暖かい色に照している。

上村が壺の横から丸い板を取り出した。それは珠子が瓶に入れられた時、首にはめられる首枷式、丸蓋だった。

ほっそりした白い首に大きな丸い首枷が掛けられると、客席の中から笑いが起った。

ピシリッ。

笞の音がすると座長は、くると客席に背を向けた。もう一ぺん笞打たれると、うなだれて歩き出した。首枷が前に傾いた。

壇の上で足首を太腿に、向う脛を下腿に縛りつける場面があつて座長は首枷をつけたまま透明な硝子壺の中に入れられた。首を軽くうなだれ、腹から胸は逆に反りかえっている。

壺の横には小さな波型の硝子の飾りが幾つかついていた。そこへ紐を通して首の直ぐ脇へ縄を何本もかけられて、首枷はもう動かなくなつた。蛇責めにされる浅尾の様に、座長は壺から首だけ出して

いた。浅尾と違つのは、彼女の方が色白の素晴らしい美人であることと、壺が透明で責めを受ける中の肢態を、くっきりと見せていることだ。

やがて炭に火が点けられて責めが始った。

木炭の束の中にかくしてある赤ランプが一つ宛、点燈されて、炭の山が少し宛、赤くなって行く。張りぼての炭は、電燈の熱で黒い塗装がはじけて少しずつ落ち、中から赤い色を見せて行く様になっていた。そこへ照明燈が真紅の光を注ぐのだ。照明の赤も少しずつ強くなって行く。

「ウーウ、ウッ。ウーム、ウッ。ウーム」

炭の山の赤くなるテンポに合わせて、座長は透明な壺の中で、身体を白蛇の様に妖しく、くねらせた。美しい顔を苦痛に歪め乍ら、のけぞってはうなだれ、のけぞってはうなだれる。そのたびに房々した黒髪が乱れて、白い額や頬にハラハラと振りかかる。

別の照明燈が苦悶する壺の中の動きを、じっと捕えている。巧みにゼラチンを入れ換えて、少し宛、壺焼きされるいけにえを彩る紅の色を濃くして行くので、真暗な場内で息を詰めて見守っている客の目には、本当に座長が真赤に熾った火で焙られている様にしか見えない。

「ウーム。ウーム、ウーン」

一際、烈しい苦痛の呻きが朱唇から洩れた。途端に炭火の山からメラメラと紅蓮の焰が立昇って壺の下方をなめ廻し始めた。

「ウーッ。アッ。熱イッ。あつ、あつア、アー」

壺の中で膝で立っていた座長が、その膝を如何にも熱そうに持ち上げ、あっちこっちへ置場所を移している。

焰は紅絹の布を扇風機で煽り乍ら深紅の照明で映し出したのだが座長の熱演を見ていると、本物の焰で灼かれている痛々しさ。

いつか座長の身体は真赤に染っていた。その真紅の美体を大蛇の様にのたうちまわって、呻き続けた。驚いたことに、烈しく上下する顔までが紅潮しきって、鈴を張ったような目を見張って、大粒の涙までポロポロとこぼしているのだ。バラリと前に垂れた髪の毛の端を白い歯を剥出してキッと噛みしめていた。

「ウウン。ウウン」

凄艶な責め顔が、まともに客席を向いて苦悶する。

責め場がクライマックスに達すると、微かにロクロの軌る音がして、座長を載せたまま、壇だけがゆっくり廻転し始めた。後向きになると、括り上げられた後手の指先が震え蠢き、裸の背中一面にもじっとり汗が滲み流れていた。苦痛の色を見せて豊満な体が烈しくうねる。太腿に括りつけられた足首が、縄目で細くくびれ上っているのが可愛らしかった。

苦悶し乍ら、ゆっくり三回廻って座長はがっくりと首を垂れた。

垂れた髪が首枷を覆い、後れ毛が扇風機に揺れている。

幕が下りても客席は水を打った様にシーンとしていた。暫く経ってホッという吐息があちこちから洩れて来た。珠子も酷く疲労した気持だった。

二、三列奥の、黒いコートと鳥打帽が意味ありげに目顔で背き合いながら帰って行った。何気なく見過してから珠子は紹介のある事を思出し、慌てて舞台裏へ走って行った。

(第七章終り)

懸賞愛読者原稿入選作品

零の舞踏会

彼は机を叩いた「零にするのだ」|| コルヴィッツ ||

氷見龍也

特別研究生教育の篇

◇

東京の小高い丘陵地帯の一劃に、街を一眸のもとにおさめて、綾小路旧伯爵家の宏大な邸宅がある。内部は樹立が深く、数奇をこらした邸内は公園のように噴水や石塊や古齡を経た樹木に形どられている。それは戦後、聖朋女子学園として解放された。

聖朋女子学園は高等学校システムで、十八才未満までの女生徒に演劇の基本を教育する

特殊なハイスクールだ。学園長は綾小路未亡人で、この白髪瘦身の高貴で尊大な貴夫人は、米国財団から贈与される莫大な援助をもとに、学園の隅々まで、厳格な宗教的な戒律をいきわたらせて、権威と信用のある学園を築きあげていた。

聖朋女子学園の生徒が必らず遵守しなければならぬ規律の根本にあるのは、沈黙と感謝と祈りであった。それは礼儀に厳しいとか、享樂的な場所への出入りを禁止するとか異性との交際にやかましいとか、授業が厳格

だとかいうだけのことではない。

毎日、早朝に祈禱の時間がある。生徒達は全員、寄宿舎に入っているが、朝食前に祈禱室に入って、一時間、懺悔と祈りの時間を過ごさなければならなかった。

毎週、金曜日は無言の勤行の日であった。

この日は終日、雑談は禁止され、学園内に話し声は殆んど途絶えた。生徒は強制的に啞にされるのだ。人工の啞の乙女達は、ひとりけにうなだれていった。

毎日、朝のホーム・ルームの時間には服装

や持物の検査がある。一クラスは十五名平均で、点検するのはルーム主任の尼僧の教師である。このときには、しばしば抜き打ち的に生徒の制服から下着まで検査することがあった。校舎の窓からは、各ルームに繰りひろげられる下着検査の様子が眺められる。うら若い女生徒達は、いっせいに白い下着だけの恰好になって起立し、両手を後にまわした。尼僧の主任教師は、冷酷な指で下着を一人ずつ点検した。

告解室というのは懲罰室でもあり試験ルームでもあった。この学園には答案用紙をくばって書き込ませるといふ普通のテストはない。試験の週になると生徒は一人ずつ告解室にはいつて口頭試問を受ける。こういう試験の型式が如何に生徒に苦しい圧迫感をあたえるものかは説明の必要もない。質問に追いつめられ、いじめられて、生徒はくたくたになった。畏怖と罪悪感だけが可憐な制服の乙女を緊めあげた。

象徴的な一例をあげれば、この学園には、各ルーム毎に黒色の革製の鞭が備えつけてあった。それはかなり太めの長い鞭で、握りには銀線が巻きつけてあって、先端は非常に細く鋭く尖った鞭だ。教鞭とよくいうのが、実

際に革鞭が備えつけてある学校は稀だ。この鞭の手入れをするのは、係にあたった生徒自身である。自分達を苦しませる鞭を自分達の手で念入りに手入れをしなければならぬ光景は嗜虐的だ。

「きょうは、あたくし、鞭のお当番なの」「わたくし？お靴を磨くお当番よ」

生徒達の会話も自然に被虐的な色あいを帯びる。靴の当番とは、教師の靴を磨く当番のことだ。その生徒は教員室をまわって教師の靴を磨く。聖朋女子学園の教師は、教科面は尼僧の教師で、実技面は外国人ばかりだ。だれも生徒に靴を磨かせるときに、わざわざ靴を脱いで渡しはしない。教師の足許にうずくまって丹念に靴を磨く女生徒は、終始無言の圧迫感に押さえられる。教師の眼に射すくめられはしないかと、生徒はうかつに頭をあげることもしない。

こういうことが、この学園の宗教的な諸規律とどう関連しているのかは判然とはとらえがたい。しかし嚴重な身許調査と父母面接を経て入学を許可された生徒は全員、邸内の寄宿舎に入っていた。生徒は週一度の外出日を除いては、学園から一步も外に出られないのだ。寮生活は設備も整って自由だ。遊戯室も

休息ルームもピアノ室もテニス・コートもプールも完備している。寮生活は自由で、生徒達は一日の緊張から解放される。しかし、その自由は裏返えせば、学園の厳格な校風の吹き抜けのようなものであった。生徒達は、一種の社会から隔離された状況に陥いつているわけだ。尼僧院に似た規律も行動も、目的はどうであらうと、だれもがしていることであるなら、なにも不自然ではない。それは例えば、旧軍隊の内部がそうであった。ミンミン蟬と忠君愛国とは何んの関係もない。少くとも忠君愛国の精神はミンミン蟬や相互ビンタがなくても養成されるべきであった。しかしそれはあったし、疑問を抱いても手のうちようはなく、そのうちに疑問を抱く眼は次第に失われて、それは当然のことのように認識されていく。

聖朋女子学園が軍隊と同じであったというのではない。しかし、どちらも社会からは隔離されており、そういう隔離状態のもとではありうべからざることもあたり前のこととして通用するし、そこに疑問の眼をむけるといふことは殆んど不可能になっていくものものうであった。

もっとも、この学園の生徒数は三学年を通

算して数十名に過ぎなかったし、その狭い門をかくぐって入学を許可されるのは、大部分、世間知らずの上流家庭の子女であった。世間には、ふしだらな俳優養成所まがいのものが多いからというだけのことではない。俳優になるならぬは別として、この学園には、学業素行ともにAクラスの基準に達したものは、凡て学園から奨学金を援助されて海外に留学できる特典があったし、さらにこの学園に学ぶうちには、自然に高貴な精神を育ぐまれて、上流社交界に登場しても恥しからぬ教養と作法と身だしなみを兼ねてもらえるからであった。しかし、生徒規律は、生徒が上流の家柄のものであろうと富裕な家庭のものであろうと、厳格さをゆるめはしなかったし規律に違反した生徒は容赦なく処罰された。生徒も、というよりは生徒の父母達は、その厳格な校風を承知の上で、入学を求めたのだ。後になってその厳しさに泣き言をいう必要はない。

このことは、学校経営上からいえば、生徒の数が少ないことは、教育と統制を容易にするし、形式的には学園を存続させて本国財団からの援助を絶やさなければいいので、生徒からの授業料収益や寄附金をあてにするよう

な普通の私立学校とは異なるのだから、生徒数をふやす必要もなければ、生徒に寛大である必要は少しもないということだ。むしろ、校風が厳しければ厳しいほど、上流学園としての権威と信用は冴えかえった。

この学園の雰囲気は、だから、荘厳な中世の教会堂によく似ていた。華麗な焼絵硝子^{ステンドグラス}が重々しい列柱を華やかに色彩するが、教会堂の内部にたちこめるのは、あくまで宗教的な荘厳な雰囲気である。この学園のように、厳選された高貴で清純な乙女達が色彩りを華やかにする学園は少ないし、ストイックな静寂感が厳肅にはりつめている学園も少ない。

水原淑子は、この学園で無事に三年間を過ぎた。無事に、ということとは、楽しいこともつらいこともあったが、特殊な事故もなく、ということだ。彼女は、紀伊方面で手広く製材会社を経営する富裕な家庭の娘だったが、母が亡くなっていない。父は、母のない娘の境遇をおもんばかって、安全で権威のある聖朋女子学園に彼女を預け入れたわけだ。水原淑子自身は、そのことで特別な心境の変化をきたすというようなことはなかった。カトリック系の関西の女子中学時代から、彼女は舞台や音楽に憧れをもっていたし、聡明で素直

な少女だった。聖朋女子学園の厳格な校風に、ときに辛さを覚えることはあっても彼女は、それはそういうものだということのように特に固定した不満をもつこともなく、従順に受け入れていた上に、演劇的な素質が次第にひらめきだして、つらさをカバーして余りある楽しみと夢を、学園の勉強に注ぐようになっていた。ことに彼女が好んだのは、音楽とバレエである。どちらも、ただの楽しみではない。苦しみと楽しみが交りあったものだ。しかし、苦しみの末の楽しみは快楽度が深い。

十八才になったとき、彼女は沈んだ知的な美しい女生徒に成長していた。眉はくっきりとして、黒い大きな瞳は長い睫毛のかげにしつとりと見開られていた。黒髪は艶やかに背にかかって、唇は柔らかだった。頸から胸へかけての線が繊細な陰影をかたちづくって、すんなりと均整のとれた肢体は、気品のある端麗な印象を漂わせ、秋の、華やかだが一抹の淋しさの影をはいた姿は、輝くばかりに浮かびあがった。

しかし、美しくなったということだけでは変化する運命の一つの序曲にすぎない。その年が卒業年度にあたっていたということも、変化を予告するだけのものだ。変化は、その

年から聖朋女子学園に、特別研究生制度が設けられて、彼女と彼女の同級生である新村節

子の二人が、第一回の特別研究生に選抜されたことから生じた。

「おき采田なの」

「きょうはわたくし
芝居の」



特別研究生とは、純粹に演劇の勉強を貫らぬいて舞台俳優の道を進む学生である。それは演劇スクールとして特色をもつ聖朋女子学園の代表者となるわけであった。

彼女が特別研究生に選抜されたこと自体は彼女の責任ではない。しかし、彼女が特別研究生に選抜されたことを受け入れたとき、彼女には誇りたかい榮譽と重大な責任が生じるようであった。彼女達の双肩に、聖朋女子学園の存在がかけられている、と綾小路学園長はいった。「あなた方は優秀な生徒として、榮譽ある聖朋女子学園の特別研究生に選抜された。学園の関係者一同も、あなた方と歎びを共にする。しかし、これは決してあなた方が單純に喜ぶべきことではない。特別研究生に選ばれたということは、榮光の座への第一歩であるにすぎない。もしあなた方が絶えざる精進を怠りミステイクを犯したならば、それは聖朋女子学園の光輝ある名声の失墜をもたらすであろうし、また、あなた方が特別教育期間を経てアメリカに留学され、更に研鑽を積み重ねるとき、あなた方は、あなた方と同様に日本の演劇の勉強に励む全女性性の代表者として注目されるのだ。立派に代表者としての使命を全うし、あなた方御自身も、榮えあ

る舞台芸術家として成功される第一歩として特別研究生の教育期間中、いままでの幾層倍かの努力に努力を傾注されることを、聖朋女子学園の一同が願っている」と白髪の老貴夫人は力をこめていった。

老貴夫人の言葉に偽りがあつたとはいえない。誇張めいた箇所はあつても、必ずしもそれは誇張とはいえなかった。しかし、いずれにしても、水原淑子は、いつになく底深い感動にうたれ、瞳を輝やかせ、唇をきつく結んで頬を紅潮させながら、厳しいであろう特別教育を、しっかりと果そうと心に誓つたのだつた。けなげにも誓つた、というべきであろうか。聖朋女子学園の普通コースでさえ、ほかの高校に比べて厳格さは比類がない。さらに努力の要求される特別教育が、いっそう厳しい勉強の毎日であることは十分に予想された。彼女は、ひしひしと身のひき緊まる緊張感に包まれ、そのことは新村節子も同様であつた。

この緊張感に包まれた誓いが、どのような思いがけぬ道に彼女達を運び去ることになるか、なにも彼女達は知らなかった。勿論、それは無理のないことであつた。誰れも、綾小路学園長さえも気づかなかつた。そのことを

知っていたのは三島毅彦だけである。それにしても、人生の波瀾というものは、後になつてみれば、大部分は唐突にきたものでないことが理解できる。いかに注意しようと、注意が及ばないだけのことだ。

水原淑子にとって波瀾の先触れとなるものは、彼女が三年生になったとき、それまでは尼僧と、外国人の教師ばかりであつたところへ、初めての日本人教師として、綾小路夫人の甥にあたる三島毅彦がはいってきたことであつた。三島毅彦は医学者であつたが、五年間にわたつて演劇研究のために海外へ留学していた青年劇作家だ。彼は帰朝すると間もなく聖朋女子学園で教鞭をとるようになった。彼は背が高く、感じやすい知的な顔と、洗練された物腰と、最新の知識を豊富にとりいれてきた新進の演劇人であつた。

この三島毅彦が聖朋女子学園に初めて教師として登場したとき、生徒の間には、一種異常なセンサーショナルな興奮がどよめいた。社会から隔離された女の園に、独身で魅力的な青年教師が現われたのだ。女子高校に学ぶ女学生の好奇心は薄汚ない。情緒もなければ健康さもなく、無細工な露骨だけが醜くあらわれる。しかも聖朋女子学園は、さらに

特別な隔離状態にあるのだ。それが、普通の女子高校生のざわめきより一オクターブも二オクターブも高い興奮を呼び起したことはないまでもない。多くの女生徒が彼に胸をときめかせ、そのときめきは波うつようにひろがつた。

水原淑子も例外ではない。しかし、彼女はそのことをあからさまに外に現わすことはしなかつた。秋の愁いの翳がさらに深く落ちかかつたというふうな現われかたしかなかつたが、彼女は誰よりも確実に、三島毅彦に魅了されていったのだ。

しかし、そのことが、普通の女学生のような幼稚な見境いのない衝動だけのものではあつたとはいえない。彼の教え方は如何にも新進芸術家らしく情熱的で、きびきびとしていた。叱責にも遠慮がなかつたし、賞讃は優しい微笑として示された。若い高校教師によくある嫌味たらしいことは一言もいわない。声は綺麗であり授業には熱心だった。彼が一歩がルーム一杯に漲ぎつて、生徒をぐんぐん惹きつけた。それが圧倒的に生徒を魅了した。そして、この対称はいっそう彼の魅力をたかめたのだが、普段の彼は素気ないほど端正な

冷たい感情的な距離を生徒との間に置いていた。とりすましていくというのではない。洗練された冷めたさで、故知らぬ虚無的な驕りが、その彼にはみられた。虚しさの影のさす情熱ほど女を魅了するものはない。

淑子は憂愁の内側に、毅彦の表情に一喜一憂する思いつめた心を秘める生徒となった。

孤独が孤独を呼びあつたというのか。彼女は毅彦に叱られても賞められても、胸が息苦しく微妙に震えるのを感じた。彼女は、それをおくびにも出さなかったが、彼女を恋する女生徒の中には、彼女が冷淡になったと、うらみがましく非難するものがでるようになった。しかし彼女は、いつもと変らぬ柔らかな優しい微笑を浮かべながら、こういった。

「おばかさんのようなこと、おっしゃるものじゃないわ」

「うそ、うそ」

「あら、こんなにしてあげているのに。ひどいことをおっしゃるのはいや」

外界から閉ざされた、うら若い少女達の世界に、同性愛が半ば公然と行われていたとしても不思議ではない。学園側も、それを黙認していた。しかし、彼女はついぞ同性愛には積極的な主体となったことがなく、ときには

それは学園の習慣だからと、やむを得ず受け入れることがあつた程度にもかかわらず、彼女を慕う少女に内心を指摘されると、胸を恋の不安と期待に高鳴らせて、思わず毅彦に対する思慕をぶちまけるように、情熱的な言動を相手の少女に注ぐことがあつた。水原淑子の思慕の情が、世の常の女学生の淡い初恋として終らずに、蒼白い業火に焼かれ、身悶えして悲嘆の快楽に曳きずりこまれていったのは、この彼女が特別研究生に選抜されたことと、三島毅彦に対する思慕の情が燃えあがつていたことが結びついたところに生じた。

……綾小路学園長は、二人の特別研究生にこう告げた。

「特別研究生の教育主任として、あなた方の一切の面倒をみてくださるのは、三島先生でいらつしゃいます。三島先生は長いあいだの留学からお帰りになられたばかりで、外国の日常習慣、演劇事情に殊にお詳しくしていらつしゃる。お忙しい先生には御苦労をおかけするわけですが、あなた方は、先生のお言葉によく従い、よくお教ををまもって十分、榮譽と責任を汚さぬよう、はげんでくださるよう希望いたします」

まだ、春の浅いころのことであつた。特別

研究生に選ばれた二人の十八才の美しい女生徒は、寄宿舎を出て、学園の続きにある綾小路私邸内の離れ洋館に移った。彼女達は二階にそれぞれ一室ずつ専用の部屋をあたえられた。新村節子は、カトリック教徒の裁判官の家庭に育つた。曠のよい控えめな態度を自然に身につけていたが、明るい陽気な性格は失われていない。

夢に夢が重なって現実になつたというふうな、水原淑子が喜びに満ちた眼をみはつたのは、その翌日のことである。しかし、それは幸運を感謝すべき夢ではない。そのとき淑子は単純に歓喜したが、運命の輪というものがあるとすれば、水原淑子と新村節子を蒼白い業火に身悶えさせる運命の輪は、そのことで、がっきと音をたてて喰いあわさることになったのだ。

彼女達が離れ洋館に移った翌日、部屋の整理の後片付けをしていた淑子の部屋に、新村節子が飛びこんできて叫んだ。

「三島先生が、この一階におはいりになるのですってよ！」

淑子は、あっ、と思わず驚きと喜びに満ちた声をあげて、節子と一緒に窓辺に寄つた。彼女は眼をみひらいた。毅彦の夥しい書籍類

告白 倒錯、女装化への悲願

織田 四 平

私が生れて始めて、母の姿見（鏡台）に向い、母の使っているカモジを手拭いに挟んで頭髪型を女性らしく造り、母の単衣を纏い、女装化らしい姿でニンマリと唇をほころばせたのは、中学三年生の時だった。

元来、虚弱な体質のため、親しい友人もつくれず、学校から戻ると独り読書——図書館から借り出した文学書を部屋にとじこもって淋しくひもとくといった私だったが女装癖というか、女性化志願というか、誰れに教示された訳でも、何かによってヒントを興えられた次第でもなしに、本能的に鏡に向うようになったのが当時だった。私は先天的な倒錯性格所有者なのだろう。

いま、私は三十七才、北海道の地方会社としては一流のある企業体の常務取締役のポストにある。二年程以前から肥りだし、それも腹がせり出してきて、体量は二十貫を軽くオーバーし、一見、堂々たる？体軀になっている。しかし、日常、背広の内身に絹のパンティとスリッパを着用しているということは、よもや、私以外の誰一人知

るものではない。

私が奇を求め、始めて男娼なるものに接したのは、終戦後、昭和二十四年の五月頃であった。その頃、新宿駅附近には、和装洋装いり混って、多くのオンナならざるオンナが人目をひいていた。私がこの陰花物を求めたのは、女装している同性の生態を審らかに知りたいという好奇心と、自分もそのような完全な女装をしたいという願望が自ずと足をこの巷に運ばしたのである。

当時、私は仕入れ担当の課長だったので毎月一回上京していた。新橋は高踏過ぎ、上野は俗に流れ過ぎ、私にとっては新宿の女性？が、一番安易な気持で接し得られた。

私はあの時、年令二十五才という、元、洋服屋の職人だったという身長も私とほぼ同じぐらいの女を選んだ。当時、私は二十八才。私自身に似通った感じの者を選んだのも、相手に自己を見出したいと願う潜在意識の現われだったのだろう。

彼女？は私を、T芸能社という看板の掛

を積んだ中型トラックが漆黒の乗用車に先導されてきて、乗用車から長身の三島毅彦が素早く降り立ったところだった。毅彦は、まだ独身だった。どこに住もうと束縛される事情はない。しかし、それは彼女には恐しく、まばゆい状態の激変だった。

淑子は一瞬、夢見心地で呆然と立ちつくした。我にかえたのは、ふと、新村節子も瞳を輝やかせて息をつめたように毅彦をみつめている風情に気づいたからだ。

「大変だあ」

と淑子は、さりげなく窓辺を離れていった。

彼女達の教育主任が、彼女達と同じ洋館に住むということは、いかに学園側が特別研究生に期待をかけ、彼女達の教育に力をいれようとしているかを如実に示すものであったからだ。淑子は、そのことを考え、感情の平衡をとり戻して気持をひき締めようとした。

しかし、新村節子は、その淑子の声をききながして、

「先生……」

と無邪気に弾んだ声で毅彦に呼びかけた。節子は窓から身を乗りだして、ひらひらと白い手をふった。毅彦は二階を振り仰いで白い歯をみせて微笑した。淑子は、とまどっ

ったシ、モタ屋風の洋館へ案内した。

フラワー、彼女はそう名乗っていた。丁度その晩はパリ祭に当たっていたところから、フラワーは私に御馳走するといいい出し私を待たせておいて、酒やビールや若鶏のカラ揚げなどを外の店から買って来た。

その夜、私はフラワーから、色々のことを教わった。私の女装願望欲が堤を切って流れ始めた。私はフラワーに囁いた。

「ボクに着物を貸して」

フラワーは私をマジマジと眺めて、幾度も念を押した。

「ホント？」

私はカツラを借り、彼女に手伝ってもらって化粧をした。白粉と口紅で粧われた私は、私であって私でなく、正に一輪の陰花であった。私の声は自ずと女性的になり、フラワーのそれは男性的な地声に変わっていたのも奇妙な現象であった。

それからの私は、月一回の上京日が子供のように待ち遠しくなった。

三年程経って、フラワーは関西に流れて行き、私も部長に昇任した。親の遺してくれた株券がモノをいい、入社後、トントン拍子にポストは昇り、若手ながらやり手だという、業界では評判の私も、家庭では余

り芳しくない存在といえよう。妻もさぞ嘆かわしく思うであろうが、経済的には恵まれている方なので、妻も、アクセサリーの立場にも、諦らめて甘んじているのかも知れない。

北海道という北国にも、文明の花は咲いたり、しぼんだり、散ったりする。花は多彩だが、さすがに陰花物という人口花の咲くのは遅かった。だが、三年程以前に、この種子が北海道まで渡って来たのだ。札幌の某一流キャバレーの経営者が女装の若者を集めてスタンド・バーを開業した。私はその店に時折立寄る。そして、女装して堂々と生活出来る彼女？らに羨望を強く感じている。生半可な智性と生活力が、却って私の人間性を抑圧して、妻にすら内密に女性用下着を購め、独りひそかに着用して僅かに自らを慰めているこの私。

一度でいい。全然未知の土地へでも行って完全に女装して街を歩き廻ってみたい。堂々と人混みの中を優歩してみたい。この意識と願望が、片時も私の頭から去らないのだ。今の私にとってそれが絶対不可能であると、ハッキリとわかり切っているながらも……。

(おわり)

た。理由のない、とまどいではない。それは恋する者が出し抜かれたときに感じる、とまどいであり、節子の無邪気さのなかに、無邪気をよそおった強引さを認めた嫉妬のためらいである。

「お手伝いにいきましょよ」

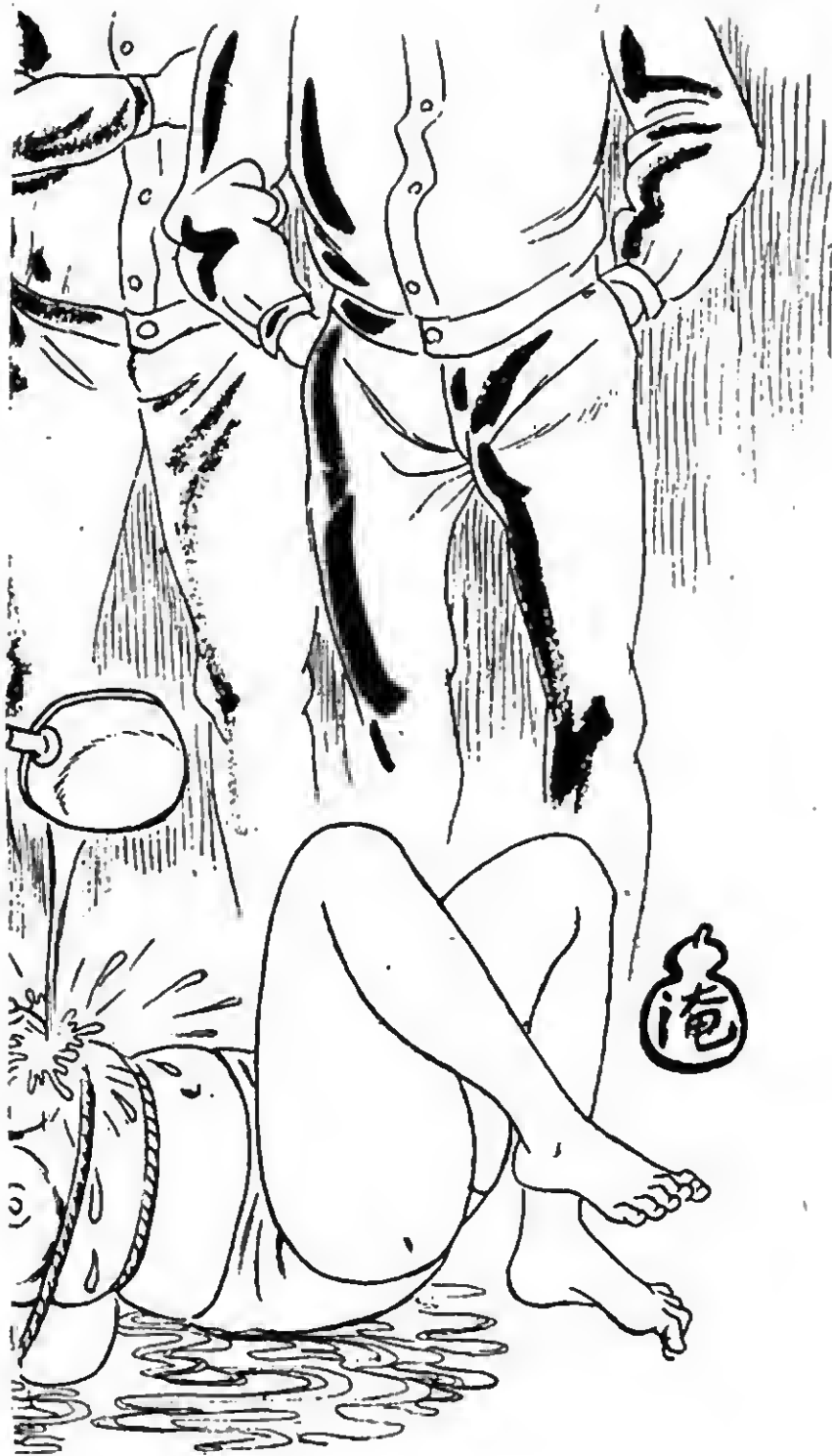
という言葉が、その淑子に投げつけられた。節子は委細かまわず身をひるがえして、一散に階段を駆け降りた。淑子は臉をあげらせて続いて階段を走らずにおりていった。

……だから、二人の特別研究生は、三島毅彦が、二階を振り仰いで微笑した直後に、なぜか不意に突きあがるような胸苦しい吐き気に襲われて、トラックの陰で苦しげに眉をひそめ、胸許を押さえた姿に気づかなかった。それは、二人の清純な女生徒をみたためである。勿論、なぜ毅彦が自分の姿をみて吐き気に襲われなければならなかったのか、その吐き気に苦しげな毅彦に気づいたとしても、彼女達には理解できないことであった。篝火の点火は、そのことに示されていた。火の粉が散ったことを誰も知らない。

(次号へつづく)

特 高 拷 問 史

庄 田 美 起 夫



濡れた下着

娘が身づくろいして出てゆくと竹刀を杖にした憲兵中尉は、おまるの中をのぞき込んで部下に言った。

「もう一人つれてこい、一寸量が少いな」

引っぱって来られたのは、まだ子供のようなベビードールであった。あどけない顔は涙にぬれて身体がコチコチに緊張している。

「どうだ、まだしたくないか、今のうちにしておかないと、また時間がなくなるぞ」

少女は聞えないのか、虚脱した目を天井にむけて、ブルブルふるえて息をはずませている。

そのとき憲兵伍長の一人が男を責めるムチをふりおろした。

ビシリ……。

ものすごい音がして男のあげる悲鳴がせまい部屋の中に反響した。

その瞬間、少女は

「キヤーツ」

甲高い絶叫を挙げて全身を硬直させた。と娘の足もとへ水のしたたる音がして、少女は真青になってふるえている。

今にも気を失って倒れようとするところで



あった。少女をつれてきた若い憲兵上等兵があわてて彼女を支える。少女は上等兵の腕の中で、まだシルシルという音を洩らしながら足もとの水たまりを大きくしていった。甘酸っぱい湯気の匂いが漂った。

「よっぽど我慢してたんだなあ、たまりにた

まったもんだ」

少女は緊張のあとの緩るみで、ぐったりとなって全身の力を抜いていた。

「世話のやける娘だな。……一体いつから出さなかったんだね。どれ、一つ男を呼び出して後始末をさせるか。オイ、娘をそこへねか

せてKを呼んでこい。そこじゃない、床の上へだッ」

ソファの上へのせようとしていた上等兵はあわてて少女を床の上へおろした。

○

Kは床の上にぐったりとのびている少女を見ると、キッと中尉を見上げた。

「この人にまで、こんなことをするのですか……ひどい……」

Kは少女のそばへかけよって、両手で抱き起した。

「ちがう、ちがう。まだ痛い目には合わせていないよ。ずい分我慢してたんで、ここへ来てから出しちまったんだ。何か文句があるんかい。お前さえ、早く口を割れば、この人だって、こんな目に合わずにいられるんだ」

Kは目をそらした。

「くそッ」

「ばかめっ、非国民」

中尉の絶叫にKはガクンと肩をおとした。昨夜から何度となく友人たちの拷問を見せつけられて、もうガククリときているのだ。

「まだ、お前には痛い目に合わせていないがもう一日だけ余裕をやるう。その代り今日はその娘の世話をしやってもらおう」

中尉は殊更、優しそうな猫なで声でいった。

「その子、いつまでも、そのまま放っておくと風邪をひくぞ」

じつとりと水分を含んだ下着は身体にべりついて冷たそうであった。

「スカートをとってやるんだ。そうそう、それからズロースも……」

Kは少女を裸にするにはしのびなかった。彼の目の前に、グシヨグシヨに濡れて肌にくっつきはりついたシュミーズがあった。

少女のうすいかげろい、ほのかな体臭が、こんな場合にでも、何かおかし難い貴重なもののように、そこはかとなく漂っていた。

「きれいに拭いてやるんだ。さあ、この手拭でだ」

残酷な命令だった。

うすっぺらな日本手拭一本で床の上を拭けというのだ。Kが躊躇していると、中尉が伍

長の手からムチをひったくって、床の上を力まかせに殴りつけた。

「おい、お前は裸になれ！」

Kは耳を疑った。今日は何にもしないというのに。

「早くしろ、痛い目には合わせはせん。が、これで許されたと思ったら、大きな間違いだ

ぞ、こんなこと位で……」

Kはとうとう猿又一つの裸にされてしまった。彼はゾクゾクと寒さにふるえた。

「どうだ、寒いだら、寒さ凌ぎに、その手拭で床を拭き清めろ」

Kは言う通りにするより外はないと観念した。水たまりに手拭を当てて吸わせると、部屋の隅に置いてあるおまるの中へしぼった。

「ひどいわ、ひどいわ」

Kのそんな姿を見た少女は、身もだえして泣いた。その娘のすすり泣くのを見て、Kはとうとう自白の決心をした。

ひしやくの水

四肢を固定され、あおむけに縛られた女は、ズロース一つにむかれていた。乳房がぶるぶるふるえて鳥肌だっている。女は生理期間中らしく白いズロースの下に黒いバンドがすけてみえている。

「いいか、寒いだらう。言えば暖かくしてやる。言わなければ、もっと冷たい目にあうのだぞ」

女はキッと唇をつぐんだままだ。一言も言うまいと歯をくいしばっている。しかし、これから何をされるのか、それが恐ろしいの

だ。覚悟はしているが、何をされるのか、それをじっと待っているのは、たまらなかった。

刑事はバケツに水をくんで来させた。くみ置きに冷たい水だ。

「さあ、いいか、いいだらうな」

凍傷させてはいけないので、刑事は水を盛ったひしやくを注意しながら女の身体の上へ持ってゆく。腹の上で徐ろに水をこぼす。

徐々に、徐々に、ひしやくの水は女の腹の上にこぼれる。女は水の冷たさにガクガクと身をふるわせ、思わず知らず声を出した。

「寒い、ひえッ、寒いッ、冷たいッ、ああ」

やがて女の腹の上をつたった水は、ボタボタとしずくを床の上へたらしめた。ズロースの方へ糸を引いた水は、吸取紙にすわれるようにしみこんでいった。

「ああッ、寒い、寒い……」

濡れた下着は、女の体温を遠慮えしやくもなしにドンドンと奪っていった。肌に粟がたつというようなものではなかった。こんなことなら、一思いに水の中へ浸けられた方が、いくらましかなれない。なまじっか、そろそろと水をかけられるものだから、その冷たさ寒さといったらなかつた。

ガクガクと全身をふるわせて寒さに耐えて

いる、そんな女の姿を、刑事たちは頬に冷笑をうかべて眺めていた。

「冷たい、ううむ、ウウウ、ウフフ」

「寒いだろう、冷たいだろう。さあ言うか、言うか。言えば許してやる。暖めてやる。すぐ暖かくしてやるぞ」

ひしやくを手にした刑事は、女の耳もとへ口を寄せてどなる。しかし、ひしやくの水は徐々にそのしずくを絶やさないう。

水は腹から胸へ、胸から首すじへと、しずくをたらしながら移動してゆく。

女の唇は紫色に変わり、足首をしばられたままの足は、その指先をピクピクとけいれんさせながら、次第に皮膚の色が蒼ざめ、白くなり、灰色を帯びてきた。

ポタリ、ポタリ、ポタリ。

床の上にたれる水の音が、部屋中へ陰惨な響きをつたえる。女が、身体をよじった。

「ああああ、く、くるしい。いたい、いたいわ。いた……ムウ、ウウウ」

女は手足を固定されているので、自由な胴体をよじる。腹の上にたまった水が流れて背中の方へ回る。冷たさを越して、彼女にはすでに痛く感じるのだろう。

「痛い、そうか、痛いだろうな。身体が駄

目になってしまふぞ、冷えきってナ。言ってみろ、言え、言えッ」

「し、しらない。……いた、いた……、ううむむう……」

刑事は、やけになって、ひしやくの水を女の身体に浴びせた。

女はお腹をふくらませたり、へこましたりして、大きくあえぎ出した。寒さにふるえていたのが、今では身体の奥底まで冷えきってしまったのだろうか。もう、寒いとも痛いとも言わなくなったが、冷たさに抵抗するように、あえぎは次第に激しくなった。

指先が凍えそうになった刑事は、ひしやくをバケツの中へほうり込むと、両手をズボンのポケットに押し込んで言った。

「おい、大分参ったらしいナ、それにしてもおっそろしく強情な奴だ」

眺めていた刑事たちも、誰もこの水びたしの女を許してやろうと思う者はなかった。只一刻でも早く自白させて、供述調書をとった上で、この殺風景な部屋から退散したかったのだ。そう思うと、この強情な女が一層憎くなってきた。

女の体温で、胸や腹の上の水は乾いてきたが、板と背中の中にたまった水は、間遠な音をたてて、床の上へしずくをたらしていた。女の顔は蒼白さから更に血の気をひいて、すきとおるようなガラスのような白さであった。

お待たせしました

限定版特別号
第三弾

『女体緊縛グラフィ集』

特価五百円
略号「グラフ」

表紙三色版、内容グラビヤ印刷、緊縛女体の豪華アルバム。
愈々完成発売しました。(御予約の方には発送済)

残部あり↓お申込次第急送いたします。

臨時増刊号

悦虐説小と緊縛写真特集号 第五集

定価三百円
略号「悦特五」

〔予告〕

五月十日発売予定！乞御期

素晴らしい新趣向の緊縛フォト満載、傑作悦虐小説を満載の臨時増刊号がお目見えします。御予約下されば完成と同時に送りいたします。



四馬孝氏の筆に成る「美少女の誘拐」緊縛画は実に素晴らしく毎号、満足の念で拝見していますが、欲をいえば是非、次の点について考えていただきたいのです。

その一 流行のモードの美女

誘拐され、夢にも思わなかった縛しめの恐怖の屈辱の大打撃を受けた女は、半狂乱にならないばかりに身悶えするであろう。被縛の惨酷さは、この時、爆発する。処で、この美しき縛しめに際しては、実際には先ず、すべて

△責画通信△

誘拐令嬢の

緊縛スタイルについて

浦田紀夫

といってよいぐらい、女はその美しい衣服を着けたままである。だから、この段階の美女ー洋装の令嬢を是非、描いて欲しい。裸だけでは不自然である。そしてその服装は当然流行のスタイルでなければならぬだろう。

たとえば、最近では冬から春にかけては、ハイティーンばかりでなく二十代から三十才近い若い女性一般の間に、単にこれまでの肌色のナイロン・ストッキングばかりでなく、ウーリーナイロンの黒ストッキング、或は青

水色、グレイ、赤、グリーンなど、とりどりのストッキング（または、タイツ）が流行している。ところで、この黒ストッキングであるが、グレイ、ピンク、ブルー、茶、グリーンなどの淡色、乃至、ブルー、茶の色のワンピース・ドレス、またはスーツ或は膝までのオーヴァーコートの下に用いる時は、実に瀟洒（しょうしゃ）で清潔な感じである。特に、それが細っそりした令嬢であるときは、可愛らしさは殊更だ。こういう女性を縛って欲しい。ハイヒール

ルは踵が細いほどよい。手袋は靴下の色と同色がよい。色物はともかく、面の黒白なら黒い靴下は描けるのだから、是非お願いしたい。

同様な意味で、一方、二十前後の潑刺とした女性に多く見られる膝小僧を出したショーツ・スカートに白ソックス姿や、夏に見られるショーツ・パンツにニッカーズ姿も是非、欲しい。冬は、やはり流行のスタイルで、オーヴァーコートの女性も欲しい。抵抗してオーヴァーコートが脱げかけ、スーツやセーターも破られて乳房が露出してしまったところなどは、単に裸よりもより寒さ痛々しさを感じさせる。同じことはスキー、スケート姿にも云えよう。

スタイル・ブックを研究して是非、四馬氏らしい美しい痛ましい女性を描いて下さい。

その二 抵抗、身悶えのあと、

迫真的な監禁の痛ましさ

誘拐され緊縛される女性は必死の抵抗をするであろうし、そこには生き生きとした痛ましさがある。また拉致され監禁されれば、そこに待っているものは、一切の自由を奪われ、また無視された苦悶の生活であろう。だから、まず捕えられ押えつけられ縛り上げられるその瞬間を描いて欲しい。それも諦め、お

どされて大人しく、また絶望して縛られるだけでなく、必死に抵抗し叩きつけられて縛られるところが欲しい。そのためにスカートを乱し、ストッキングはずり下り、太腿もあらわに服は破れ、等々の姿が描かれるとよいと思う。完全に縛られてしまったところだけでなく、両手を縛られ両脚は正に今一方の足に縄が絡みついたところとか、スキー服やハイキング姿のストラックスを膝の辺まで、林の中でずり下げられて縛られたところなど、余韻が深い。

次に監禁であるが、監禁されてしまった以上、もう泣いてもわめいてもどうすることも出来ない。一切の自由は失われており、また誘拐した側にしてみれば、捕虜に抵抗の無益を身にこたえさせるため、出来るだけ痛めつけるのが常であろう。そうなれば、もうキレイ事は絶対にありえない筈である。すなわち、顔は涙と鼻汁と涎と泥（床の塵土）でグシャグシャになるであろうし、生理的作用に耐えかねて失神するであろう。それは、どんな令嬢であろうと縛られた以上、免れる筈がない。

だが、気品のある盛装の女性が、そういう姿で泣きじやくるところにこそ、痛ましさと

緊縛美の極致があると思う。

その三 捕われの令嬢が折り重なるのたうち廻るところ

一人だけの孤独な絶望も美しいが、商品と化した女たちの群れが、荷物として大量に手ひどく扱われるところは無惨である。五人、七人の群像。そういうところが欲しい。

その四 脚を、もつともつと縛って欲しい

脚の縛り方が少い。捕えた以上、もつと脚を縛って欲しい。時には目かくしも欲しい。

その五 貴婦人を縛って欲しい

その六 もつと社会的に種々な女を縛って欲しい

令嬢、オフィス・ガールは無論、これまでのように一番望ましいが、その他、次のようなものが是非あってよい。

スチュワデス。看護婦、眼鏡の女性（これが一度もない。眼鏡姿を望む）。バスガール。スポーツ選手。

その七 ヘアスタイルに注意

（その一）と同じ意味で欲しい。いつも、やや長めで、すそをウェーブしているか、ショートカットだ。◎茶や赤や金髪に染めた髪

◎ロングヘアの巻髪 ◎ブーフアン・カット
◎ヘップバーン・カット等々。

特に近頃の若い少女は、ブーフアン・カットが多い。(ふっくらと額から左右の頬へふくらみを持ってかかるような)

その八 探險隊の女を縛って欲しい
アフリカの蛮人に捕えられる婦人探險家、

孤島や海上で処刑寸前の女など。

長靴姿——やはりスラックスは、ずり下げ乳は剥き出しがよい。しかし、ヘルメットや

ジャケットは落ちかけたり肩を脱がされながらも身に半ばつけている方が、より痛々しいだろう。

これも長靴に限らず編上の革ゲートル(足の甲を覆うカバー付きの)の方が、より脚をスマートにする。そして、その一方の靴が飛び散って、ジャングルを靴下ハダシ(単に素足よりも痛々しい。なぜなら薄い靴下など直ぐ破れてしまうから)が、よいだろう。女飛行士もよい。

隊商のラクダに縛られて売られて行く金髪
の女性探險隊員など、どうです。

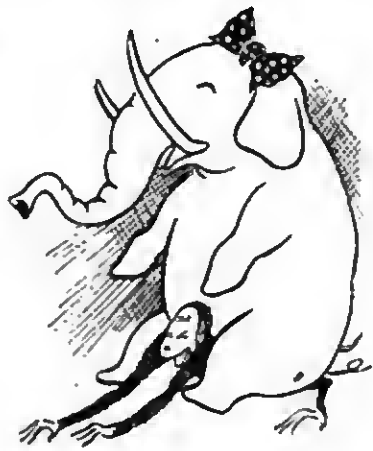
その九 拷問、責めについて

ほぼ満足ですが、吊りをもう少し欲しいのと、一瞬だけではなく、もう一いつ次の瞬間と連続したらどうでしょう。

落下傘で縛ったまま投下される女とか、そんなのは如何です。

以上、勝手極まる注文ですが、思いつきというより私には是非望みたいものを書きました。御参考にして下されば幸いです。

マゾヒズム通信



女性乗馬考雜感

鞍 良 人

増村保造監督の下、船越馬にヴォリユー
ム、三宅川騎手が乗り廻した映画「氾濫」
の大映が、今度は叶順子を主役に起用して
「痴人の愛」を撮るといふ。その再映画化
を要望した小生としても至極慶賀に存じま

す。この女優、ジャンヌダークみたいだに思
切り活発に馬を駆けさせて見る趣味をお持ち
と聞く。

去る二月号の読者通信、諸岡堅雄氏のお便
りで、柔道夫人が、十余年来、御主人の胸板

に跨って、逞しく組敷き続けておられる由
拝見致しました。ところで小生はその後、
(昨年)見合いによる結婚を致しましたの
ですが以来、妻の行動から察するにつけて
も、以前「白書」で述べた見解の一部は訂
正しなければならぬのではないかと思
う様になったのです。

「女性が我々の目の触れないところでは男
乗りを楽しんでいると信ずべきでしょう
か。少くとも僕は信ずることは出来ませ
ん。彼女達は男を馬としたり、組敷いたり
して悪魔の愉悦にひたる事はしていないに
相違ありません」(三十四年八月号百五十
五頁)と述べましたし、又、「女は自分の
良人にはひどい事は出来ないものよ」とか

「結婚しても夫にそんな要求は出来そうにありません」といった様な女性の発言を引用(三十四年九月号)して「叶えられない女性の希い」に触れたのでした。

ところがどうでしょう、妻は寝ている小生のお腹に跨ってギューギューに苦しめますし、時には勇ましいリズムの歌を口ずさみながら体をあおります。彼女が、か細き小生の胸に跨ってしまう時は本当にアバラ骨が折られてしまいそうな苦痛です。チョッキのボタンの上から力一ぱい抑えつけられた折りなど、病院へ二週間通わなければならなかった程でした。首に跨ってしまう時は、呼吸がとても困難になってしまします。その彼女の両膝は、側面から小生の顔を締めつけますので耳も塞がれてしまします。そんな目にあわされながら、目を白黒させて苦しんでいる時、やっとのことで解放されると本当に助かった気持ちが致します。小生を馬にして乗り廻す時は、潰れても馬乗りのままで敷いて居る事が屢々です。こういう「お馬ごっこ」の際、彼女は色んな衣裳で乗るのですが、模様の華やかな赤や青のパンティ姿で跨ってしまう事もあります。

それで小生が疑問とするところは、女性は見えない所では本当は「希い」をこうし

て叶えているものなのか、昔はなかなか叶えられなかったが、時代の風潮によって、叶えられるに至ったのか、それとも時代にかかわりなく専ら個々の人によって異なるのか、等といったことなのです。もし時風の利にもよる、個性にもよるのだとしたら、小生は、有難き時代に有難き個性と遭遇した、その恩恵に感謝しなければならぬのですが……そこが知りたいのです。

「笑の泉」別冊ユーモアグラフというのが毎月出ている様ですが、最近号の中には屢々小生の好みに思う写真が出て居ります。例えば三月号には特に多く、巻頭のグラビア十七頁目から以降十一頁にわたって「スーパードお嬢ちゃんの宇宙征服」という楽しい写真があります。最後の頁の写真は、とうとうこの「ピソ子お嬢ちゃん」が星人を一人残らず見事なお尻の下に制圧してしまう所です。どっかと敷きひしがれた星人が、あわれにも「ウム、ギューーモウタスケテ!」と降参の悲鳴を上げています。更に幾頁か行った「野を駆ける」の箇所では、二人の可愛い乙女が、勇ましくも裸馬に打ち跨って興じている豪華な光景が前後七頁(十二カット)にわたって展開されています。大室高原乗馬クラブにて撮影、とあります。小雪のそば降る広々とした草原な

のでもあろうか。「駆ける馬にまたがる二つの野性がゆたかな肢体の中で青春のリズムを奏でるああ白い天使らのひとときのたわむれ」とか「馬が跳躍して騎手にいどめばしなやかな脚は馬の横腹に親しみの一撃を加える」といった調子の文句が付されている。更に次の「見せます斬りますまくります」のクラブでは、夜斬りのおもんといい裸形の女辻斬りが、取り抑えた明神下のドジ六の上にお尻を据えて、刀をくわえたままどっかと馬乗りしている場面が二つあります。

映画「わたしを抱いて」(三月号四十九頁参照)では裸馬への女性乗馬もあります。が、女性同士の取っ組み合いが、なかなか執拗ですさまじい。

四月号では、折角、佳境に入っと思った「黄色オラミ誕生」が中絶になるし、二月号で「今後、毎月必ず女性乗馬に関する専門的な紹介を加えてゆきたい」(五十八頁)と約束されたばかりの原氏の「現代マゾヒズム芸術時評」が急に最終回を迎えてしまふ等、残念なことが重なった反面、「麻生氏意見」や、馬場氏「マゾヒズム百景」、山本氏「ファンタジア・マゾヒスティカ」倉仁氏「ある女優の乗馬日記より」などを興味深く拝読致しました。

手記

妻を訓練する

夫 誉 地 間

×月×日

行楽の時期をはずれた湯河原の夜は静かである。誰でも一生に一度は経験するものとは言いながらまだ結婚式の余韻も醒めやらぬままに、はじめて妻と二人っきりで向いあいながら、私は思うのだった。

今、何も知らない私の新妻は、新婚の喜びとも恐怖ともつかない感情に身を震わせているかもしれない。しかし、私の胸は、どうして妻に自分の趣味と嗜好とを理解させ、その喜びを本当に心よりの喜びとするには、どうしたらよいかということを考えているのだ。その趣味嗜好とは、——緊縛とそして浣腸——とだ。

×月×日

結婚以来既に三カ月、私と十も違ふ妻は、まるであどけなく、天真爛漫、無衣無縫な毎日を振舞っている。ほがらかな満ち足りた新婚生活。それだけに私は妻を訓練する糸口がなかなか掴めぬ。

恐怖心を起させてはいけない。嫌悪の情を催させてもいけない。すべからず漸進的に訓練すべきなのだ。家庭生活を営む以上、一致した喜びでなければならぬ。今日も私は逸る心を抑えるのであった。

×月×日

遂にチャンス到来。随分、長かった半年——夕刻帰宅すると、何時に似合わず妻の元気がない。而も頬の辺りをしきりに気にするではないか。

「どうかしたの？」

「ううん、ふき出物が出ちゃったの。いやだわ、みつともなくなってる」

「原因のない所に結果はないって訳さ。便秘でもしてるんだろう」

「まあ、図星だわ。あなたって偉いわねえ、そんな事まで分るの」

「分るさ、君の事なら何でも。じゃ、浣腸でもしてやろうか」

「いやだわ、まあ恥かしい、浣腸だなんて」

「何も恥かしい事なんかないだろう。便秘の時には浣腸する。医者もすれば、薬屋にも浣腸薬、売ってるじゃないか」

「だって、あれは子供にするもんでしょ」

「馬鹿言っちゃいけない。大人だって、便秘

痔、内臓手術の前、それからお産の時、陣痛を防がないためにする事位、学校の生理で習ったろうが」

「うん、でも恥かしくて嫌だわ」

「さあさあ、駄々こねるんじゃない。僕の前で恥かしいものないもんだ。ほら、横になって」事は拙速を尊ぶとばかり、私は大急ぎで愛用のグリセリン浣腸器とグリセリンを取り出す。

「まあ、そんな道具まで備えてあったの？」

「そう——、驚くことはないよ。これは家庭常備の救急薬品だよ。子供の痙攣の時に一命を救うのは、これとクロマイだよ。さあ、早く、ぬいだりぬいだり」

嫌がる妻をそっとやさしく寝かせる。もうこうなれば私の為すがままである。両手で顔を覆いながら、細い声で「いやーん」と言ったが、勿論、意にもかけず型通り注腸、嫌がるのを無理に五分間我慢させ、あわててトイレットへとんでゆく妻を見送りながら、ああ、何時の日か、緊縛した上で浣腸を、そして便器に、或は襦袢にと、私の空想は広がるのであった。

×月×日

最初の浣腸の日から一カ月程過ぎた頃、妻

の歩き方が何だかぎこちないのに気がつく。

「どうかしたんじゃない？」

「ええ、一寸」

「どうしたの言ってごらん」

「いや、恥ずかしいから。だって、だって——」

「ようし、言わないと、縛っちゃうから」

「いいわ、縛れるものなら縛ってごらんないだ」

「よし、本当に縛っちゃうから。その時になつて、べそかくなよ」

「あなたに縛られるなら本望。だけど逃げちゃうから」

冗談にもせよ、縛られるのは本望とは驚いた。まさかマゾではあるまいが、やはり女性本能の底に流れる被抑圧本能を今こそ少しずつ引き出すべき絶好なる機会と私は感じた。私は直ぐ帯をもって妻を追いかけた。さして広くない家ではあるが廊下から居間、居間から茶の間、茶の間から台所と、妻はスカートを翻しつつ逃げる。真剣に追えばすぐ掴まるのだが、そこは感情をかき立てるべきプレイと心得て

「そらそら、掴えて縛っちゃうぞ」

「掴るもんですか。ほら、鬼さん、こちら」

「あ、誰かきたらしい」

「え、誰？」と一瞬、妻は立ち止る。

「そら、掴えた」

「わあ、ずるい、ずるい。そんなのないわ」

「駄目駄目、智恵の勝利さ」

後から抱かえながら、素早く帯で縛り上げる。最初から高手小手では刺戟も強かろうと思つて、両腕を密着させたまま、二重にあまり強くなく縛つたのである。

「さあ、さっきの続きを言つてごらん。言わないと、足も縛っちゃう」

「言うわ、言うから許して——」

「そうか、そりゃいけないね。どれどれ見せてごらん」

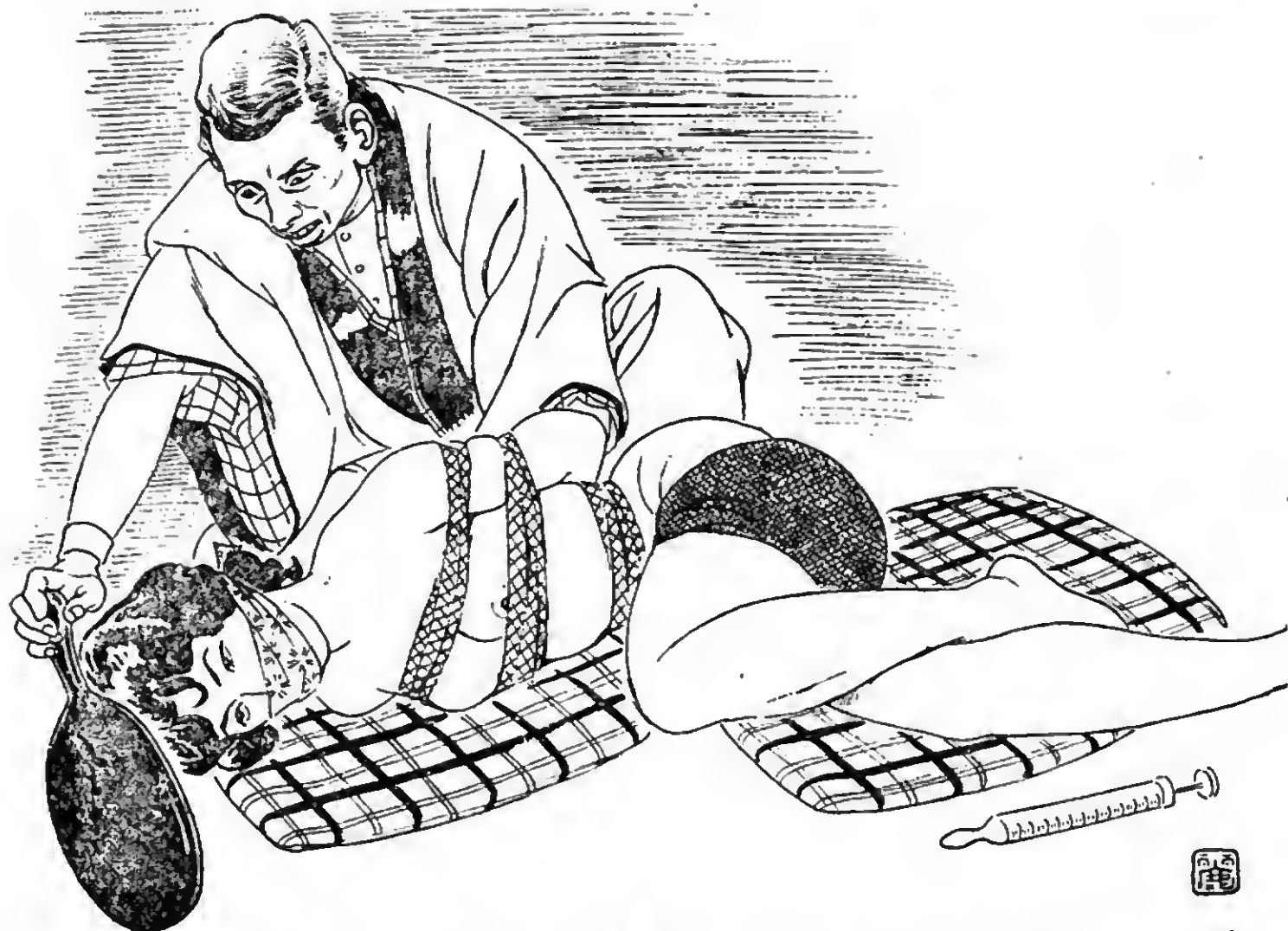
「いや、そんなこと言っちゃ、お医者様みたい。いや、いや」

「こら、駄々をこねると、ほら、足も縛っちゃう」

この時とばかり両足首を縛り上げた私は、例によつて例の如く、浣腸器をとりあげたのである。

縛られている妻は手で顔を覆う術もなく、ただ徒らに身を縮めるばかりであった。

「うーん、こりゃいけない。ほつといつて痔になつたら大変だ。ここ三、四日、毎日浣腸して、便を柔くした方がいいね。そのうち、直



ってしまうよ。さあ、すぐ
浣腸しようね」

「嫌だ、毎日だなんて」

とは言いながら、緊縛さ
れたまま、妻は静かに目を
つぶって、浣腸を受けるの
だった。

×月×日

翌日の夜。

「さあ、今夜も浣腸だよ」

「えへーだ。浣腸器ないわ
よ、隠しちゃった。どこに
あるか、当てたらえらい」
「よし、言わないと昨日の
ように又縛っちゃうぞ。そ
ら」

今日は、昨日の事がある
ので、少し手荒く、後手に
縛り上げ、

「さあ、どこに隠したか連
れてゆきなさい」

とばかり帯の後を取って
歩かせる。さすがに後縄は
恥ずかしいと見えて、

「歩くのは嫌。教えるから今夜は浣腸、許し
てね」

「駄目駄目、昨日約束したじゃないか、毎日
するって。嫌なら家中、歩かせるよ」

「ごめん、箆笥の三番目の引出しの奥」

「よしよし、いい子だ。じゃ、いつも三〇C
Cだが、今日だけ二〇CCと子供並にしてい
てあげるよ。さあ用意して」

二度、三度と浣腸される度に妻も、やや馴
れて来たらしく、

「子供の頃よく浣腸されたわ、嫌だったわ。
私、子供の頃から時々便秘しちゃ熱が出るの
よ。すると、お母さんが直くお医者を呼ぶの
よ。河村先生と言ったっけ。」

『芳江ちゃん、又ぼんぼんが痛くなったね。』
って言いながらきつと浣腸なのよ。でも本
当にすぐ直っちゃった。でも、河村先生でな
くて、あなただったら、よかったなあ」

これは驚くべき発言であった。グリセリン
と微温湯を半々に割るべく用意する私を見上
げながら、過去の回想を、而も医者と私を置
換えて考えるとは、大した変化、進歩でなく
て何であらう。

×月×日

それから又二カ月程たった今日、何時も土

曜でもなかなか早く帰宅出来ない私であるのに、珍らしく仕事も暇で、早目に帰宅した。

「あーら、珍らしくお早いね」

いそ／＼と出迎えた妻は早速、夕食の仕度に取りかかりながら、

「あなたー、ちょっと」

「なんだ？」

「いやよ、新聞を読みながらなんて。いらっしやってよ、お話したいんだから。ねえ」

「よしよし、なんだね」

妻は、甘えるように庖丁の手を休めて、首を後に回して、

「あのね、あのね」

「なんだい、なんだい？」

「いやよ、知ってるくせに」

私は、ちゃんと知っていたいながら、わざと

「分らないね、はっきり言ってごらんよ」

「いやいや、恥ずかしいんだもの、ほら」

「はっきりお言いいよ。言わないと又縛っちゃうぞ」

「それよ、縛ってね。あのね、おカンチヨウ。」

「ああ、そうかい、よしよし」

×月×日

妻は、すっかり浣腸の喜びを知った。でも

やはり羞恥は押さえる術もなく、施薬の際には、少しでも体をさらすまいと涙ぐましいばかり努力するのであるが、私にはこの羞恥こそ尊いものであり、且つ、その羞恥を害わぬよう仕向けねばならないと思っている。

さて、今日はじめて便器を用いた。手足を緊縛したままグリセリン液を注腸。

「あなた、もう五分以上たったでしょう。早くほどいて」

「駄目、駄目」

「いや、許して、お願い。早く、早く」

わざと今日はグリセリン液だけを浣腸したために、猛烈な生理的要求を起したに違いない。

「まだ早すぎるよ、二分だよ。（実は三分半経過していたのだが）じゃ、便器あててあげようか。」

「まあいやだ便器なんかどこにあったの？」

「物置の奥にあったの知らないの？」

とは言いながら、先日、買い求めて置いたのだが、私を疑う事を知らない妻は、

「いや、いや、お願い。何でも言うことを聞くから、許して」

「そう、それなら五分、我慢すること。我慢出来なかったら、この便器にすること。おや

誰か来たらしいよ、一寸玄関に行ってみる。じゃ、便器を、ほらよいしょ、当てとくよ」

誰もこんな夜遅く来る訳はないのだが、わざとそうして私はその場を離れた。五分程して帰って来てみれば、妻はぐったりと体を横たえ、縛られた両手で顔を覆っているではないか。或は泣いているかも知れない。一寸、度がすぎたかなと心配しながら、そっと手をほどいてみると、妻は片目だけ開けてニッとほほ笑んでみせるではないか。

×月×日

こうして徐々に目的を達してきた私は、プレイの度が過ぎて、妻が常習便秘に陥る事をおそれ、努めて果物、生野菜、冷い牛乳を飲むことをすすめ、浣腸は自然便通のあった後、楽しむまでに訓練してきたのであるが、そろ／＼次の課題に移らねばならなかった。

丁度その頃、私は一週間程、北海道へ出張した。その間、妻の寂しがりやうといったらなかった。さて久しぶりに帰宅した私に、

「あなた、寂しかったわ。今夜はなんでも、あなたのしたいようにするわ」

「よしよし、いい子だ。じゃ、今晚は暑いから、先ず上衣をぬいで。よし、それからスカートを取って」

「いやあ、ストリップじゃないの。いやだわ」
 「なんでもするって言ったじゃないか。では
 ブラジャーも。よしそれまで。うつ伏せにな
 って手を後に廻して、足はそろえて曲げる。
 では縛るよ。よし、では口を開けて」

「口を開けてどうするの？」

「このタオルを押しこむんだよ」

「いやよ猿轡なんか、こわい」

「いうことを聞く約束だよ。ほら鼻をつまむ
 よ、お口をアーンと開けて」

かくて、後手縛り猿轡の典型がはじめて妻
 の体に出来上った時の私の喜び。そっとその
 まま横に転がし、鏡をもって来て妻の前に置
 いた。

「ほら、よく見てごらん。ね、素晴らしい
 じゃないか」

妻はこわいものを見るようにそっと薄目を
 明けかけたが、あわてて目をつぶるや、猿轡
 の下で低く呻いた。恐らく、やめて呉れと哀
 願したのであろう。私は、そっと妻の臉に口
 づけしてから、やさしく

「君とこうしている時が一番楽しいよ。ほん
 とに素晴らしい姿だ。紐で筋肉がぐっと引き
 締って、まるで全身がはち切れそうだよ。女
 性美の極地ってこれなんだよね。さあ、大き

な声で、出来るだけ声をはりあげて『助けて
 ！』って言うてごらん。猿轡がしてあるから
 誰にも聞えないから大丈夫。そら」

「ウーン」呻き声。

「まだ、まだ、もっともっと、力を入れて、

『助けてエーッ』と叫ぶんだよ、そら」

妻のお腹が波打って、

映画通信

縛られた女優たち

大河原珠樹・記

▽大江戸の俠児 (東映)

香川京子、青山京子

鼠小僧をおびき出す囃子として幼なじみの
 純情娘(香川)と、次郎吉を慕う小唄の
 師匠(青山)の二人が、次郎吉の相棒の権
 次と三人一緒に土蔵の柱に縛られている。
 といっても、胸から上のアップーカットだ
 け。しかも暗い場面だから、縄の具合はよく

「ウーン、ウーン」と声にならず呻く。

「まだまだ、そんな事では駄目。じゃ本当に
 ひどい目に合わせなけりゃ駄目だね」

私は妻の脇腹をくすぐりはじめた。妻は思
 わずも身悶えしながら一際強く呻き声をあげ
 た。

「よしよし、止めとこう。さあ、みんなほどう

わからなかった。三人の白い猿ぐつわが実
 感あり、印象的。(監督、マキノ雅弘)

▽右門捕物帳・地獄の風車 (東映)

伊藤ユミ、伊藤エミ

風車売りの双児娘が、殺人犯と間違えら
 れ縛られる。二人を横に並べて座らせ、一
 緒に細引で二巻き、残る縄で二人を区切っ
 ていたが、この形では後手首はどうなっ



てあげるよ。痛くなかった？きついことし、
てごめんごめん」

「何だか、身も心も、宙に浮いてゆくみたい
——」

こうして妻は縛られる事にも、遂に喜びを
見出したのである。

×月×日

浣腸と緊縛。何も知らない妻を、私は長い
間かかって、やっと、ここまでリードして来
た。しかし、これはあくまでプレイであって、
肉体を害うようなことがあっては絶対になら
ない。

従って、私は、常習便秘に陥らないよう注
意すると共に、緊縛の形は、さまざまに変えな
がら、貴めも、ごく軽くすぐり程度に留め
鞭、釣り等は一切要求しない方針である。苦痛
にゆがんだ女体の美しさはその極地ではある
う。しかし現実の問題として、夫婦間には、
その愛情の表現の一方方法として、空想とニ
ュアンスと、そしてムードに富んだ、柔らかな
緊縛プレイが、時々、静かに行われるのを理
想としたい。

次号は

定価三〇〇円

麦秋増大号

五月下旬発売予定

いるのか残念ながら見当がつかない。(監
督 沢島忠) 又、同映画で女乞食に扮した
ミス・ワカサが事件の参考人として捕えら
れる。さんざん暴れ廻ってクタクタになっ
たところを、胸に二、三巻の後手縛り。

同じく、喜多川千鶴の、黒幕豪商の女将
が捕えられ、胸を二巻、後手縛りで連行さ
れるが、後姿で手首の縛り具合もみせる。
やや型式的だが、まあまあ辛抱できる縛り
方。

▽虹之介乱れ刃(大映) 三田登志子

父の仇を狙う女剣士真弓が、仇に近づく
ために虹之介の計らいで、わざと悪旗本の
もとへ縛られて行く。グルグル巻き後手に
はなっているが、粗雑な縛り方だった。

(監督 西山正輝)

▽流転の王妃(大映) 京マチ子、其他

満洲国皇帝の弟殿下の妃である竜子が、
敗戦と共に追われて八路軍に捕まり、珠数
つなぎで避難民と共に収容所に曳かれて来
る。先頭の竜子は、細引で胸を二巻き、痛
々しいまでに後手首もガッシリと縛られ、
その縄尻は後に続く捕虜につながって、ヨ
ロヨロと歩かされてくる。それへ、道の両
側に並ぶ反日思想の中国人達が砂や石を投

げつけるが、その哀れな姿を、京の演技力
が心憎いまでに見事に描く。最近の傑作だ
ろうと思う。(監督 田中絹代)

▽爆笑水戸黄門漫遊記(東宝) 清川虹子

お家横領を企らむお側室が、悪事露見し
て黄門様のさばきを受ける。太縄でグルグ
ルと三巻(型式的)の後手で庭先きに引据
えられる。ただし、裁きは至って寛大で、
すぐに解かれる。(監督 青柳信雄)

▽地下帝国の死刑室(新東宝) 池内淳子

誘拐された科学者、田川博士。その暗黒
組織をさぐる娘、早苗。早苗はキャバレー
の女に化けて入り込むが、正体を見破られ
後手で椅子に縛りつけられる。そして、す
でにその組織の一員となっている兄の手で
笞打ちの私刑に遇う。その後、別の処へ連
れて行かれるのに、白い手拭いで前手縛り
にされたりするが、縛りそのものより、シ
ルエットであしらった笞打ち場面などチヨ
ッとイカスものがあつた映画である。

この他、予告では

◎よさこい三度笠(中田康子の後手。)

◎人肌呪文(大映) 宇治みさ子の後手吊り。

◎生首奉行と鬼大名(新東宝) 小畑絹子の
後手吊りと、北沢典子のハリツケ縛り。

◎浪人市場・朝やけ天狗(東映) 雪代敬子
のグルグル巻き後手縛り。

などが観られそうである。(了)

雨の夜に大きな屋敷へ忍び込もうとする奇怪な男、

それは雨の夜の男であった。

アブ・ストーリー

雨の夜の男

沢木雪二

黒塗りの自家用車に尾行されて、路傍にうずくまる美貌の女

一、

頃合いをはかって、バー『千鳥』を出ると入る時、どしゃ降りだった雨は、うそのようにあがっていた。

「ちえッ、いやんなっちゃうナ」

オレは思わず舌うちをしていた。

頃合いをはかったのは、何も雨をあがるのを待っていたのではなかった。いや、むしろもっと地の掘れるほどに降ってほしかったんだ。その方が忍び込むには都合がよかったのだ。雨の音は、この上もない結構な防音の

役目をしてくれるからだ。

えッ？盗っ人かって、冗談じゃねえよ。これでも、れっきとした、いや、あんまりれっきともしちゃいけないが、早く言えばニコヨンのようなものさ。

だから、雨が仇のオレたちにや、こう雨つづきじゃ白棄のやんばちさ。同じことなら、じゃんじゃん降れと思うのさ。

それじゃ、これから何処へ忍び込もうとするんかって？それを話すには、もう少し話を前に戻さなくっちゃね。

毎日毎日、働けど働けど楽にならない、し

がない暮しだ。その上、雨にたたかれちゃ、なけなしの金をはたいて、バーの扉でも押してみたい気にもなるうってものさ。

そのいきおいで、もとでのかからねえ、ちいっとばかり危険だが、それだけに十分にスリルを味わえる遊びをしようってわけさ。

いや、つれはねえんだ。オレ一人でやるのよ。えりまだ、あんなことを言ってるぜ、疑え深いね。まあ、ゆっくりと聞きねえよ。オレのように、こつこつと働いても、場末のちやちな酒場の扉を押すのが、せいっていの者もいれば、親の七光りで、自家用車乗り

まわしては派手に札ビラを切る野郎もいる。まったく、色男きどりのそんなのを見ると、むしろが走るぜ。

と言うものの、からんでみたって、おかやきしているようで、みっともねえ、と思って知慧をしぼったってわけさ。――探偵きどりで尾行し、秘密をさぐってやらあね。ついでに野郎の目をつけた相手が、純情な娘さんなら、ちよっぴりこらしめてやろうという寸法なんだ。

えッ？ そうなんだよ。多少は腕に自信はあったし、武勇伝の一つもつくってやろうという気持もあったってわけさ。それで、今夜のオレさまの出かけようと思っていいるところは或る有名な実業家の邸なんだ。

決心したのは、そう、まだほんの一昨日のことなんだ。ええ、そんな大きな屋敷じゃ、さぞ人も多くて、むずかしいだろうって。いや、それがねえ、そういった家庭に珍しく一人の使用人もいねえのさ。

勿論、犬だっていねえ、おあつらえむきだった。あの日も雨だったよ。夜になると、オレはくさりきった心持をはらそうと、ふらつと家を出たんだ。

例の調子でブラブラ歩いていると、ハイテ

イーのズベ公をうまくさそって車にのせている中年の男がいたと思ひねえ。まだろくに貫禄もねえのに、キザっぽいコルマン髭なんか、たくわえやがってよ。オレは先ずこの男からだ、とっさに心にきめた。相手がズベ公じゃあ、武勇伝のたねにもなんねえが、なんとなく心がきまったんだ。

車を追うには車でなきゃ駄目だ。他に何の道楽もねえオレだ。無駄使いのようだが、まあカンベンしなよと、いるつもりの方房に手をあわせ、えッ？ どうして女を持たないかって？ こんなしがない男じゃ、今どき、まともな女はふりむきもしないさ。それにオレのようにS傾向ときてりゃ、なまじ、あたりまえの女じゃ、あっさり貰わない方が、お互いの為にも、ましというもんだよ。

ところで車でつけたその男、またヤケにひっぱりまわしやがった。人のふところぐあいも知らねえで、若いムスメに「ねえ、オジサマ」などと甘えられると、いい気になりやがって、あっちのバー、こっちのキャバレー、はては豪華なナイトクラブ。やっとな途についたのが午前三時。道楽もらくじゃないね。娘も一緒に連れて帰るつもりか、いつかな別れる様子もなかった。娘たちときたら、ま

ったくの疲れ知らず、夜明けも間もない時間だというのに、めっぽう威勢がよかった。

根気よく、つけていたオレは、そのうちにオヤッと思ったんだ。男の車は、もう家に近づいたのか、静かな屋敷町に入っていたのだが、そのあたりは、オレにおぼえのある方角だったからだ。といっても、こんな場違いのところに、オレの巣があったって、わけじゃねえんですヨ。

まあ言えば、前に忍び込んだ家の方角だったってわけですよ。殆ど間違はなく、オレの感じた通りになってきたんだ。

話さなきゃ、わからねえけど、それも又、その夜から十日程前のことなんだ。その日は午前中はひどい雨だったが、昼めし頃から、どうにかあがったようなので、例の調子で、ぶらっと出かけたのだが、駅の入口で、ものすごい美人をみつけたのさ。すらっとした立姿の程のよさといい、品のある顔立ちといい着物の好みまで、どこといて非のうちどころもない女でしたよ。

いつものクセで、ついオレはつけてみる気になった。と、いうより、思わずフラフラッと後をつけていたという方が正しいようだ。それほど女はきれいだった。オレをひきつけ

るミリヨクを持っていた。

女は何か思いなやむことでもあるのか、しおれたように、うつむきかげんに、車も拾わず歩いてゆくので、つけている者にとって、こんな楽な仕事はなかった。大分長い道のりを歩いて街はずれにかかる頃になって、やっとオレは気がついた。オレの外にも、女をつけているヤツがいやがったんだ。

そいつは車で徐行しているんだ。

今にして思えば、その時の車が、一昨日の夜、オレのつけた車だったんだ。

オレはどうしようかと迷った。その車は、オレのように、ただの好奇心でなんとなくつけているのとは、わけが違うように思えたんだ。大体、つけているとはいふものの、その車は、女にさとられるのを警戒している様子がまるでなかった。

オレは、とっさに何気なく歩いて、女より前に出ようと、きめたんだ。女の横を通るとき、もちまえのカンでさぐってみると、女はすでに、その車に気づいている風だった。オレには気づいていないだろうと、自惚れたの



だが、チラッとなげかけてきた女の眼が、気になってしょうがなかった。とにかく、女はひどく車に気をとられているようだった。

そのうちに女の足が急に早くなった。オレは、めんくらった。といって、オレまでかけ出すわけにもいかないし、変らない足どりで歩いた。屋敷町に入って、このあたりは静かだった。

世にも麗しい婦人と、野暮な皮ジャンパーのオレと、黒塗りのピカピカの高級乗用車と奇妙な組合せが、屋敷にはさまれた静かな道を進んだ。

今度は女の足が急におそくなってきた。そ

のうちに、だんだん足どりが速くなったり、おそくなったり、ちよっと立ち止ったり、オレは初めのうちは、女がつけている人間を意識して、殊更そうしているのかと思ったのだが、女は身体のごあいでも悪いのか、美しい眉をしかめて、たえているようだった。

そのうち、或る家の土塀によりかかるようにして立ち止った。余程苦しいのだろう。オレは手をかしてやろうかと考えたが、しつこく尾行してくる車が気になって、迷った。女はよろよろと歩き出したが、すぐ道端にしゃがみ込んでしまった。両手で顔をおおって、じっとしている。目まいでもするのだろ

うか。オレは、とうとう押さえきれなくなつて
「御気分でも悪いんですか？」
と声をかけてしまった。
オレのような男でも自然、言葉づかいも良
くなつていたヨ。笑わせるじゃねえか、おか

しなもんだよ。おかしいって言えば、それか
らの女のとつた行動が尚おかしいんだ。
女は、オレの言葉にハッと顔をあげると、
ひどく羞かしそうに、
「いいえ、いいんです。大丈夫です。」

と言うなり、あわてた様子で小走りに歩き
出したんだ。オレはポカンと開けた口がふさ
がらねえ、なんという馬鹿さ加減なんだ。ほ
んやりとつつ立っているオレの横を例の車がす
べるように徐行してゆきやがる。

〔新版〕女体緊縛フオート オンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 匣)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

柔肌に強烈な荒縄 (須川令子)
海浜に於ける緊縛 (萩千恵子)
床間の飾り物 (佐賀美智子)
高小手猿ぐつわ (花坂道子)
海老責し (萩千恵子)
後手猿ぐつわ (須川令子)
後手足し (村田那美子)
鏡に映つた後手 (伊吹真佐子)
股間し (須川令子)

R10	鎖しはり晒責 (萩千恵子)
R11	股間しはり正面 (伊吹真佐子)
R12	女学生制服しはり (須川令子)
R13	尻立後手しはり (萩千恵子)
R14	開股しはり (川辺砂登子)
R15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
R16	トイレでの縛り (須川令子)
R17	立木野外しはり (村田那美子)
R18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R19	足揚梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R20	いたふり (春日ルミと伊吹)
R21	帆立しはり (萩千恵子)
R22	強烈な梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R23	梯子責め (佐賀美智子)
R24	逆さ本吊りゼメ (伊吹真佐子)
R25	後手吊りゼメ (伊吹真佐子)
R26	股間しはり後手 (中塚文子)
R27	逆エビ責め (伊吹真佐子)
R28	高小手しはり (加賀利江子)
R29	変型足手しはり (萩千恵子)
R30	松樹後手しはり (村田那美子)
R31	くさりゼメ (伊吹真佐子)
R32	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

R33	股間タテしはり (中富綾子)
R34	首縄股間しはり (坂口利子)
R35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R36	和服の後手しはり (藤田節子)
R37	仰向全裸悦責 (川端多奈子)
R38	後手首縄シメ (加賀利江子)
R39	乳房下しはり (村田那美子)
R40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R41	お灸ゼメ (春日、伊吹二嬢)
R42	後手猿ぐつわ (萩千恵子)
R43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R44	コルセット縛り (中塚文子)
R45	股間しはり (伊吹真佐子)
R46	手と足と緊縛 (萩千恵子)
R47	後手しはり (加賀利江子)
R48	御開眼 (萩千恵子)
R49	くさりゼメ (川端多奈子)
R50	折檻の魅力 (須川令子)
R51	全裸の股間しはり (愛川悦子)
R52	逆立の折檻 (大塚啓子)
R53	開股椅子ゼメ正面 (花坂道子)
R54	振袖の緊縛 (村井知可子)
R55	腰元の吊り責 (愛川悦子)
R56	ヌードしはり (田中芳代)
R57	本縄しはり (川辺砂登子)
R58	股間しはり (益田房子)
R59	落花狼藉の緊縛 (川辺砂登子)
R60	樹間のハリツケ (益田房子)
R61	帆立舟のゼメ (益田房子)

R72	逆エビ責め (愛川悦子)
R73	変形全裸股間縛 (花坂道子)
R74	ヌード縛り (萩千恵子)
R75	全裸横臥緊縛 (村田那美子)
R76	ビクニツク (須川令子)
R77	ハイヒール (萩千恵子)
R78	湖畔の宿にて (村田那美子)
R79	尻立逆しはり (須川令子)
R80	下着の色模様 (大塚啓子)
R81	目隠し開股縛り (田中芳代)
R82	後手高小手 (愛川悦子)
R83	乳房しはり (花坂道子)
R84	開股ベンド縛り (愛川悦子)
R85	全裸床柱縛り (萩千恵子)
R86	亀ノ甲縛り (愛川悦子)
R87	ヌード股間縛り (大塚啓子)
R88	全裸乱れ髪 (川辺砂登子)
R89	ガソシガラメ (愛川悦子)
R90	後手股間しはり (中塚文子)
R91	腹部丸出し猿轡 (伊吹真佐子)
R92	破れたシユミーズ (坂口利子)
R93	女学生のしはり (須川令子)
R94	仰向開股しはり (萩千恵子)
R95	乳房くさりゼメ (川辺砂登子)
R96	野外バンド責め (村田那美子)
R97	トイレ正面排泄縛 (中塚文子)
R98	開股正面しはり (伊吹真佐子)
R99	乳房搾りゼメ (佐賀美智子)

女は別に病氣でもなさそうだ。それにしても、親切に言葉をかけたオレを放っぱらかして逃げてゆくとは、なんとしたことか。それに、あの車、女を乗せてやろうともせずに、いつまでもつけてゆくとは、どういう魂胆だろう。

何かあると思った。その反面、なんとなく邪魔者扱いされているようなバカバカしい気もしたが、或る程度のいまいしさが加って今度こそ、とことんまで、つけてやる気になった。

そうすると、どうだろう。女が駆け込んだ屋敷と同じ門の中へ、車も静かに入って、途端に門がしまってしまった。ますます、わけがわからねえ、とうとう、オレは門の前で腕を組んで考え込んでしまった。

二、

夜になると、どうしようもなく好奇心がたかぶってきた。おさえきれなくなって、そつと家の裏手から入ってみた。

大きな屋敷の中は、がらんとして、人の気配はなかった。二人っきりのかな。そんなことを考えながら、表へ回った。

一つだけ、明るく光の洩れている部屋があ

った。オレはそつと窓ぎわに忍びよって、のぞいてみた。さすがのオレも驚いたねえ。思わず「う、うう」と口の中でうなつてしまったヨ。

イギリス公爵邸を思わすような古風ながつちりとした調度品と、女の性格なのか、上品な中にも近代的な明るさ、雰囲気のミックスしている部屋の床の間に、あの美しい人が縛られてつながれているんだ。しかも長襦袢一枚の姿で。しーんと静まりかえった部屋の中で、じつと頭をたれている。



思わず身をのりだしかけたオレは、はっと昼間の自動車の主のことを思い出した。

ここは他人様の屋敷の中だ。あまりの光景に氣をとられて、うっかり、それを忘れるところだった。息をこらしていたが、女は猿ぐつわをさせているわけでもないのに、声を挙げようともしない。時折、身をもんで、せつなげに声をもらすだけだ。

ますますオレはカッと頭へきたね。偶然あとをつけていた美しい女が、オレの探し求めていた傾向の女性だったとは——。これでオレはなにか、一つの生き甲斐のようなものを感じた。窓ワクにつかまった手の痺れるのも忘れて、倦かず眺めたものさ。

程なく、オレは深夜の街をさまようように歩いていった。家への路をたどりながら、オレはふっと、女が自分をじっと見つめている眼を全身に感じていたような氣がしてならなかった。

それはオレなのか、いや、恐らくそうじゃあなさそうだ。多分、女の頭の中にあつたのはあの黒塗りの車の男だろう。そうすると、あの男、案外、このオレに気づいていたのではないか、そう思ったとき、オレは思わず、ぞくっとしたものだ。

あくる朝、寝坊をしてしまったオレが、あわてて起きだしてみると、外はすがすがしい日本晴の天気だった。

だが、もうオレには仕事どころじゃなかった。なさけない話だが、朝の光の中に浸っているのに、夢を見ているように、うっとりとした。あの女の緊縛姿が目の前にちらつき出してどうにも我慢ができなくなった。

オレは昼前から、昨夜の家のあたりで、じっと入口を見はっていたのさ。勿論、女の出てくるのを待っていたのだ。

いつまで待っても、オレの望みはかなえられそうもなかった。

夕方近くなつて、黒い車が帰ってきた。しびれをきらしていたオレは、やっと元氣をとり戻した。ところが、それからがいけねえ。また元通りの静けさにかえって、何の氣配もなくなった。氣が氣でなくなったオレは、あたりが薄暗くなつてきたのを幸いに、また足が裏手へまわっていた。

やはり昨夜と同じ部屋に、ささやくような人声がしていた。そっと近づいてみると、やっぱり女はオレの想像どおりだった。

女は部屋の中ほどに仰向けに寝かされていた。オレの思った通り、胸から二の腕に紅の

扱帯がからみつき、背の下になつてわからなかったが手首を重ねて括られていることだろう。だが、それはいいとして、オレのあれっと思つたのは、女が、まるで赤ン坊のようにオシメを当てられていることだった。

男の顔は、斜めうしろだからよく見えなかったが、何ごとか小さな声で女に話しかけているのだ。たえいりたような恥しめを言葉で与えているのか、女の身も世もないといった風情が、それを物語っていた。

しかし、それでいて、女は一言も喋らねえのさ。オレは自分のバカさ加減を、もう一度ここで思い知らされたってわけさ。

昨日、駅からあとをつけた女の様子之不審も、これで解けたってことよ。

その時のことでも話しているのだろうか。やがて男は、女をひき立てるようにして揃って部屋を出ていった。

どこへ行ったのか、二人にさとられないように裏手から植込みの中をくぐって外へ出た時には、もう車のかげも形もなかった。

それからというものは、何を考える氣もなく、何をする元氣もなく、馬鹿の一つおぼえで、例の通り日参したものだ、いつもイライラと失望の砂をかまされるだけだった。

編集つれづれ草

編集子

ピンクの封筒

毎月新しく雑誌が発売されると、すぐその翌日、速達でピンクの封筒が舞い込んできるといふことになる、話が中々色めいてくるのですが、実はこれが緊縛フोटオの申込なのです。

その頃は分譲写真も「今月の新版」という欄を設けて毎月毎月新しい分譲品を加えていましたので、雑誌が新しく発売されると同時に真先に速達で申込んでくるという桃色の封筒の主、勿論、水茎の跡も麗しい女性からの注文なのです。

女性の緊縛フोटオ・マニヤといっても決して珍しいことではありません。多くの女性に直接訊ねてみたところでは、同性の緊縛ポーズにより強い関心を持っているというので、残念ながら男性の緊縛写真には関心が薄いようです。従って女性が同性の緊縛写真を申込んできても別に大して注目の対象になるべき性質のものではなかったのですが、このピンクの封筒の主だけは、

毎月欠かさず、それもイの一番に申込んでくるということから、何か印象に残っていたのでした。

しかし、それも只それだけであつたら、そのまま記憶から去ってゆくのでしたが、そのピンクの封筒の主から、「一度編集者に相談したいことがあるので御逢いしたい」と手紙が来たのですから、「おやおや」と思ったのも無理はないでしょう。

その頃、殊に東奔西走忙しくて、日中は殆ど外出がち、デスクの仕事は主に夜分という有様でしたので、とにかく一応電話で連絡してくれるようにと返事をしたものです。やがて、二、三日経った午後七時頃、問題の女性からの電話です。世慣れた甘い声、電話の背後に入るジャズ。バーかキャバレーから電話しているナ、と想像した通り、彼女は北の或るバーのマダム。

所と名を言つて、是非来てくれというのですが、新手の客寄せかと興ぎめはしたものの、読者の一人でもあるのですから、そこは、うまく調子を合せて電話を切ったも

三、

十日ほど、そんなイライラした日が流れた頃だったんだ。オレがめぼしをつけた男の車をつけたのは。

黒塗りの乗用車なんか、街にはいくつも走っている。今までは女にばかり気をとられて車のナンバーなどには見向きもしなかったのだが、なにげなくガンをつけたのが、よりによって、あの男の車だとは、考えても見ねえことだった。

目的地の近くで車をすてたオレは、勝手知ったる裏口から先まわりをしていた。と、いっても今夜は人の眼が多い。そう計算したオレは、窓口からやや離れた植込みの中に、身をひそめていたんだ。

部屋の中には、あの美しい婦人が、床の間を背にして床柱に縛られていた。こうして男の帰りを待っているのだろう。何という布地なのか門外漢のオレにはチンプンカンプンなんだが、こいういやにキラキラと光る金糸銀糸とかいうヤツを縫いこんだ着物を着て、今日は特にあでやかに化粧して、その美しさたらなかったねえ。

乱した裾からこぼれる赤い布、真白い脛、

のです。それから一週間か十日毎ぐらゐに三回ばかり例の甘ったるい声でピンクの手紙の主からの電話です。北の方は行きつけないせいもあって、生返事のままで、そのままにしておいたところ、おしまひには酔った勢で大変な見幕で約束を守らないのになじるのです。お互いに一回も顔を合せていないのにも拘らず、何回も手紙の交換や電話の応待をしていると非常に親しくなつたように錯覚するから妙です。殊に酒の上からとはいっても、ぞんざいな言葉で電話を掛けられると売言葉に買言葉で、ついこちらも、先方につられて言葉を荒くし、そんなことから、何かずつと以前からの旧知のように思えてくるのも、相手の女性が客商売のベテランであるからかもしれせん。

そんな電話を最後として彼女からの連絡もなく、そして、いつとはなしに、念頭から消え去っていったのでした。次に述べるようなチャンスがなかったならば、このピンクの封筒の主の話も、ここまででピリオドが打たれるところでしたが、偶然の機会が思わぬことから彼女と逢う運命に至らしめた。といつても別に大した事件でもないんです。と初めにお断りしておきます。

その日は新緑のなんとなく生暖かい風の

吹く夜でした。或る読者の方の招待で神戸まで行き、途中ハシゴで帰りながら飲みついで尼崎まで来て、その方を車から下し、大阪駅のガードをくぐつたのが十一時すぎ頃だったでしょうか。

窓から飛び込んでくる風は酔顔を快くなぶり、赤い灯青い灯のネオンが目先にちらつき出すと、急に睡魔が襲ってきたのですから、どうも危いかぎりです。が、その時偶然、ほんとうに偶然、ほんの一秒前までは夢にも考えていなかった彼女の店のことが頭に浮かんできたのです。咄嗟にハンドルを左へ切つてOS劇場の裏通りへと侵入してゆきました。昼間だったら、とっても、見つかりつこはなかったでしょう。夜だったお蔭で、目ざす彼女の店は苦もなく見つけ出すことが出来ました。そこは一方通行の軒と軒とが接するような狭い通りで深夜でなかったら車なんか止めて置けそうにないと思われる所でしたが、さすがにカバン近くのこととて、酔客がフラリフラリと千鳥足で通る以外、余り人影もないのです。色とりどりのネオンサインの明滅するの、まるで虹のように美しく見えます。やがて、このネオンも一つ一つ消されてゆくことでしょう。

まったく一幅の絵にしたって、こんな見事な構図はそうザラにはないだろうよ。縛られてうなだれた端正な襟首なんか、一度見せたかったねえ。惚れ惚れとするような女の姿なんだから、こたえられねえ。

そのうち、男は行儀の悪いズベ公たちをひきつれ、賑やかに帰ってきた。

女はハッとしたように顔をあげたが、この思いがけないチン入者の目から少しでも逃れようと消えいらんばかりの風情で身を伏せた。

「どうだい、オジさんの話した通りだろう」男はズベ公たちをふりかえつて、そう言う

と女の紐を解いてやった。

女は三指指をついて、ていねいに客に挨拶をしなければならなかった。

あの野郎、また思いついた遊びを考えやがったと、オレは人ごとながらヒヤヒヤしたもんだぜ。

女が男になにか哀願しているようだ。男が笑いながら立ちあがった。ズベ公たちが、どっと笑う。そして、しきりに男にけしかけているようだ。残念ながら、何を言っているのか、そのところは耳に入らねえ。やがて、男は女をつれて、次の間へ消えた。一体、何が始まるうというのか。

娘たちの好奇心にあふれた話しぶりや、ギリギリ光る眼を見ると、オレまで胸がドキドキするような、わけのわからぬ期待に、心はずんでくるのを、どうしようもなかった。

妙なもので、そんな心の一方、あの男に対する嫉ましさというか、羨やましさっていうのか、変にモヤモヤした気持がくすぶってくるんだから、やりきれねえ。

十分ほども時間が経ったろうか。

——オレには、ずいぶん長いこと待ったように思えたのだが——

突然、襖があいた。

さすがのオレも、男のやり方の凄さに、あきれてしまったって、わけよ。

それにしても凄い。

女は腰巻一枚の裸にむかれ、後手にぎっちり縛られ、男に背中をこずかれて入ってきたのだ。年下の同性の前へ——。

ごくつとオレは思わず生ツバをのんだ。

顔も素晴しく美しいが、ハダカにむかれた肌の白さは、どうだろう。今の今まで、一度も空気にさらしたことのない、といった白さなのだ。それが、縄目にくびれて、薄桃色に色づいているのだから、その美しさったら、なかったねえ。

きれいだ。なんて月並な言葉だ。哀れだ、訝えわたっているって代物じゃねえ。

見物しているズベ公たちとは、天と地、月とスッポン。そりゃ、ズベ公たち自身にもよくわかってる筈だ。そうだよ、そうこなくっちゃ、いけねえ。ギリギリと嫉妬に輝いた炎をもやして娘達が寄ってたかって、女をいじめはじめた。

一人はうつむいてる女の顔を無理矢理に電灯の光へむけた。もう一人が面白がって、女の程よく通った鼻をつまんで左右に動かしはじめた。鼻をつままれた苦しさ、思わず知らず開いた口の中へ、モナカを押し込んだもんだ。

なんということだ。そのモナカを鼻をつままれたままで喰えというのだ。二つ、三つ、女はいやでも、その菓子を食べこまなくてはならないのだ。息がつまるからだ。

菓子の次には、ヤカンの水、菓子、水。

ああ、これからあとのことは、さすがのオレも話す気にはならねえ、ええ、そうだろう。

オレも片腹いてえがSのはしくれた。プレイってものには人一倍関心をもっているつもりだが、どうにも、あの女が可哀そうになっ

てきたんだ。

惚れたんだろうか。うん、どうやらオレも本気で恋をしたらしいや、笑ってくれ。オレはナ、プレイってものは、もっと明るくて楽しいもんだと思うんだ。

東の空のしらむ頃には、見物しているオレの方が、ひんやりとした朝の冷氣の中で、びっしりと汗をかいていたってわけさ。

はじめ、オレは男をつけるととき、相手がズベ公じゃ武勇伝の作りようもねえって、言っただ。だが、考え直したよ。あの美しい女のために腕をふるって見ようと思うんだ。そうしてね、プレイの本当の楽しさってものを教えてやろうと考えているんだ。

これでわかったらう。

今夜忍び込むのは、その御用なのさ。盗人じゃないってこと、納得してくれましたかい。

おや、またポツンときたぜ。

ありがたいネ、雨の降る夜はたのしいものさ。あしたの朝は、オレにとって、たまとなに最良の夜明けになるぜ。じゃ、アバヨォー。

(終)

ある女優の

乗馬日記より



倉 仁 成 人

○月×日

十月ともなると、めっきり秋らしくなり、もう下着だけでは乗馬は出来ない。しかし絶好の乗馬シーズンだ。今日は久々に障碍飛びを練習した。今日の馬は「松王」だ。馬丁と

下男に命じて馬場に横木障碍を用意させた。勿論、二人には横木を落した時の為に、障碍の側に立っているよう云いつけた。私は乗馬服と乗馬ズボン、乗馬靴に身を固めて「松王」に跨り、最初のウォーミングアップのつもり

で、始めの三十分位を馬場の中を歩かせた。「松王」も今日は張り切っている様子だ、拍車でけても、鞭で打ってもピンピンとした反応が私の足へ跳ね返ってくる。

そして私は乗馬服を脱ぎブラウス一枚となつていよいよ障碍へ馬首を向けた。馬腹に拍車を突き立てたまま駆けさせて一気に跳ぶ。二度三度、そのたびに少ずつ横木を上げさせていく。一米位迄は何の雑作もなく跳ぶ事が出来たが、それ以上になるとどうしても時々拒否するようになる。私は脚で馬を押し出すようにしてあほり、それでも立止まる事があれば拍車で思い切りけりつけて、鞭で存分に打ち据えてやる。普通の人ならば、馬がもう跳ばなくなると一旦、横木を下げてでもどうにか跳ばせるようにするらしいが、私はそんな事はしない。かつて、短大に在学していた頃に障碍飛越のチャンピオンだったし、今でも充分、自信がある。それに「松王」は一米五十位の障碍を飛ぶ能力は、充分あるのだもの。

私はいつか本で読んだ事がある西大尉がやった方法と、同じ事をしてでも馬を跳ばせようと思った。西大尉は馬を非常に愛した反面、障碍に怖じる馬を鞭で徹底的に懲らしめたそ

うだ。「松王」も長い間、障碍を跳ばなかった。障壁を恐がっているに違いない。

そこで私はどうしても馬が障碍の前で立止ってしまった時、馬が反抗して私にたてつく事より、いかに私の鞭の力の方が強いかを示す為に、その場で手綱を充分、締め上げて思い切り馬の首筋や横面を、鞭で打って打って打ちまくった。馬は始めのうち私の鞭を避ける為に盛んに首を動かし、何んとか逃れようとしていたが、そのうち、せめて眼だけでも打たれまいとして眼をつぶり観念してあきらめたような恰好でじっとしてしまった。それから私は再び馬をたて直して障害へ向って鞭を入れた。

馬は勢いよくジャンプした。私は天馬に跨って空へ上るのかと思えた位だった。ホラごらん、こんなによく跳べるじゃないの！私は今度は鞭の代りに掌で首筋を軽くたたいてやった。乗馬の真のスリルと快感は障碍跳びにあるのだわ！と、つくづく感じる。

○月×日

雑誌のお仕事で、昨日この地へ着いたばかり。今日は早速、グラビア写真の撮影だ。私は「馬に乗るグラマー」として知られている故か、スラックスにグラマーらしく胸もあら

わなブラウスを着て、この辺の駄馬に乗せられて何枚も写真を撮られた。私と同行のA子さんもM子さんも同じだった。好枝自身はいっそ裸に近い恰好で乗馬靴は履いて乗るとかまた服を着るのだったら、正式の服装をして、拍車の輝やいている乗馬靴を履いて、馬に乗りたいのだから、こんな恰好はしたくないが仕事では仕方がない。

写真を撮り終えた私は、直ぐ乗馬ズボンに履きかえ乗馬靴を履いて再び、さっきの馬に乗ってこの辺を遠乗りに出かけた。勿論、同行の二人も一緒だ。彼女等は最近の乗馬ブルムに便乗した口で、まだ乗馬歴は浅いが仲々の乗馬好きらしい。

空は、からりとした秋空で、その上、景色がとても素晴らしい。この青空の下を三人の美女が遠乗りする図は、きっと絵みたいに見える。この辺は、いかにも馬の産地らしく馬体の素晴らしい馬が多い。A子さんは「ああ！あんないい馬に乗りたくないなあ」と感嘆の声を洩らす。M子さんも「私って形のいいハンサムな馬を見ると乗りたくてたまらなくなるわ」と云う。好枝だって同じよ。私は只黙ってほほ笑みうなずいた。広い原を思う存分鞭打って馬を駆けさせ、丘を上り下りして河原

へ出る。彼女等は「こわいわー」と悲鳴をあげながらも一生懸命に私の後をついてくる。水をはねとぼしながら河原を渡るのも気持ちがよい。

河の中で立ち止まり廻りを眺めていると、突然、M子さんの馬が前足をかき始めた。これは大変！私はM子さんに「早く拍車を入れて！」と叫んでM子さんの馬を思い切り鞭打った。馬は驚いて一気に岸へ駆け出した。

M子さんはキャーッと云ったまま馬の首にしがみついていた。M子さんの馬は癖があるらしい。私は彼女に「馬が水の中で足掻きした時は、すぐに拍車を入れるか鞭を入れないと駄目よ。そうしないと馬が水の中にねこるんで、貴女なんかびしょぬれにされちゃうから」と注意した。さあ、最後に私達のホテルまでギャロップだ。皆、一斉に鞭を入れた。

○月×日

霜が下りる位に寒くなったが、乗馬には絶好だ。しかし毎日、仕事々と追いかけられ全然、馬に乗れない。そこで私は馬で撮影所へ通うことに決めた。これは名案だわ！

只、仕事が不規則だから毎日と云う訳にはいかないが、いつも馬丁の石川をつれて出かけることにしている。私が馬に騎って、さっ

そうと行く後から馬丁がトボトボと私のバッグを持って徒歩でついてくる。そして撮影所へ着くと「乗らないで馬を曳いて帰るのよッ。鞍は外してお前が持っていくのよ!」と云ってから馬丁に馬の手綱を渡す。馬丁の石川は馬の背から外した鞍を肩にかついで馬を曳いて行った。だって好枝女王様の馬には他の者など絶対に乗せるわけにはいかないし、馬丁や下男なんかよりも、馬の方がよりいっそう好枝を慰さめてくれる相手なんだもの、好枝が乗らない時位は馬を大事にさせてやらなきゃね!また帰る時には、未だ暗くならないうちならば家に電話をかけて馬を曳いて来させ、再び馬で帰る事にしている。今日はいまい具合に早く切り上げたので早速、家へ電話して、私は乗馬服に着かえ、乗馬靴を履いて馬がくるのを待っていた。しばらくして馬丁が「松王」を曳いて来た、直ぐに鞍を置かせて私は「松王」の背に騎った。他の女優さん達も羨やましそうに私を見つめている。私は胸をはって、得意気に拍車で馬腹をけった。馬上通勤だなんて車で通うより、よっぽど素敵だわ!会社としても私が馬で通うのは宣伝になるので大いに歓迎しているらしい。帰りは土手から河原へ下りて多摩川沿いに

馬を歩かせ家へ帰った。

○月×日

新年に入り、しばらく挨拶廻りやら実家へ帰るやらで、すっかり家をあけてしまい、二日前に始めて家へ帰り、やっと正月を迎えのんびりした思いがする。今日は初乗りと洒落込もう。長い間、騎れなかったので尚更に馬欲がつのってくる。私は、今日は存分に馬を責めてやるつもりで、始めからブラウス一枚に特に念入りに磨かせた乗馬靴を履き、拍車をつけさせて「雪王」に騎った。外気が冷たく少し寒い。しかし、それも始めのうちだけだ。私の征服欲は堰を切って流れ出した。

今年もお前を存分に責めてやるからね!私は独り言をつぶやき、グイグイ脚で馬を押し出しながら拍車をけり込む。柔い馬腹に拍車を突き立てる時の気分は何とも云えない。ものの三十分足らずで身体中がカーッとほてってくるみたい。

続けざまに乗馬鞭で馬の首、肩、腹を打ちまくって駆けさせる。そして、すぐに手綱を左右に引いて急に馬を並足にさせ、また、すぐ鞭で打ちすぎる。こんな事を繰り返すと、一時間余りで馬は疲れが甚だしくなり、へたばってしまう。もう馬は殆んど動けない位と

なって鼻の穴から蒸気のようにフーフーと息を吐いている。私は馬丁を呼び、今度は「松王」に、この鞍を置き替るよう云いつけ「雪王」の背から下りた。その間に私は下女のクニに新しい下着を持って来させ、汗でぐっしよりしている下着と着替え、十分位の休憩の後で、今度は「松王」の背に騎った。

型通りに最初は馬場内を四、五回、並足で廻らせ、また前と同じように猛烈に馬の体を新しい鞭でひっぱたいた。馬は全速力で走り出す。そして頃合いを見計らって手綱を左右に引張って急に停めようとする。しばらくするうち「松王」も、すっかりバテた様子で、のろりのろり歩く、私が、どんなに拍車でけりつけても、もう反抗する気力さえないらしい。とうとう私は、二頭の馬を乗り潰してしまった。私は心ゆくまで馬乗りの味を満喫した。馬は身体中に汗が滝のように流れ、鞭の痕や拍車のけり傷が一杯だ。私も脚がしびれるように痛み、あまり鞭を強く打つので右手を上げるのに精一杯と云うぐらい疲れてしまった。私の乗馬靴につけた拍車も大分弛んで歯の部分には馬の毛と血が固まってこびりついている。

読者通信



四月号は長く待つておりましたが、本日入手いたしましたのでお便りいたします。四月号誌上で「紅色の自画像」という絹川文代さんのお便りを拝見いたしましたところ、過労から寝こんでしまったそうです。その後、病気もなおり急に肥り出し元氣も出てきたと書いてありまして安心いたしました。これからは油断せずに体には常に氣をつけて下さい。いつも写真には白黒だけです。長い髪も黒だと思っておりましたが、茶褐色に染めたり赤く染めたり、手と足を真赤にマニキュアをしておられたそうです（これは写真でもわかりました）が、カラーでの緊縛写真は、きつと素晴らしいと思います。体重は五十五キロ前後、身長百六十三センチ、身長は高い方でしょう。写真だけでなく計算の上からも均整のとれた体格をして

おられることを再認識しました。又、バスト、ヒップ、ウエストもどのくらいですか？年令も二十一才ということ、まだ若いのですから、これからの活躍に期待しております。それにこれから、どしどし、お便りを連載して下さい。読者の問いにも答えて下さい。編集部の皆様、絹川さんの等身大の緊縛写真は如何でしょう。以前、連載されました「乳房に火をつけるな」は不断に吊り責め、鞭責め、灸責め、磔などが出てきますが、その中で私は一番、興味を感じたのは鞭打ちでした。このように、ただ椅子や柱、立木などに縛っただけではなく、吊し上げ、更に鞭で責めたら流石の美女もきつと悲鳴を上げるでしょう。悦虐なシーン、この頃では鞭打ちの様子が簡単に通ってしまい、あつけないようです。四月号で「間違えられた女」の一部分にリンチの場面が

ありますが、ただ全裸にさせて一鞭、打ったぐらいに終りそうでした。「乳房に火をつけるな」以上に残酷なシーンのある物語が出ることを望みます。読者通信の中に神奈川の古家悠子さんは鞭打に興味をお持ちのようですが、私も同好者です。だが貴女はマゾヒストですが私はサディストです。お手紙の交換を致していただけるものでしたら、お相手をお願いいたします。又、古家さんも云っておられました「鞭打ちされる女」の写真をお持ちの方は譲り下さい。長野県内の同好の女子の方もお便り下さい。（長野、山田英美）

○ 静岡の緊縛生様、あなた通信は私に強い共感を与えました。公園の芝生に寝ころんで渾身の緊縛感に酔いしれているあなたを想像し、共に語り合うことが出来たと思います。六尺褌をしめている人は、ほとんど見かけなくなりまして、それでもごく稀に銭湯で行きあうことがあります。

しかし、すべて老人で中年以下の人は皆無と云ってよいほどです。私自身、よく六尺褌一本で銭湯の鏡に体を写すことがあります。若いだけに一種のスリルもつかぬ感情のふるえを感じます。同好者がいたら非常な親近感を持つことでしょう。静岡の角田様、近くお会いできる機会があると思います。近況をお知らせ下さい。緊縛生氏と一緒に交換できたら、どんなに愉快でしょう。（内田武男）

○ とやま氏の「愛好者の記録」に時々オシメに関する記事が出てくるので楽しみにしています。今後とも私達オシメマニアを喜ばせてくれるような記事を書いて下さい。十月号で大人用オシメとは……と書いておられましたが、大人でもオシメを使う場合があると云うことを昨年、病院生活を送っている間に知り、実際に見る機会があり、また自分でも体験しました。急病であつたので部屋がなく

女体 『浣腸風景十二態』

(9×13Cm) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

女の患者と同室しましたが、この女の方は交通事故で下半身の神経が麻痺してしまい、オシメを当てて寝ておりました。とり換える時は、いつも真中のカーテンを下げて看護婦さんに世話をして貰っており、雨の日などは窓には沢山の色とりどりの浴衣地で作ったオムツが干され、私はそれを切ない想いで眺めておりました。若し自分が隣の女の人のように看護婦さんにオシメの世話をして貰えたらどんなに幸せだろうと思いました。女の方は私と同じ年か又は少し年上のようにでした。また、よく浣腸もされておりましたがオムツを使つてとつていたようでした。しばらく過ぎたある日のこと、レントゲンを撮りにいった帰りに看護婦室で二、三人の看護婦さん達が！六号室のK子さんね、今朝もオネシヨよ。困ったわ。やっぱり病気のね。あんなに美しい方なのに

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

ね。今夜からオムツの用意をしておきましようか？此頃オシメを使う患者さんが多いわね。Kさんを入れると四人だわ——手術後、絶対安静になった或る日、この会話を思い出した私は、思いきつてベッドをわざと濡してしまいました。そして私は永い間の夢を実現できたのでした。看護婦さんに「大きな坊や、オムツを当てておきますから安心してお休みなさい」といわれながら恥しきで熱くほてる顔を手で隠して私はじーっとしておりました。翌日、見舞に来てくれた姉は「困った子ね」と云いながら幾組かの浴衣地で作ったオムツを包みから取り出すのでした。病院はオムツ・マニアにとっては天国です。誰にもハバカルことなく浣腸をしたり、大人がオムツを使っています。同好の方々の声が最近、あまりないようですがみなさまの夢や体験を発表して下さい

特高拷問

△破られたズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

○浣腸フオート

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

○浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

さいませんか。そして「オシメ愛好者」のグループを作り、お互の夢や体験を文通により語り合い、またオシメのコレクションをしていく方々は交換し合ったりしたら面白いと思います。現在は健康になり姉二人と一緒に生活していますので、あまり自由なこととは出来ませんが夜はオムツを使います。約二十枚ぐらゐの浴衣地のオムツを持っています。ほとんどが入院中に作って貰ったもので、あの時に知り合った看護婦さんとは、その後も友達として交際しています。すが、今でも夜尿症が続いていると思つており時々冷かし半分にオムツを作つてあげましょうか？等といつて人を困らせます。(東京 T・H 生)

うになりました。はじめの頃は足の指に憧れていました。この頃では、だんだん脛にひかれるようになりました。かもしかのようになり表現されるというすうとした細い足よりも、大根足とまではゆかなくとも、たつぷり肉のついた脂ぎった精力的な若い女の脛が好きです。今年の冬は寒中でもストッキングなしの素足をむきだしにして歩くことが流行したので大分目の保養をしました。この間も、まだ三月になったばかりというのに、十八、九の娘さんがショートパンツ一枚で太股から真白い股まであらわしてサンダルをつっかけ、て電車道を歩いているのを見て、八月の太陽を直視しているようなまぶしさを感しました。時折、貴誌にも女性の素足フェチについての記事や通信を拝見します。同類項ここにありと大変心強く、以来ずっと貴誌を愛読しております。最近宝塚二三夫氏の文章が掲

載されませんが、氏の文も徒らに事実の羅列に終わらないで、もっと素足フェチについての深く掘りさげた告白文をお書き下さったなら、と思わずにはいられません。しかし、この頃の娘さんは、自分の素足に対する羞恥心なんて殆ど持ち合せがないように見受けられますが、その点いかなるものでしょうか。(大分 津久井生)

○ 始めてお便りするパンティーマニヤです。私は二十四才で会社員ですが四、五年いや、それ以上前から女性用パンティ・ブローズ等日常使用致しております。もちろん男子用のナイロンブリーフも持っています。股ぐりが浅いし前があいているのでいやです。近頃男子用でも前のあいていないパンティイがあります。やはり女性用と比較しサイズも大きいし同じトリコットでも生地が厚く使用する気にはなりません。それで私は好んで女性用を買います。女性用は股ぐりが深く切りこまれサイズも小さく生地も厚いので私には体にびっちりし大変はき心地が良いと思います。私の持っているものはサイズの小さい浅いものが多いので背後から見ると、ふんどしに似

ています。又店でこれらのパンティを買うのが好きで女子店員が変な顔をするとかあります。先日買ったのはバレーリーナがタイトの下にはく様な服が非常に切り上ったものでしたが、使用感は大変でした。私は又これらパンティを使用しているのを女性に見せたり又美しいグラマー女性のはき古した小さなパンティを着用したり、或はパンティ姿の私を女性から凌辱されたかと思うのです。どなたか女性の方で、この念願をかなえて下さる人がいましたらお願いいたします。お礼をたくさんしますし貴女の着居されたパンティを喜んでお洗たくします。では又お便りします。青い小さなナイロンパンティをはきながら。(東京 今井博)

○ 読者通信欄の皆様、就中S女性に誌上をお借りして初のお目見得致します。これからSMの活躍する素敵な季節です。実は私、Mの未経験者ですが自縛自吊り等で我慢しています。第三者に徹底的に諸々の責めを受けたら、どれ位の苦痛が快楽かと空想しています。私は如何なる責めでも甘受しネをあげない自信はあるつもりで

ヌード初縛り

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 平野 笑子 略号(みい)

敷布の白さよりも白いヌードが縄目にもだえて……

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 岩井 知子 略号(みは)

稚き柔肌にまといつく縄目は痛々しいまでに苛烈だった。

観念の座

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 平野 笑子 略号(みほ)

縄と縛の祭壇に上ったいたけにえは観念の眼を閉じていた……

開股縛くらべ

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 絹川 文代 略号(みと)

黒い紐は白い肌に奇妙なコントラストをかもし出した。

ヌード初縛り

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 田原美佐子 略号(みろ)

初々しい裸身が縄で自由を奪われて描く美しい女体構図。

全裸後手くらべ

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 平野 笑子 略号(みに)

艶やかな色香に満ちた餅肌も縄にくびられて哀れな表情……

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 絹川 文代 略号(みへ)

白磁の肌にヒシヒシと喰い込む妖しい縄の魅力……

椅子開股縛

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 絹川 文代 略号(みち)

身動きも出来ない後手しぼりと剥がれたブローズとは……

す。就中鼻吊り責めは素晴らしいでしょう。S女性で責めに自信の方は居ませんか。自信のある方は遠慮なく御連絡下さい。昨年春に鼻責めの記事がありました。鼻責めの根本の穴を開けるには最初は木綿針でも少し痛く僅かに血が出

ましたが大したことなく穴は開きました。それから順に(穴を大きくする為に)布団針、釘、鰻用錐、手帖用金属ペンシル、錠前、電燈覆のビニール(その他まだまだあります)等、化膿化防止にはヘンシリンを使用しました。穴の

塞がるのを防ぐ為3ミリのビニールを1センチ位に切断差込み、ビニールの色はピンク色が肉色に丁度似合うので使用しました。余り目立たず都合がよく穴の中も日が経つにつれ薄くなります。家でも通勤にも差込んだままです。誰かSの人に見付からないかと期待していましたが駄目でした。二、三日位のプレイでしたら針金なりを五センチ位輪にして通し半田付けしても好いのです。何かにつけ鼻孔錠が取付けられる事は都合もよく、総ての責めに便利でしょう。私を責めてみようとされるS女

麗しき縛しめの乙女たち

大手札型印紙画焼付
各組三枚一組二五〇円

聖壇の裸女

略号(けい)

△モデル 絹川文代△

カーテンの翳

略号(けろ)

△モデル 絹川文代△

艶姿色模様

略号(けは)

△モデル 絹川文代△

浴場の欲情

略号(けに)

△モデル 大塚啓子△

いけにえ人形

略号(けほ)

△モデル 絹川文代△

のぞき見極楽

略号(けへ)

△モデル 絹川文代△

開股悦虚境

略号(けと)

△モデル 大塚啓子△

ダンロの開股

略号(けち)

△モデル 田原美佐子△

開股絶命

略号(けり)

△モデル 愛川悦子△

悲鳴開股

略号(けぬ)

△モデル 絹川文代△

性の方御連絡下さい。尙私は大した事なく平凡なM希望者です。見て何んだと思われるかもしれないませんが責めで絶対カバー出来るのです。物は試しです。秘密厳守で約状でも書きます。私の行動半径は申訳ありませんが当地から2時間以内を希望します。契約成立の際本誌旧号等に依り健全なプレイを研究考案するのも好いでしょう。(名古屋 犬丸安介)

女体浣腸連続フオート

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円
モデル 愛川悦子嬢

くなり解散も考えております。私たちは最も女性の機能的下着としてふんどしや男子用ブリーフを着用して、それらの感想をのべる機会が今迄ありませんでしたので本月は男女下着(特にパンツ類)についての着用方法等述べたいと思います。まずは下着の市場調査といった所です。まず男の方から申しますと現在は申又、パンツ、ブリーフ、ふんどし等とありますが若い人達はブリーフが圧倒的で次にパンツ、申又、ふんどしの順でございます。まずブリーフは女性用パンツに等しく形色等も殆んど変わりありません。サイズは小さいのが好まれ、はちきれそうなくらいみはほ、んとうに男性美を表わします。パンツ申又類はこの点全く失望して見ます。ふんどしも強くしめ上げた美しさ、足を合せて立つと後から見えなくなる程しめている人を見るとこの上なく美しく感じます。女性の方をのぞいてみますと、何と八〇%ぐらいがパンツ、のこりがブローースその他で

す。ブリーフを見てみますと女性用は近頃益々短く股ぐりが深くなり、ふんどし形になってくるようです。着用している人を背後から見ると半分以上の人が尻が出ています。ひどい人達では殆ど丸出しで丁度男性のふんどしの後姿と同じです。それに生地が薄い為本当に大変なものです。ブローースは中年以上の人が多く先日太った婦人が小さなナイロンパンティをはきその上に黒ブローースをはいているのを見ました。私のこれらの体験から本誌の写真に男子モデルに女性用パンティを、女性モデル(大塚様等最適)に男子用ナイロンブリーフを着用させのせて下さい。私はこれで三度か四度の掲載ですが、この写真をぜひ本誌に出して頂きます様何度もお願ひしましたが一度も聞いて頂けないので情けなく五月号までのせて頂けなかつたら、もう本誌は買いませんわよ。塚田章様とおつき合い致したいと思ひます。(富永洋子)

僕は褌マニヤの一学生です。本誌を愛読してからまだ二年ほどですが、今では完全な褌マニヤとなり文字通り緊褌一番フンドシに生きています。どんな寒い夜でも六尺褌一本、勿論、学校に行く時も学生服の下に、いつも切りたての六尺褌を締めてゆくことを忘れません。銭湯にも必ず締めてゆきますが、残念なことには東京の浴場などで現在、六尺褌を締めている男を見掛けることは出来ません。越中やもっこ褌ですら中々見られない有様で湯からあがつて鏡の前で悠々と褌を締めている僕に例外なく好奇の目が集まりますが、そんな時、恥しい反面、褌に生きる誇りと喜びを感じて益々褌への執着を深めます。この頃は晒の褌にあきたらなくなつて手あたり次第ナイロンやプリント模様のブロードなどを六尺褌に締めてみましたが、やはり木綿それも単色のものが最高です。流行のウイクリー・パンティにならうつもりではあり

ませんが、最近ウイクリー・フンドシを常用しはじめましたが中々ゴキゲンです。生地はすべて木綿でフトン裏に使う生地の中から六色をえらび、月曜―白、火曜―茶、水曜―水色、木曜―緑、金曜―黄土曜―紺、日曜―赤、と毎日とりかえては、楽しんでいきます。夜寝る時に、翌日の褌を枕元に置き、朝フトンを跳ねのけて締めかえた時、体中に力がみなぎりモリモリと斗志が湧いてきます。豊かな色彩感覚を楽しみながら毎日締めかえるカラーフンドシは清潔ですしとても便利です。と言うのは曜日を忘れた時でも締めているフンドシを見れば直ぐわかるからです。尚、僕のウイクリー・カラーフンドシは晒の六尺褌よりやや幅を狭く作り愛用しています。前巾が狭いので股がぐいと締め上げられ尻にもぐつと喰い込んでくるので締め心地がよいばかりでなく、結び目をキリリとして見た目にも最高です。褌マニヤの諸兄にも、ぜ

新作『血紅使用切腹フオート』分譲

モデル 絹川文代嬢

(大中判印画紙焼付)

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

女性『切腹風景十二態』(9×13センチ)印画紙焼付 十二枚一組 九百円
モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

褌美切腹

大手札判(9×13厘米)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
二枚一組 二五〇円
略号(こせ)

切腹のプレイ

大手札判(9×13厘米)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(れい)

女性自刃三態

大手札判(9×13厘米)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(じじん)

豊麗切腹三態

大手札判(9×13厘米)印画紙
焼付 モデル 愛川悦子嬢
三枚一組 三〇〇円
略号(ほう)

ひおすすめしたいと思つてペンをとりました。(褌ボーイ)

私は古くから四馬氏の絵のファンの一人です。さて悦特第三集の面集を拝見して感想を述べさせて頂きます。『出歯の男』は責口が単なる吊り、プラス、くすぐりという、ありふれたものであることが弱点です。それに男が余り常人ばなれした顔で感心しません。もつと人間らしい醜男にした方が良いでしょう。或は痴呆の男にでも。そして右手に粗いブラシでも

持たしたら面白いと思います。古池の怪は女性のウェストを細くしたかったです。丸太棒のようなスタイルの女は責める方だけにしてくして下さい。足の爪先は、すこし口調の悪い題ですが、内容が簡単な鼻吊りポーズなら良い画と思います。責められる女は如何にもつらそうな感じですが。願わくば唇の形をもつと美しく……。足枷責め。この女性の顔、全く素敵です。顔だけではなくポーズも脚も手も体軀も素敵です。足枷は

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	（昭和30年10月号）	△売切▽
復刊第2号	（昭和30年11月号）	△売切▽
復刊第3号	（昭和31年4月号）	△売切▽
復刊第4号	（昭和31年5月号）	△売切▽
復刊第5号	（昭和31年6月号）	△売切▽
復刊第6号	（昭和31年7月号）	△売切▽
復刊第7号	（昭和31年8月号）	△売切▽
復刊第8号	（昭和31年9月号）	△売切▽
復刊第9号	（昭和31年10月号）	△売切▽
復刊第10号	（昭和31年12月号）	△売切▽
復刊第11号	（昭和32年1月号）	△売切▽
復刊第12号	（昭和32年2月号）	△売切▽
復刊第13号	（昭和32年3月号）	△売切▽
復刊第14号	（昭和32年4月号）	△売切▽
復刊第15号	（昭和32年6月号）	△売切▽
復刊第16号	（昭和32年7月号）	△売切▽
復刊第17号	（昭和32年8月号）	△売切▽
復刊第18号	（昭和32年9月号）	△売切▽
復刊第19号	（昭和32年10月号）	△売切▽

復刊第20号	（昭和32年11月号）	定価二百円
復刊第21号	（昭和32年12月号）	定価二百円
復刊第22号	（昭和33年1月号）	△売切▽
復刊第23号	（臨時増刊号）	△売切▽
復刊第24号	（昭和33年2月号）	定価二百円
復刊第25号	（昭和33年3月号）	定価二百円
復刊第26号	（昭和33年4月号）	定価二百円
復刊第27号	（昭和33年5月号）	定価二百円
復刊第28号	（昭和33年6月号）	定価二百円
復刊第29号	（昭和33年7月号）	定価二百円
復刊第30号	（昭和33年8月号）	△売切▽
復刊第31号	（昭和33年9月号）	定価二百円
復刊第32号	（昭和33年10月号）	定価二百円
復刊第33号	（昭和33年11月号）	定価二百円
復刊第34号	（昭和33年12月号）	定価二百円
復刊第35号	（増刊号青い廃院）	定価二百円
復刊第36号	（昭和34年1月号）	定価二百円
復刊第37号	（昭和34年2月号）	定価二百円
復刊第38号	（悦唐小説と緊縛写真）	定価二百円
復刊第39号	（昭和34年3月号）	定価二百円
復刊第40号	（昭和34年4月号）	定価二百円

復刊第41号	（昭和34年4月号）	定価二百円
復刊第42号	（昭和34年5月号）	定価二百円
復刊第43号	（昭和34年6月号）	定価二百円
復刊第44号	（昭和34年7月号）	定価二百円
復刊第45号	（昭和34年8月号）	定価二百円
復刊第46号	（昭和34年9月号）	定価二百円
復刊第47号	（昭和34年10月号）	定価二百円
復刊第48号	（昭和34年11月号）	定価二百円
復刊第49号	（昭和34年12月号）	定価二百円
復刊第50号	（昭和35年1月号）	定価二百円
復刊第51号	（昭和35年2月号）	定価二百円
復刊第52号	（昭和35年3月号）	定価二百円
復刊第53号	（昭和35年4月号）	定価二百円
復刊第54号	（昭和35年5月号）	定価二百円
復刊第55号	（昭和35年6月号）	定価二百円
復刊第56号	（昭和35年7月号）	定価二百円
復刊第57号	（昭和35年8月号）	定価二百円
復刊第58号	（昭和35年9月号）	定価二百円
復刊第59号	（昭和35年10月号）	定価二百円
復刊第60号	（昭和35年11月号）	定価二百円
復刊第61号	（昭和35年12月号）	定価二百円
復刊第62号	（昭和36年1月号）	定価二百円
復刊第63号	（昭和36年2月号）	定価二百円
復刊第64号	（昭和36年3月号）	定価二百円
復刊第65号	（昭和36年4月号）	定価二百円
復刊第66号	（昭和36年5月号）	定価二百円
復刊第67号	（昭和36年6月号）	定価二百円
復刊第68号	（昭和36年7月号）	定価二百円
復刊第69号	（昭和36年8月号）	定価二百円
復刊第70号	（昭和36年9月号）	定価二百円
復刊第71号	（昭和36年10月号）	定価二百円
復刊第72号	（昭和36年11月号）	定価二百円
復刊第73号	（昭和36年12月号）	定価二百円
復刊第74号	（昭和37年1月号）	定価二百円
復刊第75号	（昭和37年2月号）	定価二百円
復刊第76号	（昭和37年3月号）	定価二百円
復刊第77号	（昭和37年4月号）	定価二百円
復刊第78号	（昭和37年5月号）	定価二百円
復刊第79号	（昭和37年6月号）	定価二百円
復刊第80号	（昭和37年7月号）	定価二百円
復刊第81号	（昭和37年8月号）	定価二百円
復刊第82号	（昭和37年9月号）	定価二百円
復刊第83号	（昭和37年10月号）	定価二百円
復刊第84号	（昭和37年11月号）	定価二百円
復刊第85号	（昭和37年12月号）	定価二百円
復刊第86号	（昭和38年1月号）	定価二百円
復刊第87号	（昭和38年2月号）	定価二百円
復刊第88号	（昭和38年3月号）	定価二百円
復刊第89号	（昭和38年4月号）	定価二百円
復刊第90号	（昭和38年5月号）	定価二百円
復刊第91号	（昭和38年6月号）	定価二百円
復刊第92号	（昭和38年7月号）	定価二百円
復刊第93号	（昭和38年8月号）	定価二百円
復刊第94号	（昭和38年9月号）	定価二百円
復刊第95号	（昭和38年10月号）	定価二百円
復刊第96号	（昭和38年11月号）	定価二百円
復刊第97号	（昭和38年12月号）	定価二百円
復刊第98号	（昭和39年1月号）	定価二百円
復刊第99号	（昭和39年2月号）	定価二百円
復刊第100号	（昭和39年3月号）	定価二百円

いつもの固定式にして太腿の一方だけを細い皮紐で捻じあげる責め方の方が、肉にくびれ込んで魅力的でしょう。足首では、そう深く肉に喰い込みもしますまい。それにしても、この女性には最近での佳作。裸馬の轡。欠点は頭デッカチ。女の鼻と馬の鼻と同じ恰好はがっかり。ウエストは太く、脚は大根。切角の責め口が、この女性になつてないので魅力半減。それ

に頭は固定せず、がつくりうなだれた方が良かったでしょう。鉄檻の餌物。女体が小さ過ぎますね。男がたとえ書けなくても、女体を大きくせねば迫力がありません。裸馬の轡も同様です。そして鼻がひしゃげてこのポイズならば、膝の間に鼻がいつてひしゃげはしない筈です。それに何もかも縄のぐるぐる巻きでは芸がないです。こんな小さな檻にこれ

るならば、後手も不要、自由にしておいてもこんなのに押し込んでおけば結構、哀れさが出来ます。いや縄のない方が一層、魅力的だったでしょう。或は首輪をはめ、それを檻の鉄棒に鎖でつないでは如何が……。雨中の晒は責める男は、夫を出さず、親方。或は単に「男」という方がよい。この面は責められる女の小さいのが欠点。責めは女体が大きく描けてなくて

は迫力に乏しくつまらない。大きくというのは大柄の女のことではなく、小柄の細っそりした蕾の如き乙女でも寸法を大きく例えれば足枷責めや、キング・サイズ・の如くという意味です。キング・サイズ・の姿態は八つの面の中に「足枷責め」と共に非常によいと思えます。からだも綺麗だし、左足の脚線などは、かつての美容体操の少女の脚の如く綺麗で

す。しかし、右足、面でいえば左側の膝よりクルブシまでがいけません。不様です。それと手がやや貧弱です。その綺麗な女性に立たしたらビッコですよ。右足は失敗でした。今までの既刊号の中より傑作を拾うと、サド特集号(第三集)の「哀れな強力」(これは裸体にしたかった)ムチ打ち開始。サド特集号(第二集)の「犬の訓練」(この画は逸品です)「女体輓馬」。悦唐特集号(第二集)の「あんよはお上手」。緊縛特集号の「奴唄と云う責」(これも絶品)「女学生の嫉妬」(鞭の御馳走)。(鞭打ちは時折あっても鞭跡が女の肌に残っているのは珍しいし又、凄く魅力がある)「狂気の復讐」女体の荷物」(これの惨虐さと女の表情、そして女体の感覚など、この画も絶品)普通号の「新入荷家畜Y第31号」責めへの期待」(清楚な顔がよい)な

どがベストテンに入りました。次に私の案を一つ申し上げます。馬の後足の足首に、馬の方を向かして立たした女の脚首を括りつけ手は別々に縄で鞍の方に引っぱって縛りつけると、女は馬の尻をかかえた様な形になり、しかも胸から顔まで馬の尻の処に行き、馬は氣持悪がって尻尾を振り上げ駆け出そうとしているのです。そして馬上には乗馬姿の意地悪そうな責手が鞭を手に、そんな女を冷い目で見降している。といったのは、どうでしょう。一頁大ではなく二頁一杯に描かねば女体が小さくなって迫力に欠けましよう。(四馬氏の一ファン)

愛読者の皆様、御元氣ですか。私は一月に各地を廻りまして見てまいりましたが、面白い処がありました。先ず福島県の柳津へ行き奇祭を見て驚きました。真白い雪

絹川文代緊縛姿態集

大手札型印画紙焼付型

○全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手略号(きた)

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号(きり)

三枚一組 二五〇円

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

愛川悦子嬢の巻

大手札型(9×13センチ)印画紙焼付

☆ベッド変型縛り(略号しん1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号しん2)

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号しん3)

☆全裸縛り(略号しん4)

五枚一組 三三〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号しん5)

五枚一組 三三〇円

☆股間しぼり(略号しん6)

四枚一組 三〇〇円

におおわれた神社の広場に数百人の六尺禪一本の年男が勇しく暴れていました。紅白の麻のロープへ我れがちにぶら下りロープを伝つて堂へと暴れ狂う裸の群れ、私はこの姿を下からカメラにとらえようと前へ出ましたが、なかなか進めませんでした。そして、やっと堂の下へたどりつきました。ふんどし一つ若者が「ワッショイ、ワッショイ」と、かけ声を出してよじ登る姿は真下の私を喜ばしてくれました。岡山の会陽は残念ながら見物に行かれず新聞で見ましたが、小さくてはつきり見えませんでした。京都の法界寺とい

う御寺では子供がフンドシ一つで踊るのです。頭上に手をあわせてたがいに背中を揉み合せて踊る姿は寒さを吹きとばすようでした。又、福島県のある山間の小さな部落では、夜八時頃になると二十数名の青年が田んぼの中の池のそばに集り、降りしきる雪の中でフンドシ一つになります。そして掛声と共に池の中に飛び込みます。やがて池から上ると、田んぼの中で暴れ廻る風変りな裸祭です。「六尺のふんどし白き男かな」戦時中だったか或る雑誌に右のような句が出ていたことがありました。一口に禪といっても色々あるが、何

といっても六尺褌が王座です。日焼けした頑丈な肉体に喰い込むようにキリリと締めた六尺褌の美しさは他に類がありません。世の中の進歩につれ六尺褌を使う人が減ってきました。淋しい限りです。僅かに水泳の時以外にしか見られないのが残念です。私は中学校時代には赤褌をしめたものですが、現在もずつと六尺フンドシをしめています。恐らく一生しめ続けることでしょう。六尺褌をしめる習慣をつけると、他のパンティや越中は駄目です。下腹にしまりがな

く物足りません。他の者が越中やパンティをはいているのに私だけが六尺フンドシをしめていることは時代遅れの感がして、恥しいがしかし、その氣持を乗りこえて六尺褌をしめなければならぬようになっていきます。先ず健康上から又、氣分的にいつて経済的にも六尺褌ほどよいものはありません。我国、古来からの民族的伝統のあるフンドシです。越中褌のはじめは延宝年間、木村屋又次郎の抱えに越中という太夫があつた。或る時、相方の客が風呂に入るう

女体責写真厳選集

大手札型印画紙焼付
各三林一組二五〇円

危機一発 略号「きき」

後手猿轡の無防備な身体に襲いくる悪魔の手に引きはがれようとすするパンティ (絹川文代)

女体開陳 略号「かい」

美しい女がきびしい縄目に足をくの字に曲げての喘ぎようはただでない。 (絹川文代)

哀花悶々 略号「あい」

白く輝く柔肌をぎりぎりとタテに縛りあげて悶えに悶えぬく哀れにも艶な姿。 (絹川文代)

雁字掙目 略号「から」

首、胸、腰、股とガンジガラメに喰い込めとばかり滅茶苦茶に縄をかけられ。 (絹川文代)

寝室俯瞰 略号「ふか」

ポリウムのある愛川さんの肉体が縄目にくびれて盛り上りベツドに転々と…… (絹川文代)

柔肌地獄 略号「やわ」

押せば凹こみ放せば弾き返えす張りのある全裸の柔肌を余すところなく露呈。 (大塚啓子)

として褌まで外したので、みかねて自分の湯具のひじりめうの二布をときはなし、それに紐をつけてその客にしめさせた。並いる人々は越中太夫の機転に感心した。故に越中褌と呼ぶようになった、というのが一説。又、秋元越中守が利根川の治水工事に数多の工夫を集めたが、六尺褌では布が多すぎるので半分の三尺に紐をつけて与えたため、その名が残ったという説。もう一つは、松平越中守が天明寛政の頃、布節約のため三尺のフンドシを奨励したという話。以上、三説とも人名をとった処が面白いと思います。越中褌は簡便で愛用者が多いが「当て事と越中褌は向うからはずれ」と甚だ頼りない褌です。又、越中褌と違ったモッコ褌があります。越中褌とちがつて尻から外れる心配もない褌です。昔、武士が戦場にのぞむ時死後のみだしなみとして考案されたのがモッコ褌です。現在、越中褌について愛用されている褌です。褌の色彩については、やはり白が一番多い。褌の愛好者にとつて、切りたての晒木綿の白さは絶体的な魅力をもっています。関東では水泳の際赤フンドシが多いが関西では余り見ることは困難で

す。戦時中、九州で軍隊の水泳を見たが全員、赤褌で整列していました。美しい姿でした。赤褌は魔よけになると昔からいっています。現在、九州地方の炭坑で小敷であるが黒いフンドシをして働いているのを見ました。話を聞けば汚れが見えぬと笑って語っていました。褌の呼び方は色々あります。現在としては下帯、褌の名称が使われています。地方によっては褌と書いてへこと読ませる処があります。褌、下帯の外に、たふさぎ、犢鼻褌、ふどし、たずな、ふもだし、すましもの、ちいさきもの、肌帯、袴、裳、下袴、明衣へこ、まわし等と称しています。現在、角力の社会では、まわしと呼んでいますが、身体にぐるぐるまわすからそういうのでしよう。又、みつともいいますが、これは褌をしめた後の結びこぶが三つ辻になるから、それを略してみつと呼称されるのではないかと私は思っています。最近、色々と類似雑誌が増加して来ました。風俗奇譚、裸女〇〇画報、或は裏窓等の雑誌が出廻り、本誌が少々痛手になるようです。それは、他の雑誌には四頁以上にわたり昔の刑罰の色々の責め方

花坂道子緊縛フオト集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

や縛り方が出ていますのに、なぜ本誌は出してくださいませんののでしょうか。女の責め絵も結構ですが、男の責め場も出してください。横村奏氏や菅良太氏の文を期待し口絵や写真に男責めの出るのを要望しております。それが何よりの私の楽しみです。(清水、ふんどし男)

○ 東京、原川美津夫様。おたより拝見しました。そしてこのお手紙を出すか出すまいかと随分、迷ったのですが思い切って決心して再びペンをとらせて頂きました。正直の処を申しますと私のあの文が読者通信欄に載るとは夢にも思いませんでした。二月号にあの文が出ていたのを見ました時、大変驚き、ひとりで顔が赤くなるのを感じたのです。そして又、後悔に似た気持が随分としたのですが、三月号で原川様のおたよりを拝見

すると共に、そうした気持がまだ相当残っているにもかかわらず、お恥しいながら再びおたよりせずにはいられなくなってしまうたのです。原川様は肉体的に苦しめることよりも精神的に辱しめを与えることに喜びを感じると書いていらっしゃるようですが、私も全くその通りなのです。勿論、少しぐらいの苦痛でしたら我慢できますが、激しい苦痛はとて堪えられませんが、単に想像の範囲にとどめましても、そうした責めには魅力を感じません。激しい苦痛と申しまして、はつきりいたしません。私の申しますのは残酷さをとめたものです。ですから浣腸による苦痛とかコルセットによる苦しさをしたら本当に喜んでお受けしたいと思えます。原川様は二、三の責めのタイプを書いておられますが、何か私の心の中を見とおされてしまったように私のイメージ

にびつたりのことを書いておられるので本当にびつくりし恥しくなっていました。私はバレーはしません、トーションズによるものなど本当にしたいのならどんなに素晴らしいことでしょう。ただ逆さエビとか重みにより体を後にそらせる責めは、私の好きな苦痛ではないようです。重みによる責めの中では両足を左右に開かされるのでしたら、先ず伏臥にされた私の両足に重みをつけた綱がつけられ、それが両足を横に引っぱるようにして装置されます。手

いくら少量でも、そう長い間では相当の辛さを与えてくれることでしょう。何が何でも我慢し、しかも平静を装わなくてはならないのはさぞ辛いことで又、素晴らしいお仕置のような気がします。(東京 九仁子)

本誌を愛読されています浣腸愛好家の皆様、この誌上を拝借して皆様の仲間入りさせて頂くことをお願いいたします。私も「浣腸」とか「オムツ」という言葉に非常に興味を持って、これ等を愛好しております。しかし浣腸といえは病人にするものであり、オムツは赤ちゃんに当てるものだという先入観のために、自分の考えが何か不健全のことのように思えて絶えず不安な気持でおりましたのが、本誌を手にとるようになってからは、このようなことを愛好される方が他に多くいることを知って心強く感じるようになりました。浣腸のプレイも色々な方法で行うことが出来るものなら、又、それ自

写真 磔

(ハリツケ) 三態 略号(はり)

大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚啓子

体、楽しいものでもあります。でも、ただ一人で多くの空想を抱きながらプレイするのは何か物足りなさを感じます。一度でよいから上原様や大橋様のようないメージで浣腸され責めて貰いたいと思います。焼けつくような感触、その後の強烈な苦しみ、それ等を歯をくいしばって耐えながら悶え苦

しみます。胃洗滌、腸洗滌、グリセリン浣腸、ヒマシ油責め等、どんなことでもして頂きます。私は浣腸グループが実現することを心から願っています。それから四月号にオムツカバーのことが書いてありましたが、私はこの広告のこのを知っておりまます。このお便りを書かれた方はどんな人か存じま

せんが、オムツカバーをどのようなに愛好し又、どのような体験がありますか教えて頂きたいと思います。私にとってオムツやオムツカバーは浣腸と組合わせてトリオのようなものです。お恥しいことですが私はこれを愛用しております。我身をひそかに童心にかえらせ誰かに甘えてみたいと思う心と、誰

れにも気づかれぬままにこれを着用したときの心の脈動、それがたまらぬ喜びとなるからです。でもそのための羞恥心は多分にあります。柄模様の大きなオムツカバーそしてゴムで裏張りしたピンクのオシメカバーなど、誰かが私にこれを当てて下さったりオシメをとりにかえて下さったならば……と考

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(6×6.5種) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

Y1	全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
Y2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3	観念した胡坐	(大塚啓子)
Y4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
Y7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
一組一枚		八〇円
五組五枚		三〇〇円
十組十枚		五五〇円
二十組二十枚		一〇〇〇円
三十組三十枚		一四〇〇円
四十組四十枚		一七五〇円
五十組五十枚		二〇〇〇円

Y8	裸身の補われ人	(愛川悦子)
Y9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10	全裸ねやの縛り	(田中芳代)
Y11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13	蒲団貫通またぎ	(大塚啓子)
Y14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16	全裸脚掌股間縛	(絹川文代)
Y17	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19	全裸全身露出像	(愛川悦子)
Y20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22	退ましきヒツプ	(愛川悦子)

Y23	大の字晒し	(絹川文代)
Y24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y27	もつこれで許して	(益田房子)
Y28	むしられたスロース	(花坂道子)
Y29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31	囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y32	全裸強烈股間縛	(絹川文代)
Y33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34	開股一番一直線	(絹川文代)
Y35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y36	亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39	椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y40	強烈第手首縛縮	(田原美佐子)
Y41	ハダカ縛り人形	(絹川文代)

Y42	濃艶ハダカ縛り	(絹川文代)
Y43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45	後手立木吊り	(村井知可子)
Y46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47	全裸寝台羞恥責め	(花坂道子)
Y48	振袖合嬢後手責め	(花坂道子)
Y49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59	聖壇のさし者	(絹川文代)
Y60	エビ責めの表情	(絹川文代)

え、空想は更に拡大していきま
す。始めてお便りするのに何か行
きすぎた感じですが、何とぞお許
し下さい。そしてこれを機会に御
交信下さいませよう心からおねが
い申し上げます。(一マニヤよ
り)

○ 秋葉まり様。私は気の弱い気の
小さい男です。女王のように気位
の高い或は均整のとれたボリユー
ムある肉体美の持主の女性に思い
きり弄んで貰いたいといつも望ん
でおります。元来、私は女性のおも
ちゃになるように生まれて来た人
間かも知れません。若し相手の女
性が「私の馬になつてごらん」と
いわれたら私は喜んでいいなり
なるでしょう。私は、どんなに
つけでも素直にききます。どんな
恥しいことでも私は、その人の命
令であつたら喜んですることとし
よう。若し、そのような相手の女
性とレスリングでもして豊満なお
尻の下に組敷かれたら、どんなに
か素晴らしいでしょう。ですから、
それ以上のことをされたら私はそ
れこそどうなるか自分でもわかり
ません。昔の奴隷制度が今でもあ
つたら、どんなによいと思つてお
ります。自分が袋に入れられ奴隷

売買に出されるのです。すると金
持のたくましい婦人がそれを買
取つて屋敷へ連れて帰つて思ふ存
分、私を弄ぶのです。そんなこと
が実際にあつたら、どんなに素晴
しいことでしょうか。人間椅子、人
間ベッド、人間馬、人間座布団、
人間サドル等は、すべて私の最も
望むところです。でも私の場合は
相手がボリユームのある肉体の持
主の女性でなければなりません。
世の中には同性同志のそういった
関係を好む人(たとえば三隅千恵
子様、長瀬昭子様、三木恵子様の
如き)もあるそうですが、私には
理解出来ません。私は異性に屈辱
を与えられることを望みますから
自分にお金があつても商売女を買
つたりすることは好きません。反
対に自分が婦人から買われて玩具
にされたら、どんなに嬉しいこと
でしょう。それは買われるという
だけで既に非常な屈辱だと思ふか
らです。大体、マゾヒズムという
ものは、精神的な要素が極めて強
力なものであると思うのです。で
すから実際にそういう目にあわな
くても、そういう想像をするだけ
で非常な快感を抱くことが出来る
のです。だから相手が、あらゆる
点で優位に立っていることが望ま

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨さらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

しいのです。征服者と被征服者の快感は、必ず被征服者のその方がより強力であると考えておられます。ですからマゾヒストはサジストより深い快樂を持つ可能性を持つているのですが、その可能性を可能ならしめる機会は、かえってマゾヒストには恵まれていないと思います。ですから私なども、この世の中にサジスト的な女性が本当におられるのかどうか疑問に思わずにいられないのですが、たまたま或る本屋で本誌を発見し、貴女の悦虐の体験記を拝見するとああ、やっぱり広い世の中には自分が想像していたような女性の方もおられるのだと思うと矢も立てもたまらなくなり、ペンをとった次第です。若し、貴女様が本当に自分の前に現れて下さったら、どんなにか驚喜し、どんなにか感謝することでしょう。貴女様が私に「馬におなり」とお命じになり、四つん這いになった私の背に豊満なお尻をおのせになつて跨られ、「ハイシドウ、ハイシドウ」と部屋中を乗りまわされるのです。そうすると私は貴女様の豊満な肉体の重量をじかに快く味わいながら這い廻るのでありますが、回を重ねることに非力な私は次第にくたび

れ、なおも荒い息づかいをしながら背中の重圧を一生懸命堪えているのですが、貴女様が「もっと速くお歩き」と云わないばかりに重いお尻をドシンドシンと上下されるに及んで私はとうとうその場へばります。すると貴女様は、もつともつと乗り廻そうと私を鞭打つのですが、馬がどうしても動かないとわかると、苦しそうにもがく私の顔の上にお尻を据えられ鼻も口もピッタリふさがれます。このようなことを想像しながら擲筆させて頂きます。(鳥取市、女性の奴隷いより)

○
ぼくは二十一才になる男性マゾヒズムに執著を感じているものです。というのには、小さい時に母を亡くし継母によつて小学校四年生頃まで育てられました。この継母がS女性だったと今になって思いますが、一寸いたずらしても、すごい折檻をされました。裸にして手足を縛り、お灸せめにされたり、庭の立木に雨の降る中を半日ぐらい縛られ雨ざらしにされました。そして近所の人々の評判になるくらいでした。でも継母は罪に対する罰だといつて平気だったらしい。でも、このひどい継母も、ぼ

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 機(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手札型(9×13種)です。
お申込は 天星社代理部へ

くが四年のときポツクリ死んでしまいました。それから父の手で好きな様に育ち、一人の人間として成人したとき、なによりも継母のことがなつかしく思い出されてなりません。小さい時から天性これがぼくにはM性だったなあ一人苦笑している仕末です。ぼくの希望としてはS女性に責められるM男性物を、又、思い出にお灸せめの変った処をおねがいします。継子いじめというものがよくいわれますが、その様な実話も時々には貴誌に載せて下さい。(T・K生)

○
小生は、ずっと以前からの貴誌愛読者です。始めて投稿させて頂きます。私は大分前から女性を縛り責めることに憧れを抱いていました。それが空想の世界でなく現実となつてあらわれるとは夢にも思っていなかったのです。しかし平凡な見合結婚の結果、思いがけなくそれが実現して毎日満足した生活を送っています。さて編集部へのお願いですが本誌の口絵写真のモデルのポーズは、どうもおどろきの感じがします。もっと本当に縛られ、猿ぐつわをされて恐怖

におののく真の表情をとらえたものを掲載して下さい。(熱田 山田生)

初めてこの室をノックします。

私はホモで有り男性の責めに深い興味を持っています。かつて本誌に名文をふるっていられた三根耕一氏、青葉慎一氏及び杉俊夫氏、植村泰氏の迫真的な健筆には全く感嘆の外ありません。私はM傾向の二十八才の独身者です。緊縛は勿論のこと、白粉、紅、墨、金銀粉に異常な程の好奇を持っています。それらを全身に塗られること

を喜びとしたいのですが実現不可能です。又蠟人形として私の全身に蠟を流して欲しいし石膏で全身を掩われてもみたいと思っっています。加えて浣腸、女装にも興味がありますので私のよきSとなられる人の出現を期待しております。私はハンサムでは有りませんが年に似ず可愛いと言ってくれます。こんな私を心ゆくまで責めて下さる人がいたら誌上にて結構です。すから、よろしくお呼びかけ下さい。幸いお逢いできる機会が訪れましたら私の心身は貴兄のものです。尚私は異性に興味の無いこと

を付け加えておきます。又、私を絵画写真等のモデルに使ってみたいと言われる人がありましたらお知らせ下さい。必ずや御満足のゆけるものと信じます。本誌の本年度旧号所持の方寄贈を仰ぎます。終りに諸兄の私のこの記事に対する御意見や御希望御批判を仰ぎたいと思います。(大阪西成 入舟生)

○

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

告白と手記と体験記

優作 一篇に付 一万円 若干篇
秀作 一篇に付 五千元 若干篇
佳作 一篇に付 二千元 若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

桜咲く頃となりました。切腹フアンの方々お元気でいらつしやいますか。四月号に初めて通信をのせていただきました。有難うございました。五月号本日入手いたしました。まして余りの嬉しさにペンをとりました。切腹状態のグラビヤ、山田さんの「切腹雑感」等々私達切腹ファンの待ちのぞんでいたものでした。通信欄では熱田の五郎様の活潑な意見も大賛成ですわ。これから暖かくなりますので、裸の切腹もやりやすくなります。去る三日の日曜に都合よく私達三人のグループが集まりましたので、久しぶりにプレーすることが出来ました。誌上をおかりして、その時の模様を、お知らせしたいと思

います。私が腰元、Y子さんが奥方、M子さんがお局様となって腰元の私が、粗相をして切腹を申しつけられました。いつもの様に切腹の座をつくり、着物をぬいだ私は長襦袢だけになり座につきました。「これにて静かに死につくがよからう」と、奥方から短刀をわたされ、胸元から下腹までくつろげて「おさらばでございます」と二人に声をかけ目をつぶり短刀を左脇腹へ突き立てました。私もその時には本当にこれで死ぬのだという気になっていました。思わず「うっ」という声が出てしまいました。いつもより力をこめてゆつくりと引きまわしてゆきます。冷たい刀身がお腹を横切つてゆくのがなんともいえない気持ちです。やがて右脇腹まで引きまわした私は力をつきたようにバタリと前に倒れ伏しました。見ていた二人は「幸ちゃん、見事だったわよ」「ほんとだったら傷口から腸なんか出るのね」といつて抱き起してくれました。それからY子さんは床柱にもたれて十文字腹、M子さんは片膝立てて洋服の前をひろげて一文字腹のプレーをしました。本当にたのしい一日でした。どうか切腹ファンの皆様方、どしどしお便り下さいませ、お待ちしております。(兵庫 幸子より)